
こちら探偵同好会

しんどうみずき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こちら探偵同好会

【Nコード】

N68710

【作者名】

しんどうみずき

【あらすじ】

探偵同好会——クラブではなく同好会。廃部寸前の同好会につれてこられた白谷結衣と、4人の先輩たちとの物語。個性的な会員たちとともに学校の難事件を解きあかす。

白谷結衣（前書き）

とくに注意書きなどはございませんが、もしよかったら感想をいただけると嬉しいです。

更新は、改稿を繰り返す感じになると思います。

白谷結衣

「犯人はあなたですね」

凜とした声が、霞ヶ丘高校1年A組の教室につきささった。

それは夏とよぶには早く、まだ春の香りがこのる5月のことだった。うららかな日差しが教室の窓からはいりこみ、そろそろ新鮮さもなくなってきた退屈な授業を聞いていると、つい気が抜けてうたた寝をしてしまいそうになる。スカートからのびる太ももをつねってみたりノートに落書きをしたりと、どうにかして意識を保つていようとするのだが、まるで暖かな毛布にくるまれているような陽気のなかにいるとどうしても眠くなってしまう。

教室にいる生徒たちの大半はすでに心地よい夢の世界へ足を踏みいれていた。だが出席番号順に並んだ机のせいで運悪く教卓の目のまえの席になってしまった白谷結衣は、かろうじのところで睡魔に抗っていた。

うつらうつらと頭を落としそうになっては、ふたたび戻ってくる。そののくり返した。黄ばんだ教室の壁にかけられた時計はいつもよりゆっくり進んでいるようだった。

我慢できずに思いっきりほおをつねるが、痛みはない。もう片方もつねってみる。やはり痛くない。そうか、わたしはもう眠ってしまったのか、ならもう起きている必要はないんだな——などと支離滅裂な考えが頭のなかをパレードする。

「もうすぐ中間だからな、ここはテストに出るからしっかり勉強しておくように」

まだ最初の間テストまでには三週間もあるというのに、このつまらない授業の元凶である数学教師は脅しをかけてくる。高校のテ

ストというのが中学のときとどれくらい違うのかわからないが、みんなも寝ているようだし、あまり心配する必要もないだろう。

うしろから聞こえるうなり声のような音を背中に感じながら白谷結衣はついに書きかけのノートの上に突っ伏した。

ああ、気持ちいい——結衣がふたたび気がつくときチャイムが鳴り、昼休みがはじまっていた。

「ゆい、お弁当食べよう」

色とりどりのお弁当箱を手にした友人たちが机のまわりに集まってくる。結衣の通う霞ヶ丘高校では中休みに昼食をとることが禁じられているので、昼休みになるとみな一斉にお弁当を開けるのだ。

瞼をこすりながら結衣はうなずくと、机の横にかけていた鞆から弁当箱をとり出した。この鞆は学校指定なので入学の前に強制的に買わされたものだ。最初のうちはダサいだのカッコ悪いだのと不平を並べ立てていた新入生たちも、一か月もたてば気にならないくらいに慣れていた。

「わかったー」

近くにあるいくつかの机を寄せて、ひとかたまりの島をつくる。隣の席に座っているひとはまたほかの場所へお弁当を食べに行っているので問題ない。

ただ、なかにはいちいち席を移動するのが面倒くさいということとで鞆ごと持ってくる人も何人かいるのだが。

わいわいとさっきまでの眠気はどこに飛んでいったのやらおしゃべりをはじめると、時計も目を覚ましたように速足で進みだす。こんなときくらい居眠りをしてくれてもいいのに、と結衣はいつも思う。

「なにこれ！」

休み時間も半分が過ぎて、何人かの運動好きな男子たちがグラウンドに駆けていくころ、結衣の目の前にいた女の子が素っ頓狂な声

をあげた。

みんなの視線が声のほうへ集まる。

その手にはまるで血のように赤いインクで書かれた文字の並んだ手紙が握られていた。A4サイズの紙面にはいっぱい不気味な文字が踊り、ひときわ大きく「死」と記されている。

「えー、なんか気持ち悪い」

手紙を持っていた少女――黒崎瞳が、寄せられた机の中央に手紙を置く。興味津津といった様子で女子たちが身を乗りだして文面をのぞき込むがすぐに顔をしかめて席についた。

「なぜか知らないけど鞆のなかに入ってた。誰だろ、こんなもの入れたの」

結衣は最後に手紙を受け取るとゆっくり目を走らせた。隅から隅へ、まるで無くしものを探すように。

「やめときなよ、気味悪いだけで別に面白くもなんともないよ」

友達のひとりが結衣を気遣っているが、聞こえていないみたいに真剣な表情で手紙を読んでいる。結衣はしばらくじっと睨めつことを続けて、それから手紙を戻した。

「どう見ても、脅迫文だと思う」

「それはそうでしょ」

周りから笑いが起こった。

「それなら、誰に宛てられたものかわかる？」

結衣が尋ねると周囲は押し黙ってしまった。宛先などは書かれていなくてただ暴力的な言葉が並んでいるだけだったからだ。

「書いてないじゃん」

「これはね、先生に出すはずのものだよ」

「なんでわかるの」

興味を持った何人かが椅子を近くに寄せてくる。

「殺すとか死ねとかをのぞいて、いくつかくり返されている言葉があるよね。たとえばこの『差別』とか『レッテル』とか。これだけだとただの批判になっちゃうけど『エゴイスト』って単語が加わる

ことによつてだいぶ絞られてくる」

「……どういうこと？」

「つまりこれに当てはまる人を脅したいんだと思う。差別をしてレッテルを張つてエゴイストになれる人——いちばん身近なのは、先生だよ」

「あ、わかつた」

なぜか脅迫状が鞆にはいつていた瞳が膝を打った。

「中間テストでしょ」

「正解。正確に言えばテスト全般だけどね」

「じゃあ、誰がこんなものを入れたの？ それも瞳の鞆に」

「まあ、それも大体わかるよ」

結衣はニヤリと笑うと教壇にあがつて人差し指をつきだした。

「さて——」

がらりと椅子を引き、少し高くなつた教卓のまわりを左右に闊歩しながら結衣が話しはじめる。突然はじまつた奇妙な行動に、教室中の興味と視線が集まつた。

「ついさきほど黒崎瞳さんの鞆に、どういうわけか脅迫状が入れられるという事件が起きました。ですがこれは明らかに黒崎さんに宛てられたものではありません。それにまだ不完全のようでした。ただのA4用紙に綴つただけの脅迫状ではおそろしさに欠けていますからね」

なんだどうしたと教室がざわめくが、ふたたび結衣が口を開くと静まりかえつた。

「この事件で解決しなければいけないポイントは二つあります。『誰が』『どうして』脅迫状を黒崎さんの鞆に入れたのか、ということとです。おそらくは中間テストをやめさせるために作られたこの脅迫状がなぜ先生ではなく黒崎さんに渡されていたのでしょうか」

「黒崎が犯人なんじゃねーのか」

教室の後ろのほうにたむろしているお調子者の男子がヤジを飛ばす。瞳がキツとその男子を睨みつけると、おどけて怖がるふりをし

た。

「その可能性もあります」

結衣が大真面目な顔でうなずいた。得意げな表情をするお調子者。「ちよつとゆい！　なんであたしがそんなことしなくちゃいけないのよ」

「なぜ？　なんででしょうね」

結衣がほほ笑んでみせる。

「そう、それこそが黒崎さんを犯人でないと立証する大事な証拠になります。動機がない、つまり脅迫状をつくる理由がないんです。瞳はそんなに成績悪くないもんね」

「ゆいよりはずっと良いよ」

「……成績が悪いという点では、わたしにも充分動機はあるかもしれません。はい。というか他人よりもテストに対する恐怖と憎しみは強いですね」

「じゃあ、白谷が犯人じゃねーの」

またヤジが飛ぶ。

「大丈夫です。わたしは最初からあきらめてますから中間のなんのそのです」

「……それでいいの？」

「わたしのことは気にしないで先に進みましょう」

結衣の背中を一筋の冷や汗が伝っていくが、それに気付いたものは本人以外にいなかった。

「今でもわかったと思いますが、この脅迫状をつくったのは成績の悪い人です。それしか動機がありませんからね。ただそれだけではあまりにも漠然としているので、この教室の大半が容疑者になっ
てしまいます。じゃあオレじゃねーの、と言うのは、なしの方向で
軽い口を開こうとしていたお調子者のまわりで笑いが湧きあがつ
た。どうやら凶星だったらしい。

「犯人を特定するにはもうひとつの要素が関わってきます。それは『なぜ』黒崎さんの鞆に脅迫状を入れたのか——いえ、入れてしま

ったんです。間違つてね」

結衣は脅迫状をヒラヒラと振って見せると、マグネットをつかつて黒板に張りつけた。

「さっきの数学の授業、わたしはさっぱりわかりませんでした。わからないので居眠りをしてしまったくらいです。このままじゃテストは大変でしょうね——犯人もそう思った。成績が悪いのは前々から分かってるから脅迫状をつくってみたはいいものの、どうにも送りつける勇気が出ない。そこにあの数学です。犯人はどうとう決意しました。今日こそ脅迫状を出そうと。そうして手紙を片手に廊下を歩いているところで、ふと気がつきました。こんな出来で大丈夫だろうか、いやそれ以上に自分がやったとばれないだろうか。警察沙汰にでもなって指紋を調べられたらすぐに犯人だと特定されてしまう——さしずめ、こんなところでしよう。犯人は途中で挫折し、脅迫状を戻しにやってきました。そして、自分の机にかけられている鞆にそれを入れた」

「でも、入れたのはあたしの鞆」

瞳がつぶやく。

「そう。瞳の鞆になんて入れるつもりはなかった。なぜなら、自分の鞆と勘違いをしたから」

あつと声をあげて、視線がひとりの人物に、まるで虫眼鏡で集めた太陽光のように浴びせかけられる。

「犯人はあなたですね、住田くん」

結衣のひとつ後ろの席に座っている生徒の名前が、高々と宣言された。

「わたしたちの鞆は不幸ながらどれもこれも同じに見えます。アクセサリーがついていたりして普段は見間違えるようなこともないでしょうが、すぐに脅迫状を隠さなければと焦っていたあなたはミスを犯しました。そのせいで瞳の鞆に脅迫状を入れてしまった——違いますか？」

住田くんは教室の窓際の隅で、とりつかれたように固まっていた。

なにが起こっているのか分からないのか、それとも結衣の洞察力に愕然としているのか、どちらともとれるような啞然とした表情をしている。

誰かが声を発する前に、結衣はやさしく笑った。

「でも大丈夫ですよ。これは未遂です。今ならただの笑い話ですむ話です。だから、こんなものは破いちゃいましょう」

ビリビリと半分ずつに脅迫状を破り、紙吹雪のようになった文字を窓から風にのせて飛ばす。春風に舞う言葉は、まるで桜のようにきれいだった。

「わたしも勉強をがんばります、ですから住田くんもいつしよにがんばりましょう」

昼休みの終わりを告げるチャイムとともに、自然とわきあがった拍手が教室を包んだ。

住田くんは中間テストまで、クラスで一番頭のいい人に勉強をみっちり教えてもらうことになった。

結衣がその人に出会ったのは住田くんの脅迫未遂の事件を解決したすごいやつがいるという噂が学校中を駆けめぐった翌日の放課後のことだった。

クラスメイトたちはそれぞれ目当ての部活を見学するために出かけたなり、いち早く帰宅部を決めこんでいたり、勉強を教えてもらいに図書室へ向かって行ったりしている。

結衣はのんびりと鞆に荷物をつめ終わると人影もまばらになった教室を見回した。

中学のときは合唱部に所属していたせいで声はよく通るようになったが、歌はあまり得意なほうじゃない。カラオケでも60点をとるのが精いっぱいといったところだ。

なにより歌っている最中に貧血になってしまうから、コンクールなどにだしてもらえなかったという苦い記憶がある。だからもう合

唱部に入るつもりはなかった。

霞ヶ丘高校には同好会があるので、部活の数は比較的多い。たしかクラブと同好会の違いは人数の差だったはず——と、おぼろげに覚えている生徒手帳の一文を思い出す。

たしか読んだことには読んだが、細かい字がびっしりと敷き詰められていて途中で挫折したのだ。

「きみか！ 白谷結衣は！」

とても元気のいい声が教室の入口あたりから飛んできた。見ると、ショートカットの髪をした、体中からエネルギーがほとばしっているような女生徒が立っていた。

身長は結衣と同じくらいで160センチ程度。適度に着崩された制服や膝上までまいてあるスカートからして、おそらく先輩だろう。それも高3の。

年齢はあまり変わらないのだが、高校生くらいになると学年が違うだけでずいぶん大人びて見える。その先輩もはつらつとした雰囲気の中にどこか貫禄があるように思えた。

「はい、そうですけど……」

何のご用ですか、と言う前に両手で握手をされる。

どうやら生意気な新生入生だということの手荒い洗礼を受けるとかではなさそうだ。見知らぬ先輩が訪問してきたということですから緊張していた結衣は、ほっと胸をなでおろした。

「部活は？」

「まだ決めていません」

「あの噂はほんとうなんだろうね」

息をつく間もなく先輩が言う。

「なんの噂ですか？」

「もちろん1年生にとてつもない超新星があらわれたという噂にきまっているじゃないか。なんでもホームズばりの名推理だったかなんとか」

「そんなことはありませんよお」

片手をヒラヒラ振って否定する。

「わたしはただ——ちょこっとわかったことを口にしただけです。名探偵だなんて言い過ぎですよ」

「ふむ。じゃあ、すこしテストをしてみようか」

先輩はそう言つと、ブレザーのポケットのなかから1枚のコインをとりだした。そして背中の後ろでごちゃごちゃ手を動かすと、握られた両手をぬつと突き出した。

「ひとつだけ質問をしていいことにする。どちらにコインが入っているでしょうか」

まるでいじわるな悪魔がいたずらをしているときのような笑みを浮かべる先輩。結衣はすこしのあいだ考え込むと、口を開いた。

「どちらにコインが入っていますか？」

「それでいいの？　うちが本当のことをいうとは限らないよ」

「かまいません」

「それなら——右つてことで」

結衣は右手のこぶしを注視してから、先輩の表情をうかがった。ウソをついているようには見えなかったが、ほんとうのことを教えてくれなかった可能性もある。

けれども結衣はそつと右手のほうを指差した。

「先輩のことを信じます」

「それだけ？」

「はい」

握った右手を反転させると、ひらいた手のひらからコインが出てきた。不思議そうな顔をする先輩に結衣が説明する。

「確信はありませんでしたけれどいきなり初対面の人にウソをつけるような人じゃないかなあつて思つたんです。先輩、どこかの部活の勧誘に来たんですよね。それだったら最初から印象を悪くするようないい人じゃないでしょうし」

「——さすがだ、新入生」

目に涙を浮かべながら感動した面持ちでその先輩は目頭をぬぐつ

た。結衣が照れくさそうに頭をかく。

「でも、結局は勘ですし」

「推理小説に出てくる刑事たちは得体のしれない勘というものをあてにしている。それを考えれば名探偵の要素に直感も必要さ」

しきりにうなずく先輩。

「ところで白谷結衣くん、うちは3年の片倉だ。これから一緒についてきてほしいところがある」

「いいですよ」

「楽しい高校生活を保障しよう」

片倉先輩は白い歯を光らせながら親指を立てて笑った。

白谷結衣（後書き）

少しずつ更新です。

探偵同好会

主にH R教室のある本校舎とはべつに音楽室や理科室などがはいっている旧校舎は、大小いくつもの部活の根城になっているという。もとは立派に教室として使われていたのだが、老朽化や生徒の人数が増えたことによつて新しい校舎が建てられてからは学び舎としての役割をゆずっていた。

旧校舎へ行くためにはいちど外に出てからグラウンドの横をわたつていかなければならない。ただ、入口までは屋根のある通路があるので上履きを履きかえる必要はなかった。

生温かい風が髪をないでいく。

隣に見えるグラウンドでは野球部がユニフォーム姿でノックを行っていた。一年生はさつそく球拾いに追われている。残念ながら霞ヶ丘高校の野球部はあまり強くないのだが。

「うちの部室は三階にあるから、ちよつと階段を上らなければいけないのが難点だけだね」

「わたし、そのくらいは平気です」

「ちなみに部室に来るときはウサギ飛びで上がってこなくてはならないというルールがあるからね。体力づくりも大事だし」

「——あ、じゃあ、やめておきます」

「あつはは。冗談だつて」

そんなことを話しながらなんとか3階までたどりついたところには、結衣の息はすっかりあがつていた。強がつてはみたが正直なところ体力にはまったく自信がないのだ。

その様子を見て片倉が半分本気で心配したくらいだから、毎回ここまで来るのは至難の業かもしれないなど、結衣はため息をついた。片倉に案内された部屋は廊下のいちばん奥にあつて、その途中にはいくつかの同好会の部室があつた。U F O研究会や、数学を愛する会などと書かれた小さな看板がドアにかけられている。まるでテ

レビドラマで見た大学の研究室みたいだ、と結衣は思った。

そして探偵同好会も、例にもれず達筆な文字でプレートが掲げられていた。片倉が勢いよくステンレス製のドアを開くと、満面の笑みで結衣を部室のなかに引き入れた。

「じゃーん！ 待望の新人部員を連れてきましたー！」

「新人会員、ですね”会長”」

ツインテールのおさげ髪をした女の子が言った。

「うるさい。なんともいうがうちは部長だ」

「なんともいうがおまえは会長だ」

公民館にあるような安っぽい折りたたみ式の椅子に腰かけている眼鏡をかけた青年が、読んでいた本から顔をあげた。座っているが、かなり背が高い。黒ぶちの眼鏡もあわさって知的な感じをかもし出していた。

「こ、こんにちは。白谷結衣です」

しどろもどろしながら結衣が自己紹介をして、お辞儀をしながら頭を下げた。

どうやらこの同好会に自分は入ることになるのだろうという確信を胸に抱きながら。

「きみが噂の一年生だね。みなみが連れてきたってことは本物なんだろうけど、副会長の大高だ、よろしく」

「あ——よろしく願います」

親しげにさし出された手を思わずにぎりかえす。だが、大きさのわりには手を握る力は強くなかった。

結衣は残ったもう一人の女子生徒を見た。片倉先輩はともかくとして、ほかの部員はしっかり者のようだ。

「会長って、どういう意味なんですか？」

と結衣が素朴な疑問をぶつける。背のたかい副会長は朗らかに笑った。

「とくに深い意味はないんだけど僕たちは同好会だからね、その長も部長ではなくて会長というわけさ。もつとも、本人は部長とよん

でほしいみたいだけど」

「部長とよべ、部長と」

ムスツとした表情で片倉は新高をにらみつけた。
それから、もう一人の会員に顔を向ける。

「咲ちゃんも自己紹介をしておきなよ」

「わかりました」

咲ちゃんによべた人はローファーのかかとをコツコツ鳴らしながら結衣のほうへ歩み寄ると、親しげに微笑んだ。なんだか他人を安心させるような笑顔だった。

「児玉咲です。これからよろしく願いますね」

「こちらこそ願います」

結衣がぺこりと頭をさげ、会長は満足げにうなずいた。
それからさほど広くない部室を見回し、咲に尋ねる。

「誠くんはどうしたの？」

「なんでもすでに勉強についていけないということで補習を受けていると思います」

「まったくもう……咲ちゃんが勉強を教えてあげたら？」

「いやですよ。あたしはこれでも充分に忙しいんですから」

「へーえ」

まるで信じていないといったような会長に咲は、

「落ち着きのない会長と頭のわるい副会長せいで後始末が大変なもので」

と皮肉を飛ばした。

片倉会長は眉をひそめ、新高副会長は咲の言葉を無視していた。

いつもの静寂が部屋のなかを包み込んで、結衣はどうしたらいいかわからずぼんやりと立っていた。

とても気まずい空気だ。

「……………」

「……………」

「……………」

誰も音を発しようとしな。とりあえずこの空気をなんとかしよう
と結衣は決断した。

「あの、入——会？ するにはどうしたらいいんでしょうか。わたし入部届とか持っていないもので」

「入部ね、それならうちのサインときみの同意があれば大丈夫だから。たしか咲ちゃんが保管していたはずよね」

「これですね」

部屋に置かれていた、書類のつまった棚から二枚のプリントをとりだすと咲はそれを結衣に手渡した。見ると、同意書、と大きく印字されている。どうやらこれに署名するだけでいいらしい。

「学校側に提出するのがひとつと、こちらで保管するためのひとつです。——そういえば、入会するということでもいいんですか？」
「え？」

「見たところいまさつき会長につかまって連れてこられたというところでしょう。だったらすこしは考える時間を設けたほうがいいんじゃないかと。簡単に部活を決めて後悔するようなことがあっても嫌ですからね」

「わたし、ここにはいます」

結衣が力強く言うが、副会長はかぶりを振った。

「だめだめ。入ってくればうれしいのは山々だけど、勢いにのまれてしまっただけじゃないからね」

「えー、いいじゃない。本人が入るって言うてるんだし」

会長が駄々をこねるが、咲と副会長からほとぼる無言のプレッシャーを浴びて首をひっこめた。

そのとき、部室にあったデジタル時計が4時ちょうどを告げた。かわいた電子音がひびく。

「どうするかい？ 今日のところはこれで帰ってもいいし、すこし見学していてもかまわないよ。といってもとくにすべきこともないんだけど」

副会長が優しい口調で聞く。

結衣はいちど時計を見てから、窓のそとへ視線をやった。まだまだ日は明るい。だが、結衣は家路につくことにした。先輩たちにお礼と挨拶をしてから昇降口に向かって階段を下りていく。グラウンドでは相変わらず野球部が大変そうな練習をしていた。

「同好会、か」

空に向かってひっそりと呟く。

中学のときにはたったの4人しかない部活なんて存在しなかったし、同好会というものもなかった。なにより先輩後輩の上下関係がとても厳しくてつねに敬語をつかっていた印象しかない。だから片倉会長に連れてこられたとはいえ、探偵同好会というのはすごく魅力的に思えた。

あの人たちと一緒に過ごせたら、きっと楽しい時間を送ることができるだろう。

ぼんやりとだが、うらかな朝の陽ざしのような明るさが未来にさしこんでいるように感じた。

本当はあのまま部室に残って探偵同好会の活動というのを見てみたかった。けどとらえどころのない不安のようなものを覚えて、無性に逃げたしなくなったのだ。

それはたぶん、変化に対する恐怖なのだけだ。

焦る必要はない、時間はたくさんあるんだと自分に言い聞かせながら結衣は家に帰った。

頭上では夏を迎えようとしている太陽がまるで勝ち誇ったみたいに地上を照らしていた。

探偵同好会（後書き）

初めてですが、章機能というものをつかってみました。
いろいろ変更もあるかもしれませんが。

入部

自室においてある大きなベッドにからだごと放り投げると、結衣は白い天井を見上げた。

「探偵同好会か……」

明るそうな部長（会長？）さんだった。優しそうな副部長だった。真面目そうな先輩もいた。それから、もう一人の先輩もいるらしい。なんだか思いあたるところがあつて結衣は鞆から生徒手帳を取りだすとぱらぱらページをめくった。そしてあるところで手をとめると、そこに書かれている文章に目を通し、ベッドから起き上がった。「わたし、探偵同好会に入る」

結衣はすぐさま咲からもらった同意書に自分の名前を書き入れると、A4のクリアファイルに大事そうにしまった。

次の日の朝、結衣は学校につくなりすぐクリアファイルを片手に3年生の教室へ向かった。まだほかの学年の教室にいったことはないのですこし緊張する。心臓の鼓動の音がこころなしか激しくなっていた。

廊下にたむろしていた先輩の一人に会長のクラスを聞き、友達の輪にまじって談笑している片倉の姿を見つけると、結衣は同意書をつきだした。

「ありがとう、新入生——いや、白谷結衣。これからよろしく」

差しだされた手をつちり握って結衣は足どり軽く自分のHR教室へと戻ったのだった。

春の陽気にも似たうきうきした気分とは裏腹にその日最後の授業はチャイムが時間通りに終わりを告げて進み、ようやくのことで先生が出ていったのは10分後だった。

慌ただしく帰りたくをはじめ教室をしり目に、結衣は旧校舎の階段を駆け上がった。入部初日から遅刻するわけにはいかない。中学のころの合唱部では理由がなんであれ定刻に間にあわなければ厳しいペナルティーが課された。

さすがにそんなことはないだろうが新入部員として迷惑をかけてはならない。立ちくらみがしそうな階段を上りおえると、雑然とした廊下の奥にある扉をいきおいよく開いた。

「すみません、遅れてしまって——」

荒い息をつきながら顔をあげると、副会長ともうひとり見知らぬ人が長テーブルで向かい合って座っているだけだった。会長も咲も見当たらない。

副会長は学生服の裾をまくって腕時計を確認した。

「まだじゅうぶん間に合っているじゃないか。そんなに急がなくても、僕らは運動部みたいに厳しくないから大丈夫だよ。なんといつでも会長のみなみがいつも最後にやってくるくらいだからね」

「え……そうなんですか？」

副会長がにこやかにうなずく。その肩を、正面にいた男子生徒がつついた。

「もしかしてこの子が会長の言ってた超期待の超新星の超ホープですか」

「たしかにそう言っていたな。今日も同意書を持ってきたと大騒ぎだったぞ」

「えっと、白谷結衣です。よろしくお願いします」

まだ名前を聞いていないがおそらくは会長の言っていたもう一人の会員なのだろうということで、結衣は自己紹介をした。

その人は副会長とちがって体つきがしっかりしていて、昔はスポーツをしていたのだろうとうかがわせた。いや、もしかしたらいまも続けているのかもしれない。

それにしてもあまり日焼けしていないのが気になったが、バスケット部かなにかだったのだろうか。

「2年の神崎です。なんか嬉しいな、後輩ができるのって」

そう言って神崎はわりに整った顔をはにかませた。きつとモテルんだろぅな、と結衣は推測した。いかにも女の子に好かれそうなスポーツマンっぽい先輩だった。それがどうして探偵同好会に所属しているのかは知らないが、きつと何か事情があるのだろう。

「ところで、活動はいつ始まるんですか？——そのまえに、ここはいったいなにをする会なんですか」

結衣が質問する。

副会長はそれもそうだと口のなかでつぶやくと、隅のほうに置いてあったホワイトボードを移動させてきて、マジックでなにやら書きだした。

「その名の通り探偵同好会——ということだが、正直なところ不可解な事件が起こる頻度は極めて低い。つまり普段はとくにすることがないというわけだ。だが、それでは部活として成り立たない」

”事件”と大きく書かれた文字にバツ印をつける。

副会長は続けた。

「もちろん推理小説なんかを読んで推理力を鍛えるということもできる。それも重要な活動の一つだ。実際、児玉さんは家に図書館なみの蔵書を誇っているらしい。僕もそれには及ばないが、ある程度の量は読みこんでいるつもりだ」

「わたし、あんまり推理小説は読んだことないんですけど……」

「だったら神崎くんと一緒に勉強するといい。神崎くんもまだ初心者だからね」

「そうなんですか」

結衣が神崎のほうを見ると、

「いやまあ、あんまり活字って好きじゃないし」

と苦笑いをした。

「それからある程度の体力はあったほうがいいかもしれないね、僕が言うのもただけど」

「よくわかってるじゃないですか」

神崎が減らず口をたたく。どうやらこの同好会のなかでは先輩に対する皮肉や冗談が黙認されているらしい。あるいは咲や神崎の口が悪いだけかもしれないが。

副会長は黙って”体力”のところに丸印をつけた。

「これらはあくまでメインのことじゃなく、あつたらしいという程度のことから、そこまで気にする必要はない。いきなりランニングをはじめたりホームズを読みあさらなくてもいいからね」

「だったらメインはなんですか？」

結衣の質問をうけて副会長は満足げにうなずいた。

「よい質問だ白谷くん。うん、すごくいい」

「早く説明してくださいよ副会長」

神崎が急かす。気分を害されたのか副会長は冷たい視線を向けてから、

「つまりメインの活動というのはなんてことない日常から謎を見つけて出して解決することだ。学校側にも名目上はそういった解決を行うことで観察力を養うことだと説明してある」

「本当にそんなものが身につくんですか副会長」

神崎が手をあげて聞く。

副会長は首をたてに振った。

「きみは本気にしていないかもしれないがある程度は成長することができる。みなみの観察眼などは大したものだ。それが学問にいかせるかどうかは保証できないが、まあいつか役に立つだろう」

なんとなく無責任な感じで副会長は締めくくった。

あまりホワイトボードは使われていない。たぶん用意したはいいもののさほど必要ではなかったのだろう。結衣は咲が副会長のことを頭がわるいと評していたのを思い出した。

その理由はこの辺にあるのかもしれない。

見た目はすごく賢そうな人なのに——と、結衣は残念に思った。

そのあといくつかの値引きされた菓子パンを抱えた会長がやってきて、それから咲が本を片手に姿をあらわした。なんでも図書委員

の仕事も兼任しているため、こうやって時々遅れてくるらしい。

会長のほうは購買のタイムセールをねらっておやつを買い込んでくるのだ。無論、隙を見てつまみ食いしようとする神崎とのし烈なあらそいが陰で起こっていることなど結衣は知るよしもなかった。「さて、これで部員全員がそろったわけだ」

会長がうれしそうに、すこし窮屈になった部室を見回した。

5人はそれぞれ長テーブルを挟んで向き合っている。座っているのは簡素なパイプ椅子だ。

「結衣くん、改めて自己紹介をしてくれたまえ」

会長が言っと、結衣は簡単に自己紹介をすませて頭を下げた。ぱちぱちと拍手が鳴る。

「うちは”部長”の片倉みなみ。副部長の高健輔に、部員の児玉咲と神崎誠くんだからよく覚えておくように」

なぜかひとりではかのメンバーの紹介を終わってしまうと、会長は鼻の穴をふくらませながら席についた。

こうして、白谷結衣は探偵同好会の一員となったのだった。

入部（後書き）

これで5月編はおしまいです。
つぎは6月編になります。

第一部

赤点はなんとかまぬがれたもののあまりほめられるような点数ではなかった中間試験が終わり、かわりに梅雨前線の運んできた長い雨が空をおおっているころ、白谷結衣は頬づえをついていた。

探偵同好会の部室である、用途のわからない荷物が雑然とつまれている部屋にもカビの生えそうな湿気が充滿している。ひよっとしたら咲の持ってきている本にもカビがこびりついているんじゃないかとこっそり表紙の裏を確認してみたりしたのだが、その痕跡を見つけることは出来なかった。

同好会に参加してからというもの、テストがあつたりなんなりであつという間に時が過ぎてしまい、とくに事件とよべるものに遭遇する機会はなかった。

副会長は「まあ、そういうこともあるさ」と言つてあまり気にしていないふうだが、もっぱら読書とオセロに励んでいる人に言われなくても説得力があるはずもなく。

「あーあ、なにか起こらないかなあ」

どんよりと曇った空を見上げながら結衣がつぶやく。

かりにも探偵同好会と名のつくものが事件を望むのはおかしいことかもしれないが、ついそう願つてしまふほど日々は平和なものだった。

「お、あたりだ！」

嬉しそうにアイスのあたり棒をにかけてみせる会長。

湿度が高くなるにつれて、じりじりと夏の予兆を感じだす季節だ。そのせいか会長のおやつも菓子パンからアイスにかわり、時々お腹を壊しては熱いお茶を飲んでなおそうとしている光景を見かける。

変わったことといえはこのくらいだろうか。

だから、結衣のうつぷんを満足させるような騒ぎが起これとはだれも予想もしていなかったのだ。

「なんかさあ、最近みように体調が悪いんだよね」

結衣のいる教室で野球部員の男の子がそう愚痴っていた。一年生はみな入部して早々に丸刈りを命じられていたため、その生徒も例外なく坊主頭だった。

夏に向けては涼しいだろうが、冬は寒そうだなといつも思う。

それはスカートもあり変わらないことなのだが、やはり印象としてはより風通しがよさそうな気がする。尼さんにならなくてよかったな、と結衣は必要のない心配をふりはらった。

「部活のしすぎじゃねーの？」

とほかの男子が言う。

授業と授業の合間のわずかな休み時間の会話だ。結衣は疲れたからだを机にあずけて休みながら、その男子たちの会話に耳を傾けていた。

理由は特になかったけれど、ぼんやり耳に入ってきたことを受け止めていたというだけのことだ。

「いや、ちかごろは筋トレばかりでさ。まあ球拾いよりはましだけど退屈なもんさ」

「じゃあ筋肉のつけすぎか」

「そういえば腹筋が9つに割れてきたんだよね」

「んなわけねーだろ」

笑いあう声が聞こえる。

それから話題はほかのことにうつってしまったためそれ以上は聞くことができなかった。

また授業の開始を告げるチャイムが鳴って、すこし後に教師が出席簿を片手に入ってきた。

席替えをおこなったおかげでうしろから二列目という安泰の位置を得ていた結衣は、いつものように至福の時間を味わう――要は、居眠りをした。

第二部

「夏風邪がはやっているらしいから結衣ちゃんも気をつけなよ」

会長がソーダ味のアイスをはおびながら言った。涼やかな青色が目まぶしい。

「大丈夫です、なんとやらは風邪をひかないっていいいますから」

結衣が胸をはってこたえる。

「だってさ、健輔」

会長が副会長の背中に声をかける。

咲から聞いた話だと二人は幼馴染らしく、お互いを下の名前で呼び合う仲なのだ。付き合っていないようだが、普通の友達以上の関係であることには恋愛にうとい結衣にもすぐ分かった。

「なにが言いたいんだ、みなみ」

「そこまで言わせるから健輔は頭が悪いんだ」

会長がやれやれと肩をすくめた。

副会長の頭の悪さはひどいものだとか会長から教えてもらったことがある。なんでも追試の常連らしい。それから神崎も同じように成績がよろしくないのだとか。

だから結衣ちゃんもちゃんと勉強しておきなよ、と忠告されてしまふ始末である。

それでも会長と咲は平均以上の成績をとっているので、全体でのバランスはやや低めに傾いているということだ。

「そうですよ副会長、しっかり大学には進学してくださいね。あたし副会長と同じ学年にはなりたくないですよ」

発売されたばかりの推理小説をもう半分ほど読み終えながら咲が言った。

「なぜ僕ばかり責められなきゃならないんだ。神崎くんだって同じようなものだろう」

その神崎とオセロをしている副会長が抗議の声をあげる。神崎の

次の一手を見ると、顔色を変えて悩みだした。

「副会長は見るからに優等生キアラなのに成績が悪いという負のギヤップがありますから。それに対して神崎は見るからにスポーツ馬鹿です。どちらが残念かは一目瞭然でしょう」

まったく遠慮のない咲の言葉。

会長がくつたくなく笑う。咲はなにか恨みがあるのではないだろうかというほど副会長に強い言葉を浴びせかける。本人もそれを楽しんでいるようだし、副会長もなれているのかあまり気にしていないので問題ないのだが。

さすがに結衣には皮肉を飛ばすほどの勇氣はまだないのだけど。

「夏風邪のときってなにを食べればいいでしたっけ」

結衣がだれにともなく質問した。

「アイスにきまつてるじゃん」

会長が即答する。オセロの石をひっくり返す音が無機質に響いた。

「やはりビタミンをとることが大事ですからね、ゴーやチャンプルなんていかがでしょうか」

まともな回答をよこしてくれたのは咲だった。

「あたしのクラスでも野球部の何人かが休んでいますし、あまり不健全な生活をしていると危ないですよ会長」

「あら、咲ちゃん優しいじゃん」

「あたしは先輩思いのいい後輩ですから」

副会長が盛大な咳ばらいをした。

「副会長も風邪ですかね」

対面している神崎がおもむろにオセロの黒石をおきながら言った。結衣が盤面をのぞきこむとどうやら神崎のほうが優勢らしい。副会長は残念なことに4つの隅のうち3つをすでに取られていた。

「どうやらそうみたいだね」

副会長は本を読んでいる咲のほうを見るが、とうの本人が意に介した様子はない。ゆつくりとページをめくる手の動きはとまらず、すばやく行間に目を通していく。

肩をすくめて副会長はオセロを降参した。

神崎はうれしそうにマグネットのはいつた石をあつめて、ぼろぼろになったケースにしまうとそれを棚の上にのせた。ほかにも将棋やチェスなどの盤も積まれているが、いちばんよくつかわれているのはオセロだった。

たまに暇をもてあました会長が相手をしていることもあるが、回数をこなしているわりに副会長も神崎も強くはなくて、圧倒的な大差で負けているのがほとんどだ。

「あ——そういえば、おれの野球部の友達も学校を休んでましたね。野球部内で風邪がはやってるんでしょうか」

神崎が席に戻りながらつぶやく。

「同じ部室をつかつてるんでしょ、たしかあの散らかった薄汚いところ」

会長がはき捨てるみたいに言う。それから「うち、あそこ嫌いな。どうにも汗臭くてムリ」と付け加えた。

結衣はまだ行ったことがないが野球部には専用の部室が用意されていて、そこには泥まみれになったユニフォームや使い古されたグローブが置かれているのだ。広さは探偵同好会とは比べ物にならないくらいで、何十人も部員が腕立て伏せをできるくらいのスペースが確保されている。

さほど強くないとは言っても、霞ヶ丘高校の野球部はサッカー部や陸上部を抑えて堂々のグラウンド支配権を握っており、それにともなつて待遇も非常にいい。

つまり学内で一番の勢力を誇る部活ということだ。

「そうです。最近は雨でグラウンドが使えないのでもっぱらあそこで筋トレに励んでいるみたいですね」

神崎が解説した。

「でも不自然ですね。雨なのに風邪がはやるなんて」

「なんかの事件かもしれないわね」

冗談っぽく会長が笑った。

第二部（後書き）

更新が遅くなつてしまい申し訳ありません。

なるべく早く更新するようにはしますが、いろいろ（テストなど）あつて厳しいかもしれません。

第三部

それからというものの野球部員の欠席者は日が続つにつれて増え、なかには用心のためにマスクをつけている人もいる。それでもあまり効果はないようで、次々に体調を崩して脱落していった。

普通に考えればただの風邪がはやっているだけだろうと思うのだが、こうも野球部ばかりがピンポイントで感染するとなると、不穏なうわさも流れはじめる。

「のろい？」

「だれかが新種のウィルスを開発してたれ流しているという話も耳にしました。さすがにそんなことはないでしょうが」

部室にくるなり開口一番に咲が報告したのはまことしやかにささやかれているいくつかの流説のことだった。それを聞いた会長は眉間にしわを寄せながらうさんくさそうな声音で反応した。

「なんで野球部が呪われなくちゃならないのさ」

「日々グラウンドを占拠されている恨みだとか、他校の生徒がやっているとか——なんとか」

「それで風邪をひかせる呪い？　ずいぶんショボくない？」

「あたしに言われても困ります。どうせどこかの適当な人が面白半分に流したうわさでしょうし」

「ふむ——」

会長は顎に手を当てて考えこむそぶりを見せた。

すこしのあいだ、まるで浮遊する微粒子を見つけようとするかのように宙に視線を投げてから、すくと立ち上がる。

「探偵同好会の出番かしらね。副部長、ホワイトボードを持ってきて」

「はいよ」

めずらしくやる気を出した会長の言葉に苦笑しながらも、律儀にボードを引っ張ってくる。

他の会員たちを席につかせ、会長の高倉みなみはニヤリと不敵な笑みを浮かべながら黒マジックのキャップを外した。

「さて——。久しぶりに探偵同好会にふさわしい事件が起こったんだからね、みんなやる気だしていくよ」

「ついに活動ですね、会長」

結衣が瞳をかがやかせながら言った。

「うちは会長ではなく部長だからね、結衣ちゃん」

「会長、どうしてただの風邪が事件になるんですか？」

訂正したそばから神崎が手をあげて聞いた。会長は複雑な表情をしながらも、気を取りなおしてホワイトボードに向き合った。

「いい質問ね。なぜ風邪ごときで——まあ呪いという噂があるにしろ——探偵同好会が出勤しなければならぬのか」

「たんに暇だからだろ」

副会長がぼそりという。

会長は般若のような形相でにらみつけた。

「そこ、うるさい」

「すみませんでした」

「よろしい。ところで結衣ちゃん、うちの言いたかったことはわかるかな」

気をとりなおして会長が指名する。

立ちあがった拍子に思いきり椅子をけりたおす結衣。あわててひっくり返った椅子をもとに戻してから口を開いた。

「副会長が空気の読めない人だということですね」

「それもそうだけど——、いや、それもすごく言いたいことなのだけれども。こちらが調査に乗りだす理由はなにかってことを聞いたの」

「あ、そっちでしたか」

どっちなんだよ、とため息をつく副会長。

「それは会長も言ったとおり、明らかに不自然な病気の流行だからです。なぜ梅雨という時期に野球部ばかりが感染するのか、なぜ予

防を充分にしているにもかかわらず風邪をひくのか——そのあたりが不可解ですね」

「ざつつらいと！」

親指をつきだす会長に、笑顔でこたえる結衣。変な構図ができあがったな、と神崎は思った。

「ここまで不自然だと呪いという話を信じなくなるかもしれないけど、そんなはずないからね。必ず事件の裏には人為的な力が働いている。それをつきとめるのがうちの仕事なんだから」

「いや、呪いなんじゃないか」

急に副会長の両目がかがやきだしたのを結衣は見逃さなかった。

「古来、平安の昔より呪いという概念は継承されつづけているわけだ。日本だけではない、世界中に呪術に関する伝説があるんだ。これほどまでに呪いが広まっている理由はただひとつ。呪いが実際に存在するからだ。現代科学では解き明かせないことがたくさんあるが、呪いもそのうちのひとつなんじゃないだろうか。解明されていないからといって信じないのは、探偵としての心眼をくもらせることに——」

「わかった、わかった」

とりつかれたような勢いで語りだした副会長を強引にさえぎって、会長が割ってはいった。

内心ではもう少し聞いていたかった結衣が残念そうな顔を見せる。

「あんたのオカルト好きも知っているけど、呪いで片付いたらその後がないじゃない」

「呪いの犯人をつきとめればいいじゃないか」

「どうやって？」

「うちに霊能力に関する本がごまんとある。それを参考にしながら五寸首の刺さった藁人形でも探せばいいんじゃないか」

「あたし夜の神社とか学校には行きたくないです」

「あ——、おれも遠慮したいです」

咲と神崎がそろって辞退する。副会長はとても不満そうな表情だ

つたが、会長が話をつづけた。

「とにかく！　こちらはこれから『野球部連続風邪事件』についての調査をするからね」

「会長、もうすこしネーミングセンスのある名前にしましょう」

神崎が異論をとねえる。会長はまゆをひそめた。

「たとえば？」

「そうですね――『マネージャーは見た！　6月の高校球児にふりかかる未知のウイルス、雨のなかに伝染する病気の謎』なんてどうでしょうか」

「一時間たつたところで出てくる人が犯人ね、きつと」

「母の録画しているやつを毎晩見ているんですけど、けっこうハマりますよ。どうですか会長も」

「うちは遠慮しておく」

「じゃあ、児玉は」

「あたしもムリ」

「白谷さん」

「途中で寝てもいいのならお付き合いします」

「はあ……」

悲哀のこもった大きなため息をつく神崎。副会長を誘わなかったのはわざとだろうか。

「『水無月の呪い事件』でいいじゃないか」

「『霧ヶ丘高校、連続殺人事件』がいいと思います」

「やだ！　部長権限で『野球部連続風邪事件』だから！」

この同好会にはまともなセンスをしている人はいないのだろうか。咲はこっそり文庫本のカバーを外して、そのタイトルを確認した。だいじょうぶ、あたしは平常だ。

百年も雨が降っていない砂漠よりも不毛な議論が、降りしきる6月の雨のなかで延々とくり広げられた。

第三部（後書き）

すこし文体が変わっているかもしれませんが、お許しください。
本を読むことに影響されてしまう体質です。

第四部

「とりあえず、なぜ野球部にだけ風邪が流行しているのか、それを調べなければいけない。探偵の基本は聞き込みから——というわけで、さっそく行こうかしら」

「会長、なにをどういうふうに聞きこめばいいのかさっぱりわからないんですけど」

神崎が質問する。

「誠くんの好きな2時間サスペンスの刑事のようにねちっこく尋問すればいいのよ」

会長がびしつと指をさして答える。

「じゃあ手帳が必要ですよね！ おれ買ってきます」

はつらつとした口調で、とてもうれしそうに駆けだそうとする神崎の襟首を副会長がむんずとつかんだ。

「行かんでいい」

「えー」

気分がでないだとか、メモができないだとか散々ごねていたのだが、咲に「経費では落ちませんからね」と諭されてようやくあきらめたみたいだった。

「5人じゃさすがに多すぎるから、結衣ちゃんと誠くんはうちと一緒に。健輔と咲ちゃんは別行動でよろしくね」

「なんであたしが副会長と一緒になんですか？ 男同士でなかよく調査させればいいじゃないですか」

咲が口をとがらせて不満をならべたてる。

「天才とはいえまだ学校に慣れていない結衣ちゃんと完全初心者の誠くんの面倒をうちがみて、頼りない健輔としつかり者の咲ちゃんをペアにする——我ながら素晴らしい采配だと思うんだけど？」

平然と説明する会長。

「完全に貧乏くじじゃないですか」

「本人の目の前でそんなことを……」

こんなメンバーで大丈夫だろうか、と結衣は心配になった。なんだかコンビネーションがばらばらだ。

そんなことを露ほども気にする様子もなく、会長は部室のドアを開けて階段の踊り場に飛びおりた。

「誠くんの携帯でいま学校を休んでいる人たちに連絡取れるかな？」
旧校舎をでて本校舎にむかう道のりで会長がそういった。

「できますよ」

「メアド知ってる範囲でいいから変わったことはないか、病氣の原因は何だと思っかけて聞いてくれる？」

「了解です」

さっそくシルバーの携帯電話をズボンのポケットから取り出し、手慣れた様子でメールを作成する。本来なら学校で携帯電話を使うのは禁止されているのだが、意味もなく廊下を徘徊するほど教師は暇ではないのだ。

見つからなければどうということはない——ただ、見つかったと没収されてしまうのだけだ。

「さてと。結衣ちゃんは何にか調べたいことはあるのかな」
会長がやさしく問う。

「——野球部はいま筋トレをしているって聞いたんですけど……」

「それ本当、誠くん？」

「いや……あまりこの時期に筋トレをしていた覚えはないですね。去年は空梅雨だったせいか、普通にグラウンドで練習をしていたと思います。あ、ただ雨の日は野球部の部室にこもってみんなで筋トレでした」

野球部の元エースピッチャーがメールを打ちながら答える。

ひじの怪我で野球人生を絶たれた神崎は、結衣が連れて来られたすこし前に探偵同好会に入会したという。だから、野球部のことに関しては結衣たちよりもずっと詳しい。

「それで、その人たちは腹筋が9つに割れてきたって……」

「それはない」

会長がきつぱりと否定した。

メールはすぐに返信されてきた。きつと風邪で寝込んでいるとはいえ暇を持て余しているのだろう。テスト直前でもなければ高校生は勉強なんてしないのだ。

学校のない日なんて退屈なだけなのである。

会長と結衣が、神崎の携帯の画面をのぞきこむ。本文は絵文字もなにもない簡素な文章だった。

「ハートマークとかつけないの？」

「会長はなにを期待してるんですか——。男同士のメールなんてこんなもんです」

「ふうん」

メールの内容をまとめると、いつものハードな練習ではなく筋トレばかりだからたいして疲労はしておらず、とくに風邪の原因となるようなことも見当たらないということだった。

ただ梅雨がじまってから一週間ほどして部員のなかで風邪が流行し出したらしい。それからというもの次々に部員が倒れていくので、マスクをつけると厳命されたとか。

「マスクの着用が義務付けられているのに感染——か。まあ部活やつてる最中は外すでしょうし、あまり効果はないかもね」

会長がつぶやく。

これだけの情報ではなかなかちが明きそうにない。風邪をひいた本人たちに心当たりがないというのだから原因はきつと意外なところに隠れているのだろう。

ここで考えていても仕方がない。あの匂いにはうんざりするが、野球部の部室を見ないわけにはいかないのだ。

「誠くん、結衣ちゃん、野球部の練習を見学するよ」

会長はそういうと、大きなため息をつきながら小雨の降るグラウンドの方へ足を向けた。

おとといからやむ気配を見せずに降り続いている長雨のせいでグ

ラウンドの土はぬかるんでいた。気を抜くと、すべりやすいロープ
アーに体を持って行かれそうになる。

こんな泥まみれのなかで転んだら一大事だ。
ズボンやスカートの裾に泥が跳ねないよう気をつけながらゆっく
り歩いて行くと、校舎とは対角線の場所にある野球部の部室が見え
てきた。

どういうわけか野球部が異様な人気をほこる霞が丘高校では、も
はや部屋というよりは建物と形容したほうがしっくりくるくらい立
派な、専用の部室が用意されている。

広さはだいたい教室を4つほどつなげたくらい。

主に内部は2つのスペースにわかれていて1つは着替えやシャワ
ー用、もう片方はバットやユニフォームをしまっておくために使わ
れている。

「ああ、憂鬱……」

その野球部の部室の前まで来て、会長がふたたび大きなため息を
ついた。

「どうして運動部ってあんなに汗臭いのかしら。それさえなければ
別にかまわないんだけど、逆にあれが致命的な破壊力を持つてい
ると思うの」

「そんなに匂いますかね」

神崎が首をひねる。

「自分たちで気付いてないの？ どうりで平気なわけだ」

呆れたように肩をすくめる。

だが、爽やかな雰囲気をもった神崎ならばたとえ汗をかいてい
たとしても、オレンジのような柑橘系の甘酸っぱい香りが漂って来
るような……。結衣には、そんな気がした。

神崎がノブをひねって部室のドアを開けると、もわつとした汗と
熱気と制汗剤の中途半端にフルーティーな匂いがいつせいに飛び出
してきた。せき込みながら膝をつく会長。こころなしか、顔色が悪
い。

結衣も顔をしかめて鼻をつまんだが、神崎は平気な顔をして立っている。

やはり慣れという要素が強いのだろうか。それとも、男という性別は匂いに鈍感に作られているのかもしれない。

「むり、絶対無理！」

荒い息をしながら叫ぶ会長。眼には涙も浮かんでいるようだ。

「ほら、行きますよ」

神崎がそう言って抵抗する会長を羽交い絞めにしながら部室のなかへ引きずり込んでいく。そのあとを、結衣も深呼吸をしてから続いた。

「よお、神崎じゃねえか」

「お久しぶりです先輩」

1、2、3と大声で号令しながら筋トレに励む部員たちのなかでもひととき体格のいい、ユニフォームに高木と名前の記された人が声をかけた。

2年生の神崎に敬語を使われているところを見ると、どうやら3年生らしい。上下関係の厳しい運動部において、頂点に君臨する階級ということだ。

そのほかの部員たちはちらりと探偵同好会のメンバーに視線をやったが、すぐ練習に戻ってしまった。規則的な動きで腕立て伏せが繰り返されるようすは、まるで機械が動いているみたいだった。

部屋の壁に取りつけられた棚にはユニフォームやグローブなどがしまわれている。その備品に監視されるようにして、野球部は練習に励んでいた。このさらに奥の部屋に更衣室があるのだ。

「そっちは片倉か、なんの用だ」

と、顔のあちらこちらにニキビのあとが残る高木が言う。結衣のことは気にも留めていないらしい。

「なについてこの悪臭の根源を破壊しに来たの！」

そう怒鳴り立ててから会長は静かに口で息をすった。こうするとあまり鼻孔を刺激しなくて済むのだ。

「そうか」

「焼き払ってやるんだから、こんなところ！」

「会長、目的が違ってきてます」

神崎がいさめるが、羽交い絞めにされた下で会長は手足をばたつかせながら暴れていた。

「すみません、本当はこんなことを言いに来たんじゃないんですけど」

「さつさと済ませてくれよ。こつちも暇じゃないんだ」

「実はわたしたち野球部について調査に来たんです」

「調査？ ああ、そういえば探偵同好会とやらがあるんだっけか」

高木が暴れている会長を眺めながら納得したように言う。

「それで？ なにを聞きたいんだ」

「もちろん妙な風邪の流行についてです。最近なにか変わったことはありませんでしたか。たとえば、環境が変わったとか、部屋の模様替えをしたとか」

「……いや、とくには」

しばらく記憶を探るように考え込んだ高木だったが、力なく首を振りながら答えた。

この事件の原因は思いもよらないところにひそんでいる。結衣は改めてそう確信した。すこし面白いことになってきた。謎が不可解であればあるほど、探偵の好奇心は燃えあがるのだ。

「それなら呪いのほうに心当たりはありませんか」

「くだらない噂だろ。俺たちに恨みを持った人間が呪いをかけているとか、なんとか」

「そうです。誰かに恨まれるようなことはありませんか」

「探偵が呪いなんかを信じてるようなら、こんな茶番に付き合っってはられないな。帰ってくれ」

高木は気分を害したようで、露骨に眉をひそめながら背中を向けた。その背中をキッと睨みつける会長。

「ちよつとあんた、うちのルーキーになんて態度とってんのよ。金

属バットで殴ってやろうかしら」

「本人を目の前にして言うセリフじゃないです、会長」

手を放したら本気で金属バットを片手に追いかけまわしそうな氣迫だったので、神崎は両手に込める力をさらに強くする。ここで殺人事件が起こったら犯人は火を見るよりも明らかだ。

「こっちはね、ある程度の根拠があつて呪いについての調査もしてんの！ あんたのちっぽけな脳みそじゃ思いもつかないようなこと考えてるんだから」

ふん、と鼻を鳴らして、高木は結衣たちに向き直った。

その顔にはどこかあきらめたような色が浮かんでいる。

「呪いなんてものは知らないな。運動部のやつらなら多かれ少なかれ野球部に恨みを持っているんじゃないか、グラウンドをほとんど占拠されているわけだし」

「うちも忘れないでよね！」

会長が犬のようにうなる。

「白谷さん、これで質問は終わり？」

抵抗する会長をけんめいに抑え込みながら神崎が問う。結衣はもういちど野球部の薄汚れた部室を見まわしてから、ぺこりと頭を下げた。

「では部長、これで失礼します」

神崎も深々とお辞儀をして、会長を引きずりながら部室のそとへでる。

生温かい空気が体を包みこんだが、それでも部室のなかよりは幾分か涼しく感じられた。いつの間にかあの悪臭もさして氣にならなくなっている。慣れというものは恐ろしい。

「マネージャーっていませんか」

ふと思いついた疑問を口に出す。部屋の中はあまりにも散らかっていたし、棚にしまわれていたユニフォームのたたみ方も粗雑で、とてもマネージャーがいるようには思えなかった。

「不思議なことにうちの野球部にはマネージャーがいらないんだよね。」

高校3年間で告白し続けたにもかかわらず彼女ができなかった初代部長が女人厳禁の部活にしたっていう伝説もあるくらいだし」

「……悲惨ですね」

「もしかして、その部長の呪いだったりして」

「まさか」

乾いた笑い声が、雨のカーテンに吸い込まれていった。

第四部（後書き）

長らく更新期間を開けてしまい申し訳ありません。
これからは少しペースアップしていこうと思います。

第五部

「会長たちも行ってしまいましたし、嫌々ながらあたしたちも行く
としましょうか」

「……はあ」

嵐のような勢いで結衣と神崎をひきつれた会長が部室を飛び出していくと、残された部屋は急に静かになってしまった。

今までは聞こえなかった小雨が窓をかすめて行く音さえ明朗に届いてくる。

小説を読むのにちょうどいい静かさだな、と副会長は思う。雨の日は読書をするに限るのだ。

「めずらしく会長がやる気を出したんですから、サポートするあたしたちが動かないでどうするんですか」

「口の悪い後輩といっしょでなければ幾分か気が楽なんだけどね」

「あたしも頼りない先輩とペアを組まされるとは思ってもみませんでした。まだパシリとして使えるぶん、神崎のほうがマシってものです」

「パシリ以下、ね」

「マイナスですね」

「児玉くんはよく小説を読んでいるみたいだけど最近はやりのツンデレというのは」

「違います。いつまでも無駄口たたいてると怒られますよ」

咲はそう言うど席から立ち上がり、ちらりと窓のそとへ視線をやった。きっと会長は野球部の部室にむかったことだろう。元野球部の神崎を連れていったのだからコネクションにはこと欠かないはずだ。

副会長もあとからつられるようにして腰をあげた。

「僕は呪いの出所を調査ということでもいいかな」

咲が驚いた表情をする。なんだか小馬鹿にされているようで、副

会長の心中は複雑だった。こういうとき、どんな表情をすればいいのだろうか。間違っても笑ってはいけない気がする。

論理的な思考をするのが苦手なわけではないのだ。いや、むしろ得意な分野にはいるかもしれない。ただ――

「なんで数学のテスト赤点なんですか？」

そう、ただ試験には反映されていないだけで。

「学校裏サイトがあれば便利なのに」

ふたりで旧校舎の廊下を歩きながら、咲が愚痴るように言った。

普通の高校には裏サイトと称されるものがあるのだろうが、霞が丘高校ではそういった類のはなしを聞いたことはない。おそらくそんなものを作っているような物好きがいないからなのだろうが、良いにしろ悪いにしろ、学校の生々しい情報が手に入る場所がないというのは探偵にとって不便だ。

「信用度の低い情報をあてにしていけないからね。僕に言わせてみればそんなものに頼るのは邪道というものだ」

「あたしあんまり聞き込みとか好きじゃないんです。冴えない刑事がうーんと悩んでいるところに颯爽とあらわれた名探偵があればよあれよという間に事件を解決してしまうようなやつが好きなもので」

「つまり、面倒くさいことは鈍くさい僕に任せるってことかい？」

「あらいやだ。そんなこと言っていないじゃないですかあ」

わざとらしく笑うが、その瞳は笑っていないかった。
先輩としての威厳はどこに消えてしまったのだろうと自分の半生を振り返ってみたが、会長に馬鹿にされ続けてきた思い出ばかりが蘇ってくる。

生まれたときからダメみたいだ。無性にむなしさが込み上げてきて、ため息に乘せてふりはらう。

「けど、調べるといつてもどこから目星をつけていいのやらわからないな。噂なんて誰がながしたものかわからないし」

「ある程度は絞り込むことができると思いますよ」

「どうやって」

「まずは動機です。普通に考えればただの風邪の集団感染だというのに、わざわざ呪いだとか怨念だとかいう物騒な話題をつくりだすのだから、それなりに理由のある人間がかかわっているのは間違いないでしょう。だからこそ一見どうでもいいことなのに、会長が重要視しているんです」

「なるほど。つまり野球部になんらかの恨みがある人物だと思っていいだろう」

副会長が深くうなずく。

人間性はあまり信用していないが、会長の探偵としての洞察力は舌を巻くものがある。だからこそ同好会のトップという地位を得ているのだ。

「で、その恨みというのは」

「体育会系の部活は大方グラウンドをとられている積年の怨恨があることでしよう。特にサッカー部とかは。彼らの練習場はサッカーというよりフットサルに近いものだと聞いています」

「だが、そんなものは年中変わらないだろうし、そいつらだって半分あきらめているんじゃないかい」

「人の恨みを侮つてはいけませんよ。副会長もいつか背後から包丁でグサリ、なんてことがあるかもしれませんからね」

むしろ咲が被害者で、自分が犯人になっていそうだと真剣に思った。はやいところガンジーと同じくらい寛大な心を手に入れないと危ういかもしれない。

「ほかにも個人的な理由で恨んでいるという可能性もあります」

副会長の危険な未来予想図も関係なく、咲が普通に続けた。

「たとえば素振りの最中に手がすべって飛んできたバッドに顔を直撃された人とか」

「それは痛そうだ」

「極端な話ですけど、廊下で肩がぶつかったというだけで恨みに思う人もいますよ」

「それじゃ、僕たちには見当がつかないじゃないか」

「あたしたちには分からなくても、他の人が気付いている可能性は高いです。だから聞き込みをするんですよ、副会長」

笑顔のひとつもなく咲が副会長の細長い背中をたたく。

女子のなかでも小柄なほうである咲と、筋肉さえあれば運動部から引く手あまたであろう高身長の副会長が並んでいると、まるで教科書に載っている、子供の発達具合をまとめた図を見ているようだ。足のむくままに渡り廊下をつたい、教室のならば本校舎を歩いて行く。

放課後の教室に人影はまばらだ。上級生の教室ほど下の階にあるので、副会長と同学年の3年生からまわっていくことになった。

最高学年である3年生には、部活を引退して受験勉強に専念するひともいるが、学校側がそれほど受験に力を入れていないせいもあって強制ではない。そのため会長や副会長のように部活を続けるひとも少なくないのだ。

どこかさびしげな雰囲気漂っている教室のなかでは、数人の生徒がノートと参考書を広げてせわしくなくペンを走らせていた。まだ6月ということもあって、それほど張りつめたような感じではなかった。

これが冬に近づくにつれて見ているのが辛くなるような必死さに変わってくるのだ。

ほんとうなら副会長も残って勉強に励まなければならないような成績なのだが、やらなくて大丈夫なのだろうかと咲が珍しく心配するほどに。

「やあ」

と嫌味にならないよう気をつけながら、机に向かう生徒のひとりに声をかける。

問題に行き詰っていたのか、その人は疲れた様子で顔をあげた。勉強熱心ではなさそうだったが危機感をつのらせて残っているのだらうと咲は推測した。

「なんだよ、大高か。後輩連れて、彼女ができたって報告か？」

「違います」

咲がつめたく言い放つ。

「そつだよな、お前には幼馴染とかいう世にも珍しい彼女候補がいるもんな」

「どうだろうね」

この手のからかいには慣れているのか副会長がかんたんにはぐらかす。

「君はたしか野球部だったよね」

「レギュラーにはなれなかったけどな」

自嘲気味に笑う。

だからこそ部活をやめるふんざりがついたので。

「野球部のなかで風邪が流行ってるのは知ってるかい？」

「ああ。この時期にしては」

「その原因を調査しているんだけど、なにか思い当たるようなことはないかな」

「そりゃあ——ただの体調不良じゃないのか。あんな息のつまるような男くさい場所で練習していたら身体も壊すだろ」

なにを言っているんだというような表情で首をかしげる。

「あ——、いや、前にもこんなことがあった気がするな。たしか俺が1年だったところに。あれも梅雨どきで風邪が蔓延したんだっけ」

「そうだったか。あまり覚えてはいないんだが」

「それもそうだ。今年よりは全然少なかったし、だれも騒ぎはしなかったからな。夏になってグラウンドが使えるようになったらウソみたいに無くなったし」

まあ、偶然かもしれないけどな、と付け加える。

これは貴重な情報を手に入れることができた。偶然という線も捨てきれないがおそらく関連性はあるだろう。一昨年と今年の状況を比べることで原因を見つけられるかもしれない。

「呪いの噂は？」

「野球部に怨念がついているとかそんなんだっただけ。もう俺には関係のないことだけど」

「だれかが話しているのを聞いたことは」

「教室で小耳にはさんだくらいだから特定はできない。わるいな」

「いや、すごく助かった。ありがとう」

副会長が言うと、そのひとは欠伸をしながら問題集に向きなおった。数学の問題集だった。が式を解いている時間よりもペンを回しながら問題文を凝視しているほうが長いみたいだった。

頑張れよ、と声をかけてから教室をあとにする。

まだ勉強をはじめると自分には早すぎると自分に言い訳をしながら。

「副会長もはやいところ問題集に取り組んだほうがいいですよ」

無情にも咲が確信をついた。

第六部

「わたし犯人わかつちやいました」

5人の会員が部室にもどったのは下校時刻ギリギリの、空がうつすらと夜の闇に染まりはじめるころだった。夏の夜はみじかい。だけど雨雲におおわれた空は昼間からずっと薄暗くて、時間の移ろいを忘れてしまいそうになる。

咲が気をきかせて買ってきた缶ジュースを飲みながら、簡単に調べてきたことをホワイトボードにまとめていく。まるでサスペンスドラマの刑事たちがやっていることみたいだと、神崎は喜んでいた。ひととおりの報告が終わり、ホワイトボードがいくつもの丸で囲まれた情報で埋まると、下校時刻を知らせるチャイムが流れた。

最近ではここまで遅くなることがなかったので、咲にとっては初めての最終チャイムである。

つまらない校歌をピアノの音にのせて放送しているだけなのに、なぜか楽しく思えてくる。これが青春なのか、とすこしばかり感動した。

「今日の部活はここまでにして、もう帰りましょう。続きはまた明日ということだ」

会長があちこち擦り切れている学生靴を肩にかけながら言った。

「えー、もうちょっとやりましょうよ」

神崎が口をとがらせる。

「これからが謎解きの面白いところじゃないですか」

「だからこそ先延ばしにするんじゃない。サスペンスドラマでいえば『あなたが犯人ですね』と言ってCMに入るべきところよ」

と会長が諭して、しぶしぶ帰り支度をはじめ。野球部のころはもつと遅くまで残って練習していたものだ。まあ、ほとんど強制的に練習させられていたというのもあるけど。

「あたしも副会長といっしょに行動して疲れちゃいました。おかげ

で今晩はすぐに眠れそうです」

「それは皮肉か、それとも嫌味か」

「やだなあ、どっちもですよ」

というような咲たちのやりとりは、結衣の耳には届いていなかった。

真剣な表情をしてホワイトボードを凝視している新入部員の様子に気づいた会長が声をかける。

「どしたの結衣ちゃん？」

「あの、風邪の原因だけなんですけど――」

結衣はしばらく笑うべきかどうか迷ったあげくに、

「わたし犯人わかつちやいました」

と控えめに微笑した。

聞きたいことは山ほどあったのだが、すこしくらいは自分で考える時間もほしいということで、その日の部活は解散になった。推理小説だって主人公の探偵が一方的に種明かしをしたのではつまらない。

だけど結衣があっけなく謎を解いてしまった以上、その推理を聞いてみたいのもまた事実で、残念なようなほっとしたような不思議な気分だった。

暗くなった雨のなかでも、副会長の歩幅はかわらず大きい。

黄色の傘をさしながらその先を歩くのは会長で、うしろにいる副会長に追い抜かれまいとやや小走りで足を動かしていた。

結衣や神崎たちとは帰る方向が違うので校門を出てすぐにわかれた。

幼馴染というだけあってふたりの家は近く、道路をはさんで向かい側に建っている。だから幼稚園から高校までずっと同じ場所に通うことになったのだ。

雨のせいかな人影のない道を歩いていると、街を照らすはずの電燈

さえ寂しげに思えてくる。そんなときにちらりと後ろを振り返ると、いつだってひよろひよろした幼馴染がいる。

「ねえ健輔」

「なんだ」

「結衣ちゃんのこと、どう思う」

「いい新入部員だな。素直で言うこともきくし、なにより口が悪くない」

副会長がこたえる。

コンクリートの上に溜まった水たまりをふみつけると、花火みたいに水しぶきがはじけた。

「ほかにほ？」

「びつくりするぐらい推理力がある。みなみが褒めるんだからすごいとは思っていたが、まさかここまでとは予想もしていなかったな。白谷さんがいれば、これからの同好会もうんと楽しくなる」

「部長のうちの負けてはいられないわよね」

その言葉は、雨滴が傘をたたいて落ちる音にもさえぎられることなく副会長に届いた。

「よし。呪いのほうの犯人はうちらで見つけよう」

なにかふっ切れたように笑うと、会長はスカートをひるがえしながらバレエダンサーみたいに一回転した。あやうくその下にあるものが見えそうになって、副会長はとっさに視線をあらぬ方向へやったのだった。

まるで意地悪しているみたいにゆっくり時を刻んでいた時計が授業の終わりを告げ、解放のチャイムが鳴りひびくと教師が出て行くのよりもはやく会長が教室をあとにした。

廊下は走るなんて標語は気にも留めない。

一直線に職員室にかけこむと、部室の鍵をなかば盗賊団のような勢いでさらっていく。そのまま世界陸上にも出場できそうなスピー

ドで階段をかけ上り、雑然とした廊下の奥にある探偵同好会と書かれたプレートのさがった鍵穴に鍵をさしこむと、ようやく一息ついた。

いつもなら購買部で菓子パンやジュースをゆっくり吟味している時間だが、今日ばかりはクリスマスプレゼントを目の前にした子供みたいに部活が待ちきれない。

それは会長に限ったことではなかったようで、他の会員たちも授業が終わるとすぐ部室にやって来た。そして、いつもの調子で結衣がのんびり探偵同好会のドアを開けるころには、目をキラキラ輝かせた4人が座っていた。

「――さて」

結衣が人差し指をたてて話しはじめる。

合唱部にいたというだけあって、水晶のように透きとおる声をしている。聞いていて心地の良い声だった。

結衣のうしろにあるホワイトボードには黒マジックでところ狭しと書かれた文字が整列している。昨日から手は加えられていない、そのままにされた情報だ。

「なぜ野球部ばかりに、そしてこの湿気が多い梅雨どきに風邪がはやっていくのか。その謎を解く決定的な手掛かりになったのは副会長と咲先輩のはなしでした」

わずかに口元をほころばせる副会長。

「一昨年にも小規模ながら同じ状況が起こっている。そして去年にはまったくならなかった。この時期ですから考えられる要因はやはり雨でしょう。空梅雨だった去年とは違って、今年はほとんど晴れる日がありません。ぬかるんだグラウンドでは練習できず必然的に野球部は部室で筋トレということになります」

あの匂いを思い出したのか会長がすこし顔をしかめる。

咲はホワイトボードの前を左右に往復しながらつぶけた。

「それこそが原因です。屋内にこもって練習していたのでは、練習道具もユニフォームくらいしか使わないでしょう。もちろんボール

磨きをするようなこともない」

「それとどういう関係があるんだ」

神崎が半分面白がって聞いた。探偵の推理には茶々が必要なのだと勉強してきたのだ。

「だから掃除をすることもなかったんです。雨が降っているのは換気のために窓を開けることすらしなかったでしょう。それに加えて動かされることのない道具たち。すべてが悪い方向へ向かっています」

「あ、うちもわかった」

「僕もだ」

途中で会長と副会長がうれしそうな声をあげる。それでも神崎と咲はまだ気がついていないみたいなので、ネタばらしはしない。

手品の最中に横からトリックを明かされてしまうことほど無粋なものはないから。

「答えはそう——カビです」

ああそうか、と咲が納得した表情をするが神崎はまだしっくりこないようだった。

おずおずと手をあげて結衣に尋ねる。

「どうしてカビが風邪につながるんですか？」

「症状は風邪に似ていますが、おそらく軽い気管支炎になっていたでしょう。軽度のもんですから、数日も家で休んでいればなおってしまう程度の。部室で感染しているわけですから、マスクが意味をなさないのも当たり前です。部活中にはもちろんマスクをはずしていますからね」

「だから去年は起こらなかったのか……雨が降らず、屋内で練習することもなく、カビも生えることがなかったから」

感嘆した神崎の声。

「そうです。それに加えてマネージャーがいなかったことも災いしたでしょう。せめて誰か定期的に掃除してくれる人がいれば、カビが蔓延することもなかったはずです。汗臭いのが当然となってしまう場所ではだれもカビの匂いなんて気にしませんから」

「なるほど……」

神崎はしきりにうなずいている。

その横では咲が無表情で宙を見つめていた。

「おーい、咲ちゃん」

心配に思った会長が声をかける。

すると我に返ったように咲の視線がもどった。

「あ——、ちょっとびっくりしてました。あまりにも鮮やかだったもので……」

「うちも愕然とするくらい素晴らしい推理だったよ、結衣ちゃん」

「ありがとうございます。会長」

「うちは会長じゃなくて部長だからね」

「はい」

屈託のない笑顔で返事をされると、訂正する気もうせてしまう。

それからしばらくはみな気が抜けたみたいにぼんやり座りこんでいたのだが、定時を告げるチャイムが鳴ると、魂がもどったみたい

に時間が進み出した。

会長が気合いを入れ直すためにトイレで顔を洗ってから、ホワイトボードをひっくり返して新たに文字を記入する。

「呪いの元凶が解決したいま、うちの調査は呪いを作りだした人間のほうにコンバートする。だれが、なぜ、呪いなどといううわさを流したのか。今度はそっちを調べなくちゃね」

「そうですね」

咲があいづちを打った。

「今度はあたしたちの出番です」

第六部（後書き）

こんなところで書くのは無粋かもしれませんが、ひとつ質問です。

この小説、視点移動が多すぎますかね？

いちおう結衣を中心にしているつもりですが、他のキャラクターだけのシーンとか、それ以外にもところどころ他キャラの心理描写とかあると感情移入しにくいのでは——という話を見かけまして。そういえばこの小説にも当てはまるのでは……と思ったのです。

もし読みにくい、ここを直したらいいなどのアドバイスがあったらどうぞ遠慮なく教えてください。

お願いします。

第七部

「基本的なことはすでに調べ終わっていますから、今度は調べなくてはならないことを絞ってから聞き込みにむかうべきです。結衣が推理したことで大きななぞは解決していますし、ここで話し合いをするのがベストだと思います」

咲がよどみなく言った。

鮮やかな結衣の推理によって風邪の正体はカビによる気管支炎だと判明したわけだが、まだ呪いのうわさを流した犯人を突きとめるという目的が残っている。

それを解決しない限りは、完全な解決にはならないのだ。

「僕もそう思う。また聞きこみに行くのなら違う質問を考えていかないと」

副会長が同意する。

刑事ドラマとはちがって何度も尋問をするわけにもいかないし、その必要もないのだ。

「野球部に恨みを持つ人間に限定して推理してみようかしら。あ、今回は結衣ちゃんに負けないよう全力で頑張るからね。役にたたなかった部員は一ヶ月間の脳トレを命じるわよ」

会長が気合いのはいった声で言う。

いきなりルーキーに先を越されてしまっでは先輩として立つ瀬がない。だが、それよりも自分で事件を解き明かしたいという欲求のほうが強かった。

「あの……脳トレって具体的にないをすればいいんですか」

神崎がおずおずと尋ねる。

弱腰になっている神崎を、会長がキツと睨みつけた。さながら追いつめた蛙に最後通告をする蛇のような視線だ。

「試合がはじまる前からあきらめてどうする。貴様それでもエースピッチャーか！」

「野球に関してはそうですね……」

「だったら立ち向かえ！ 頭のよさなら結衣ちゃんどっこいどっこいだろうが！」

「会長……」

神崎は目をうるませた。

「おれ、白谷さんより頭悪いです」

「そうか」

ため息すらなく乾いた瞳で神崎をながめる会長。

気をとりなおして推理のほうへ話を戻すことにした。この阿呆でふぬけは戦力にならないかもしれない。結衣が探偵同好会にはいつてくれてほんとうによかった。

後輩の半分が戦力外となると、とても心もとない。

「まずはうちの勘だけだね、これは1年生の仕業じゃないかと思ってる。つまり結衣ちゃんと同じ、新入生というわけだ」

「なぜですか」

まるで霧のなかから小石を見つけ出すような会長の言葉に、咲が驚きながら訊いた。

「ちよつと根拠は薄いけど、去年もその前も野球部に関する不穏なうわさが流れたことはいちどもなかった。悪評なんてものはこじつけなんだからいつだって流せるものなのに、なぜか今年だけはそんなものが生まれてしまった。結衣ちゃんと同じ考えかただよ。以前になくて、今にないもの」

「だから1年生」

「そう。もちろん他の学年が最近になってから恨みを抱いたというような可能性もあるけどね」

「それはちよつと横暴すぎやしないか」

副会長が反論する。

「みなみの言ったとおり論理が飛躍しすぎている。あくまで勘だ。ひとつの仮説としてはアリかもしれないが、それでも根拠が弱すぎる。とても方針としては認められないな」

「なら健輔にはほかに名案があるの？」

「消去法で探していくには無理があるからな、ある程度うわさの範囲を調べて、それから絞っていくべきだと思う。アンケートをとるなり、データの収集が必要だな」

「そんなことしてたら途方もない時間がかかる。容疑者を手当たりしだい潰していくほうが早いと思うけど」

「それこそ非効率的だろ。急がば回れというやつだ」

副会長は声を荒げようとはしなかったけれど、妥協する気がないのは明らかだった。いつもは言い負かされている副会長だが、根は頑固な性格をしているのだ。

普段は言い争っても仕方のないことだからあきらめているが、探偵に関することは譲れない。

「だったら別々に捜査しましょう」

不穏になりかけた空気にそぐわないのんびりとした声で結衣が提案した。

「真実はひとつです。違う方面から真相に迫っても、いきつく答えに変わりはありません。それなら自分の好きなように動けばいいんじゃないでしょうか」

「あたしも賛成です」

と咲が言った。

「今度こそ会長といっしょに調査したいですし」

「もしかして、そっちが目的じゃないだろうね」

副会長がいぶかしげな視線を向けるが、咲はにこりと微笑して答えた。

「そうですね？」

「……神崎くん、きみは僕について来てくれるよね」

「え、ええ」

「よし、きまった！」

バン、と思い切り机をたたいて立ちあがる会長。そして意気揚々と結衣のほうを見つめた。

「どっちに付く？ 健輔？ それともうち？」

「わたしは――」

結衣はすこしのあいだしゅん巡していたが、やがて決意したように口を開いた。

「副会長といっしょに行きます」

第八部

その日も朝からまるで当たり前のように雨が降っていて、いつこ
うにやむ気配を見せなかった。空を灰色に彩っている曇天も、青空
を忘れてしまいうらい居座っている。

霞が丘高校のグラウンドにはあちこちに水たまりができていて、
とても練習ができるような状態ではない。6月になってからずっと
この調子だ。

—— 天気が悪いと、気分まで滅入ってくる。

だがそれも、わがもの顔でグラウンドを占拠し、ボールを追いか
ける野球部の風景を見せつけられるよりはずっと良かった。

軽快な金属音を響かせるバットの音もキャッチャーグローブに吸
い込まれるボールの破裂音も聞きたくはない。苦虫を口に突っこま
れるような記憶ばかりが思い出されるから。

雨は好きじゃない。けれど、晴れるのはもっと嫌だ。

教室の窓からしめった風景をながめる。

野球部の部室であるコンテナのような建物がグラウンドのすみに
あるのが目に入り、無性に窓ガラスを割りたくなった。体の内側か
ら発生した破壊的な衝動をおさえこむと、残ったのは力なくガラス
をたたくこぶしの音だけだった。

「だからといって他人を中傷するのはよくないですよ」

誰もいないと思っていた放課後の教室で、後ろから声をかけられ
る。いや、もともとそこにいたのではなく、はいつて来たことに気
がつかなかったのだろう。

振り返るとそこにはふたりのスカートをはいた生徒が立っていた。
片方はツインテール、もう片方はショートカットの髪型だ。

「君だよ、野球部にへんなうわさを流したのは」

「……それがどうだって言うんですか。証拠もないのに人を悪人呼
ばわりしないでください」

ぶつきらばうに答える。

見知らぬ人にいきなり真相を突かれて驚いたが、うわさなど風のようなもので簡単に出所がつかめるわけがない。

しらを切っていれば大丈夫だろう。そう思っているのに、かすかに足が震える。

「推理小説の犯人はみんなきまってそう言っんですよ」
ツインテールの咲が言った。

「凶星ですか？」

「そういじめるもんじゃないよ咲ちゃん。べつに人を殺したわけでもないんだし」

シヨートヘアの会長がたしなめる。

「証拠というほどのもんじゃないんだけどね、状況証拠と証言を集めてまわったら君にたどり着いたというわけ。たとえば野球部に入部を断られた1年生がいなかったか——とか」

つとめて明るい雰囲気をだそうとしている会長だが、言葉は鋭い。ふたりの上級生に問いつめられた小柄な男子生徒は逃げ出すようなそぶりも見せず、じつとふたりを見据えている。

学校で名前と学年をしられてしまったら、もう逃げ出すことはできないのだ。それなら正面から立ち会っしかない。

「先輩たちは……誰なんですか」

かすれた声で問う。

「うちらはね、探偵同好会っていう部活をやっているの」

会長がこたえる。

「正確には同好会ですけどね」

咲が口をはさんだ。どうやら会長であろうと副会長であろうと口が悪いのは変わらないらしい。

「探偵？」

「そ。かつこいいでしょ」

会長のウインクはその男子生徒——内田には届かなかった。

あきらめたようにうつむく。彼の表情には水をやり過ぎてかれて

しまった花のように生気がなかった。

「探偵なら全部わかってるんですよ、きっと。俺をどうするんですか。先生に言うなら停学か退学ですよ。そうじゃなくてもみんなに知られたらお終いだ。俺もう学校やめた方がいいですよ」

最後のほうはほとんど独り言のようにつぶやく。

「身長だけじゃなくて器も小さい人ですね」

咲が呆れたように言う。その脇腹を会長のひじが小突くが、氣にとめた様子もなく内田を睨みつける。

「あたしネガティブな人って嫌いなんです。どんなに罵られようと馬鹿にされようとくじけない人じゃないと。せつかく入部したのに怪我に泣かされてもめげないやつがいるのに、挫折しちゃうような情けない根性じゃダメなんです」

「でも、俺は最初から入らせてすらもらえなかった」

「知ってます。体格が良くないせいで入部を断られたっていうことも、無名中学の中心選手だったっていうことも。それで諦めてしまいうような君はしょせんその程度の選手だったということです」

「そう。諦めるにはまだ早いつてこと」

咲の言葉をついで会長がふたたびウインクする。

「君もチャンスをつかみなおしてみな」

その頃、教室のそのの廊下では副会長をふくめた三人組が声をひそめて立ち往生していた。無人の廊下にはなかで繰り広げられているやりとりが鮮明に響く。

「……タイミングを逃しましたね」

「すまない。僕が先生に呼び出されなければこんなことにはならなかった」

「仕方ないですよ。ほんの少しだけ会長たちが早かっただけのはなしですから」

結衣がなくさめるが副会長は大きなため息をつく。

「出番、なかったなあ」

「次は呼び出されませんよきっと」

膝をかかえ、ため息をついている副会長をよそに、神崎はかすかに頬を赤くしながらたたずんでいた。

雨が上がったのはそれからちょうど1週間が経った日だった。かりりと晴れた日差しはもう季節が夏なのだということを認識させる勢いで、まだエアコンのはいっていない教室はサウナのように蒸し暑い。

うだるような熱気と湿度のなか、グラウンドは久しぶりにトンボがかけられ、きれいに整地されている。まるでさざ波のような模様が砂の地面に描かれていた。

「本当にそれで良くなるのか？」

野球部の主将、高木がいぶかしげに訊いた。

胸を張ってうなずく会長のとなりでは、小柄ながらも目いっぱいバットを振っている内田の姿がある。そのユニフォームは霞が丘高校のものではなく、彼の中学時代のものだ。

「こいつの入部試験をするだけでいいんだよな？」

「そうよ」

会長のうしろにはほかの会員たちの姿もある。まぶしい太陽に目を細めながらも、素振りをする内田にエールを送っていた。

晴れの日を待って高木に交渉を持ちかけたのは会長だった。

とある生徒に入部試験を受けさせるかわりに部内で蔓延している風邪をなくしてやると言って、高木も半信半疑ながらそれに同意したのだ。

べつに入部試験がマイナスに働くわけではないし、それで原因不明の流行病がなくなるならもうけものである。

そういう算段が働くことも、会長は見通していた。

「こんなチビが役に立つとは思わないけどな」

高木が小さな1年生の体軀を見ながら言う。

身長だけなら会長とさほど変わらないくらいである。体格が重要

視される運動部には、あまり魅力のない体つきだ。

「うちが推薦するんだから間違いない。将来は第二のイチローになるかもしれないんだから」

「そんな簡単にいくもんか」

神崎ならともかく、とつけ加える。

かつて鳴り物入りでエースの座を手にいれた神崎は、怪我を理由に退部しいまでは探偵同好会の一員となっている。

その神崎も身長こそ副会長には届かないが、無駄のない引き締まった筋肉をしているのだ。

「まあ見てなつて」

マウンドにはピッチャーが上がり、キャッチャーとサインの交換をしてしきりにうなずいている。バッターボックスにはヘルメットをかぶった内田が腰を低くして構えていた。

ルールはアウトになる前にヒットを打つこと、というものだ。

要は1打席で結果を残せということである。バッターに不利な条件ではあったが、会長がだいじょうぶだと言って強引に受けてしまったのだ。

野球のルールを知ったうえのことだから空恐ろしい。

「頑張れー！」

と結衣がのんきに声援を送っている。

スポーツに疎い咲は、キャッチャーの右手が動くのを不思議そうに見ていた。

「あれってなんなの？」

神崎に尋ねる。

「ストリートと真ん中。狙い球だな」

神崎が真剣な表情でこたえるが、いまいちよくわからない。

そして、ピッチャーの右足が高々とあがり白球が直線をえがいてミットに吸い込まれていく——直前に、鋭いスイングがボールを捕らえていた。

2塁手の頭上を高々と超えていく打球。

内田はあつという間に2塁を駆け抜けると、ボールが外野を転々としているうちに3塁まで余裕で到達していた。

「見事なもんだな」

副会長がつぶやきをもらす。

鮮やかなスリーベースヒットだった。打たれたピッチャーも信じられないといった様子で啞然としている。

「さ、これで文句ないでしょ」

会長がじまんに高木につめ寄る。

「ああ——あれだけのスピードがあれば十分にレギュラーが狙える」
高木の目はきらきらと輝いていた。

有望な新人を見つけたときの態度というのはどれも似るものらしい——会長はすこしだけ高木に親近感を覚えた。

その夏の大会は道半ばに終わったが、例年よりも勝ち進んだ霞が丘高校のメンバーのなかには、小柄ながらも奮闘する小さなプレイヤーの姿があった。

第八部（後書き）

これで6月編は終わりです。
更新が遅くなり、申し訳ありませんでした。

留年しませんように（前書き）

ここから7月編となります。

留年しませんように

7月7日の朝、食卓にならべられたトーストを口にくわえながら、祈るような表情でテレビの画面を食い入るように見つめている少女がいた。

その日はいつもより30分もはやく起床して、制服のスカートを着こんで髪の手入れまで終わっている。普段は目覚まし時計が朝を告げてベッドから離れようとはしない結衣だったが、その日だけは電子音のタイマーが鳴るよりもはやく目が覚め、準備万端の態勢で食卓にのぞんでいた。

貴重な早朝の睡眠時間をけずってまで早起したのは理由がある。

「てんびん座のあなた、今日の運勢は——」

「神様仏様仏陀様お釈迦様……おねがいします」

なんだか仏教系にかたよった祈りの言葉ではあるが、結衣の口調は真剣そのものだ。

今日はぜったいに運勢が悪くてはいけない日なのである。そのためにいつもは慌ただしくて見る暇もないニュース番組の占いコーナーを待っていたのだ。

両手を合わせ神に祈る。

どうかてんびん座のわたしに幸運を授けてください——。

「そんなことやってもテストの点数が変わるわけじゃないでしょうに」

キッチンのなかから結衣の母親の呆れた声が飛んできた。

「そんなことないもん」

美人のアナウンサーがくるくる変わる画面の向こうで占いの結果を告げる。その瞬間はまるでスローモーションのように感じられた。「金運と勉強運がよさそうです。ただ、大事なところで他人に迷惑をかけてしまいかも。ラッキーカラーは緑色、ラッキーアイテムは

時計です」

やったあ！ と歓喜の声のリビングにひびく。

「べつに勉強運が良かったからといってテストには関係ないでしょう」

ふたたびため息をつきながら我が子の将来を心配する母親をよそに、結衣は食べかけのトーストをくわえたままテレビの前で喜びのダンスを踊っている。

これで今日のテスト返却は大丈夫だ。赤点をとることはない。

地獄のような期末テストの日々が終わってつかの間の安息を楽しんでいた結衣だったが、すぐにめぐって来た返却日。

せつかくの七夕だというのに風情のないことよ、と柄にもなく嘆いてみても学校の予定が変更になるわけではないのだ。

「さて、今日は七夕ですが、高気圧が日本を覆っているため夜までよく晴れるでしょう。全国各地できれいな夜空が見られると思います。以上、天気予報でした」

いつの間にか占いのコーナーが終わり天気予報になっていた。

どうやら織姫と彦星は無事に会うことができるみたいだ。一年に一度のラブロマンス。甘美なひびきにあこがれる。

あまり星の多くない地域ではあるけれども今晚くらいは空を見上げてみるのもいいかもしれない。

期待に胸をおどらせながら食事を終えると結衣は、行ってきましたと言って元気よく家を出て行った。

「ルンルンルン」

と鼻歌まじりに上機嫌な結衣が、探偵同好会というプレートのさげられた部室のドアを開く。

入部から2カ月がたってもいっこうに慣れない旧校舎の階段もぜんぜん気にならなかった。スキップでひと息に上りきってしまったくらいだ。

肩にかけた学生鞆がゆれる。

「こんにちはー」

挨拶をしながら部屋にはいると、すでに咲と副会長が折りたたみ式のいすに座って読書をしていた。

咲が持っているのは文庫本の推理小説で、副会長はUFOについてという分厚い本を読んでいる。

結衣はかばんを机におき、副会長のうしろからその本をのぞきこんだ。

「UFO好きなんですよね」

「UFOに限らず超常現象やUMAなんかも大好きだ」

副会長がこたえる。

「ユーマってなんですか？ アイドルグループのひとりでしたっけ」

「僕がそんなものを好きはなはずがなかるう。UMAというのは未確認生物のことだよ」

「そんなことより副会長、聞いてくださいよ」

結衣が悪気なく話題をそらす。

「自分からネタを振っておいて……」

「わたし、テストがぜんぶ平均点以上だったんですよ。すごくないですか」

「それは嫌味かい？——いや、素直におめでとつと言おう」

副会長のそっけない拍手が鳴る。

ほこらしげに胸をそらす結衣にむかって咲がぼそっとつぶやいた。

「副会長はその逆なんですってね」

「それをどこで」

「ここに来るまえに会長と会ったんですけど、そのときにすごくうれしそうな表情で報告されました。本当に進学できるんですか」

「これでもいちおう勉強はしているんだ。それでダメというなら仕方ない」

「はやく寝るといいですよ。わたしはそれだけで10点くらい上がりました」

結衣がアドバイスする。

「それだけならいくらでもやるさ」

「本当ですよ」

リスのように頬を膨らませる結衣。それから、部室の奥にかざつてある青竹が目にはいった。

青々と葉を茂らせた竹が窓際に立てかけられている。味もそっけもない、そのままの状態の竹は、へんに部室に溶けこんでいた。

つい先日まではなかったはずなのだが。

「あの竹、誰が持ってきたんですか」

「自然に生えてきたんだよ」

という副会長の言葉は

「神崎が会長に頼まれていたみたいです。今朝がた抱えて来るのを見かけましたから」

間髪をいれない咲の説明によって打ち消される。

「今日は七夕ですもんね」

パタン、と副会長が手にしていた本を閉じた。写真付きのあやしげなハードカバーのそれを机の上に置くと、人差し指をたてる。

「知つてのとおり七夕とはベガとアルタイル、つまり織姫と彦星が年に一度だけ会うことを許された日のことだ。もとはといえばこの行事は中国で生まれたんだが、奈良時代に日本に伝わってきたんだ。短冊を笹につける風習は江戸時代からはじまったもので、今のようになんでも願い事を書くんじゃないやなく芸事に関することだけがご利益があるとされていたらしい。さらに注目すべきは天の川。旧暦だったころは月の満ち欠けを基準にして日付を定めていたから、いつも天の川がきれいに見えるよう、上弦の月がのぼるころに設定されていたんだな。それが太陽を基準とする新暦になったから、月の明かりが強すぎて星が見えないなんてこともあるようになってしまった。それ以前に、7月上旬なんてまだ天気が不安定な時期だから晴れになるかどうか怪しいものだけだね」

「でも、今日は快晴だって言っていましたよ」

「めずらしいことにね。さらに調べてみると月の齢もぴったりらしい。七夕ラッキーデイってところだな」

「素敵ですね」

結衣の瞳がかがやく。

「この辺じゃ天の川なんて見えませんけどね」

文庫本から視線をあげずに咲が言った。

「そうでもないよ。僕が子供のころはすこし郊外まで行けばきれいな満点の星空が見えた。今でも見られるんじゃないかな」

「そうなんですか」

咲がすこし驚いたように反応する。開発の進んだ霞ヶ丘高校の周りでは、冬でも星がいくつかまたたいている程度で、天の川なんて見たことがないのだ。

「天の川なんて、蛭といっしょになくなったものだと思ってました」
「そういう僕もしばらく星を見ていない気がするな。UFOは探しているんだが」

開け放たれた窓から吹きこんだ風が、笹の葉をなでていく。クーラーも扇風機もない探偵同好会の部室では、夏場には窓を開けていないと大変なことになる。

旧校舎の廊下沿いに並んでいるほかの部室は、どこも似たり寄つたりの状況だ。幸いなことに本校舎の各教室にはクーラーが完備されているので授業は快適に受けられる。

会長はこちらにもクーラーをつけてほしいとよく愚痴っているが、予算やスペースの問題で却下されている。だから部室にはあちこちに広告の載せられたうちわが転がっているのだ。

そのあと神崎が暑そうにワイシャツをパタパタとやりながらはいって来て、それからシャーベットを抱えた会長が登場して、会員がそろった。

「美味しそうですね、それ」

「あげないよん」

結衣がものほしげな視線を送るが、会長はぷいとそっぽを向いて

しまつ。

「食べ物に関してうちは妥協するつもりないからね」

そう言つて溶けないうちにオレンジ味のシャーベットをきれいに食べ終える。今年の夏は長い梅雨が明けると一気に気温が上がってきて、身体がついていけないくらい急激に暑くなっている。

はやくも熱中症の二ユースが流れはじめたほどだ。

「そつだ、みんな短冊に願い事を書いてよ」

アイスのあとにジュースを飲みほしてから会長が色とりどりの短冊をとりだした。長方形の短冊は、まるで紅葉の葉っぱのように鮮やかだ。

「好きなを選んでいいからさ」

「これ会長の手作りですか」

神崎が黄色い短冊をながめながら言つた。

「そうだけど」

「手が込んでますね」

「あんまりイベントらしいことやつてなかったからね、せめて日本の四季を感じるくらいのことはいないと。それに誠くんにも無理を言つて竹をもつてきてもらつたわけだし」

「これくらいなんともありませんよ。家の近所の人がわけてくれたやつですから」

神崎がさわやかに笑う。不思議なことに汗をかいていない。

「ほらほら、みんなさつさと書いてよ」

会長がにやりと笑いながらみんなを急かす。

結衣はラッキーカラーである緑色の短冊を選んだ。もうテストの結果は変わらないが、もうひとつくらい幸運が訪れるかもしれない。芸時に関することだけなんでしたっけ」

副会長の話を思い出しながら結衣が質問する。

「べつに気にしなくてもいいんじゃないかな。好きなことをかくといい」

「副会長はどんな願い事にしますか？」

「さて、どうしようかね」

ペンの頭でトントンと机をたたきながら考えこむ副会長。それに
対して神崎、咲と会長はさっさと書き終えて短冊を笹にかざりはじ
めている。

ようやくのことでカラフルな短冊が5枚そろったのは、それから
10分後のことだった。

楽しい生活が送れますように

「なるほどね」

会長が色とりどりの短冊をながめながら言った。

まだ陽が高いので雰囲気は出ないが、短冊を飾るとだんだん七夕らしくなってきた。他人の願い事は見ないようにするのが礼儀ということで、会長もすきをうかがいつつ遠くから観察している。

ときどき目を細めたりしながら様子をうかがっているものの、なかなか上手くいかないようだ。

「なにが、なるほどね、なんですか」

神崎がうちわであおぎながら訊く。

「みんながどんなお願い事をしたのかと思ってさ。視力2・0のうちが見ればすぐにわかることなんだけどね」

「嘘をつけ。そんなによくなかったはずだ」

副会長がすぐさま指摘する。

「……1・0でも充分だし」

「僕も眼鏡の補正を含めて1・2はあるが、ちつとも短冊の文字は読めない。つまりなるほどと言いながら、なにもわかっていないということだな」

「そうなんですか。よかった、おれ口なこと書いてなかったから会長が小さく舌打ちする。」

「僕のもあまり見られたくないな。特にみなみには。学校中をメガホンを持ちながら走り回って馬鹿にされるような気がする」

「あ、それあるかもしれません」

神崎と副会長が笑う。結衣もつられて少しだけ笑った。たしかに会長ならやりかねない。

「なによ、失礼ね」

「あたしのは別に読まれてもかまいませんけど」

片手に本を咲が言う。

その推理小説はもうほとんど読み終えられていて、あとは数ページを残しているだけだった。普通よりもずっと速いペースで読み進めることができるらしい。

「なんて書いたの、咲ちゃん」

会長が身を乗りだして問う。

顔を動かさず、視線だけをちらりと会長へ向けて咲は

「――わざわざ教えるのもなんだか嫌ですね。というわけで秘密です」

と言つてとりあわない。不満げな会長はこんどは結衣のほうを見た。

「結衣ちゃんは？」

「わたしもあんまり他人には教えたくないかも……です」

「なんだ、つまんない」

赤の他人の織姫たちに平気な顔して願い事をたのむわりに、自分の周囲の人たちにはお願いを聞かれたくないものらしい。かくいう会長も結衣になんと書いたのかと尋ねられて、言葉を濁しているのだから。

「あ、そうだ」

と会長がなにやら思い出したようにもう一枚の短冊をふところから取り出した。

白い長方形の紙にはまだなにも文字が書かれていない。近くにあったボールペンを手に取り、くるくる器用にもてあそぶ。

「せっかく探偵同好会なんだし、うちがクイズを出してあげる。このくらいの問題はすぐに解いてもらわないとね」

「なんですか？」

神崎と結衣が興味しんしんといったふうに着長の手元をのぞきこむ。ちょうど本を読み終えた咲も、鞆に文庫本をしまってから注意を向けた。

「ちよつとした暗号なんだけどね、個人で解いてもらおうと思ってつまり他人と話し合ったり、相談したりしてはいけないうてことだ

からね」

黒字のボールペンでさらさらと文章をつむぎだす。会長の字は崩してはいるが、読みにくいものではなかった。

出来上がった暗号文をのぞきこんだ神崎が読みあげる。

「ふたつの流れが重なるとき、地上の星は現実となり——」

そこで言葉に詰まる。

「この『鵲』っていう字はなんて読むんですか」

「かささぎ」

会長が即答した。

「えーと、——鵲の架け橋をもって、織姫と彦星は出会っであろっ。ひとつ前の季節に散った花々を目印にして」

これが暗号の全文だった。神崎はさっぱり見当がつかないよう眉間にしわを寄せている。それはほかの会員たちも同じことで、みな一様に難しい表情をしていた。

そのなかでひとり、会長だけがいたずらを仕掛けた子供のような笑みを浮かべている。

「さて、君たちにこの難問が解けるかな」

「かろうじて七夕関係だつてことはわかるんですけど」

神崎が頭をかきながらいった。

「それがいったいなにを示しているのかさっぱりわかんないです」

「はい。ヒントはそこまででストップね。自分の頭で考えなくちゃ面白くないよ？」

「みなみ、ひよっとしてこれは……」

副会長がためらいがちに訊こうとするが、それを会長がすどく遮った。やけに反応が早い。それから目つきもいちだんと厳しくなっているようだ。

「言っちゃダメだからね」

「あ、ああ……」

副会長も心なしに複雑な表情をしている。

「なんだか頬が赤くなってますん、副会長？」

咲に指摘され、あわてて顔をそむける。だが耳のはしが赤くなっていることまでは隠せていなかった。

「なにか秘密がありますね、これは」

うすら笑いを浮かべた咲が副会長につめ寄る。いすに座ったまま後ずさる副会長はまるでハンターに追われた小動物のようだ。

「そんなにいじめないであげなさいよ」

見かねた会長が口をはさむと、こんどは会長のほうへ向きなおる。

「怪しいですね。ふたりして隠し事してませんか？」

「してないわよそんなこと」

「だったらどうして目をそらすんですか。やましいことがある証拠ですよ」

「咲ちゃんの顔が近すぎるからでしょ。暗号が解けないからってうちに八つ当たりするのはやめてちょうだい」

「そんなことありませんよ。このていどの暗号、すぐに解けちゃうんですから。それよりも面白そうなことが転がっているもので」

「あ、わかった。会長たちこのあとデートでもするんじゃないですか。きつと二人にしかわからないようなメッセージが隠されていて待ち合わせ場所と時間が書かれていたりして」

サスペンスドラマ好きの神崎が割りこんだ。思考パターンが主婦に近づいて来ているのかもしれない。整った顔立ちを際立たせている両目が、きらきらと輝いている。

「どうなんですか会長」

「はつきりしてください会長」

「あーもう！ 知らないから！」

芸能人にむらがるマスコミのような後輩たちのあいだを縫って自分の鞆をつかむと、会長はドアのノブに手をかけた。

「夜の10時までを考え付かなかったら諦めて寝ることだね。夜更かしは身体によくないから」

そして出ていく。

遠ざかりかけた足音が途中でひきかえして戻って来た。

「うちと健輔はデートなんてしないんだからね」

あかんべーと舌を出して去っていく会長。どうやら機嫌を損ねてしまったらしいとみて、咲と神崎は互いに顔を見合わせた。

「ちよつとからかいすぎたかな」

「会長はあのくらいじゃへこたれないでしょ」

にべもなく言うてのける咲。その小柄な体からはちつとも反省している様子が見られない。会長の残していった短冊に目を向けると、制服のブレザーから手帳をとりだして文章のメモをする。

この暑いなかでも霞ヶ丘高校の女子生徒のほとんどはブレザーを着こんでいる。それが校則なのだ。ちなみに男女ともネクタイの着用は強制されていないので、大事な行事があるときくらいにしか見かけない。

男子生徒だけがブレザーを脱いでもいいというのは賛否両論あるが（女子側からはもちろん、男子側からもある）、いまのところ校則は変えられていない。

「僕も帰ることにしようかな」

標的を自分に向けられないうちに副会長がそそくさと帰り支度をはじめ。

「暗号も解けたことだし」

「やつぱり。会長との秘密のメッセージがあるんですね」

「そんなことはない。論理的に考えればすぐに答えは浮かんでくるさ」

「ちよつとだけでいいんでヒントをお願いします副会長」

神崎がすがりつく。

副会長はすこし考えてから

「状況をよく考えることだね。これはある日突然道ばたに落ちていた暗号というわけではない。たまには出題者の意向を察しながら推理するというのもアリだと思うよ」

「会長のことを思い浮かべろっていうことですか」

「端的に言えば、そうなる」

「だから副会長はすぐに暗号が解けたんですね」

「さて帰るとするかな」

棒読み口調ですがりつく神崎が引きはがすと副会長は部室を出ていった。部屋に残されたのは咲と神崎、それから黙りこくっている結衣だけだ。

結衣は短冊に記された暗号とにらめっこをするかのように、じつと会長の手書きの文字を凝視している。そして、ろう人形かと錯覚するくらい動かない。

完全に集中しきってしまっている結衣には声をかけづらく、自然と咲と神崎の挙動も静かなものになる。図書館にいるような静けさがやがて部室を覆った。

「……なあ、全然わからないんだけど」

咲の耳元で神崎がささやく。

「手助けはしないから」

「たのむ。今度アイスでも奢るからさ」

ちらりと冷たい目線をやってから咲は

「じゃあ特別に教えてあげる」

と言った。

「この暗号はどこか特定の場所を指し示しているものだから、地図でも持ってきた方がいいかもしれない。そして今日は七夕。キーワードは流れ」

「——流れ？　流れ星かなにか？」

「最初のほうに書いてあるでしょうが、『ふたつの流れが重なるとき』って。あとは会長の言動を思い出せば、ある程度予測はつくかな」

「マジ？」

「まじ」

うーむ、とふたたび首をひねりながら暗号文を見つめる神崎。咲は壁にかけられたアナログ式の時計を見やると、鞆を肩にかけた。

時刻は5時30分をすこしまわったくらいだ。

さつさと帰ろうとする咲を追いかけて神崎も急いで自分のバッグをつかむ。部室を出ようとして、ひとり残った結衣に「おつかれ」と声をかけた。

その声で我に返ったように立ちあがる結衣に手を振ってから、神崎は駆け足で咲のあとにつづいた。

「あ……」

気付いたら誰もいなくなっていた。

答えはだいたい察しがついたが、細かいところは家に帰って調べないとわからない。開け放たれた部室の窓を閉めるとき、生ぬるい風がほおを撫でていった。

まだ明るい陽ざしを背に、結衣は探偵同好会の部室の電気を消して、ドアを閉めた。

たくさん謎に出会えますように

早足で進む帰路はよく晴れた空に照らされていて、背中にはうっすらと汗がにじんでいる。黒いブレザーには熱がたまりやすい。結衣の背中もまとわりつくような熱気に包まれていた。

それでもどうか日射病で倒れることなく無事に家にたどり着くと、制服を着替えるよりはやくリビングにあるパソコンに向き合う。家族共用のパソコンで、あまり性能は良くない。

よくフリーズするのが難点だが、さほどパソコンを使わない結衣にとってあまり問題ではなかった。

「おかえり。テストはどうだった？」

「占い通りだった」

母の問いに早口でこたえる。

はやる心をおさえるのは難しい。

人差し指を使うだけのタイピングはもどかしくて、すこしくらい練習しておけばよかった、と後悔する。

「えーつと……」

まずは地図を検索する。

それから近辺にある桜の名所をしらべる。『ひとつ前の季節に散った花々』というのは夏の前、つまり春の代名詞である桜のこと間違いでない。

暗号はいちどピースがはまりだすと、面白いようにすべてのつじつまが理解できるようになる。何気ない会長の言葉もヒントになっていると気付けるのだ。

キーボードをたたきながら自然と笑みがこぼれてくる。

これだからなぞ解きはやめられない。ジグソーパズルを完成させたときのような快感と、トランプタワーを組み立てていくときのようなくずくぞくとしたスリルがこみあげてくる。

「あつた！」

すぐに目的の地図をプリントアウトし、暗号に記された場所にマル印をつける。家からすこし距離があるので電車を使うことにしよう。その前に夕飯。ふと、神崎は大丈夫だろうかと心配になった。

「夜の10時まで」

それを過ぎればタイムリミットだ。咲はなんとなく勘づいているようだったが神崎はどうだろう。しぶとく食い下がって意外と答えにたどり着いているかもしれない。

会長の決めたルール通り、他人との相談はなしだ。だから神崎にメールで教えることもできない。

「……………」

しばらく思案してからどうしようもないと悟った結衣は、夕飯ができるまでのあいだにデジタルカメラを探していた。せつかくの思出だ、写真に収めておこう。

カメラのレンズにうつるのが5人であるようにとベガとアルタイルに祈りながら。

夜になるといくら7月といえどもすこしは涼しくなって、やや天頂を過ぎた半月が顔をのぞかせている。天気予報のとおり夜空はすつきり晴れ渡っており霞ヶ浦の夜景はところどころで星がまたたいているという感じがした。

結衣は身支度をととのえ家を出る。駅にむかって歩き出す。

ポケットには財布と小型のデジタルカメラが入っている。

それ以外に必要なものはないだろう——答えが間違っていないければ。

でも、その心配はしていない。会長を、なにより自分を信じているから。

家から駅までは徒歩で10分というところだ。その途中、どこかで祭りがあるのかあでやかな青や紅の生地が織りまざった浴衣を着

た人びととよくすれ違った。

そのなかにはもちろんカップルなんかもいたりして、そのたびに会長と副会長のことを思い出す。

幼馴染ということだったから恋人同士になれるチャンスはいくらでもあるはずだ。探偵でなくともあのふたりがお似合いなのはすぐわかる。

空はとつくに真っ暗だというのに駅前は人工の光にあふれていてすごく明るい。

ファストフードの看板や街灯が、これでもかとかばかりに街中を照らしている。プラットホームに立って電車を待っているあいだにも目を凝らして空を見上げるが、月明かりがやっと届くくらいだ。

電車に乗り込むと、寝過ごしてしまわないよう窓の外の景色をずっと見ていた。

「あ、結衣ちゃん」

と声をかけられたのは、目的の駅で電車を降りてからだだった。

同じ電車に乗っていたのに気がつかなかったらしい。改札口をでる寸前で、うしろから咲の声がしたのだ。

「こんばんは」

「結衣ちゃんがいるってことはここであつてみたいね」

咲がほほ笑む。

いつもの隙のない制服ではなく、デニムのホットパンツにＴシャツ姿の咲は新鮮だ。学校のそとで出会うといちだんと大人びて見える。

斜めがけにしたショルダーバッグも、学生鞆とは違った雰囲気がかもし出している。

「時間は大丈夫でしょうか」

「１０時まで間に合えば」

会長が部室を去る直前に残っていた時刻。それまでにはまだ十分な余裕がある。

「どうせ会長と副会長が先に到着しているだろうし、あたしたちは

ゆつくり行けばいいわけだし」

「神崎先輩はどうなんですか？」

「あいつは——たぶん、川沿いをずっと自転車で駆けてるんじゃない？　最後まで解けなかったみたいだけど、この付近で川といったら星合

ほしあい

川しかないからね」

「大変ですね」

「あいつにはちょうどいい運動になってるんじゃないの。体がなまって仕方ないころだろうし」

「わたしだったらいくら夜でも倒れちゃいます」

「運動しか能がないんだから、自転車を数時間こぎ続けるくらいはしなきゃだめでしょ。——神崎の家から考えて、そろそろこの辺にいてもいい頃だとは思うけどね」

駅のすぐ前にあるシャッターの下りた商店街をぬけ、地図を見ながら星合川の河川敷にむかって足をすすめる。結衣に地図をもたせると反対の方角へ行ってしまうので、もっぱら咲が道案内を務めている。

閑散とした住宅は、女子二人で歩くには少々さびしすぎる。

うす暗く感じる街灯をたよりに、星合川の土手までたどり着くと、自転車のライトが目にはいった。

ここまで来るともう人の気配はない。川のせせらぎの音が聞こえるなか、チャリンチャリンという自転車のベルが鳴らされる。

「あー、よかった！」

神崎が疲れきった様子で歓声をあげた。

ママチャリらしい自転車のかごからペットボトルの飲み物を取りだし、ひといきに飲み干す。かなり汗をかいているのか、シャツがべっとり張り付いている。

「何時間走ってたの？」

咲が冷たく問う。神崎は携帯をとりだして時間を確認した。

「ざつと3時間ほど」

「それだと家に帰ってからすぐつてとこか。夕飯は？」

「途中のコンビニですこしだけ。腹が減ってしょうがないんだ」

「チョコあるけど、欲しい？」

「お願いします」

ショルダーバッグから板チョコを探し出すと、神崎に手渡す。ついでに物欲しそうな視線を感じて結衣にもチョコをあげる。

「偶然にも三人がそろったところで、あたしにいい案があるんだ」
と」

そう言つて、咲が提案する。

話をひと通り聞き終えると三人は、ニヤリとほくそ笑んだ。

たくさん謎に出会えますように（後書き）

季節はずれで、夏の感覚を思い出すのに苦労します。

夜空がきれいでありますように

ひとつひとつの小さな輝きをはなつ星が宇宙の果てで幾万も集まって、大きな流れを作りだす。地上に降った雨が、やがて大きな川となって平野を流れていくように。

広大、という有限の言葉で語るにはあまりにも広すぎる宇宙。

いくら手をのばしても届かないところにあるはずなのに、目の前で大挙して輝いていると、簡単につかめてしまいそうな錯覚に陥る。それと同時にどこまでも深い闇が、とてつもなく恐ろしく感じられることがある。

ふとした瞬間に吸い込まれてしまいそうで。宇宙がどこまで続いているのだろうと想像するだけで、自分がとてつもなくちっぽけな存在に思えてくるのだ。

それでも次に星を見上げたときにはやっぱりその光がとてつもなく美しい。

こんな景色が現代の日本に残っていたのは奇跡なのかもしれない。そう思わずにはいられないほど壮大で、美麗な夜空が頭上に展開していた。

「結衣ちゃんたち、来ないね」

ふと身震いをするような恐怖が肌をつたって、副会長に話しかけていた。

そうしないと消えてしまいそうな気がしたから。

「そうだな」

体育座りのまま、こたえる。

「どうしたんだろうね」

「暗号が難しすぎたんじゃないのか」

「そんなはずない。誠くんならともかく、あの結衣ちゃんまでもがたどり着けないレベルじゃないし」

「僕はすぐにわかったが、他人が解くのは困難なのかもしれないな」
「そうかなあ……」

しきりに腕時計を気にする会長。

目の前には星合川が流れていて、その水面に一面の星空が反射している。

「ふたつの流れが重なるとき」

「それってこの川と天の川をかけてるんだよな」

「そうだよ」

「地上の星は現実となり鵲の架け橋をもって――は、この水面に映る星のこと。織姫と彦星は会おうであろうというのは七夕をさし、ひとつ前の季節に散った花々は、ここ。つまり桜の名所であるこの場所を特定しているんだな」

「そうだよ」

ぶつきらばうにこたえる。

暗号というのは誰かに解いてもらえるからこそ、面白味があるのだ。あまりに難解で誰にも解けないような暗号では出題したほうもつまらない。

「そんなに難しくしたつもりはなかったんだけどなあ」

「まだ時間はあるさ。ゆっくり待とう」

副会長はそう言ってまた星空を見上げた。そこではるか彼方からやって来た光明が深淵のパレットを彩っている。

「ここも変わらないな。僕らが子供のころから」

「いつからだっけ。ここに来なくなっただけ」

「小学校の途中からだっただけかな。なんだか機会がなくなっただけ」

「それまでは毎年来てたのにね」

「どうして今年に限って来ようと思ったんだ？」

「結衣ちゃんたちにも見せてあげようかなと思ってさ。うちらが高校なのも今年で最後だし。健輔は来年も高校生かもしれないけど」

「不吉なことを言わないでくれ。僕だって努力しているんだから」

「努力ねえ……」

「仕方ないだろ。深刻な問題なんだから」

「うちが勉強教えてあげてるのはどうなのさ。役に立たないってわけ？」

「いや、それがなければ今ごろ誠くんどころか白谷さんと同じ学年だったかもしれない。感謝してるよ」

「どうだか」

肩をすくめる会長。

「健輔は大学どこに行くのさ」

「みなみと同じところに」

「え？」

「冗談。行けるところに行くさ」

「あ、そう」

川面にむかって吹く風がふたりの肩をないでいく。

人工の光はどこにも見えない。隣にいる副会長だけが現実的だ。

「うちさ、部長になってから結衣ちゃんがいってくれるまですごく不安だったんだよね。でも、今はそんなことが馬鹿らしいくらい楽しい。副部長が健輔だつていうのがいけなかったのかな」

「頼りなくて悪かったな」

「ほんとに」

会長がくすつと笑う。

「来年はどうなるものかね」

「僕らがいなくなっても大丈夫だろう。児玉さんはしっかりしてるし、新入部員の数人くらいすぐに見つけてくるさ」

「そうだといけど」

ふたたび、星を見る。

「ちよつと寒い」

会長はピンクのノースリーブといった格好で、肌の露出が多い。

夏とはいえ河川敷は想像以上に風が冷たくて、腕に鳥肌が立っていた。

「困ったな、上着なんて持ってきてないし——」

副会長がリュックサックのなかをあさったが、めばしいものは出て来ない。

だが両腕を抱えるようにして縮こまっている会長を見て、そっと肩を寄せた。

「これでちよつとは温かいだろ」

「……まあね」

肩が触れ合い自然とふたりの距離も近くなる。それこそ相手の肌のぬくもりが感じられるくらいに。

「健輔。また背が伸びたね」

「みなみが伸びないだけだろ」

「そんなことない」

そう言つて頭をもたれかけようとした瞬間、背後からくしゃみの音がして、とつさに離れた。振り返ってみると桜の木の陰に隠れた結衣たち三人が気まずそうにたたずんでいる。

「いつから見てたのさ」

「かなり最初のほうから」

咲が返事をする。

「もう少しでいいところだったんですけどね」

「反省はないのか、反省は！」

「結衣ちゃんがかくしゃみさえしなければよかったんですけど」

「すみません」

「謝るとこはそこじゃないでしょうが！　うちに謝れ！」

「むしろ感謝してほしいくらいですよ。せつかくいいムードにしてあげたつていうのに、副会長がもう一步踏み込まないんですもん」

「余計なお世話だ」

副会長がムスツとしていった。

「せめてキスくらいまではいつてほしかったんですけどね」

「うるさい！」

顔を真つ赤にしながら会長が反撃する。咲の頭を抱え込んでのヘツドロツクだ。

「ほらほら、そんなことしてないで、きれいな星空だよ」

副会長がふたりを制止しながら言った。

「あ、ほんとだ」

会長と副会長の成り行きを見守るのに忙しくて気がつかなかったが、空一面に降ってきそうな星が輝いている。結衣と神崎が天空を見上げ、呼吸をするのも忘れてしまうくらい壮大な景色に魅入っていた。

「きれいですね」

神崎がため息を漏らす。

「こつちを見せたくて呼んだのに。咲ちゃんには見せてあげないんだから」

ヘッドロックのままダウンをとりにかかる会長。ふざけ過ぎて土手を転がって行かないか心配になる。

「あたしはほかに面白いものが見れたからよかったです」

「口の減らない奴め！ 咲ちゃんの毒舌が少しは良くなりますようにってお願いにしとけばよかったかしら」

「ぜんぜん毒舌じゃないですよお」

「どこが！」

子犬のように戯れる咲と会長をとめるのもなんだか馬鹿らしくなって、副会長はそつと自分の二の腕あたりを触った。

会長に寄り添われたときの感触がまだぼんやりと残っている。

こんなふうにくたりに過ぎしたのは久しぶりだったのかもしれない。

「いいですね、同好会って」

結衣がしみじみ呟いた。

それを聞いて会長は、咲をおさえこむ手を緩めた。その隙をのがさず逃げ出す咲。

「そう思ってくれるのなら、部長のやりがいがあるってものよ」

「会長、ですけどね」

まぶしいくらいの星空のもと、咲と会長の追いかっこはしばらく

く続いていた。

探偵同好会がいつまでも続きますように

「さて、夜10時ということだったが、誠くんは自転車で帰らなければいけないだったな。後輩を法の網に引っ掛けるわけにはいかないということ、もうすぐお別れの時間だ」

副会長が腕時計を見ながらいった。

未成年はあまり夜遅くまであたりをほっつき歩いていると補導される恐れがあるのだ。

「みなみも言っていただろう。明日も学校があることだし、そろそろ帰ったほうがよさそうだ」

「おれだけ自転車ですか」

神崎が恨めしげに自分のママチャリを見つめる。

「これじゃ折りたためないしね。これからは電車で来られるよう精進なさいな」

会長があっけからんと言う。

咲たちが姿を現したあと、しばらく5人で満天の星を見上げていた。そうしているうちに時間は流星のように過ぎていき、気付けば帰らなければいけない時間になっていたのだ。

「会長たち、このあとカラオケ行ったりしませんよね」

「いいこと言うね誠くん。行こうかしら」

意地悪な笑みを浮かべる会長。

「そんなあ」

「冗談に決まってるじゃない。さすがにそこまで鬼じゃないわよ」
「ならよかったです」

神崎は安心したように微笑んで自転車にまたがる。来るときは周囲に目を凝らしながらの運転だったため3時間はかかったが、帰りは一直線に進むのでその半分の時間で行けるとのことだ。

どちらにせよ電車を使うより圧倒的な時間を食うのには変わりないが。

人影も、街灯の明かりさえもない河川敷を、ライトをつけた自転車が遠ざかって行くのを見送ってから、残った4人が歩き出す。

見事なくらい、あたりには明かりがない。

副会長がリュックサックから懐中電灯をとりだし足元を照らす。

咲たちが来たときにはまだ月が残っていたが、もうすでに地平線の彼方へ姿を消していた。

「結衣ちゃんたちにはあの暗号、楽勝だったでしょう？」

会長が尋ねる。

「ええまあ。そんなに難しくはなかったです。帰ってからパソコンで検索するほうが難しかったですね」

「情報収集能力も探偵に必要なスキルのひとつだからね、それも訓練よ」

「みんなで星空が見たいから、わざと簡単な暗号にしたんですよ会長」

咲が横から口をはさむ。

「神崎はあぶなかったみたいですけど」

「まあ咲ちゃんあたりが手助けしてくれるのかなって思ってたから、たいして心配はしてなかったよ」

「アイス奢ってもらって約束がなければそんなことしませんけどね」

「でも、神崎先輩が来てくれてよかったです」

首からデジタルカメラをさげた結衣が笑顔をみせる。

そのカメラのなかには探偵同好会の5人でとった写真が収められている。光源がほとんどないのでうまく写すのは難しかったが、なんだかの試行錯誤を経てなんとか成功した。

「来年も来たいですね、ここに」

結衣がつぶやく。

「僕らは大学生になってるけどね」

と副会長がいった。

「それでもいいです。また七夕の日に集まればいいじゃないですか」

「そのときはしっかり周囲を搜索するからね。隠れても無駄だよ」
会長が睨みをきかす。主に咲にむかって。

「このへんに物影が少ないのが残念です。すいとんの術でも練習しましょうか」

「忍者かあんたは」

会長がつっこむ。

「兎玉さんたちがちゃんと探偵同好会を存続させていてくれたら、僕らも来年行くことにしようかな」

「大丈夫でしょ」

答えたのは咲ではなく会長だった。

探偵同好会がいつまでも続きますように（後書き）

これにて7月編はお終いです。

今年はこれでかきおさめになると思います。よいお年を！

学校の怪談（前書き）

いちおう怖い話がメインとなっております。
作者の技量がアレなので何とも言えないですが、
怪談などが苦手という方は気をつけてください。

学校の怪談

「とある中学校に、動物嫌いで有名な理科教師がいた。彼は校内にはいりこむ動物を片っ端から捕まえては、そのつど殺していたという。殺した動物は骨格標本にして理科室にかざり、入りきらないぶんは学校の敷地に大きな穴を掘って埋める。そんな重度の動物嫌いの教師が、ある日突然神隠しにあったように消えてしまった。前日まではなんともなかったのにまるで祟られたかのように忽然と姿を消した。それ以来、校舎内ではなぜか動物の鳴き声が聞こえてくる。犬や猫、鴉、教師に殺された動物たちの恨みがましい声が廊下をこだまするんだ。その証拠に学校のあちらこちらに神社にあるようなお札が大量に貼られ、トイレの鏡も外されている。お札はもちろん動物たちの怨霊を鎮めるためのもので、トイレの鏡は幽霊が写らないようにということだ。——そんな話が、まことしやかに先輩から後輩に語り継がれている。そのたびにちょっとした騒ぎが起こるんだが、みんな信じてはいない。トイレの鏡は校内暴力が激しかった時代にどうせ壊されるのなこととで外したものだとし、理科室にある骨格標本も業者から購入したものだ。動物の声を聞いたというのも、おそらくは多感なお年頃の中学生にありがちな思いこみの類じゃないかということだ。

だが、そのなかで唯一気味が悪かったのは教室とかに貼つてあるお札。よくわからない漢字なんかを書いてあったり、いろいろ図形みたいなものが印刷してあるものだ。それが学校中のいたるところに——それも、体育館の更衣室のロッカーの奥の目立たないところだったり、明らかに脚立を使わなければ届かないような階段の裏のすみとかに貼つてある。たまに誰かが悪戯をして剥がしたりすると、必ず次の日には元通りになっている。どんなに見つかりにくい所のお札を剥がそうと、絶対にその翌日には貼り直されているんだ。

それがあまりにも不自然で気味が悪いということで、ある生徒が

先生に真相を確かめに行つたんだ。そんな話はまったくの出鱈目だつて言ってもらいたかつたんだ。その先生はその中学出身で、行方知れずになつた理科教師がいたところに在籍していたこともあつてオリジナルの話を知つていた。その中学は新しく作られた団地にともなつて創設された学校で、人が住みはじめたばかりだつたせいかな野良猫や野良犬がたくさんいたそう。そして創立時からいた教師はほんとうに動物嫌いで、しかも本当にある日突然いなくなつてしまつたのだという。

この話が何十年も語り継がれてきたのは毎年のようにうるさいくらの動物の声が聞こえるからだそう。どこかで鴉が鳴いていたりとかいうレベルじゃない。何十匹もの動物たちが帰る家を探しているのか、殺されたときの悲鳴なのか、それとも自分を殺した相手を呪う声なのか。とにかく異常なくらいの鳴き声がある。そのなかには微かに「たすけて」という人の声もまざっている。だから動物の怨霊を祓うためあちこちにお札が貼られているんだ」

副会長がゆっくり話しおえると、電燈の代わりにすえられたろうそくの灯がゆらりと揺れた。

風鈴とかき氷のよく似合う季節になると、太陽のひかりもじりじりと肌を焦がすようなものになつて、夏なのだということを身に染みて感じさせられる。青空はいつもよりもずっと濃さを増し、まるで海がひっくり返つたみたいに広く、深い。

霞ヶ丘高校の旧校舎にある探偵同好会の部室には、運動部の元氣なかけ声が届いてくる。ぐるぐるとメリーゴーランドのようにグラウンドをまわっている運動部の部員たちは汗を流し、つらそうな表情をしていた。

夏休みは運動部にとってかつこの練習時である。

そうはいっても室内でいつものように集まっている探偵同好会の面々はそれが夏であろうと冬であろうと関係なくて、会長の食べる

おやつがたくさんのアイスに変わったくらいだ。

「大変そうですねー」

神崎が部室の窓からグラウンドを見下ろしていった。

「中学のころからずっと運動部だったもんで、きつい練習が当たり前でしたから、こんなのにんびりした夏は初めてなんですよ。去年はちょうど大会の真っ最中だったし」

「神崎先輩は野球部だったんですね」

結衣が神崎の背中に問いかけた。

「そうだよ。けどその大会でひじをやっちゃってね、しばらく落ち込んでいたところを会長に見つけてもらって探偵同好会にはいったんだ」

「誠くん、うちは会長じゃなくて部長だからねー」

部室の中央におかれた長テーブルに足を投げ出している会長が、うちわを力なくあおぎながら訂正した。脱力しきった四肢はまるでしぼんだ風船のようだ。

そのそばには派手に彩られたアイスの包装が散らばっている。すべて会長が食べてしまったものだ。

「元気ないですね、会長」

自分で持ってきた小型扇風機を首元においた咲がいう。

咲の手にはホラーを売りにした怪談推理小説がにぎられている。

「暑いからねー。咲ちゃんは一とりで涼しいだろうけど」

「すみません。ひとり分しか家になかったもので」

「それはそうと、その扇風機を先輩にゆずる気はないのかしら」

「先輩は涼しそうなうちわをもっていますから」

会長のうちわには花火をイメージした写真が印刷されている。よく駅の前などで配っている無料のものだ。そのほかにもいくつか会長はもらってきた団扇を部室にストックしていて、気分によってそれらを使い分けている。

「会費でクーラーを買えばいいんじゃないか」

結衣といっしょに宿題を広げている副会長が提案するが、本から

視線をあげた咲にひと睨みされて首を引っこめる。

「どこにそんなお金があるっていうんですか。ただでさえもろの雑費で苦しいんですから馬鹿なことを言わないでください」

会計担当の咲がくぎを刺す。

「それから神崎もはやく宿題にもどる。いつまでもサボっていると終わらないよ」

「はい」

気のない返事をして、神崎が結衣と副会長のあいだの席に座る。

三人の目の前には山のように宿題が積まれていて、それを少しずつ減らしているところだ。夏休みに入ってからしばらく、同じ光景が続いている。

「そんな宿題なんて初日にとっと終わらせたらいいのに。うちを見習ったら？」

「みなみのように、徹夜してまで宿題を片付けようとは思わないかな」

「甘いこといつてるから宿題のひとつも終わらないのよ。根性たたき直したほうがいいかしら」

会長が大きな欠伸をした。

伝染するように、宿題にとりくんでいる人たちも欠伸をしはじめる。

ほとんど無風だった部室に、そよ風のような生ぬるい風が吹き込んでくる。その風にかすかに髪をたなびかせながら、会長がむくりと上体を起こした。

「合宿しよう。そうだ、それがいい」

「合宿ですか？」

咲が問いかえす。

「去年はやってなかったような気がしますけど」

「だから今年からやるの。たしか書類にいくつかハンコとサインをすればいいんだったわよね」

「はい。会長と副会長の承諾、それから学校側への報告があれば」

「じゃあ今すぐ書類作成にとりかかってちょうだい。健輔とうちは明日サインするから、今日中に話を通しといてね。合宿やるならはやいほうがいいだろうし」

「そうですか」

咲は書類の詰まった棚の底から一枚の紙をとりだすと、ボールペンで必要事項を書き込みだす。

「なんでまた急に合宿なんてやるんだ」

副会長があつけにとられて言った。

「いいじゃない、どうせ宿題くらいしかやることがないんだし」

「それはそうだが、なにをするっていうんだ？」

「そうね——」

会長がニヤリと笑った。

「怪談でも話しましょうか」

翌日は、忙しかった。

もともとあまり広くないスペースに、テーブルや棚が所狭しと置かれている部室であるからそのままでは5人が寝られるような隙間はとてもない。だから寝袋をならべられるだけの空間をねん出するために、季節はずれの大掃除をしなければならなかったのだ。

床には埃がつもり、寝転がっただけでぜんそくを起こしそうなくらいだ。

会長と副会長が必要な事項を書類に書き込んでいるあいだ、咲や神崎たちは雑巾がけをしていた。

もちろんスカートの下にはジャージを着ているのだが、夏場ということだけあって非常に暑い。探偵同好会には不似合いなほど汗をかいた結衣は、熱中症になりかけて廊下で休んでいる。

途中で仕事のなくなった副会長が咲に指示されながら高い場所の掃除をはじめ。窓は全開にしてあるのだが、空中に綿ぼこりが舞

っていた。

「お疲れさーん」

ようやくのことで掃除が終わり、見違えるように綺麗になった部屋が完成したのは、夕暮れのころだった。

会長がねぎらいの言葉をかけながら、どこで買ってきたのかラムネのビンを配る。

「いやー、綺麗になるもんだねえ」

「定期的に掃除をしないからですよ。いったい何年分の埃がつもっていたことやら」

咲が愚痴る。神崎もそれに同意しうなずいている。

「うちが入部してからまったくやってないから、少なく見積もっても2年半分くらいはあるかな。本当にごくろうさまって感じだね」
会長がラムネを飲みながらいう。ビンに閉じ込められたビー玉がからからと音をたてた。

「それで、合宿はいつやるんですか？」

ひと息にラムネを飲みほした神崎が聞く。白いポロシャツは途中、汗で透け過ぎてしまつて体操着にかけられている。そのシャツはいまも窓際でハンガーにかけられながら干されているところだ。

「明日は部活がない日だから、明後日の夕方に集合してからその翌日までということにしようかな。メインはもちろん怖い話だからね。結衣ちゃん、怖い話は平気だね」

いちばん不安要素のある結衣に尋ねる。

「わたしは大丈夫です。昔からそういうの得意なもので」

「よし。その他は知ったこっちゃないから、ひとり一つ以上は必ずとっておきの話を用意して来るように」

「久しぶりに僕の出番がくるみたいだな」

オカルトや超常現象が大好きな副会長が眼鏡を光らせながらいった。普段よりも数倍、生き生きとしているように見える。

「しばらく怪談を語る機会なんてなかったから、ストックがたまっていたところだ。児玉くんが泣いて震えるくらいのもを用意して

こようじゃないか。平生のうらみ、ここで晴らさずいつ晴らす」

「あー、頑張ってください」

手をひらひらと振る咲。

副会長がキツと睨みつけるが、その口元は薄笑いを浮かべている。

「夜の学校は想像以上に怖いものだ。それを思い知るがいい」

「副会長、顔がちよつと怖いです」

神崎の言葉は、本人には届いていないようだった。

合宿の日は朝からめずらしく、しとしと雨が降っていて、どんよりした曇り空が空を覆っていた。ノックをするような音が周期的に閉め切った窓をたたいている。

会長と副会長の持つてきた5つの寝袋が床にならべられ、まんなかにあるろうそくを囲むように配置されている。

消灯時間をすぎ、明かりの消えた校舎は暗いという程度のものではなく、完全な闇に包まれていた。そのなかで、ろうそくの頼りなげな灯だけが儚げにゆれる。

吹けば消えてしまいそう。

耳が痛くなる静寂のむこうで雨滴の音がこだましている。

ろうそくを囲んだ寝袋のなかで、副会長がおもむろに口を開いた。「合わせ鏡というものがあるのは知ってるかな。その名の通り、鏡を二つむかい合わせたものだ。鏡は本来、自分の正面だけを写しだすものだが、場合によっては背中を見たいということもある。そんなときに使われるのが合わせ鏡なわけだ。けど、すこし考えてみてほしい。鏡同士を向かい合わせるとそこに写っているものはいったい何なのか。片方の鏡に映ったもう片方の鏡が、また鏡を映す。鏡のなかに鏡が写り、そのなかにまた鏡が映る——という具合に、鏡は無限に鏡を映している。両方の鏡には無数の鏡が写っている。鏡かがみ力ガミ。その果てにはいったい何があるのだろうか。鏡か、それともほかの何かか。僕にはわからない。ひょっとしたら悪魔か

もしれない。

それは僕らと同じ、高校三年生のある生徒の身に起こった出来事だ。受験も差し迫った12月のこと、教室でふたりの生徒が話していた。よくある都市伝説の類だけど、その学校の体育倉庫には布をかけられた合わせ鏡がおかれていて、鏡の間に立つと鏡のなかから無数の手が伸びてきて引きずり込まれてしまうという話だった。過去にも何人もの生徒がその鏡に消されていて、鏡から出てくる無数の手はその生徒たちが不幸な仲間を増やそうとしてやっていることなんだと。

その話を聞いた生徒はもちろん信じなかった。だが、本気でその話を信じ込んでいる友人と口論になり、ある夜実際に確かめることになったんだ。迷信に決まっている。そう思って深夜の学校にむかうと校門で友人が待っていた。なぜカリユックサックを背負った恰好で。不思議に思った友人が問いかけると、ああ、とか、うん、とか返事になっていないような返事ばかり。どうにも様子がおかしい。その友人は足取りもおぼつかないまま校舎のなかへはいって行く。まるで手繰り寄せられるように。あわてて彼を追っていくと真つ暗な体育館があった。こっそり鍵を開けておいた窓から体育倉庫に侵入すると、合わせ鏡にかけられている布をとった。鏡は呪われているみたいに薄気味悪い。夜の学校ということもあっていくら迷信だと思っても恐怖心がうかんでくる。それに友人の様子も変だ。ふらついた足取りのまま鏡のあいだへ引き寄せられていくとしゃがみ込んでしまった。すこししてから友人の視線が不自然なことに気づいた。さつきからまるでなにかを凝視しているように動かない。大丈夫か、と声をかけようとしたとき突然友人が狂ったように絶叫し出した。それなのに友人は叫ぶばかりで逃げ出そうとしない。必死に手足をじたばたさせている。それがまるで鏡のなかから出てきた無数の手によって全身を掴まれているみたいだと気付いたその生徒は友人をおいて逃げ出した。そのまま留まっていたら自分まで鏡のなかへ引きずり込まれてしまうような気がしたんだ。体育倉庫を飛び

出す。心臓は壊れたように鼓動している。校門を過ぎてからようやく友人のことが心配になった。あいつは大丈夫だろうか。助けにいったほうがいいんじゃないだろうか。そんな思いが鎌首をもたげてくる。恐るおそる確認にもどると、そこには誰もいなくて布のとれた鏡だけが残っていた」

ふと部室の窓があいているような気がして振り返る。だが窓は閉まっていた。

「次の日には友人が平気な顔で登校して来るんじゃないかという淡い期待はかなわなかった。友人が行方不明になったまま数日が過ぎ、その生徒は鏡を見るのさえ怖くなった。そこから得体のしれない腕が伸びてくる気がした。だが受験前の大事な時期に学校を休むわけにはいかない。次は自分が襲われるのではないかという恐怖におびえながらも学校に通う日々。勉強も手に付かない。しかし一週間がたち、登校してみると体育倉庫のあたりが騒がしい。震える足でそこへ向かうとぼろぼろになった友人が、割れた鏡のあいだにしゃがみ込んでいた。失踪したときとまったく同じ格好で。あとから聞いた話だと行方不明になっていた間の記憶はないらしい。だから友人は自分の腕についた無数のあざを不思議そうに眺めていた……」

夜も深まり、副会長の話も幾つか目になった。

口には出していないが神崎と咲の顔色は良くない。正反対に元気そうなのは会長と結衣である。副会長にいたっては水を得た魚のよう元気だ。

ただ、ムードを出すためにいつもよりずっと低い声で喋っている。そのたび中央のろうそくが消えてしまいそうになる。

「いやーゾクゾクするねえ」

合宿という名の百物語を提案した会長が笑いながらいう。

「こついうときに健輔は役に立つからね。ほんとにイベント向きの男さ」

「今日ばかりはなんとも言ってくれ。非常に気分がいい」

「結衣ちゃんも平気そうだね」

会長が平気な顔をしている結衣を見ながらいう。

「すごく楽しいですよ」

結衣がこたえる。

「怖くないの？　今のも相当ホラーだったと思うんだけど」

「そうですね——でも、これは論理的に説明がつきますから」

「いやあつけからんと言つてのけたけど、結構すごいこと口にしたね。説明してもらおうか」

「はい」

会長のリクエストにこたえて結衣がうれしそうに話します。

「この事件——キーは彼らのおかれた状況にあります。彼らは受験生だということを念頭に考えれば、自然と真相は見えて来ると思います。副会長、勉強は好きですか？」

「大嫌いだ」

「即答ありがとうございます。わたしもそうです。きっとその友人も受験のプレッシャーに悩んでいたことでしょう。逃げ出したいとも思っていたはずです。でもそんなことはできない。たとえ逃げ出したとしても内申に傷がついてしまう——。そこで考えました。合わせ鏡に引き込まれたことにして行方をくらましてしまえばいいのではないだろうか。こんな受験から逃げ出してしまえ……まあ、こんなところでしょう。話をもちかけて一緒に確かめさせたのは証人を作るためです。いきなり失踪したのでは意味がありませんからね。演技も手が込んでいます。きっと何回か練習したんでしょうね。どんな人間でも夜の学校なんて怖いものです。それなのに平然とピエロを演じられるのですから、きっと慣れてしまっくらい学校に忍び込んだのだと思います。そして生徒を怖がらせて体育倉庫から追出し、まんまと自分は逃げおおせたわけです。ですが途中で受験をやめてしまうことが怖くなって、戻って来たのでしょうか。つじつまを合わせるために合わせ鏡を割って。きっと学校側もへんなうわさを立てられたくないので、あまり言及はしなかったことでしょうし」

「……そういうことか」

副会長が感嘆のため息をもらす。その隣では会長もおどろいたように目を見開いている。

「まさか怪談話まで事件にしちゃうなんて。ほんとに探偵の鏡みたいな後輩ね。これだけでも合宿をやったかいがあったというものだわ」

「それほどでもないですよ。この話はたまたま説明がついたというだけのことから」

はにかむ結衣。

「……いま話を聞いていて思ったんですけど」

咲が口を開くが、めずらしく口調が重い。まるでなにかにおびえているみたいに。

「最初に話してもらった副会長の怪談、あれってひよっとすると別の真相が隠れているんじゃないかって」

「どんな風な？」

会長が問うが、咲はなかなか喋り出そうとしない。

「……俺も、すこし気付いたかもしれないかも」

かわりに神崎がいった。

「めずらしいね。教えてよ」

会長が茶化するようにいうが、神崎もあまり気乗りしないようで、ためらいがちに話しはじめる。

「動物嫌いの教師ってひよっとすると動物の呪いとかじゃなく、誰かに殺されたんじゃないでしょうか。おそらくほかの教師か、校長の手によって」

「ふむふむ。それで？」

「あまりにも不自然な失踪の仕方ですし、計画的な犯行ではなかったと思います。きつとなにか口論になるなりして、衝動的に殺してしまったんでしょう。だけど遺体の隠し場所がない。そこでひらめいたのが動物たちを処分していた穴です。ここに埋めれば匂いや骨も誤魔化すことができる。動物の遺体なんて気味が悪くて掘り返す人もいない」

「……………」

「お札は事件をカモフラージュするのと、恐怖心の表れなんだと思います。ありもしない怪談に信ぴょう性を持たせれば、誰も理科教師が人によって殺されたなんて考えない。それに人を殺すというのは恐ろしいことです。いくら信じていなくても霊や祟りによって復讐されるんじゃないかと思えてくる。だからお札を張って魂を鎮めている。動物ではなく、人の魂を」

ひよつとすると、どこからか聞こえてくる「たすけて」という声は本物なのかもしれませんね、という神崎の声は不思議と遠く感じた。

「——聞いてよ結衣ちゃん。うちさ、あの話のあとに夢を見たんだ。そう、怪談のあとに。当然怖い夢かと思ったたらそれがまた不思議な夢でね、ぜんぜん怖くない。どんな夢だったかというと、新しい団地ができてすぐってさ、それまであった自然を切り崩して住宅をたてているわけだよ。それにともなって動物たちも住みかを奪われるんだけど、餌を求めて住宅街に下りて来ちゃうことがあるんだよね。それってすごく危険なことだし。ひよつとしたら人間を襲っちゃうかも知れなかったり、伝染病をまき散らしたりする可能性もあるわけよ。そうすると結局その動物たちも殺されちゃう。だから電気シヨックなんかで山から下りて来ちゃいけないって教えることがあるんだけど、例の動物嫌いの教師もそれをやってるのよ。はたから見たら虐待してるみたいなんだけどね。本当は動物たちのことを考えるとそれがいちばんなんだ。」

でさ、その時代ってすごく学校が荒れてた時代でもあるんだよね。特に新しい環境に引っ越してきたばかりなんてみんな不安定だし。学校の備品なんかがあちこち壊されたりしてさ、目も当てられないくらいに。その痕跡を隠すのと学校が安泰することを祈って神社か

らお札をもらってるんだ。さすがにお札を剥がした翌日には元通りになってるってことはないだろうけど、誰かが見つけるたびにお札が新しく貼られていくわけ。ちよつと風変わりではあるけどね。

それで理科教師なんだけど、暴力の溢れる時代だったから生徒の誰かがいたずら半分で動物を殺しちゃうようなこともあったわけなんだよね。それを処分するために時々地面に埋めてやってたんだけどさ、穴を掘ってる最中に足を滑らせて怪我しちゃったんだよね。そいでしばらく入院。そのついでに暴力のない平和な学校に転勤していったって夢。

——え？ 覚えてないの？」

学校の怪談（後書き）

この話に出てきた二つの怪談は、ネットで調べた都市伝説や階段をもとにしてつくったフィクションであります。

自分で怖い話を作るのはけっこうしんどいので、いろいろ検索してたんですけど、かなり怖いです。ああいう文章を書きたいものだ。それから、本作は通じてはやみねかおる先生の作品をまねている傾向があります。あしからず。

ストーカー犯

「——最近ストーカーの被害に遭っているみたいなんです」

神崎がそう切り出したのは、よく晴れた9月のことだった。

「ストーカー？ 気のせいじゃないの？」

会長が顔をしかめて問いかえす。あまり気分のいい話ではない。

「おれも最初はそうかなって思ってたんですけど、いつも知らない人につきまとわれているような気配がしたり、いつの間にか学校の机に置いておいたものの配置が変わっていたり、撮られた覚えのない写真が落ちていたり……ってことがあって」

「でも確固たる証拠はないわけね」

「そうなんです」

神崎がため息をつく。

長い夏休みが終わりをつけ、新学期をむかえてようやく休みボケが抜けてきた頃だ。そうはいっても残暑は厳しく、まだ夏の雰囲気が残っている。

長い休みがあると、学校という空間が非日常になってしまうことがあるのだが、再び授業がはじまると自然に元通りになっていく。

「犯人の目星はつかないの？」

「ぜんぜん」

首を横にふる神崎。会長はあごに手をあててふーむと考えこんだ。
「つけられてる気配があるのなら逆に待ち伏せて捕まえちゃえばいいのに」

「相手が刃物なんかを持っていたりしたら危ないじゃないですか。」

それにまだストーカーをされていると決まったわけでもないですし」

「ヘタレね。体つきは悪くないくせに」

会長がやれやれといった視線を神崎へ向ける。

「健輔なら返り討ちにされそうだけど、誠くんなら大丈夫なんじゃないの？」

「いやですよ。怪我したくないですし」

「そんな弱腰じゃ犯人を追いつめたあと、逆切れされて殺されるわよ」

「会長だつて得体のしれないストーカーは怖いですよね？」

「うちは平気よ。合気道は黒帯だし」

「ほう？」

「健輔は黙つてて。とにかく、ストーカーなんて根暗なものはこっちから出向いてやればいいのよ。そうすれば万事解決なんだから」

「そういうもんですかね」

「そういうもんよ」

胸を張つてふんぞり返る会長。

神崎は内心で、相談する相手を間違つたかな、と思う。

「副会長、相談があるんですが……」

「ちよつと誠くん、それどうということ」

「まさか立ち向かつていけという回答を得られるとは予想していません。参考にならなそうなので副会長にも話したほうがいかなー、と」

「いいかなー、じゃないわよ。人がせつかく親身になつてやっているっていうのに」

腕を組んで憤慨する会長。

そして部室のすみからホワイトボードを引つ張つてくると、黒のマジックで文字をかこうとしたがインクが切れているらしく、かすれた線しか出て来ない。

「咲ちゃん！」

「新しいマジックならその戸棚にはいつてますよ」

咲が本から顔をあげずにこたえる。いま読んでいるのは図書室から借りてきた古い推理小説だ。表紙には昭和時代の看板にあるような主人公が描かれている。

会長は棚から取り出したマジックのビニールを勢いよくはがすと、ペン先を神崎につきつけた。

「チキンな誠くんに代わってうちらがストーカー犯を捕まえてやるうじゃないの。ただし探偵同好会らしく待ち伏せや強引な行動はなしということぞ！」

「ありがとうございます、会長！」

「誠くん、うちは会長じゃなくて部長だからね」

「わかってます会長」

「……………」

会長はしばらく複雑な表情でまっ白なホワイトボードを見つめていたが、やがて気を取り直したように口を開いた。

「もう一度聞くけど犯人に心当たりはないんだね？」

「はい、まったく」

「よく女性がストーカーに会っているのは聞きますけど、男の人がされるっていうのは珍しいですね」

ホワイトボードが用意されるなりウサギのような俊敏さで神崎のとなりにもぐりこんだ結衣が、楽しそうにいう。

他人の不幸を喜んでいるのではなく、事件が起こったことがうれしくてたまらないのだ。

「そうそう。振られたんだけど諦めきれなくてストーカーになっちゃう人とかいるよね」

「素敵ですよ。純愛です」

結衣がうつとりした瞳を宙に浮かべる。

「すこしちがう気がするんだけどな。まあいいや。大事なのは誠くん。最近誰かに告白されたなんてことは？」

「いえ。この前まで夏休みでしたし」

「ついでに聞くけど誠くん彼女いないの？ そのルックスなら引く手数多でしょうに」

「そうでもないですよ。おれなんて大したことないですし」

神崎が照れくさそうに頭をかく。否定してはいるが多少は自分の容姿について自覚しているのだろう。

「神崎先輩カッコいいですもんね」

結衣が遠慮なくいう。

憧れや羨望などの響きはまったく含まれていなくて、純粹に事実を述べたという感じた。

「咲ちゃんもそう思うよねー」

会長が静かに読書にいそしんでいる咲に話題を振るが、

「副会長のほうが男前ですよ」

という皮肉で返すあたりは慣れている。

男前と評された本人の鼻孔が、すこしだけ誇らしげに膨らんだ。

「お世辞だつてわかつてる？」

「分かつてるさそれくらい」

「そう。それならいいんだけど」

すっかり釘を刺してから会長がホワイトボードに向きなおる。

「彼女はいない——と。……ひよっとすると男色の線もあるかもしれないわね」

「ホモつてことですか？」

結衣が聞く。

「近年は性がオープンになってきてるからね。誠くんを好きになった男子がいても不思議じゃない」

真剣な表情でうなづく結衣と会長。

神崎は頭痛がしてくるのを感じた。

「容疑者の範囲が広がっちゃいましたね」

「仕方ない。誠くんだもの」

「神崎先輩ですものね」

「男もありよね」

「ありですね」

勝手にふたりで話を進めていく。これでは推理が明後日の方向どころか月あたりまで飛躍しかねないと神崎が会話をさえぎった。

「どうして女子という方向を疑わないんですか？ それ以前にどうして恋愛がらみと話がきまっているんですか？ 他の可能性もありますよね」

「そりゃあ——女の勘というやつかな」

「ですよね」

野次馬根性とも言いかえられるんじゃないだろうか。サスペンスドラマを見せたら案外ハマリそうな気がする。その素質は十分にあるはずだ。

咲と副会長が会話に参加してこないのが唯一のなぐさめだろうか。「誠くんはなにが原因だと思ってるのさ。うちの貧相な想像力じゃ恋愛沙汰しか思い浮かばないものでね。教えてくれるとありがたいかな」

会長がニヤつきながら質問する。どうせ答えなど返ってくるはずがないとたかをくくっているのだ。事実その通りなのだが。

神崎が頭を抱えて悩みだす。

「あんまりに成績がいいものでひがまれたとか」

「自虐ネタはいいから」

「……誰かと間違われているとか」

「そんなことないでしょ。ストーリーカードまでしているくらいだし」

「すぐく奥手な女の子が定期券を拾ったんだけど恥ずかしくて声がかけれないとか」

「持ち物が動かされてた謎が解決できないでしょうが。少女漫画でも読んでたの？」

「……………」

辛らつな言葉に黙り込む神崎。

どうしてストーリーカード被害について相談したのに自分が責められなければいけないのだろうか。

助けを求めて副会長に視線を送るが、なぜか部室に持ち込んでいるプラモデルを作るので忙しそうだ。おそらく戦艦なのだろうか完成した瞬間に会長の手によって破壊されそうな予感がある。

「部室で関係ないこととしてんじゃないわよ」

とかなんとか言っただけ。

そのときの副会長の悲しげな瞳が脳裏に浮かぶ。それは同時に、

いまの神崎の瞳でもあった。

「事件は解決してくれるんですね？」

「たぶんね。ストーリーはどっちかというと探偵よりも警察の仕事だとは思っけどさ」

「わたし頑張ります！」

と結衣が元気な声を張り上げる。

やる気も実力もあるのは結構だが、かなり天然なところがあるので間違った方向へ直進して行ってしまったときがすこし怖い。最悪の場合、神崎が犯人に仕立て上げられることもありえる。

「さっそく張り込んで来ましょうか」

いきり立っている結衣を会長がなだめた。

「まあまあ落ち着いて。こちらは犯人の姿を見ることなく特定しなきゃいけないんだからね。それがルールだよ」

「はい」

「まるでゲーム感覚ですね」

という精一杯のいやみは、会長に通じないみたいだった。華麗にスルーされる。

「探偵同好会としてはこんな簡単な事件じゃ申し訳ないくらいね。

答えは決まったようなものだし」

「だったら早く解決してくださいよ」

「ちょうど暇だったところだしね。本格始動と行きますか」

会長がバン、と長テーブルをたたくと、反対側にいた副会長のプラモデルが反動で床に落ちていった。あーあ、可哀そうに。

ストーカー犯（後書き）

9月編になります。

いろいろ文体が変わったりしているのには目をつぶってください。

不可能犯罪

「ちょっと待ってよ」

ホワイトボードの前に立っている会長が目を丸くする。

その声はちよつと嬉しそうだ。探偵同好会の会長を務めるくらいだから好奇心が旺盛なのはかまわないけれど、悩み相談にまで楽しそうにふるまうのはやめてほしい。

「これ全部本当なの誠くん？」

「おれが覚えている限りでは事実です」

「それって不可能犯罪じゃない！」

やっぱり。

探偵同好会に入部してから勧められるがままに推理小説なんかを読んだりしていたのだが、不可能犯罪という言葉は作中でとてもよく目にする。

とくに漫画なんかに多いだろうか。実は部屋に抜け穴がありました、なんてこともあるのだけど。

「ほぼ同時刻に三か所で不可解な事件が発生している。ストーカー犯が瞬間移動でもない限り犯行は不可能！」

「これで神崎が密室で殺されでもしたら完ぺきなんですけどね」

会長の号令でしぶしぶ本をしまった咲がぼそりと呟く。不吉なことを言うのはやめてほしい。

「密室殺人も面白いけど、神隠しとかのほうがうちは燃えるかな。

これぞ怪異、って感じで好きなんだよね」

「UFOにさらわれたのかもしれないだろ」

むっすりと不機嫌な副会長がいう。

落下したプラモデルは幸い無事だったようだが、いまは壊されないように安全な場所に保管している。嫌な予感ほどよく当たるものだ。

「それじゃつまらないじゃない。改造されて帰ってくるとかいいうの

なら別だけど」

「神隠し自体は僕も嫌いじゃない。むしろ好きなほうだが、実際に間近で体験してみないとただの見落としなんじゃないかと思えて仕方なくてね」

「大丈夫よ、誠くんが近いうちにそうなるから」

「そうか、楽しみだな」

「あの、おれなにか悪いことしましたか」

神崎の悲壮な声。

「こんな素敵な事件を持ちこんでくれて感謝してるわよ」

あつけからんと言つてのける会長。

会長は黒マジックで大きく『不可能犯罪』と書いて、その周りを何重もの線でかこつて強調した。

「これは探偵同好会の総力をもつて解決すべき難事件になるわよ。

まさか生きてる間に不可能犯罪と対面できるなんて思つてなかった

！」

「わたしもハッピーです会長」

結衣が呼応する。このふたり、馬が合うのか性格や言動まで似てきているような気がする。

「それで？ 不可能犯罪だったら解決できませんよ」

冷静に咲が意見を述べる。

不可能犯罪という響きに浮かれている会長たちや、もともと頼りにならない副会長とちがつてずつと頼もしく見える。

「実際には不可能犯罪に見えて、そうでないっていうのが定番だからね。どこかに矛盾する点があるんじゃないの？」

「あるんじゃないの？ って無責任じゃないですか」

神崎がケチをつける。ただのストーカーが、ずいぶん大きな話になつてしまった。それに伴つて解決の糸口も遠ざかっている。はたして本当に事件を解き明かすことができるのだろうか。

変なプライドにこだわつて迷宮入り、というようなこともありえるかもしれない。

「なんか解決しちゃうのがもったいなくてさ。ほら、夢みたいな話だし。足跡ひとつない大雪原に踏み入りたい気はするんだけど、やっぱり壊したくないような気もする——っていえばわかるかな」

わかるような、わかりたくないような。

「誠くんがストーカーの気配を感じているあいだに、机のものがなくなっていて、おまけに名無しのラブレターまで届いていたということだったけど、気のせいと勘違いって可能性はないのかい」

副会長が疑問を投げかける。

神崎は、力強く首を縦に振った。

「おれが購買部に行く途中、ずっと誰かにつけられているような靴音がしていたんです。すごく変な時間だったからほかに購買部に用があるやつなんていなくて、それなのに足音がするから変だなあと思ってたんです。おれのあとに誰かが購買部に入ったということもなかったみたいです」

「姿は見えないのかい？」

「残念ながら。でも足音を殺しているような感じではありました」

「よく聞こえたわね」

会長が感心していった。

「聴力はわりといいんですよ。それで気付いたんです」

「ラブレターのほうはどうなんですか？」

結衣が興味しんしんといった風に訊く。

「どうって言われても……ハートマークのシールがついた便箋だけが友達に届けられてたんだよ。それなのに誰からってきいてもわからないって言うし」

「なんで？」

「知らないうちに渡されてて、顔を見てないんだけど名前だけ書いてあったからとりあえず届けておいたってことでした。それが購買部に行く途中のことです」

「ストーカーをしている人はまだ後ろにいたんだよね？」

会長が確認する。

「いたと思います。だから同時にラブレター混入とストーカーをできたはずがないんです。その友達の話によるとラブレターが入っているのに気づいたのはおれに会うすぐ直前だったってことでしたから。それで届けに行こうとしたときに出会ったそうです」

「ラブレターは悪戯なんじゃないの？」

「そういうことをする人じゃないですから」

「ますます不可能犯罪の予感がしてきたわね」

会長は純粹無垢な赤ん坊のように笑っている。他人事だとかこまで態度が変わるものらしい。信頼関係なんて所詮そんなものだ。

「先輩、机のものがなくなっていたというのは？」

結衣が尋ねる。

「その購買部に行ってから戻ってくるとなぜか筆箱からシャーペンが数本なくなってたんだ。けっこいつも使ってるシャーペンだったんだけど。そのときちょうどおれの机の周りに注意を払っている奴はいなくて、誰が犯人かはわからないって。でも少なくとも誰かがすこし借りただけってことはなさそうだけど。もしそうなら一度に何本もシャーペンを持つていく理由が見当たらない」

「なんだか踏んだり蹴ったりですね」

結衣が神崎にあわれみの視線を向ける。

「占いはちゃんとチェックしなきゃだめですよ。ラッキーアイテムをもってるだけでもずいぶん変わるって雑誌に書いてありました」

「ありがとう。次からはそうするよ」

棒読み口調の神崎。

その声音からはそろそろあきらめた雰囲気か漂いはじめている。

この事件はやはり迷宮入りになるかもしれない。探偵同好会ではなくて、興信所同好会とかに相談すればよかった。

もちろんそんなものないのだけれど。

「さっき撮られた覚えのない写真が撮られていたって言うてましたけど」

「そうなんだよ。みように写りのいい写真が廊下に落ちててさ。そ

れがなんてことない教室での風景なんだけど、だからこそ不気味で」

「その写真、いまも持っていますか？」

「捨てちゃったよ。気味が悪かったし」

「だめじゃない。そういうのは大事な証拠になるんだからちゃんと保管しておかないと」

会長は眉をしかめながらポニーテールに結んだ髪を撫でつけた。

普段はさほど長くない髪をおろしている会長だが、夏のあいだはこうして髪を束ねていることもある。

「ずいぶん粘着質なストーカーだな。だが妙なところもある。たった数日のあいだにそれだけのことをやってのけるくせに、証拠もたくさん残している。それなのにシャーペンを盗むときは痕跡すら残していない。まるで別の人格があるみたいだ」

いままで静かだった副会長が口を開いた。

「慎重なおつちよこちよいな人なのかもしれませんね」

結衣が自分のことを棚に上げていった。

「うーん……いまいち犯人像が浮かんでこないわね。さしづめ怪人二十面相かアルセーヌ・ルパンってところかしら」

会長がうなる。

そのとき、咲が申し訳なさそうに決定的な一言を告げた。

「それって、複数犯なんじゃないですか？」

あ、という声がまるで合唱のようにこだました。

真相

「完全に盲点だったわ。まさか複数犯だなんて」

会長がひたいを押さえながら力なく首を振った。その疲れ果てた様子はまるで生涯をかけた試合を終えたばかりのボクサーみたいだ。「推理の基本だと思いますけど」

神崎の言葉は、冷たい。

北極の最下層に眠る氷の塊よりも、ずっとひやかだ。

「ストーリーっていうからってつきり単独犯の仕業だと思ってたの。そうでないと不可能犯罪にならないし」

「むしろそっちのほうが重要なんですよね……」

「まさか誠くんがそこまでモデルとは思ってなかったのよ。ストーリーって言うても、単なる追っかけじゃない」

「だからどうして恋愛がらみの話と決まっているんですか!」

会長はホワイトボードの「不可能犯罪」という文字を名残惜しうに消すと、その上に大きなハートマークを描いた。そのなかに、三人の棒人間。

「白紙のラブレターなんて恋愛沙汰に決まってるじゃない。恥ずかしくて誠くんに声をかけられないうぶな少女が足音の正体。ちよつとだけ誠くんの推理が当たってたのがむかつくけど」

「それからラブレターの犯人は、別のおっちょこちよいの犯行だと思います。たぶん中身を入れるのをためらっているうちに落としてちやたんですよ。生写真もそうなんじゃないですか」

結衣が会長の言葉を引きついだ。

その表情は先ほどまでの明るいものから、すこし落ち込んだようなものへと変っている。難事件があまりにもあっさり解決してしまったせいなのは明白だった。

「シャーペンがなくなっていたのはどういうことなんですか?」

ほつと胸をなでおろしながら神崎が訊く。

その問いには、副会長が返答した。

「好きな人のものは身につけていたいものだろう。それがたまたまシャーパーンだったという話だ。体操着なんかじゃなくてよかったな」「それって盗みじゃないですか」

「そういうな。恋する乙女のかわいらしいいたずら心と思えば、許せる気にもなるだろう」

いやに副会長が寛容だ。

へんに思つて尋ねてみると、少女漫画のようにメルヘンチックで素敵だという。この人もすこし、いやかなり価値観がずれているらしい。

「うちがジャンプを読み漁っているあいだに健輔はりぼんを読んでいたようなやつだからね、多少女々しいのは勘弁してあげてよ」

「めずらしく会長が副会長に優しいですね」

すでに事件は終わったのだというふう推理小説のページをめくっている咲がつぶやいた。本を読みながらも周囲の会話はしつかり耳にはいつているらしい。

「健輔ん家のマンガにはお世話になったからね。わるいことは言えないわけよ」

会長が手をひらひら振りながらこたえる。

「その過程で愛が芽生えたんですね」

咲がぼそりと、だがちゃんと聞こえるようにいった。

「余計なこと言わないの。そんなことないから」

「少女漫画をふたりして読んでいるとなんだか胸の奥がうずいてきて——となりには幼いころからのいとしい彼の姿——そっと近づくとふたりの距離、そして唇がゆつくりとふれあいそれから……」

神崎がここぞとばかりに情感豊かにまくし立てる。

さつきからずいぶんうつつ憤がたまっているのだ。自分ばかりが恋愛話でからかわれていたのでは面白くない。

「馬鹿な妄想を披露するんじゃないわよ」

会長がつとめて冷たい態度で吐き捨てるが、その両耳はゆでたみたいに赤く染まっている。それは居心地悪そうにかばんから本を取りだそうとしている副会長も同じで、神崎の口元がさらに歪んだ。「もしかして、本当にそんなことがあったりしちゃったりしたんですか？」

「あるわけないでしょ！」

「でもその照れようは普通じゃないですよ。うーん、探偵の直感が事実であると告げています」

「ああもう怒った！」

会長がいすを蹴って立ちあがるのとほぼ同時に、神崎が盗塁を試みるランナーのように素晴らしいスタートを切った。そのままの勢いで部室を飛び出していく。

「待て！」

と叫びながら、逃走した犯人を追跡する刑事

デカ

のような形相で会長もドアをくぐりぬけていった。騒々しい足音がだんだんと遠ざかっていく。

残された三人のあいだに、不思議な空気が流れる。

いままで大音量で演奏していたドラマーが突如動きをとめ、ボーカーの小さな歌声だけが響いているときのような。

「愛って素晴らしいですね、副会長」

結衣の眼は夢見る少女のそれだった。副会長が、こほんと咳払いをした。

数十分後、駅伝を走り終えた選手みたいにぜいぜいと荒い息をした会長と神崎がかえってくると、探偵同好会の一同は写真同好会のもとへ向かった。

探偵同好会と同じ、旧校舎の廊下沿いにある写真同好会は残念ながら人数が少なくて部としての規定を満たせず、同好会にとどまっ

ている同好会である。

ふつうの高校なら写真部、という扱いであるが、霞ヶ丘高校の写真同好会は依頼を受ければ盗撮まがいの撮影もいとわない。最高の一枚をとるのではなく、みんなに満足してもらえる写真をモットーにしているのである。

そのため人気のある生徒の裏写真が流通するときには、かならず写真同好会が一役買っている。

だが、写真をとっている瞬間を目撃したことのある者がひとりもないという伝説もあって、その存在はなぞに包まれているところも多い。

「たのもー！」

6月に野球部の部室を訪れたときとは違ってかわって朗らかな笑顔で、会長がドアをノックする。

なかから返事があって、するりとドアが開いた。

「いらつしゃい。一枚百円から受け付けておりますが、どういたしましょうか。L判サイズなら一割増し、連写でよろしければ二割引きです。さらに日常の風景などだけに限らず、風の強い日のアクシデントなどのスクープ写真も取りそろえております。さてお客様、どちらをお求めで」

まるで大阪の商人みたいにまくし立てられ、面食らう会長。

部室のなかには様々な種類の写真が所狭しと張られていて、まるで写真館のような雰囲気醸し出している。それとは裏腹に入口のすぐそばには受付が設置されていて、どこかせわしない。

「ものすごいところですね」

結衣が感嘆のため息をついた。見慣れた探偵同好会の部室からはかけ離れている。異世界に来たような気分だった。

「こついうやつらなのよ。写真同好会っていうより写真組合って感じね」

会長が慣れた様子でいう。

ほかにも霞ヶ丘高校には大小様々な同好会やクラブがあるのだが、

写真同好会はその一端にすぎないのだ。

「ちよつと聞きたいんだけど、ここにいる神崎誠の写真を依頼した人を教えてくれるかしら」

会長が受付にいる男子生徒に顔をぐい、と寄せた。

それでも笑顔を崩さないのは、すごい。

「申し訳ありませんが、プライバシー保護のためそれはお教えできないことになっております」

「こっちは実際に被害を受けてるのよね。誠くんはこの通りノイロ―ゼになっちゃったし」

神崎はげっそりとやつれた様子だ。これは演技ではなく、会長との追いかけっこに疲れ果ててしまったためである。

会長のナイフで刺すような鋭い言葉にも、男子生徒は笑顔をくずさない。

「そういった苦情は当方では受けてっておりませんので」

「あんたたちは他人の健康と、客のちっぽけなプライバシーとどっちが大事なのよ」

「お客様にご迷惑をおかけするわけにはまいりませんので」

「だったらそうね、探偵同好会の集合写真をたのむかしら」

「はあ」

いきなり会長の態度が急変したため、受付の表情が少しだけ困惑したものにかわる。だが会長が耳元でなにやらささやくと、その笑顔が納得したようにもとにもどった。

「了解いたしました。では、こちらへどうぞ」

「なにをしたんだ？」

副会長が会長に聞いた。

「ちよつと多めに写真の撮影をたのんだだけよ。どうせ卒業写真とか撮らなくちゃいけないわけだし、ついでに、ね」

にべもなく答える。

「というわけで咲ちゃん、これは経費で落とせるわよね」

「まあ仕方ないでしょう」

しぶしぶといった様子で咲が了承する。いちおう調査費ですからね、とつけ加えた。

「まさか学生の身で力ネの駆け引きを覚えているとはな。いつ覚えただんたそんなこと」

副会長があきれ顔でいう。

「こういう金の亡者みたいなやつらの口を割らせるには、利益で黙らせるしかないでしょ。そのくらいちょっと考えれば思いつくでしょうに」

「いや、そういうことじゃなくてだな。いつの間に世知辛い世界の真理を悟ったのかということだ」

「生まれたときからかしらね」

すずしい顔の会長。副会長は、やれやれと肩をすくめた。まるで似合っていない。

「写真をとるならそう言ってくれば服装とかも考えたんですけど

……」

結衣があたふたと身なりを整えている。それから手ぐしで前髪を撫でつけていると、写真同好会のほうから手鏡が渡された。ぺこり、とお辞儀をする。

「だってとつさの思いつきだったし、誠くん相談されたのもつしさっきのことだし。大丈夫よ、結衣ちゃんならそのままでも充分力メラ写りはいいから」

「ほんとですか？」

「嘘はいつてないわよ」

「じゃあ、自信満々で行きます」

結衣の容姿はかわいいというよりは、どちらかといえば美人な類に含まれる。肩まで伸びるつややかな髪や、口を閉じて座っているときの涼やかな目元は、まるで山頂の頂に咲いている白い花卉のようだ。

だが、言動がかなり天然であるため、普段はそういった印象を与えないのではあるが。

それから何十枚かの写真を取り、ひとしきりポーズを終えたあとで会長は、

「誠くんの弱みを握れるような写真はないかしらね」

とこっそり商談をまとめかけていたのをギリギリで神崎に気づかれ、失敗に終わっている。

神崎の選択

写真同好会のひとりから神崎の写真を依頼した犯人の名前をききだすと、こんどは神崎のクラスメイトのなかから女の子をリストアップした。

さらにそのなかから彼氏もちのひとなど、条件に当てはまらない人を除外していく。主に神崎の証言と印象をもとにしながら、名前のリストに次々横線が入れられていく。

シャーペンを取ったとき、周囲の人間に勘づかれなかったということは、心理的盲点にはいつていた可能性が高い、ということだった。

「たとえばひとの多い駅で犯罪が起こったとする。すると、不思議なことに誰も犯人の顔を覚えていないという。人がいる、というのが自然な光景に溶け込んでいるから、みんなまわりの人間に対して無関心になるんだ。それと同じことが、誠くんの教室にも起こっていたと考えられるだろう」

副会長が、首をひねっている神崎に対して説明する。

場所は、ふたたび探偵同好会の部室だ。

「どういうことですか？」

「きみは教室にいる同級生の行動をいちいち記憶していられるかい？ 無理だろう。だがもし先生が急に教室へはいつてきて、なにやら不審な動きをしていたら、記憶に深く刻まれるはずだ。ひよつとしたら一年くらい先にも覚えていかも知れない。それは先生という特異点があらわれたからなんだ」

「……つまり、普通とはちがうことをしている人は印象に残りやすいということであってますか」

「そういうことだ」

「なるほど」

神崎がふかく納得する。

そして、あることに気づいた。

「おれのことを購買部までつけてきた人って、すごく目立ったんじやないですか。あんな変な時間に購買に行く生徒なんて珍しいし。それなら誰かが覚えているかもしれない」

「そのとおりよ誠くん」

容疑者のリストアップを完了し、首の関節をパキペキ鳴らしながら会長がいった。

手元の名簿表には、ひとりの名前が蛍光色でマークされている。

「咲ちゃんに聞き込みに行ってもらってるから、もうすぐ帰ってくるわよ。そうしたら3人の犯人が特定されるから、のりこみに行きましょう」

「のりこむって——どうするんですか？」

神崎の顔が不安なものへ変わる。にんまり笑うと会長は、神崎の瞳をのぞき込んだ。

「だれを選ぶか決めてもらうのよ。楽しみね」

あっはっは、という高笑いが部室にとてもよく響いた。

「まさか全部振るとは思ってもみなかったよ。さすがモデル男は違うねえ」

会長がけばけばしい炭酸飲料の缶に口をつけながら、神崎の頭をくしゃくしゃと乱暴に撫でた。ワックスで整えてある髪が、生長しすぎた雑草のように乱れる。

「可愛い子もいたじゃない。あの写真の犯人なんてクラスでも指折りの女子なんですよ」

「べつに好きなわけじゃありませんし、中途半端な気持ちでは向こうに失礼ですから」

「まったく。優等生な回答なんだから」

そう言いながらも会長は酔っ払ったみたいに上機嫌だ。

よもや炭酸飲料で酔っ払っているはずはないから、気分だけビー

ル漬けにしているのだろう。

「みなみ、あんまり冷やかしてやるなよ」

副会長がたしなめる。

神崎が3人に自分の意志を伝えてから数十分、いやにテンションのあがった会長がパーティーまがいの装備をととのえて部屋にもどつてくると、なぜか祝勝会が開かれた。

長テーブルの上には色とりどりのジュースやお菓子が並べられているが、咲と副会長があまり手をつけていないため減りは少ない。

「だってうれしいじゃない。誠くんがこんなに男前に育ってくれちゃって」

「どこが男前なんですか」

会長に頭を撫でられて身体は逃げているものの、神崎はそれほど嫌そうな表情でもない。

「ただの女たらしにはなつてほしくないからね。とつかえひつかえ、みたいなことにならないでひとりのパートナーを生涯愛し続けられるようになってほしいと思ってたのよ。それを教え込む前に、立派な判断力を身につけてくれていたもんだから、嬉しくってしかたないの」

「一途な愛ですね、先輩」

結衣がニコニコしながらいうが、そのじつすこし残念そうな表情をしている。恋愛の修羅場が見られるかと内心では期待していたのだ。

「でもまさか3人同時とはね。夏休みで男に磨きがかかったってことかしら」

「偶然ですよ」

「夏のあいだ会えなかったから意識しちゃったのかもしれないね」
結衣がクツキーをつまむ。

チヨコチップが口のはしについた。

「いいですね、届かない片想いつていうのも……」

「まさか相手のほうからやってきて振られるっていうのも考えてい

なかっただろうしね。ちょっと残酷だったかな？」

会長が悪気のない様子で首をかしげる。

「誠くんを好きになるのはあの子たちの勝手なわけだし、その権利を奪っちゃうというのもなんだか申し訳ないわね」

「たしかに辛いと思います」

結衣が同意した。

「それも神崎先輩が彼女を作らないからですよ」

ちらり、と咲を見やる。

その本人は素知らぬ顔で推理小説の続きを読んでいる。進み具合からいつてもうすぐクライマックスのなぞ解きなのだろう。

「そんなこと言われてもなあ……」

「これから秋ですし。恋愛の季節ですよ」

「そうなのか？」

「そうですね。せっかくですし、どうですか」

「どうですかって言われてもなあ……」

神崎が口をもごもごさせる。そのとき、新たに会長が開けたペットボトルから勢いよく泡が吹き出して、神崎の横顔を直撃した。

「ごほごほとむせ込む神崎」

「おや、ごめんね誠くん。よく振ってからお飲みくださいって書いてあったものだからさ」

「……そんなこと書いてあるわけじゃないですか」

「おや、振ったのは誠くんだったかな」

おあとがよろしいようで、と副会長が呟いた。

神崎の選択（後書き）

とくに山場もなく、オチも残念な感じで申し訳ないです。
精進します。

探偵と怪盗（前書き）

ここから10月編になります。

探偵と怪盗

霞ヶ丘高校には探偵同好会をはじめ、大小様々な同好会や部活が存在しており、正確な数は学校側も把握していないという。それは同好会を設立するにあたって顧問の教師が必要ないことが大きいのだが、もちろん設立のための条件もいくつか定められている。

そのひとつが文化祭での活動報告だ。

各同好会は生徒会に申告して、文化祭での活動報告を行わなければならないという一文が生徒手帳に明記されている。

そのため10月の終わりにかけて開かれる文化祭が近づいてくると、同好会の部室が並ぶ旧校舎は慌ただしい雰囲気流れだす。

「さて——今年はどうしたもんかしらね」

放課後の部室で、ペンをくるくる弄んでいる会長と、難しい表情で眉間にしわを寄せている会長が話しこんでいる。

議題はもちろんすぐに迫った文化祭についてのことだ。

「去年と同じように適当な推理小説を紹介しておけばいいんじゃないか。毎年そんな感じだったろう」

「つままないじゃない、そんなの」

会長がペンをいじる手をとめ、木馬で遊ぶみたいにいすを前後に揺り動かす。

プラスチックのきしむ音が周期的に副会長の耳をついた。

「せっかくの文化祭なんだから派手にやりたいじゃない？ 来年の

新入部員のことも考えなきゃいけないわけだし、ひとりくらいは感銘を受けて門戸をたたいてくれるかもしれないわよ」

「まあ、それも一理ある」

副会長がうんうんと頷いた。

「それで、具体的にはどうしたいんだ？」

「それが思いつかないから困ってるんじゃない」

大きくため息をつく会長。

部室には後輩たちの姿はない。活動のない日を選んでゆつくり話し合うためだ。しかしふたりだけでは良案も考え付かず、数時間ほどこうして果ての見えない会議が続けられている。

「即興の推理なんてのはどうだ。シャーロックホームズがよくやっているみたいに持ち物の記名を見て、名前をあててみせるとか」

「いまどきの人間はそうそう名前をかいいたりしないでしょうが。制服姿でやってきて、鞆に思いっきりYUIとか書いてあるのなら別だけ」

「……やっぱりふたりだけで相談するっていうのが間違いだったんじゃないか。児玉くんならなにかしらよさそうなアイデアを出してくれそうだし、白谷くんだって思いもよらない名案を思いつくかもしれない。つまらない意地張るのをやめれば楽になれるぞ」

「そんなの、先輩としての面目が立たないじゃない」

リスのように頬を膨らませる会長。

副会長は肩をすくめた。ギブアップというジェスチャーだ。

「べつに探偵同好会のみんなで考えればいいことじゃないか。わざわざ隠す必要もないだろう。児玉くんは去年も一緒にやっているわけだし」

「あんなの咲ちゃんの蔵書をならべただけの図書館じゃない。今風にアレンジするなら推理小説喫茶みたいな感じだけど、そんなの流行らないわよね。せめてメイドや執事をつけるとかしないと」

そういつて会長は副会長の顔をまじまじと見た。

「なんだ？」

いやな予感がする。

「——いや、やっぱり無理ね。苦情が殺到するのがオチだわ」

「失礼だな、本人の目の前で」

「結衣ちゃんなんかは美人だからメイド衣装も似合うだろうけど、健輔はギャグにしかないし」

「そこまで言うならみなみがメイドをやればいいんじゃないか」
「ぶぜんとした口調で副会長がいった。」

会長の眼が冷たくなる。

「そんなことやらせたいわけ？」

「自分の後輩にやらせようとしていたじゃないか」

「変態」

「みなみだつて僕に執事役をやらせたらどうだろうか。ちょっと想像しただろ。それと同じだ」

「聞く耳持たないわね。たとえ理由がどうであれひとのメイド姿がみたいだなんて、裸を想像するのと同じくらいセクハラだし」

「二度目だが、自分の後輩でそれをしていたじゃないか」

「とまあ、あげ足とつて八つ当たりしてみただけだ。びっくりした？」

「いつものことだと思ったださ」

副会長がつかれたようにこめかみのあたりを押さえてマッサージする。それからくるりと首を回した。

「この案も駄目ね。ホントにどうしようかしら」

「悩んだところで仕方ないと思えてきたな。さっきみたいに話があるうちこつちに飛躍するもんだから」

「あら、怒ってるの？」

「そういつわけじゃない。明日が見えないだけだ」

「夜の12時を過ぎれば明日になるわよ」

「仮にそうだとしても夜明けはこないな」

「まったくつべこべと」

会長がいじっていたシャーペンを床に落とした。かがんでそれを拾うと、テーブルの縁から顔をのぞかせる。

「うちのメイド姿見たかった？」

「はい？」

「健輔がどうしてもというのならやってあげてもいいけど」

「……なにか裏があるだろ。それに僕はコスプレに興味はない」

「あらそう。食いついてくると思ったんだけど」

会長が残念そうにいすに座り直す。

「変装ならともかく、コスプレなんて探偵同好会には関係ない。客は集まるかも知れんが」

「なんで変装が関係するのよ」

「探偵の宿敵はいつだって完ぺきな変装をしてくるものさ。そのくらい小説の基本だ」

「——そうね。いいこと思いついたかも」

会長は不敵に笑みを浮かべると、ゆっくり立ち上がった。かばんも持たないまま部室のドアへ近寄る。

「帰るのか？」

驚いたような声で副会長が背中ごしにたずねた。

「そんなわけないじゃない。ちよっと交渉をまともに行くのよ。あつちも忙しいだろうし、ことは急がなきゃ」

「僕も一緒に行こうか」

腰をあげかける副会長を、会長はやんわりと制す。

「健輔、怪盗同好会っていうのがあるの知ってる？」

「聞いたことはあるがな。具体的に誰がいるのかはさっぱり」

「運のいいことにその部長と友達なのよね。誰とは言わないけどこの前話してるときに一度でいいから真剣勝負を試みたいねってことになったんだけど——」

会長がニヤリと笑った。

「——今がそのときかもしれない」

会長が部室を出ていくと、副会長はひとり取り残された。ひどく静かだ。そして、のどかだ。

だがどういいうわけか落ち着けない。変な緊張感が部屋に満ちている。それが嵐の前の静けさであることを、副会長は知る由もなかったのだ。

探偵と怪盗（後書き）

またちよつと文体が変わった気がします。

でも、個人的にはこちらのほうが好きなので、いまのままで書いていこうと思います。

ほかの章よりも長くなりそうです。

探偵たちの作業場

文化祭も押しせまった一週間前になると、にわかに学校中が騒然としはじめる。あちこちの同好会だけでなく、クラスごとの企画があったり、文化部などは唯一の発表の場だったりするところもある。それにとまって放課後の遅くまで居残って文化祭の準備をする生徒も増えてくる。

授業がなくなり、文化祭の準備に専念できる日までにはまだ数日があるが、探偵同好会の部室でも黙々と作業が行われていた。

「……………」

沈黙のなかで、ときおり副会長がワープロのキーボードをたたく音と、裁断ばさみが布をたちミシンが駆動する軽快なリズムがなっている。

誰もしゃべらない。口を開く余裕がないのだ。

五人分の洋服——もとい、衣装を作るのには研ぎ澄まされた集中力と、迅速な作業が求められる。シャーロックホームズを模したインバネスコートと鹿撃ち帽という特殊な洋服を縫うのにも時間がかかり、〆切を翌朝にひかえた漫画家の作業場のように張りつめた空気が流れていた。

結衣と神崎が寸法を測り、それに見合ったサイズに布地を切りだしていく。

慣れた手つきでミシンを扱うのは咲と会長で、副会長は家から持ってきたノートパソコンをにらみつけている。そんな光景が数日前から継続していた。

活動が終わるころにはみなくたくたになって、口をきこうともしない。

まるでハードな合宿を終えたばかりの運動部みたいなありさまだった。

「一着、あがりです……………」

か細い声で咲が報告する。

会長は出来上がったばかりのインバネスコートをチェックすると、大きく息を吸い込んだ。

「みんな、休憩するわよ」

はい、という乾ききった声がして、いつせいに倒れ込んだ。

「結衣ちゃん、すごく似合ってるじゃない」

完成したばかりの衣装をまとった結衣を見て、会長が歓声をあげた。

シャーロックホームズと呼ぶにはすこし頼りない気もするが、結衣の容姿が いいのもあって様になっている。

「そうですか」

結衣がはにかむ。

「写真同好会に行つて写真集を作ってもらおうかしら。一部800円くらいなら黒字になるわよ、きつと」

「言っておきますけど探偵同好会ですからね」

咲がくぎを刺した。

通販などでホームズの衣装をまかなおうと思っていたのが思いのほか高価で、自作せざるを得なかったのである。それでも生地をそろえるために相当な出費があり、財政は苦しい。

会計担当の咲としては渋い顔だ。

「わざわざ衣装じゃなくても、イベントは成り立つんじゃないですか」

という苦言は、

「そんなの盛り上がらないじゃない」

という会長に一蹴されている。

「向こうが変装してくるのは目に見えてるんだから、こっちもコスプレで対抗しなきゃだめでしょ」

「やっぱりコスプレになるんじゃないか」

副会長がため息をついた。

パソコンの画面を見つめすぎたせいで目が充血している。パンフ

レット用の原稿をかくので苦勞しているのだ。

草案をつくっては会長のもとへはこび、ボツにされる。重い足取りでふたたびパソコンの前へ戻り、また原稿を練り直す——という繰り返しだった。

「これなら探偵同好会つぼくっていいでしょ。ホームズ以外じゃちよつとマイナーで分かんない人も多いだろうから、他の名探偵のコスプレができないのは残念だけど。明智小五郎とか、ポアロとか、三毛猫とか、赤い蝶ネクタイと伊達眼鏡とか」

「たしかに名探偵ではあるけどな」

なにか違うものも混じっているような気がする。三毛猫とか三毛猫とか三毛猫とか。

「それにメイドやなんやだと恥ずかしいけど、ホームズなら気兼ねなく着られるしね。文化祭中ならさほど違和感もないでしょ」

「いいですね。おれもはやく着てみたいなあ」

レギュラーのユニフォームにあこがれる補欠部員のようなまなざしで、神崎が結衣を称賛する。

ほおを赤くする結衣。

「慣れるのにちよつと時間がかかるかもしれないです。なんだか不思議な気分です」

「その格好で登校したらどうかしら」

会長がいじわるな提案をする。

だが意外にも、結衣は名案だと思ったようだった。

「いいですね！ わたしシャーロック・ユイに改名して学校に来ることにします」

「いや、それただの中二病だから」

からかったつもりが真に受けられてしまい、気まずそうに会長がつっこむ。

結衣は残念そうに首をひねった。

「そうですか？」

「制服以外で学校来ちゃダメでしょ」

「警察に補導されるかもしれませんね」

咲がいう。

「名探偵なのに警察に捕まるなんてへんですよ」

「いや、結衣ちゃんのほうがへんだから」

会長の確な反論で、わずかな休憩時間はまくを閉じた。

「あとは誠くんのぶんだけが完成してないからね。もし作れなかったら、まあ、仕方ないってことで」

気合いを入れ直すために会長が声をかける。

「なんでおれのだけやる気がないんですか」

「だってもう疲れたじゃない。いざとなったらワイシャツをもみくちゃに丸めて、ヘアアイロンをやたらめったらにかけて金田一耕助になってもらうから」

「あと一週間もありますし、大丈夫ですよ」

「そうかしら」

会長は目を細めた。

「油断してミシンの縫い目をミスったりしちゃうかもしれないわよ」

「それって会長のせいじゃないですか」

「気が抜けてる誠くんの責任よ。だから頑張ってちょうだいね」

「……なんか納得いきませんが、とにかく頑張ります」

神崎がワイシャツの裾をまくる。10月中旬になつて、副会長がコートを着込んでいるのに対して神崎はブレザーだけで過ごしている。そのブレザーでさえ、いまはいすの背もたれにかけられていた。「さて、あと一着、さくさく完成させちゃいましょう。その頃には健輔の原稿も完成しているだろうしね」

「鬼のように厳しい編集長がいなければな」

副会長が眼鏡をくい、と指で調整する。

「これだけのパフォーマンスをするんだから宣伝は派手にやらないと。向こうだって全力で宣伝してくるわよ」

「いいじゃないか、片方がやれば」

「いやよ」

会長の眼光が鋭くなった。

「あいつらにだけは絶対負けないんだから。あの——怪盗同好会なんてふざけた同好会には、絶対に」

自分から喧嘩を吹っ掛けに行つたのにもかかわらず、会長の鼻息は荒かった。

探偵たちの作業場（後書き）

いまさらですが、t w i t t e r はじめてみました。
更新情報をのっているので（主にROM用ですが）、よかったら
見てみてください。

望月聖也という名前で（偽名ですが）登録してます。

作戦会議（前書き）

ちょっと長いです。

作戦会議

怪盗同好会——探偵同好会があるのなら、それと相対する怪盗同好会があっても不思議な話ではない。どちらが先に創設されたのかはわからないが、お互いマイナーな同好会なのでその存在を知らない生徒も多数いる。

そしてことさら怪盗同好会は部員が何名いて、どんな活動をしているのかなどという情報が闇に包まれているのだ。

たんに有名でないというだけでなく、意図的に情報を制限しているような感じさえうかがわせるほどに。

「それじゃ、まあ、作戦会議と行くわよ」

おそろいのホームズ姿に身を包んだ探偵同好会の部員たちが、長テーブルを囲んでいる。この日はいつものようにホワイトボードではなく、テーブルの中央に校内の見取り図がおかれている。

「怪盗同好会の部長とうちは偶然にも知り合いなわけだけど、残念なことに向こうの部員がいったい誰なのか見当がつかないのよね。聞いても教えてくれないし、ちょうどいい機会だと思うわ」

「なにがですか？」

神崎がおずおずと質問した。

こちらも最後につくられたシャーロックホームズのコスプレを着こんでいる。あまり似合っていないが、本人は上機嫌だった。

「怪盗同好会のやつらを片っ端からつかまえて面子を暴いてやるのよ。それでもって写真同好会の連中に頼んで学校中にばらまいてやるんだから」

いきまく会長。

「なんでみなみは向こうの会長と知り合いなんだ？」

副会長が訊いた。

「ちよつとした腐れ縁だね。何度か激闘を繰り広げたものよ」

しみじみと語る会長の顔を、咲の冷たい視線が撫でた。

「どうして独断で決めちゃうんですか、そんな大切なこと。文化祭の披露会なんていちばん重要なイベントじゃないですか」

「だからこそうちが素晴らしいアイデアを思いついてあげたんじゃない。去年とは盛り上がり方が格段に違うわよ」

「せめて相談してくれてもよかったじゃないですか」

「心外ね。こっちは数時間も悩んだあげくに、怪盗同好会のほうへ交渉をもちかけてあげたんだから」

「部室の場所しってるんですか？」

「——いや」

咲の質問に、会長が力なく首を振った。

「探してみようとは思ったんだけど、結局どこを探しても見つからなくてね。携帯で電話しちゃった」

「ずいぶん時間がかかったと思ったら、そのせいか」

副会長がため息をつく。

「仕方ないじゃない、あいつ場所教えてくれないんだもん」

「あいつって誰なんですか」

「こんどは結衣が尋ねた。」

「うちと同学年の氷川美保」

ひかわみほ

「って女なんだけどね、これがまた気に食わないというか、なんというか」

「そうだったのか？」

副会長が意外そうに眼を丸めた。

「彼女が怪盗同好会の会長だったなんて初耳だな。みなみとずいぶん仲がよさそうな印象はあるが」

「どこがよ」

口をとがらせる会長。

苦虫をつぶしたような表情をしている。

「あいつとは徹底的に馬が合わないのよ。だから今回という今回は公の舞台でこてんぱんに負かしてやるんだから。それでもってぎゃ

ふん！　と言わせてやらなくちゃ腹の虫がおさまらないわ」

「べつになにかをされたわけでもないだろうに」

副会長が指先で地図をなぞった。霞ヶ丘高校の敷地は、本校舎が作られたことよって建物の占める割合が大きくなっているもの、かなりのスペースを余している。

同好会をいくつも抱えていることからもうかがえるように、霞ヶ丘高校は県内でも有数の広さを誇るのだ。

それゆえに文化祭も他校をしのぐような大規模なものになっている。

「うちの探偵道の行方をはばむのよ、ことごとく。だから完膚なきまでに叩きのめしてやるわ」

「具体的にはどうするんですか？」

熱くなる会長が結衣がクールダウンする。

おもわず握っていた拳に気づいた会長は肩の力を抜いた。

「そりゃあ、探偵と怪盗の勝負といったら、盗むか、捕まえるかの戦いよ。捕まえればこっちの勝ち、盗まれれば向こうの勝ち、それから盗まれなくても捕まえられなかったら引き分け」

簡単な話でしょ、とウインクする。

「校内の特定個所に生徒会の用意した品物をおいてもらって、文化祭の期間中にそれをめぐって対決するの。場所は4か所。もし初日で勝敗がつかないようなら翌日に違った形式で再戦する——とまあこんな感じかしら。うちと美保は顔見知りだから初日の勝負には参加しないわよ」

「なんでですか」

神崎がいった。

ホームズの服装の下で、高揚したように耳を赤くさせている。

「怪盗が顔を知られてちゃ話にならないでしょ。そりゃ変装の技術も多少はあるだろうけど、それでもプロには及ばないわ」

「プロなんているんですか」

結衣が目を輝かせる。

「どっかにいるでしょ、たぶん」

会長がそつけなく答えた。

「やっぱり探偵と怪盗の対決っていったら、どこから誰がどんな手段で盗みに来るのかわからないのが醍醐味じゃない。それが相手の顔を知っているようじゃつまらないわ。でも、向こうはもちろんこっちの顔を知っているでもいいというルールにしたわ」

「そんなのおれたちが不利じゃないですか」

神崎が不満を漏らす。

「そういうわけでもないのよ誠くん。こちらはどちらにせよホームズの格好をしているわけだし、目立つたらありやしないわ。それにシチュエーション的には探偵の顔が割れている場合がほとんどでしょ」

「ああ、なるほど」

「この条件であの女を負かすことに意味があるのよ。ぐうの音も出ないほどに負けという文字を刻みこんでやってちょうだい」

「文化祭のあいだ会長はなにをしてるんですか」

結衣が鹿撃ち帽を斜めにかぶり直す。よほど気に入っているようだ。

「うちはみんなのサポート役。陣頭指揮をとるわ。生徒会に無線を申請してあるから、たぶん借りられるわよ。なんだってやってくれるんだから、生徒会は」

誰からも愛され誰からも必要とされる生徒会、というのが霞ヶ丘高校の生徒会のモットーである。

霞ヶ丘高校では文化祭の実行委員はおらず、かわりに生徒会がすべての指揮をとることになっている。そのため生徒会に入るためには厳しい試験をクリアしたうえで選挙を行うのだが、内申に非常にプラスになるため、その人気は高い。

つまり優秀な人間がごまんといるのである。

「時間は初日の12時から14時までのあいだ。その間いつでも怪盗同好会のほうは盗みにいけるし、こちらはその時間の前からでも

警備につけるわ。もちろんそのつもりだけど」

「当日のこみ具合なんかも把握しておかなければならぬだろうしな。当然、人が多ければ多いほど警備は難しくなる」

副会長がそう付け加えた。

「それから場所の事なんだけど、公平を期すため前日に生徒会のほうから通達が来る手はずになってるわ。だからいまはわからないってこと」

「ある程度予測をたてておく必要はありますね」

咲が冷静に分析する。

ツインテールの髪がいつもより大きく見えた。

「なんせ情報が少なすぎるものですから、相手がどういう手を使ってくるのか、予想はしにくいですが対策をたてておくべきです。基本的な方針はあったほうがいいでしょう」

「そのための作戦会議なのよ」

ようやく話が振り出しに戻ったところで、会長が校内の地図を指差した。

「ブツの置かれる可能性がある範囲は霞ヶ丘高校の敷地内ならどこでも。ひよっとしたら校庭のど真ん中かもしれないし、女子トイレの個室ということもありえるわ。ま、そこは生徒会の良識を信じるかもしれないわね」

「やつら、文化祭になるとうっ憤を晴らすようにはっちゃけるからな」

すでに二回、文化祭を経験している副会長がつぶやいた。

「まともなところであることを祈ろう」

「ですが、あまりイレギュラーな場所ばかりを考えても仕方ないでしょう」

本校舎の教室や廊下を指ししめす咲。

「主な場所と傾向、そして対策を練るべきです。そのためには教室、廊下、グラウンド、図書室——というあたりを警戒しておくべきでしょう。これ以外の場所はひとまず想定外ということで、前日にな

つてから思案するべきだと思います」

「それでいきましょう。作戦がすべてを握るといつても過言ではないわ」

会長が気合いをみなぎらせた視線でほかの部員達を見回す。表情にだすださないは別として、どの顔にも緊張感と興奮の色が浮かんでいた。

「ところで質問ですが」

すっかり進行役になった咲がいう。

「生徒会から警備員のような人たちを借りることはできないのでしょうか。怪盗が盗みに来るという状況では、警察があちこちに立っているのが普通ですし」

「それについては美保と話し合っただけだね。申請したらさすがに人手が足りないからって生徒会に断られちゃった。機材はよこせども、人材よこさずって感じね。ただの便利屋じゃなかったみたい」

「そんなふうと考えてたのか」

あわれな生徒会に、副会長が深く同情する。使役される立場同士、いろいろとわかりあえるところがあるのだ。

「いくら優秀でも文化祭中は忙しいもんだろう。毎年、鬼のような形相をしてるかネジが飛んだみたいにはっちゃけているか、というやつが多いのもそのせいだろう」

「激務ですね」

結衣がしみじみ呟いた。

「そんなことうちらが知ったことではないわ。生徒会は生徒の下僕、とことん利用しつくしてやればいいのよ」

「そんなことをいってると、とんでもない場所に置かれかねませんよ。おれ女子トイレの警備はいやですからね」

神崎が鹿射ち帽をくるくる指の上でまわしながらいった。どこから持ってきたのかレプリカのパイプまでくわえている。気分だけはホームズそのものだ。

「苦境をひっくり返してこそ探偵同好会というものよ。たとえ北極

だろうと死守してみせるわ。それが探偵の美学であり、プライドなんだからね」

「そんなことより」

咲が会長の言葉をさえぎった。

「現実には目を向けましょう。場所によってはひとつを捨てて他に人員を割くという作戦も必要になってくるかもしれません」

「そんなのダメよ」

会長は頑として首を横にふった。

「完全勝利を目指すんだから」

「それならはやく対策を考えてください。まずは教室からにしましよう」

「死角は多いけど、出入り口が二か所しかないから警備はしやすいかもしれないわね。ただ教室を使うとなると、ほかの企画と相部屋ってことになるだろうから人がたくさん来ることが想定されるわ。

理想は無人で見渡しのよいところなんだけど」

「なにより生徒の数が多いほどこちらは不利になる」

副会長が補足する。

「敵の顔かたちがわからない以上、全員に気を配るのは不可能だ。なによりふつうの生徒の格好をしていると油断を招くからな。知り合いが怪盗同好会の一員だったということもありえなくはない。木を隠すなら森のなか、というわけだ」

「そんなことがあるんですね……」

結衣がすこし宙を見つめる。

今日までふつうに話していた友人が文化祭では敵に化ける可能性があるのだ。まるで、すごくリアルな夢を見たときのような、不思議な違和感。

「そういえばフェアじゃないからって教えてもらっただけ——うちが頼んだわけじゃなくて、向こうが勝手に知らせてきたことだからね——うまい具合に怪盗同好会の人数も5人らしいわよ。何年生が何人いるのかはわからないけど」

「でも、向こうが一对一で来るとは限りませんよ。勝つという目的を第一にするなら、もっといい方法がたくさんあります」

「あの女は邪魔くさいけど、そういうところは正面から来るやつだから心配しなくてもいいと思うわよ。なんなら今すぐメールで約束させてもいいけど」

「会長がそういうならかまいません。いちおう指揮官ですからね」

「いちおうってなによ、いちおうって」

「言葉のままです」

咲がしれっと返答した。

霞ヶ丘高校は主に本校舎と旧校舎、それから野球部の部室などがあるグラウンドとそれ以外の敷地とで構成されている。探偵同好会をはじめとする同好会などの部室がそろっているのが旧校舎で、もとはHR教室として使われていたのが老朽化によってその役目を終えたという経緯がある。

かわりに生徒の受け皿となったのが本校舎で、文化祭の主な催し物はほとんどこちらで開かれる。

同好会のなかには部室を改造して発表の場とするところもあるが、クラス単位で行う企画をはじめとして、大部分は本校舎の教室を使うのだ。

その理由は明快で、本校舎のほうがきれいなためである。

廊下にあふれかえった備品や、傷んだ壁などが目立つ旧校舎は生徒が使う分には構わないのだが、来校者の眼には触れさせたくないものだ。

そんな学校側の思惑もあって、文化祭のメインは本校舎となっている。

グラウンドは土がまいてあるだけのいたって普通のものだが、端にはコンテナのような野球部の部室がおいてある。そこでは広いスペースを利用してダンスなどのパフォーマンスをするのが大抵で、文化祭期間中はいつも観客でにぎわっている。

体育館も同じようなもので、なにかしらイベントが催されている

ことが多く、客足が途絶えることはない。

「基本的にはこちらに不利な条件だと思われます。会長がいけないんでしょうけど」

苦言をていす咲。

「対策はそれぞれ、教室では制服姿のひとに。廊下ではとにかく全員に。グラウンドでは近づいてくる人に。体育館では死角に気をつけるというのが基本ですね」

「心配なのは誠ちゃんと結衣ちゃんなのよね」

会長が不安要素である二人に視線を向ける。

どちらもきよとした表情をしていて、どうにも頼りない。

「なんでですか？」

「誠くんは言わずもがなの初心者で、結衣ちゃんは文化祭を経験していない。これは大きなハンディキャップになるのよ。たとえむこうに新入生がいたとしても観客に紛れ込むのは簡単。変なことをしなければいいだけの話だからね。対して守るほうはふつつのなかから不審者を見つけ出さなければならぬ」

「そのためには経験がものを言うからな」

副会長が言葉を継いだ。

神崎はひどく不満そうな顔をしている。それに気づいた会長が声をかけた。

「なによ？」

「どうしておれは『言わずもがなの初心者』で片づけられてるんですか。こう見えても観察力は養ってきたつもりですけど」

「その心意気やよし。きっちり証明してちょうだい。結果がすべての世界よ」

あまりの興味がないふうに着会長がさらっと流した。

副会長のほうを見る。

「ベテラン有利、となると健輔がエースということになるわね、気に食わないけど。いかなる手段をつかって勝つことが最低条件ね」
「ずいぶん厳しいノルマだな」

「負けたら坊主にしてもらうつもりだから、あしからず。部長みずから断髪してあげるから覚悟しておいてね」

「おお怖い」

そういつた副会長からは余裕が感じられる。どこからわいてきたのか自信満々のようだった。黒ぶちの眼鏡がきらりと光った。

「いやにゆとりがあるわね」

「怪盗ごときに僕が遅れをとるはずもないだろう。UFOに乗ってくるならともかく、安っぽい変装やフェイクには騙されるわけがない」

「そういつてるやつほど足元をすくわれるのよね。どうしたもんだか」

「まあ、見ていろつて」

ふんぞり返る副会長。

今日はいつにもまして偉そうだ。結衣は、副会長の鞆の口から数え切れないほどの怪盗小説が顔をのぞかせているのを見て、合点がいった。かなり研究しているらしい。期待していいものだから迷うが、先輩を信じないわけにもいかないだろう。

「結衣ちゃんは潜在能力を期待してるわよ。どんな環境であれスパールーキーが負けるといふ展開はありえない。5月に見せてくれた洞察力と推理力でさくつと捕まえちゃって」

「わかりました」

結衣の声は震えているわけでもなく、リラックスしすぎているわけでもない。

平静を保っているという感じだ。

「咲ちゃんはいつものように冷静でいれば問題ないでしょう。手堅く勝利をもぎ取るわよ」

「あんまり油断しすぎると痛い目を見ますよ」

咲の眼は笑っている。

「誠くんも、せいぜいがんばってね」

「……はい」

ふてくされた神崎の声。会長のぞんざいな扱いにふてくされているのだ。

会長は4人の部員たちの顔を見回してから、すっと右手を差し出した。

その手に結衣の掌がかさねられ、副会長と咲の重みが加わり、最後に神崎の大きな手がそつとのせられた。

「ファイト！」

『オー！』

元気な声が、小さな部室に唱和した。

ゲームの直前

いつもなら土曜日といえば学校は休みで、クラブ活動にいそむ生徒のために教室やグラウンドが解放されているのだが、いまは制服姿だけでなく親子連れからどこかのカップルまで、数え切れないほどの一般人が好き勝手に動きまわっている。

そのようすを部室の窓から眺めていると、まるで働きアリが餌にむらがっているみたいでおもしろい。いったいどのくらいの人出なのか見当はつかないが、少なくとも盛況であることは間違いないようだった。

地元でも霞ヶ丘高校の文化祭は人気があるということで、近隣の住民もこぞってやってくるものだから、その混雑は半端なものではない。

とくに今年は天気も良く、気温もおだやかだということで平年以上に客足はおおいようだった。

部室のカーテンからその光景をうかがっている会長の眼光は鋭い。獲物を物色するハゲタカのような目つきだ。

「大雨でも降って誰も来ないとかだったらよかったのに——まあ、観衆は多いほど燃えるんだけど」

会長の手には丸められた文化祭のパンフレットがにぎられている。絵画部の描いた素敵な表紙の絵も台無しだ。

「生徒会もずいぶんなところを提供してくれたものだな」

いすに座っている副会長はのんびりお茶を飲みながらくつろいでいる。長テーブルには赤いマル印のつけられた校内の見取り図が置かれ、ホワイトボードには事細かに作戦がかきこまれていた。

生徒会が対決の場所を公表した文化祭の前日、最後の追いこみ作業が行われている横で、探偵同好会の部室では遅くまで綿密な作戦会議がつづけられていたのだ。

びっしりと記入されたホワイトボードの文字は、期末テストの勉

強をするよりも強引に頭へインプットされている。

それは主に会長がはっぱをかけまくったためなのだが、そのせいで結衣と神崎はさきほどから部屋の隅でぶつぶつと内容を復唱している。勉強のせいかな、顔色がよくない。

「調子はどう、結衣ちゃん」

「わ、悪くはないです」

疲れきった声で結衣が応答する。

夜中ずつと脳内シミュレーションを繰り返していたため、興奮して寝付けなかったのである。遠足が楽しみで眠れない小学生のようなものだ。

「体調はしっかり調整しておいてよね。いざというときに居眠りしてました、じゃ笑いごとにならないわよ」

「大丈夫です、たぶん」

あまり大丈夫ではなさそうな返事。

だが結衣のことだ、きつとサプライズを起こしてくれる。会長は自分に暗示をかけた。かける相手が間違っているとは気づかなかった。

「ちよつと走ってきます」

神崎が突然そういつて、駆け足で部室を飛び出して行ってしまった。

緊張に耐えられなくなったのか、それとも暗記に嫌気がさしたのか、どちらにせよいなくなったのは事実だ。

「みなみ、ちよつと誠くんに厳しすぎるんじゃないか」

副会長がいった。

「元野球部なんだから根性はあるでしょ。ここで甘やかしたら本人のためにならないわ。逆に反発心を起こさせることによってやる気を引き出してるのよ」

「そう上手くいけばいいけどな。かえって力みすぎるかもしれないぞ」

「大丈夫よ。うちは誠くんも信頼してるから」

「そうか」

副会長はすこし意外げな反応をしめした。

「それより健輔こそ大丈夫なの？　こういったときほど失敗するんだから」

「これまで幾多の文献を読み込んできた。死角はないさ。知識量なら兎玉くんにも負けないと思ってる」

不愉快そうな表情をする咲。

「あたし副会長よりも成績いいですけど」

「それだけが頭の良さではないさ」

下手くそなウイंक。

咲は視線をそむけた。

「会長には悪いですけど、あたし副会長がコテンパンに負ければいいと思います。それで坊主頭になって風邪をひいて、病院のベッドで自分の愚かさを呪いつつ息を引き取ればいいと思います」

「そこまでいうか」

「それでもセーブしたほうです。全貌を聞きたければぜひ教えてください」

「遠慮しておくよ」

タバコがあれば優雅にパイプを吹かしていそうなくらい、副会長はゆとりをまき散らしている。あまりにも自信がありすぎて、かえって不安だと会長は思う。

「本当に、負けたら坊主だからね。それがいやならその減らず口を慎んだほうがいいわよ」

「わかってるさ」

「か、会長。開始まであと何分ですか？」

×切寸前の原稿をあげたばかりで徹夜明けのマンガ家のようにふらついた結衣が聞いた。

会長が腕時計を確認する。

「あと2時間だね。少なくとも30分前には現地入りしておきたいものだけど」

「わかりました。じゃあ、すこし仮眠をとるので時間になったら起してください」

そういうなり、部室のすみで丸くなって目を閉じる。すこしすると小さな寝息が聞こえはじめた。咲が埃をかぶっているブランケットを戸棚の上から見つけてくると、パンパンと払ってから結衣の上にかぶせかけた。

「疲れてるみたいですね」

結衣を起こさないよう、咲が静かにいう。

「寝不足は判断力をにぶらせるから、こうやって仮眠をとるのも悪くはないわよ。緊張で眠れないくらい気合いが入ってるのも高評価ね。咲ちゃんもちよつとはやる気を見せてちょうだいよ」

「作戦を考えたのはほとんどあたしなんですけど」

「それだけじゃ足りないわ。過程より結果よ。あの女に負けるわけにはいかないんだから」

「だったら会長同士で対決すればよかったんです」

「それも一興だけどね」

ふつとさめた目で部室を見回す会長。

そして、いった。

「手塩にかけた後輩たちが活躍するってのもうれしいものよ」

CASE 咲

CASE 咲

これまたスタンダードな場所を任されたものと、咲はひとりため息をつく。

透明のプラスチックケースのなかに保管されているのは、黄金の生徒手帳。ふつうの生徒手帳は藍色をしているから、これは生徒会の特注品ということになるらしい。

どこで仕立てたのかわからないが、とにかくこれを2時間守りきることが咲の使命だ。

「警戒は怠らないようにね」

耳につけた無線から、会長の落ち着いた声が届く。

本部と称された体育館のイベント会場にいるらしいが、もちろんその姿を見ることはできない。いたところで何が変わるというわけではないのだが、うるさくされないだけマシというものか。

「わかってますよ」

「はじまって五分だけど、まだなんのアクションもないわ。まさかとは思うけど停電もありえるからね」

「ここは日のひかりが強いので平気です」

文化祭の展示用にあつらえられた本校舎の教室は、生徒の宿題などを発表するためのパネルなどで死角は多いが、そのかわりに人出はあまり多くない。

数学の課題であるポスターや、レポートが展示されている空間はアトラクションなどをメインとする教室とは違って人の流れが緩やかだ。

そのぶん客をゆつくりと観察することはできるが、逆に慢心を招きかねないとも限らない。

なにしろ二時間は長い。

授業のひとコマが五十分であることを考えると注意力が途切れる時間帯があるのは確実だ。それをいかにして警戒し、悟られないようにするか。その点が勝負の分かれ目になると咲は思っていた。

「ルールは五分と五分、それなら個人の能力が勝敗を分ける、か」ひとりつぶやく。

いつの間に決めたのか、生徒会から渡されたプリントには事細かにルールが記載されていた。

主な内容は

・イベントは12時から14時までの2時間にかけて行われるものとする。

・探偵同好会、怪盗同好会からはそれぞれ4名が参加するものとする。

・時間内であれば、どのような行為も許されるものとする。

・14時になった時点で黄金の生徒手帳を怪盗同好会が有していた場合、1つにつき1ポイントとなる。反対に怪盗同好会側は探偵同好会によって身柄を拘束されていた場合、1人につき1ポイントが探偵同好会に加算される。

・上記のどちらでもない場合、ポイントは加算されない。

・探偵同好会は明確な意思をもって怪盗同好会の会員の身体にタッチすれば、その身柄を拘束することができる。

・拘束された身柄は生徒会役員によって本部まで移送される。ただし、拘束されていない怪盗同好会の者は拘束されたメンバーにタッチすることで、その者を救出できる。

・探偵同好会、怪盗同好会の会長両名は本部席にて無線による指示を送ることができる。

といったところである。

驚いたのは拘束ルールだった。まさかドロケイのようにタッチすれば逃げられるとは思っていなかった。これで会長の役割もすこし

は増えたことだろう。たとえ何人捕まえたところで、本部をがら空きにしているは逃げられてしまう。

かといって持ち場を離ればやすやすと盗み出されてしまう。采配が難しいところだ。

『明確な意思をもって』タッチするというのは、犯人だと意識して捕まえろということだろう。誰かれ構わずぺたぺた触っていればいいというわけではないのだ。

「こちら兎玉、いまのところ問題なしです」
「了解」

5分ごとの定時報告。

会長からの命令だ。

「気をつけてね」

「わかってます」

「うん？」

聞き取れなかったのか、会長があいまいな返事をする。

「なんでもないですよ」

「そう？ 気をつけてね」

またか、と咲は苦笑する。会長も心配症になったものだ。

そのとき、展示をめぐっていた客のひとりがちよつとすみませんといってパンフレットを片手に話しかけてきた。

人のよさそうな中年の男性と、幼稚園くらいの子が手をつないでいる。おおかた迷子になって母親からはぐれてしまったところだろう。

それでも万が一のことを想定して、いちどケースに入れられた金の生徒手帳を確認する。手帳はしっかりとそこで輝きを放っていた。念のためにプラスチックケースと父娘との間に体をはさみつつ、にこやかに対応する。

「どうしましたか？」

「お恥ずかしいが、すこし迷ってしまいました……。いやはや、地図はあるんですけど、どうにも読むのが苦手です。この、写真

同好会というやつに行きたいんですけど、どう行ったらいいかわからないもので、教えていただけませんか」

「いいですよ」

やけに物腰の丁寧というか、腰が低いというか、とにかく頭をペコペコさげながら話す人だ。その足元で懔然とした表情をしている少女のほうが、よっぽどしっかりしている。

どう見ても平凡な一般人だ。

さすがに怪盗同好会の協力者ではない——と思う。

「廊下のつきあたりに階段がありますから、そこを下っていちど昇降口からそとへ出てください。そうすると右手側に建物が見えますから渡り廊下沿いに進んで、四階が写真同好会の部室です」

「えーと、つきあたりまで行って——」

教えたばかりだというのに空白のおおい復唱をする男性。咲はそのひとが言葉に詰まるたび、ていねいに説明をくりかえした。

数分かかってようやく覚えたらしい父親は、去り際にふかく頭を下げて教室を出ていった。ばいばい、と少女がかわいらしく手を振っていた。

「——ふう」

ひと仕事を終え、咲は大きく深呼吸する。

そして急に我に返って、生徒手帳がそこにあるのを視認した。

危ないところだった。つい気をつけていなくてはと思っていながらも、説明するのに注意をとられて油断していた。この隙だったら知らない間に盗まれていても気付けなかっただろう。

プラスチックのケースのかたい表面を、コツコツと指先でたたく。人差し指に感じる冷たい感触。

「……あれ？」

なかに安置されているはずの生徒手帳の反射が、前に見たときよりもすこし違っていたような——気がした。確信はない。ふとそう思っただけだ。勘違いかもしれない。

それでも、疑心に駆られたからだは、それが本物だと確認せずに

はいられなかった。あたりを見回し、だれも怪しい人物がいないと判断すると、ゆっくりケースをもちあげる。

そのとき、会長の焦った声が無線に飛び込んできた。

「咲ちゃん！ もうすでにひとつは入手したって氷川がいつてるんだけどホント！？」

しまった。

咲は舌打ちする。

一瞬の油断をつかれた。いま目の前にある手帳はフェイクだろう。そうとしか考えられない。

「すぐに本部まで来てちょうだい！」

会長の鋭い声。

咲はいわれたままに教室を飛び出した。失態は取り返さなければならぬ。どのような方法であれ、とにかくこの場所を守っているも無意味だ。

咲は完全に焦っていた。

普段なら見逃さないような小さなミスを、まったく気付かないまま廊下を疾走する。

CASE 副会長

CASE 副会長

副会長は、黄金の生徒手帳を見ていた。

カーテンの閉め切られた部屋は暗く、ほのかに手帳の姿を確認できるくらいにしか照明がつけられていない。だが、その暗闇にも目が慣れてきたところだ。

さほど広くない教室の一角。

ただでさえ狭い空間を、黒い布でしきっているため圧迫感が増している。時折聞こえる甲高い悲鳴や、興味本意ではいつてきたのだろう子供の泣き声をBGMにして、副会長は手帳を見つめていた。

「まったく、にぎやかなものだ」

なにも文化祭企画の定番、お化け屋敷を対決の舞台にしくなくてもいいだろうに。

さきほどからひっきりなしに流れてくる客のなかには、どっかりと椅子に腰をかけている副会長を見て腰を抜かす人もいるくらいだ。もちろん、副会長の顔に特殊なメイクをしているわけではなく、それまでの道のりがあまりに恐怖に満ちているためだった。

せっかくなら家にある仮面などをもつて来てもよかったのだが、会長に怒られそうなのでやめた。神崎や結衣では悲鳴のこだまする状況に耐えられないだろうという判断で配属された場所だ、咲と入れ替わりになることもありえる。

実をいうと、副会長はこの環境を楽しんでいた。

お化け屋敷のなかに、お化けでもないのに滞在してられる機会はめったにない。おどろおどろしい仮装をしている生徒たちは同じパターンで客を驚かしているのだが、そのたびに叫び声をあげる様が見ていて面白いのだ。

これほど見物に向いた立場は、ほかにない。

なかにはカップルで来てキヤーキヤーと叫ぶ彼女の前で、必死に恐怖を我慢している彼氏なんかもいて、人間観察にはうってつけだ。極限に追い込まれるほど本音が出てくるものらしい。

「健輔、起きてる？ お化け屋敷だから寝られるわけないだろうけど」

「大丈夫だ。いまのところ何の問題もない」

「さつきからいやな胸騒ぎがするのよね。まだ最初の定時報告なんだけど」

「5分しか経ってないじゃないか。まだこれから先は長いぞ」

「そうね」

会長が無線の向こうで大きく深呼吸をしている音が聞こえた。

「緊張してるのか？」

「まさか、武者ぶるいよ」

「そっちには氷川さんもいるんだよな」

「あまり嬉しくないことに。こっちからは見えるけれど、なにを話しているのかまではわからないわ。あ、こっち見てニヤニヤしてるむかつくわね」

「あまりカリカリするなよ」

副会長が苦笑する。

誰かの絶叫がひびく。ここはお化け屋敷なのだ。

「じゃ、ビビらないで守っていてよね」

「了解」

回線が切断された。

すると、耳元のノイズがなくなってまた異常なくらい静かな空間にもどる。本当に怖いとき以外は、自然と黙り込んでしまうものなのだ。

偶然なのか今年のお化け屋敷はやたらにクオリティが高い。イベントが開始される前に二回ほどお化け屋敷を回ってみたのだが、お化けが出るタイミングがわかっていても驚いてしまうほどだ。

いやに気合いのはいった企画。それもそのはず、三年生の作品は

高校最後ということもあつてほかの学年を寄せつけない出来なのだ。部活を引退した三年生は勉強の憂さ晴らしをしようとするかのように、作業に熱中する。同好会に所属したまま活動している生徒もなかにはいるが、手伝えるときにはなるべく顔を出すようにしている。問題はない。

副会長も、このイベントが無事に終わったら自分のクラス企画に参加しようと思っていたところである。

「さて――」

いくらお化け屋敷の内部が楽しいからといっていつまでも遊んでいるわけにはいかない。敵――怪盗同好会がどのような手段で攻めてくるのか想定しておく必要がある。

イベントがはじまる前にも入念な作戦会議を行ってはいしたが、やはり現地に赴いてみると机上ではわからないことがたくさん発見できる。たとえば室内は想像以上に暗いが、行動に差しつかえはないということや、パニックになった客が通路を全力で走っていくことがある……など。

それらの場合をシュミレーションしておくことは、後々必要になってくるだろう。あらゆる可能性を考えておくにこしたことはない。「いちばん心配なのは恐怖だ。恐怖に支配された人間はなにをしかすかわからない。最悪、こちらに突撃してくることもありえる。そのどさくさで盗まれるのが危険だな」

口に出しながら思考を整理していく。

紙もペンもない状況ではこれがもつとも効率のいい方法だ。ひよつとすると怪盗同好会の誰かが近くで監視しているかもしれないが、聞かれたところでこちらが不利になるわけでもない。

むしろ警戒して選択肢が狭まることになるだろう。目の前で自分の考えていた作戦を口にだされたら、それを実行する勇氣は出ない。思いつき次第、適当に喋ってみるほうがよさそうだ。

「停電も悪くないアイデアだ。いくら視覚が闇に順化しつつあるとはいえ、まっ暗闇にされたら手も足も出ないからな。カーテンが閉

じられているだけでなく、まとも黒い模造紙で覆われているくらいだ、光は漏れてこない。だがそれは敵にとっても同じこと。手帳の場所を完ぺきに暗記しないかぎり、盗み出すことは不可能だ」

いい調子だ。よく頭が働いている。

「それから懐中電灯で急に照らし、こちらの視界を奪うという方法もある。暗闇に慣れた眼球は、いきなり強い光を浴びせかけられたときに対応しきれない。その隙に悠々と手元を照らしながら手帳を盗みだす。我ながら素晴らしい良案じゃないか」

自慢げに鼻孔を膨らませるが、それを見ている人はひとりもない。

すこししてから、女子高生の二人組が気味悪そうに副会長のよこを通り抜けていった。どうやら独り言をつぶやいている異常な生徒役だと勘違いされたらしい。

お化けでもないのに避けられるとさすがにちよつと傷つくが、副会長は気を取り直して作戦を練りはじめた。落ち込んでいる暇はない。

「相手はどうするにしろ、いちど僕の視界から外れるか、僕を身動きの取れない状態に束縛しておく必要がある。こちらは身体にタッチすればいいだけの話だからな。つまりなにかアクションを起こして注意をそらしてくる可能性が高い。それに動じず、ここで見張りを続けることが大事だな」

うんうんと頷く。

また女子高生たちが物騒な目つきで副会長をいちべつしてから、早足で進んでいった。

——これくらいでへこたれはしない。大丈夫だ。

校門で配布されているパンフレットには探偵同好会と怪盗同好会の対決イベントも記載されているはずだが、隅から隅まで目を通して人はいない。

ほかにも数え切れないほどの同好会があり、それぞれが展示会を開いているものだから分量が大変なことになっているのだ。パンフ

レットというよりは小冊子と呼ぶほうがしっくりくる厚みである。

会長ふたりが指揮をとっている本部のある体育館では多少客入りが多いだろうが、実況解説をしているわけでもないしそれほど注目を集めているとは思えない。

それに加えてまだ始まったばかりであるから、まずは目玉企画を回ってしまおうという客が流れてくるには早い時間帯だ。昼過ぎになれば観客も増えることだろう。

それまでに形勢がどうなっているか――まったく想像がつかない。誰かが突破されるかもしれないし、逆に誰かを捕まえているかもしれない。もしかするとあつさり4人とも捕まえてゲームセットという夢のような展開もありえなくはない。

「ま、なるようになるさ」

全体の作戦を考えるのは会長の仕事だ。

自分は目の前にある黄金の生徒手帳を魔の手から守りきれればいい。そう思っていたときだった。想定していた最悪の事態が起きた。

副会長の座っている場所のすぐ前には顔面を火炎放射気で焼いたようなメイクをしたゾンビがいて客を驚かしているのだが、これがまたすごく怖い。腰を抜かして動けなくなった人も何人かいた。

ほとんどは絶叫しながら駆け足で逃げてくるわけだが、その女子生徒は目をつぶり、耳もふさぎながら全速力で副会長のほうへ突進してきた。もちろん前は見えていない。うわっという副会長の声も届かず、派手な音をたててぶつかった。

「ぐ、ごめんなさい」

副会長の背中に馬乗りになった女子生徒はあわてて身体をどけた。頭を押さえながら副会長も身体を起こす。そのときちらりと生徒手帳のほうへ視線をやった。これで盗まれていれば彼女が犯人ということになるが、黄金の手帳は何事もなかったようにたたずんでいた。

倒れている椅子を起こし、警戒しながら話しかける。

「大丈夫ですか？」

「はい、本当にすみません！ あの、どこか怪我とかは……」

うるんだ瞳は小動物のように愛らしく、水晶のように透きとおっている。ふんわりとカールした黒髪のした、新雪のように白い肌がおもわず触れたいくなるような弾力をはなっていた。

結衣のように美人というわけではないが、どこかか弱そうな印象が可愛らしい。そして均整に整った目鼻立ちが可愛さを決定づけていた。

着ているのは霞ヶ丘高校の制服ではない。どこかほかの学校の生徒なのだろう。

そんなことをぼんやり観察しつつ、やはり視線は顔に向いてしまう。目を離そうと思っても、なぜか引き寄せられてしまう魅力があった。

「そちらこそ、怪我はありませんか？」

「ありがとうございます、大丈夫です」

小さく頭を下げると、肩にかかったつややかな髪がふわりと揺れた。息をのむ副会長。

一瞬、会長の顔が脳裏に浮かんだがすぐに消えた。

「あの、このお化け屋敷ってあとのくらいあるんですか？」

「ここがちょうど折り返し地点だから、あと半分というところですか」

「そうですか……」

がつくりとうなだれる女子生徒。細くしなやかな指で目頭をぬぐった。

「私すごく怖がりで、お化け屋敷なんて入ったことがなかったんですけど文化祭なら大丈夫かなって思って、ちょっと試してみようかなって挑戦したら、すごく怖くて……」

ときどき鼻をすすりながら話す女子生の声は小刻みにふるえている。ほとんど泣いているような状態だ。自分が泣かせたわけではないのだが、どうにもバツが悪い。

「これがあと半分もあるなんて私、耐えられません」

「そうはいつでも、後半のほうがもつと怖いんですよ」

「そんなぁ……」

力なくひざから崩れ落ちる。

そして、涙をためた瞳で副会長を見上げた。

「お願いします、出口までついて来てください。お礼はなんでもします。誰かがいないともうこれ以上先に進めない……」

「そついわれましたも」

副会長が頭をかく。

男としてはついて行ってあげるのが正しいだろう。いや、むしろ出口まで守ってあげたい。背中にじつと美少女が抱きついてくるなんてシチュエーションめったに体験できるものではない。

幸いなことにこれからどうなるかはわかりきっているし、お化け屋敷という空間にもだいぶ慣れた。驚かされるようなことはないだろう。つまりたくましい姿をアピールできるとのことだ。

さらに——と、副会長の思考はスピードアップする。

おそろしい局面をいっしょに切り抜けた男女のあいだには恋愛感情が発生しやすいという。いわゆるつり橋効果だ。お化け屋敷なんて格好の舞台じゃないか。ひよつとすると、ひよつとするかもしれない。

それにここで断るなどというのは、男としての沽券にかかわる。

いいですよ、と答えかけてとどまる。黄金の生徒手帳をちらりと見た。これを守るとというのが使命だ。それに盗まれてもしたら確実に坊主にされる。

「坊主刈りの男性は好きですか？」

「え？ あ、嫌いじゃないです」

その言葉で副会長の心はきまった。

ほんの少しだけ持ち場を離れる。それなら大丈夫だ。すぐに戻ってくる。

「行きましょう。出口まで僕がついてます」

「本当ですか！ ありがとうございます」

ばあぁつと笑顔が広がる。

この笑顔が見ただけでもよしとするか。もう後には引けない。たくましいところを見せつけようと、副会長は女子生徒の前に立った。そしてずいずい進んでいく。

「待ってくださいよぉ」

という泣きそうな声が、後ろから聞こえた。

無事に彼女を出口までおくりとどけると、手を握って感謝をされた。意気揚々と持ち場へ戻ると、当たり前のようににもなくなっていて、副会長は力なく椅子に座りこんだ。

闇が、広がっていた。

「……どうしよう」

逃げようか。

いや、必ず見つかる。

会長はきつとどこまでも追いかけてきて復讐するだろう。女の子にうつつを抜かして負けたなんてばれたあかつきには、許されるはずもない。

これからの人生をどう生きていくべきか考えながら、副会長はその場でずつと頭を抱えていた。

CASE 神崎

CASE 神崎

神崎の眼は、飢えた野獣のように獯猛に光っていた。

どうしようもないくらいあらぶった呼吸のなかに、彼の闘志がうかがえる。イベント開始前にグラウンドをランニングしていたためだけではなく、精神的な理由も神崎の息を激しくしていた。

会長から期待されていないのはわかっている。

ラッキーな勝ちを拾ってくれば上々、負けても仕方ないと思われるのだ。それが悔しかった。新入生ながら咲がとてつもない才能を持っていることも知っている。けど自分は先輩だ。後輩に負けることがあつてはいけない。

たしかに探偵術に関して神崎はまったくの素人だ。

だが咲にだって会長にだって初心者だった時期はあるのだ。右も左もわからない状態からの上がったのだから、神崎にできないはずはない。才能がないなら努力をしる。

それが中学時代の野球部の監督がよく口にしていた言葉だった。スポーツは努力をしても怪我で道をあきらめなければならぬときがあるのだが、探偵はいくら頑張っても怪我をしない。

ひじの故障で野球を断念せざるを得なかった神崎にとって、魅力はそれだけで十分だった。なにかに打ち込めること、それがうれしかった。

グラウンドを横切っているたくさんのお客さんが、神崎とプラスチックケースに収められた黄金の生徒手帳を不思議そうにながめている。

イベントがはじまってからまだ五分。広いグラウンドでは観客がぐるりとまわりを取りかこむことも考えられた。その場合、咲の作戦ではすこし離れた場所で待機することになっている、と神崎の手

帳に記されている。

興味本位で近づくと見せかけて、怪盗同好会のほうからプラスチックケースに手を伸ばすだろう。そこを捕まえれば神崎の勝利である。

秋風はすこし肌寒いが、神崎はワイシャツの袖をまくっていた。

いましがた走って来たばかりで身体が火照っているのだ。それに生徒手帳のまわりをぐるぐると周回しながら見張っているので、身体がさめることもない。

ふう、と深呼吸する。

会長からの連絡はさつきはいったばかりだ。どう？ 問題なしです。了解 という簡単なやり取りだけで最初の定期報告は終了した。

会長の態度は冷たいままだった。それでも構わない。結果を出せばいいのだ。

「どこからでも来やがれってんだ」

細工のしにくいグラウンドでは、なにか仕掛けてから目標に近づくというのが難しい。もし力業でくるようなことがあれば、この広いグラウンドの敷地内で必ずとらえられる自信があった。

ピッチャーだったためあまり注目はされなかったが、神崎は野球部のなかでも足の速いほうだった。それにシャーロックホームズの衣装のしたに履いているのは野球用のスパイクだ。

これならふつうの靴よりも速く走ることができる。たとえ相手が陸上部だとしてもグラウンドでは負けない。

会長が神崎をこの場所に配置したのは消去法だといっていた。

仮にそうだとっても神崎にとっては絶好の舞台だ。お化け屋敷やせまい教室では、足の速さを披露するチャンスがない。

ただひとつ気がかりなことはときおり起こる砂煙だ。

校庭の向こう側からつむじのようにやってくる砂煙に巻き込まれると、一瞬のあいだは視界が奪われる。その隙を突かれてしまう可能性があった。

サングラスでもあればよかったのだが、と神崎は思う。

あいにくホームズにサングラスは似合わない。

「それでもいいか」

手帳を盗まれないのは最低条件だとして、神崎にはある悩みがあった。

それは犯人を捕まえないことには勝利にならないというルールである。つまり、あまりにも完ぺきな警備をしていると相手は攻められない。

顔も特徴もわからない探偵同好会は、怪盗同好会がアタックを仕掛けて来ないかぎり相手を捕まえないのだ。勝利を目指す神崎にとって、それは非常に困る点だった。

あえて隙を作るという作戦もある。

野球でいうならわざとフォームを大きくして盗塁を誘うようなものだ。リスクはあるが、そのぶんチャンスもある。

どちらをとるにせよ、タイミングが重要になってくる。仕掛けるなら早いほうがいいが、よく考えてからにしておかないと。

乾いた唇を舌で濡らして。

神崎はプラスチックケースが反射する太陽の光のまぶしさに、すっと目を細めた。

CASE 結衣

CASE 結衣

スカートがはためく。

結衣は後ろ手にそれを押さえながら、つよい風に踊る髪の毛をなでつけた。ホームズに似せたインバネスコートごとスカートの裾が舞うので、油断しているとながが見えてしまう。

風の弊害はそれだけではなく10月のつめたさを同時に運んでくる。

衣装のしたに着こむような服は用意していなくて、せめて手袋かマフラーでも用意しておけばよかったと後悔する。

今日だけは北極でも寒くないような気がしていた。そんなことなかったけど。

「結衣ちゃん、屋上は頼んだわよ」

とウインクしていた会長がすこし恨めしい。

寒いのはとにかく困る。家のコタツを持ってくればよかった。そうすればミカンでも食べながらぬくぬく警備ができたのに。

気合いはあるのだが、こう寒くては集中力も途切れてしまう。安全のためにとりつけられた金網の向こうには、グラウンドを守っている神崎の姿が見える。

この寒さのなか、ひとりだけ白いワイシャツをまくつているのでよく目立つ。あんな格好で寒くないのだろうか。それとも走ると温かくなるのだろうか。汗をかいて余計に寒くなりそうだけど。

それに屋上では走り回ることなどできない。

本校舎の屋上は新しく建設されたということもあって、屋上のスペースも有効に使おうという観点から庭園のように植物で彩られている。あまり広くはないが畑や、お弁当を食べることのできるベンチなどもアリ、昼休みには憩いの場になっている。

そのかわり安全に関してはかなりの配慮が施されており、万が一の事故が起こらないよう過剰なほどの対策がとられているのだ。丈夫な金網のフェンスもそのひとつである。景色はあまり良くないが、落ちる心配もない。

ほかの学校にはない珍しい施設ということもあって、昼ご飯をたずさえた大勢の一般客で屋上はにぎわっていた。

料理部のつくった焼き菓子の美味しそうな匂いが鼻孔をくすぐる。空腹感がだんだんと湧きあがってくる。そうなると誰かの行動よりも、手元の料理に目がいつてしまう。美味しそう。会長に頼んだらなにか温かい差し入れを持って来てはもらえないだろうか。

まあ、無理か。

「寒いなあ——」

青空の下で怪盗を待ちうける探偵というのもなんだかシニールだ。本当ならもつとヘリコプターのサーチライトが夜空を切り裂いて、嚴重すぎる警備をしているなかほんの一瞬でお宝を盗み出し、名探偵との壮絶な頭脳戦を繰り広げるようなものを想像していたのに。

化かし化かされのはてに、結局は名探偵が勝つのだ。

「これじゃ時間が来るまえに凍死しちゃうかもしれないなあ——あ、ストーブが見える。こっちにはできたてのラーメンが浮いてる。マッチはいかがですか——はあ」

ちよつとした一人芝居もなんだかむなしくなつて、ため息をつく。やる気がないわけじゃない。ただ寒すぎるのだ。

空を見上げる。凍ったように薄い青が広がっていた。

CASE 2 咲

CASE 2 咲

森の木々のあいだをすりぬけるように廊下の人込みをよけ、体育館を目指す。普段から運動していないせいですぐに息が切れる。こんなに走り回る刑事ドラマのような展開は好きじゃないがわがままを言っていられる状況でもなかった。

開始五分で盗まれるとは思っていなかった。

油断があつたのかもしれない。いや、万全の状態で臨んだとしても守りきれただろうか。

道に迷つた親子と話しているあいだ、咲は背後のガラスケースに対する警戒を怠らなかった。油断していたのはほんの一瞬だった。

その隙に生徒手帳が盗まれたのだとしたら、相手はよほどの強敵だ。それを、ほかの人にも伝えなくてはならない。

体育館はさらに多くの人でにぎわっていた。

休憩所も兼ねているということもあつて、とても賑やかだ。ステージの上では二人組の派手な衣装を着たコンビがくだらない漫才を披露していた。その両端に会長と、怪盗同好会の会長らしい女性が座っている。

どちらも耳にイヤホンをはめ、無線のレシーバーを握っている。

敵の会長——氷川美保は、気配を隠すには少々華々しすぎる容貌だった。髪を染めているわけでもとりたてて派手な格好をしているわけでもないのにもかかわらず、たとえ群衆のなかにいてもひと目で気づいてしまうようなオーラをまとっている。

どうしてこんな人に今まで気づかなかつたんだろう。

これほどのオーラをまとっているのなら、学年どころか近所一帯にまで噂になっていてもおかしくないはずなのに。それとも、意図的に自分のまとう雰囲気や印象すらも変えられるのだろうか——。

泥棒という陳腐な枠におさめるには器が大きすぎる。咲が圧倒されながら氷川を見ていると、ふと視線が重なった。にこり、と微笑する。その笑顔に悪寒が走った。

高校生であるにもかかわらず、熟した大人を超えた妖艶さをまとっているような気がした。

「会長！」

気を取り直して、ステージの下から声をかける。咲の姿を見た会長は、座っている椅子から転げ落ちそうな勢いで驚いた。

「なにやってんの咲ちゃん！ なにかあったの！？」

「……え？」

思考が固まる。

どうして会長は驚いているのだろう。

「だって、あたし……盗まれちゃいました」

「いつそんなことがあったのよ！ どうして報告しないの！」

「あ……」

まるでずつと解けなかった知恵の輪が、ふとしたひょうしにあっさり外れてしまったみたいにな、咲の頭のなかでいくつもの光景がつながっていく。

迷子の親子。一瞬で偽物とすりかわった手帳。会長の言葉。そして、怪盗。

「咲ちゃん！」

「——騙されました、完ぺきに」

咲はステージの反対側で微笑を張り付けている氷川を睨みつけた。「どうしたのよ」

「会長、まだなにも盗まれたなんて報告は入ってませんよね」

「いまの咲ちゃんをのぞけばね」

ただ事ではないように、会長がようやく落ち着きを取り戻す。

「それから、敵の会長はどなたでしたっけ」

「美保でしょ。それがどうかしたの？」

「氷川、とは呼びませんよね」

「そんな風に呼んだことはないわよ」

「そう、ですか」

「いい加減なにかあったのかちゃんと説明してよね。盗まれたって
どういうこと？」

「それは――」

と言いかけて、咲はいちど言葉をとめた。深く息を吸う。

「警備の最中に、親子連れの方に写真同好会の部室はどこかって聞かれて、それを説明してあげていたんです。それがちょっと手間取ってしまつて、ほんの少しだけ意識がそれたんです。その一瞬で、生徒手帳は偽物にすり替わっていました」

「ウソでしょ？」

啞然とする会長。もしそれだけの高等なスキルを相手が持つているのだしたら、勝ち目はないかもしれない。

「あたしがそれに気づいてすぐ、会長から連絡が入りました。『もうすでにひとつは入手したって氷川がいつてるんだけどホント！？』
って」

「うち、そんなこと言ってないわよ」

「それはそうです。あたしをおびき寄せるための罠だったんですから」

「――そうか、あの女まったく汚い真似を」

会長が形相をかえて氷川を睨みつける。向こうでは待ち構えていたようにあかんべえのポーズをしていた。

「やられたわね」

「ええ。まさか無線を乗っ取られるとは思いませんでした。会長の声真似もそっくりでしたし」

「無線だとわかりにくいってこともあったのよね」

「生徒手帳が偽物なのではないかと疑った瞬間、相手は攻撃を仕掛けてきました。タイミングが良すぎて、考える暇を与えてもらえませんでした」

「なんで偽物だと思ったわけ？」

「光の反射具合が違ったんです。でも、おそらく細工されたんでしょう。時計に反射させた光をあてるとか、方法はいくらでもあるはずです。とにかく少しでも疑心を持てば、その隙を突かれます」

「用心深い咲ちゃんに合わせた作戦ってわけか。あーやられたねえ」「すみません」

咲が頭を下げると、会長は軽く笑った。

「しかたないよ、ここから挽回しよう。あとの三人がコソ泥をとっ捕まえればいいんだから」

「じゃあ、あたしどうすればいいですか」

咲は、少なくとも外面上は、動揺していないようだった。冷静に次の指示を仰ぐ。会長はすこし悩んだあと、ここにいてちょうだいといった。

「相手の顔すら見ていないようじゃ捕まえることはできないわ。それなら本部で誰かを捕まえたあとに見張っていてもらったほうがいいもの。それに参謀が一人欲しいところだったしね。盗まれたときの状況をみんなに伝えるから、くわしく聞かせてもらえる？」

「わかりました」

素早く切り替えて、咲が説明をはじめた。

あとのメンバーの役に立てるよう、なるべく細かく、気付いたことやこれからの対策も含めて話す。それが今の自分にできる唯一のことだと冷静に判断した。

「相手は普通の人間です。ただ、無線には気をつけたほうがいいのかもしれません。本人が喋っているとは思わないほうがいいでしょう。とくに後半は」

「そうね。とにかく今は待ちましょう。動きがあるまで、こっちは受け身でいくしかないわね」

「そうですね、それがいいと思います」

「結衣ちゃん、聞こえる——？」

会長が無線を使って、結衣、神崎と状況を説明していく。

その間も、氷川はまるで会長の唇の動きを読むようにじっと見つ

めている。なにを考えているのか、さっぱり読み取れない。

「健輔、そっちは大丈夫？」

「——ああ」

生気のない声がかえってくる。

会長は眉間にしわを寄せた。

「本当に大丈夫？ お化け屋敷でビビってんじゃないの？」

「——ああ」

やつれた老人のような口調。

「とにかく、そういうわけだから気をつけてよね」

「——ああ」

首をかしげながら無線をきる。

どうしたんですか、と咲が訊いた。

「なんか様子がおかしいよね。なにを言っても、ああ、としか返事しないし」

「よほどお化け屋敷が怖かったんじゃないですか」

「オカルト好きだし、まあ大丈夫だろうけど。ひっかかるわよね」

「副会長は負けたら坊主ですし、あたしはそれでもいいですけど」

「風邪引かなきゃいいけどね」

「似合うと思いますか？」

「いや、まったく。一生の汚点になるでしょうね」

「それは喜ばしいです」

咲がにこりともせずと言った。

CASE 2 結衣

CASE 2 結衣

「じゃあ、頼んだわよ」

「はい」

無線の切れる、ぷつりという音がした。

会長の話によると咲がすでに盗まれてしまったらしい。堅実に守りきって一生は確実だと思っていたのに、予想外なこともあるものだ。相手は単純なトリックを使ったというから、あまり警戒しすぎるのもよくないのだろう。

油断してもいけない、慎重になり過ぎてもいけない。

いったいどんな心構えでいればいいのかわからなくて、結局自然体でいるのが一番だと結論付けた。そもそも探偵というのは事件が起こってから活躍するもので、起こる前から警備するものではない。連続殺人事件などがよく起こっていることからしても、名探偵は事件を未然に防ぐのが苦手なのかもしれない。最後に残ったのは数人だったということもよくある話だ。

それにしても、寒い。

結衣は腕時計を確認する。まだはじまってから十五分ほどしかたっていない。昼にかけてもっともあたたかい時間帯のはずなのだが、とにかく風が冷たくて足がかじかんだ。

カイロを持ってくるべきだった。

天気予報で今日は暖かいというから油断していた。気温よりも、風のほうが体にこたえる。

「生徒会なんて嫌いだ……」

両腕で体を抱きかかえながらふるえる。

こんな場所を勝負の舞台にした生徒会は、きっと性格が悪い集団に決まっている。文化祭の尋常ではなく忙しい時期に七面倒なイベ

ントを持ちこんだということで、八つ当たりしているのだ。

いや、会長の横柄な態度に怒ったのかもしれない。どちらにせよ、結衣には関係ない理由だ。というか、会長が原因な気がする。

「そんなところでなにやってんの、結衣？」

凍えそうなところへ、後ろから声がかかった。振り向いてみると、黒崎瞳が悠然と立っていた。

5月に起こった住田くんの事件——あれは、悲しく、辛い事件だった。なんてね——の際に、鞆に入れられた脅迫状を最初に発見した生徒が、黒崎瞳だ。

それがきっかけで結衣は探偵同好会にスカウトされたわけだから、ある意味では恩人ということになる。同じクラスということもあって、結衣とは仲がいい。

「ヤッホー瞳。寒くて死にそうなところ」

「なにやってんのよ。寒いならなかにはいいじゃないのに」

呆れた口調。結衣はプラスチックケースに入れられた黄金の生徒手帳を指差した。

「これを守ってるの？」

「どうして？」

「文化祭のイベントでね、怪盗同好会つてところと勝負してるの。だからわたしもほら、シャーロックホームズのコスプレしてるでしょ。似合う？」

「なるほどね、可愛いけどさ。結衣は探偵同好会なんだっけ？」

「そうだよ。探偵はこんなに寒いところで仕事したくないよ」

「仕方ないな、ほら」

瞳はそう言ってポケットから使い捨てのカイロをとりだした。それを、結衣に手渡す。

「いいの？」

「もう一個あるし、手袋もあるから。寒いならちゃんと防寒すればいいのに」

「油断してたの。北風と太陽は、北風の勝ちだってことに気づいた」

「なにそれ」

「太陽のひかりなんてあてにならないってこと。瞳にもらったカイ口のほうがずっと温かいよ」

「それはよかった」

瞳が笑うと、アイドル似の可愛らしい風貌がよく映える。女子の結衣から見ても素直に可愛いと思えるほどだ。

「いつまでやってるの？」

「勝負は14時までだってルールに書いてあった」

「まだ長いね。終わったらいっしょにまわろうと思ってたのに」

「ごめんね。明日は空いてると思うから、そしたらいっしょに行こう」

「うん」

瞳がこくりとうなずく。

「怪盗同好会っていうのにその手帳をとられちゃったら負けなんですよ」

「そうなの。でも、タッチすればわたしたちの勝ち」

「じゃあ、牢屋に入れたあと逃げられないようにしなきゃね」

瞳がくすくす笑う。

あまり大きな口を開けて笑ったりしないのだ。だから、軽い口調のわりにどこか上品な優雅さが隠れている。それが男子の気を引くのもかもしれない、と結衣は思った。

住田くんの事件からというものの、瞳の鞆には脅迫状の代わりにラブレターがよく入れられていた。

最初は戸惑っていたようだが、そのうち慣れて「あら、間違いかしら」なんてわざとらしく笑って、読まずに紙飛行機にしてとばしてしまう。

校内の誰かが拾ったら読まれてしまうということだ。それだけにハイリスクであるが、いまでもときどき恋文が紛れ込んでいることはある。

「ねえ、この手帳、触ってみたい？」

「え、いいの？」

結衣の提案に、驚いた表情をする瞳。

「だって大切なものなんでしょ？」

「いいよ。すこしくらいなら」

「そういうなら、ちよつとだけ」

結衣がプラスチックケースを持ち上げ、黄金色にかがやく生徒手帳を手渡す。瞳はしばらくそれをしげしげとながめた。まるで月の石を手に入れているみたいに、手のなかで転がす。

「これってどこで作ったのかな」

「生徒会から配られたものだからわかんない。わたしにとってはあんまり関係ないし」

「ふーん」

そのとき、冷気をのせた北風が結衣たちの間をかけぬけていった。あわててスカートの後ろに目をやる。大丈夫、めくれていない。

「大変だね、ここ」

「やらしい風のせいだね」

「やらしい人間じゃなくて良かったでしょ」

瞳が笑いながら生徒手帳を返す。

そのとき、結衣は瞳の差し出した手を握った。

「なに？」

「捕まえた」

その場の空気が凍りついてしまったようだった。瞳がすうつと無表情になる。それに対して、結衣は自然体を崩さない。

「捕まえたってどういうこと」

「――瞳さ、怪盗同好会だよ」

その言葉を聞いて瞳はかたまった表情を融解させた。いつもの優しい笑顔にもどる。

「なに言ってるのよ、そんなわけないじゃん」

「わたしは騙せないよ」

結衣が瞳の手をにぎる力を強める。

「変だなんて思ったのはついさっき。ふつうは怪盗にタッチしたらそこでおしまいだと思うよね。捕まえた相手を牢屋にいれて、ドロケイみたいに逃げたりできるようなルールだとは考えないはずだよ。そんなことパンフレットにも書いてなかったしね。そのルールを知っているのは探偵同好会か、怪盗同好会か、生徒会の役員だけ。瞳は生徒会じゃないから、残った可能性はひとつだよ」

「そんなの偶然かもしれないじゃない」

「わたしもそう思ったよ。だからちよつと試してみたの。こうやって生徒手帳を渡してみてね。もしも瞳が怪盗同好会の一員なら、この絶好のチャンス逃すはずがない。けどさすがにわたしが見ている目の前ではアクションを起こせないだろうから、ちよつとスカートを気にするふりして隙を作ってみたの。瞳マジック上手なんだね。よく見てなかったら絶対に気づかなかったと思う」

結衣は、瞳に返してもらったばかりの生徒手帳をかけた。太陽の光を反射して、金がきらめく。

「偽物だよ、これ」

「……………」

「咲先輩は本物を偽物だと勘違いしてやられちゃったから、自然と偽物なんてないという先入観が生まれてしまうこともある。うまい心理作戦だよ。こつちの連絡がすべて裏目に出てるみたい。瞳がミスしなかったら、わたしも騙されてたと思う」

「そっか。失敗したんだ」

瞳はからから笑って、透きとおった空を見上げた。雲が流れの速い風にはこばれていく。

「まさか瞳が怪盗同好会だったなんてね」

「ばれちゃったものは仕方ない。もう結衣には隠す必要もないね。ちよつと気が楽になったかも」

「そういえば瞳がどこの部活にはいつてるのか聞いたことなかった気がする。たしか学外で活動してるっていったよね」

「こういうイベントに備えて、怪盗同好会は基本的に情報を隠して

るからね。ほかのだれにも話さないようにしてるんだ。とくに結衣には気をつけてた。ちよつとしたことではれちゃいそうだったからね、いまみたいに」

「そんなに普段から注意してないし、大丈夫だよ。授業もさっぱりおぼえてないくらいだから、仮に喋っちゃったとしてもすぐ忘れるよ」

「そのくらいだったらよかったんだけどね」

瞳は結衣の両目をじつとのぞきこむ。はつきりした二重瞼と、化粧もしていないのに長いまつ毛。

「結衣はへんなところで勘が鋭いから、ふつうに話してるだけでも怖いんだよね。おかげでよく考えてから言葉にできるようになったつもりだったけど、大事な場面でミスっちゃった。まあ、いままで正体を見破られなかっただけでもよかったとするかな」

「これからも忘れたほうがいい？」

「ううん。これで気兼ねなく生活できるから。ほかのみんなは鈍感だから気付かないだろうし」

すこしの間があつて、瞳が口を開いた。

「せっかくだから話しちゃうけど、あたしが怪盗同好会にはいったのって結衣のおかげなの。5月に住田くんの事件があつたじゃない、それで結衣ってすごいなって、探偵ってすごいなって思ったの。でもあたしには推理する才能なんてなかったから、どうやったら結衣に近づけるかなって考えてた。それで、どうやって知ったのかわかんないんだけど会長から——まあ、部長から勧誘が来て、怪盗同好会にはいつてみないかっていわれたの。結果的に逆のベクトルになっちゃったんだけどね。ちよつと悩んだけど、かじる程度だったマジックもすごくうまくなったし、こうして結衣と対決できたのも楽しかった。負けちゃったけどね」

「紙一重のところだったから、次やったらどうなるかわからないよ」
結衣がいう。

瞳はなにか吹っ切れたような顔をしていた。まるで冬のよく晴れ

た空みたいに。

「さてと、そろそろ行かなくちゃ。生徒会の人が連行してくれるんだっけ。すぐ助けてもらって、また結衣のところに来るからね」

「わたしはあんまり来てほしくないけどな」

ふたりの笑い声が重なる。

はた目から見れば平凡な女子高校生たちが他愛もない世間話をしているようだ。実際、そうなのかもしれない。探偵と怪盗の戦いなんて何気ない日常の出来事なのかもしれないのだ。

たとえそれが、赤い夢のなかの出来事だったとしても。

「もしもし、黒崎瞳です。捕まってしまったので屋上まで迎えに来てください」

瞳が無線で連絡を入れる。

すこし時間がかかるとのことだった。

「あ、そうだ。本物の生徒手帳返してよ」

結衣が思い出したようにいう。もし相手を捕まえたとしても、本物を持っていかれては怪盗同好会のポイントも加算されてしまうところだ。

「あちゃ、ばれたか」

舌を出して瞳が黄金の手生徒手帳を結衣に返す。

結衣はすぐにぶらすチックケースのなかにそれをしまった。

「ほかのだれかが来ることもあるのかな？ 教えてよ」

「たとえ捕まっても怪盗同好会の一員、味方を売るようなことはできないよ」

結衣が軽い調子で聞いたが、きっぱり断られてしまう。

会長は一对一の対決になるだろうといていたが、盗まれたり捕まえたりすることで状況が変わってくると、一对一とばかりもいつていられなくなるはずだ。

タイムリミットが迫ってくれば、複数人で仕掛けてくることもあるだろう。それに、いまは咲がいるだろうが本部の警備も必要になっってくる。

まあ、そういう難しいことは会長に任せておけばいいのだ。

寒いのは相変わらずだが、ここで生徒手帳を守っていればいい。星はちょうど五分、ゲームは振り出しに戻ったばかりだ。

「じゃあね、結衣。明日こそはいっしょに文化祭回れるといいね」

「うん。またあとで」

手を振りながら、生徒会の役員に連れていかれる瞳の足取りは軽い。なにか、心の憑きものが取れたような、そんな気がする。

はたして瞳が怪盗同好会であることを打ち明けたのがプラスに働いたのかどうかわからないが、もしすこしでも瞳の力になれたのなら嬉しいことだ。

外は寒いが、こころはマフラーをかけたみたいに温かくなって来た。この調子なら大丈夫だろうと、スキップしながら警備にもどる。「会長に報告しようっと！」

ネズミを捕まえてきたネコのようににはしゃぎながら、結衣は無線を開く。

会長の声は、明るかった。

CASE 2 結衣（後書き）

アジア杯見てて更新忘れてました……。
まあ、勝ったからいいか。

CASE 2 副会長

CASE 2 副会長

タイタニックから落ちて、極寒の北大西洋で溺れているような心持だった。寒い。凍えてしまいそうだよローズ。ちなみにローズというのは映画タイタニックのヒロインのことだ。

咲が些細なミスで手帳を盗まれたと知らされたときは、すこし喜んでしまった。これで自分がすでに手帳をとられていたとしても許される。そう思った。

だが、冷静になって考えてみると、いよいよ恐ろしい運命が待ちうけていることに気づいた。

咲が手帳を奪取されたときの状況は、とても詳しく報告されていた。つまり副会長も同じだけ詳細な報告を求められるということだ。真実はなにがあっても打ち明けられない。となると、嘘を付くしかないのだが会長をはじめとして探偵同好会の部員達を騙しきれような嘘をつけるはずもなく、ごまかせば疑われるだろう。

さらに決定的なのは怪盗同好会の会長である氷川美保の存在だ。

副会長から生徒手帳を盗んでいったひとは、もちろん氷川にそれを伝えるだろう。どうやって盗んだのか、そういったことがむこうの耳にはいると非常にまずい。

氷川と会長は本人いわく犬猿の仲であるが、副会長が見たところ結構仲は良い。イベント本部では会長に揺さぶりをかけるためこのことを伝えることもありえるだろう。

たとえそうなったとして、しらを切っていれば言い訳を考える時間は稼げる。終盤戦になればどうしても混乱が起きるだろうから、そのどさくさで盗まれたことにしてしまえばいい。

氷川がどう会長に真実を話したところでそれを否定し続ければ問題ない。

「……はあ」

どんなに都合のいい未来を考えたところで、事実は変わらない。
これから副会長を待ちうけているであろう未来と同じように真っ
暗な空間を、じっと見つめる。いつまでたっても希望は浮かんでこ
なかった

CASE 3 咲

CASE 3 咲

「グッジョブ結衣ちゃん！」

ステージの上で会長が叫んでいる。結衣が怪盗同好会のひとりを捕まえたらしい。喜ばしいことなのだが、なんだかあっさりしすぎていて、逆に実感がわかない。

腕に腕章をまいた生徒会の役員につれて来られた女の子は、どこか怪盗同好会の会長である氷川と同じような雰囲気をもっていた。それは多分、外面的なものではなくて、内面的なものだ。

テレビで見るような、警察が容疑者を連行していくようなシーンとは違い、空気はとても軽い。

まるで授業がおわってちよつと廊下に出てきたような気楽さ。

瞳は氷川のほうを見ると、可愛らしく舌を出した。

「すみません、捕まっちゃいました」

「助けてあげるからそこで待ってな」

はじめて聞く氷川の声は、澄んだ風鈴の音のようだった。涼やかではかなげに消えてしまいそうなかに、こっそりと芯の強さが隠れている。

中学時代の人に合唱部だったという結衣の声も心地いいが、氷川の声にはまた違った美しさがある。いちど耳にはいったら引き付けて離さないような魅力。

「絶対ですよ」

「やつぱりやめようかな。そこで捕まって恥をさらせばいいんじゃない？ ちよつどいい罰ゲームになるでしょ」

「そんなあ、あんまりですよ部長」

「ねえ咲ちゃん」

会長が小声で話しかける。

「なんですか？」

「美保は部長って呼ばれてるんだけど。むこうも同好会のはずなのにね。それなのにうちはどうして会長なのかしら」

「仁徳の差じゃないでしょうか」

さらりと答える咲。

会長は露骨に顔をしかめた。

「あの女のほうが性格悪いに決まってるじゃない。うちのどこがあの女に劣ってるっていうのよ」

「たとえば、声とか、顔とか」

「そんな外面的なものに惑わされないでちょうだい。性格とかあるでしょ、性格とか」

「まだ氷川さんとは初対面ですし、どんな性格なのか知りませんから。そのぶん、会長はよくしてますけどね。ロクな性格じゃないですけど」

「ちよつとなによその言い草」

「氷川さんって、素敵だなんてことです」

「だめよ咲ちゃん、あんな奴に騙されちゃ」

「すくなくとも会長には騙されませんよ」

「あつそ」

すねる会長の視線の先には、氷川美保の姿がある。

体育館にいる多くの人々が同じように氷川のことを見ていた。まるでハリウッドスターがステージにいるかのような存在感。

「じゃ、気が向いたら助けてあげる。そんなピンチになるはずないけど」

「お願いしますね」

そういつて瞳は牢屋のなかへ入れられた。

牢屋とはいっても堅固なおりや看守がいるわけではなく、テープで囲まれた範囲に椅子が置いてあるだけの質素なものだ。そのため、体育館中の好奇的になるという欠点もあるのだが、瞳はたいして気にしていないようだった。

萎縮するどころかむしろくつろいでいるようにも見える。

「咲ちゃん、あの子のすぐ近くにいてくれるかしら。たとえば誰かにタッチされたとしてもすぐ捕まえられるように」

「わかりました」

会長の指示に従って、咲が瞳のすぐそばに立つ。

そして横目で瞳をじつとうかがいながらまわりを徘徊する。これがいちばん効果のある警備体制だ。

「いつ奪還しに来るかわからないから、周囲の人間から目を離さないようにね。本当なら誠くんを警備に使いたいところなんだけど、本人もやる気みたいだし、ぜひとも一人捕まえてもらいたいものだわ」

「上手くいきますかね」

「信じるしかないでしょ。誠くんにはグラウンドといううつつつけの舞台を用意してあげたんだから、それで結果を残せなかったら探偵同好会に必要な人材ってことになるわね」

「それでも退会させるわけにはいきませんよ」

「当たり前じゃない。道連れになってたまるもんですか」

会長がいった。

昼間も佳境ということで、体育館に充満する人の数はどんどん勢いを増してきている。どこを見ても人ばかりだ。牢は、テープのなかにさえ入らなければいいというルールなので瞳のすぐ目の前を大勢の人々が通り過ぎていく。

いつ怪盗同好会の刺客があらわれてもおかしくない状況だ。

雑踏のなか一人ひとりを注意深く観察していく作業は神経をすり減らす。それでも咲は手を抜くことなく真剣なまなざしで瞳の周りを警戒している。

自分が失態を犯したぶんは、ほかの場所で挽回するしかない。そのためにも絶対に瞳を逃がすわけにはいかなかった。これ以上失敗したら、副会長でなくとも坊主にされるかもしれない。

尼さんになるつもりは、まだない。

星が五分なら、相手は必ず動いてくる。それを防ぎきることこそが、咲の役割であり、義務であつた。

CASE 3 結衣

CASE 3 結衣

……退屈だ。

瞳を捕まえてからというものの、怪盗同好会からはなんのアクションもない。北極にひとり置いていかれたような気分。

定期的に会長からの報告は入るものの、瞳の一件があつてからはさして大きな動きがあるわけでもなく、北風だけが結衣の話相手だった。一方的に語りかけてくるだけの、冷たい友達。

いちど失敗した場所にふたたび攻め込みたくないという心理はよくわかる。まだ神崎と副会長の守る手帳があるわけだし、先にそこへアタックをかけるというのは自然な流れだ。

だが、その裏をかいて結衣のところにも来てもらわないと、非常に暇なのである。

ときおり屋上で出会う友達も、瞳のことがあつたせいかどうしても警戒してしまう。誰が怪盗同好会なのかわからない、それが結衣をリラックスさせなかった。

それにしても動きがない。

タイムリミットまで残り30分を切ったというのに、瞳を助ける気配さえないのだ。会長はしきりに落ち着けとっているが、時間が長引けばいるんな余計な考えが頭に浮かんでくる。

それがむこうの狙いなのだとしても、抗うすべはなかった。

「あーあ、誰か来ないかなあ」

退屈しのぎに空を見上げる。とてもきれい。風に吹き飛ばされていく雲は、いつまで見ても飽きないけれど。スカートの下にのびる生足凍えそうな現実を引き戻す。

「はあ」

ため息は、すこしだけ白く残ってすぐ消えた。

CASE 3 結衣（後書き）

最後の一文だけは、夜空のムコウから拝借いたしました。

CASE 2 神崎

CASE 2 神崎

残り15分。サッカーならば監督が選手交代を考えだす時間帯だ。残り15分。ここからゲームが動く。

神崎はうでにつけたGショックを一瞥し、黄金の生徒手帳を見る。まだ誰の手にも触れさせていない手帳。このまま守りきるだけでは、少し甘いかもしれない。

探偵同好会は、怪盗同好会を捕まえないことにはポイントを得ることができない。現時点でポイントは互角だが、もしも本部にいる会長と先の防衛網が破られ、脱獄されるようなことがあれば勝負はほぼ負けとなる。

咲を信じていないわけではないが、唯一手帳を盗まれているのも咲だ。今日はあまり調子がよくないとみたほうがいいだろう。

会長は指示を出すだけで警備にまわれないから実質一対一の勝負になる。守るほうとしてはいい条件ではない。

基本的に、攻めるほうが守るよりも簡単なのだ。

それに星が五分のままで、決着がつかない。会長は引き分けなどという曖昧な結果では満足しないだろう。それは神崎も同じことだ。

あれだけ馬鹿にされて引き下がっているようでは探偵として失格だ。逆境でこそ真価を発揮するのがエースの役割というもの。元野球部のエースとしては絶対にひとり捕らえなければいけなかった。「さて――、どうしたものか」

スパイクの靴ひもを結び直しながら考える。

これで何度目かわからないが、念には念を入れておくべきだろう。

会長の指示を仰ぎたくはない。どうしても独力で手柄をあげたい

のだ。

「あーあ……」

考えるのはあまり好きじゃない、といったら会長に怒られるかもしれない。結局どのくらい悩んだところであたるときはあたるし、外れるときは外れるものだから。

神崎は恨めしげにプラスチックケースをながめると、視線をグラウンドに行きかう人々へ向けた。いつまでたっても盛況なのは変わらない。知らない顔が通り過ぎては、知らない顔が入ってくる。

とくに小学校低学年くらいの子供なんかはなぜだかひとりで走り回っていることが多くて、目につく。保護者はどこへ行ったのだろうか。自分の子供くらいしっかり手綱を握っていてくれればいいのに。

ふとなにか思い当たることがあって、悩むふりをしてプラスチックケースから離れてみる。

まるで関係ない方角を向いているように見せかけて注意はしっかり生徒手帳をとらえている。

「——ふーん」

もついちど腕時計を確認。

のこり13分。

もう少し離れる。追いつくか追いつかないかの、ギリギリのところまで。

案の定、半そで半ズボンのこどもがひとりではしゃぎながら手帳に近づいてきた。神崎は知らないふりで、足をとめる。

透明な緊張の糸がはりつめている。

行くか、行かないか。

それは俊足のランナーが盗塁を狙っているときの感覚に似ていた。一瞬の間合いの盗みあい。焦って飛び出せば逃げられる。

心臓の鼓動が激しくなっていくのを感じた。

足の隅々にまで血潮がめぐってくる。身体は温まっている。臨戦態勢だ。

緊迫した雰囲気打ち砕いたのは無線から飛び込んできた会長の声だった。

「誠くん！ 今すぐ体育館に向かってちょうだい！ 逃げられたわ！」

その一瞬、神崎は考えることに気をとられた。

興味しんしんでプラスチックケースに収まった黄金の生徒手帳を見つめている、という様子を演じていた少年が箱をはずすと、手帳を右手に一気に走りだした。

ほんのわずかに遅れて神崎がスタートを切る。

会長の言葉は耳に入らない。たとえ一人逃げられたところで、目の前を走る少年を捕まえれば帳尻はあう。それに手帳をとられてしまった以上、この場所に固執している必要はない。

典型的なやんちゃ小学生にふんした怪盗同好会のひとり、小さな体を利用して人ごみのあいだをすいすい逃げていく。それに対して筋肉質な神崎はすみませんと叫びながら客を弾きとばす。

多少手加減はしている。大丈夫だろう、たぶん。

「待て！」

いちどいつてみたかった台詞を思い切り叫びながら、少年を追う。身長では神崎が勝っているものの、意外と少年の足もはやく、距離はなかなか縮まらない。ただ、スパイクをはいているぶんだけ神崎のほうが地面をしつかり蹴れるという利点はあった。

少年はちらりと後ろを振り返った。

見たことのない顔だ。童顔、と呼ぶにはすこし子供っぽすぎる顔立ち。虫捕り網を持ってアキアカネを追いかけた日々がそのまま止まってしまったみたいだ。

だが、怪盗同好会のひとりであるのだから、少年もまた高校生なのだろう。信じられないけど。

あんなにも特徴的な顔立ちをしているなら、すこしくらい噂になっただけでもいい気がする。それとも意図的に隠していたのか。

ふたたび前を向くと少年は、直角に折れ曲がった。

どうやら校舎に逃げ込もうとしていたのをあきらめて、人ごみのなかを進もうという魂胆らしい。神崎も負けじと素早い反応で食らいついていく。

誠くん！ と会長の怒鳴る声がイヤホンから響いてくる。

うるさいなあ。神崎は片方の耳につけていたイヤホンをはずした。あとで怒られようがなんだろうが、知ったこっちゃない。

少年の蹴ったあとから、砂煙が上がる。

冬になる前の乾燥した空気は、視界を妨害するのに十分なくらい砂埃を巻きあげた。

「待てって！」

追いかけてっつ、腕時計を確認する。

あと10分を切っている。

体力に自信があるとはいえ、全力で走り続けるにはちょっと長すぎる時間だ。だが、目の前の相手はライオンに追いかけられたウサギのごとく、がむしゃらに駆けている。手を抜いているようでは見失ってしまう。

しかたない、神崎は大きく息を吸い込んだ。

「待てってば！」

ああ、なんて心地のいい響き。

ドラマに出てくる刑事はこんな快感をいつも味わっていたのか。名探偵と呼ぶにはすこし違うスタイルかもしれないが、犯人を捕まえるという目的では共通している。それなら犯人を追いかけるのだって立派な推理だ。

だが、ふくらはぎは徐々に悲鳴を上げはじめていた。

探偵同好会に入ってからというもの、ハードな練習などに行っていないから、予想よりもずっと体力が落ちている。

前に行く少年の背中がだんだん遠ざかっていくような錯覚。突き放されるマラソンランナーはこんな気持なのだろう。

脇腹も痛くなってきた。

呼吸が荒くなる。これは本格的にやばいかもしれない。それでも

神崎に諦めるという選択肢はなかった。足を止めたら、そこでゲームセットだ。時間はまだある。それまで追いかけて続ければ、きっと相手はばてるだろう。

ふと、身体をむしばむ辛さから逃避するみたいに頭のなか鮮明になった。

にこった水を下水処理したみたいにクリアな思考。相手はグラウンドにかまえるのが神崎だと知って勝負を仕掛けてきたのだろう。小細工のしにくい場所では、盗むまでは辛抱の勝負。

盗んでからは体力の勝負になる。それを見こしての人材派遣だから、体力にいちばん自慢のあるやつが来たにちがいないのだ。その代り、すこし怪盗としての技術は低いのもかもしれない。

神崎と似たような境遇。

それなら、同じ立場として負けるわけにはいかない。

走る。その単純な動作がいまはなによりも辛い。

ピッチャーが全速力で疾走することはめったにない。だがそんなことは関係なかった。

「はあっ、はあっ」

呼吸が激しく、荒いものへ変わっていく。

だが、それは相手も同じようだった。足の回転がみるみる遅くなっていく。死闘の鬼ごっこを繰り広げるふたりの姿を、いくつもの視線がなでる。

神崎は、突然大きな声を出した。

驚いて振り向く少年。いまのでそうとう息が辛くなった。だが、神崎は威嚇するように叫ぶのをやめようとはしない。羊を追いまわす猟犬のように吠えたてる。

その勢いに気おされて少年は進行方向をかえた。顔は神崎のほうを向いている。気でも狂ったのだと思っっているのだろう。

神崎は声を振りしぼり続ける。声だしは探偵同好会にはいる前からずっとやっている。だから、小柄な少年が態勢を崩して、宙を飛んでいるときでも余裕が残っていた。

「——あつ！」

少年が足をとられたのは、野球のマウンドのプレートだった。高い丘のような土の上に、白いプレートが悠然と置かれている。神崎はこのプレートを踏み続けてきた。

ただ、野球部でもなければグラウンドに足をとられるような凹凸があることを覚えているものは少ない。よく体育の授業でもマウンドに足を引っ掛けて怪我をする生徒がいるくらいだ。

転んだ拍子に少年の手から離れた黄金の生徒手帳を拾い上げてから、神崎は少年の背中にタッチした。もう立ち上がる気力すら残っていないようで、激しく呼吸しながら仰向けになって空を見上げる少年。

同学年ではない——たぶん。

そうなると1年生だろうか。すくなくとも3年生のようには見えなかった。

どちらにせよ高校生に見えないのも事実で、それは少年の服装のせいだけではなかった。身長も、体つきも、顔立ちも、すべてが小生意気な小学生にふさわしい。

よほど注意して観察してないかぎり、彼をひと目で小学生でないと見破ることはできないだろう。

神崎もこの時間帯になるまでまったく気がつかなかった。捕まえただすくそばで顔をのぞきこんでも信じられないくらいだ。

少年の失敗は顔を見せ過ぎたことだった。

神崎の前に現れるときはすこしずつ服装をかえたりしていたのだが、それはあまりよく覚えていない。印象に残っていたのはあまりにも典型的なこどもがグラウンドをうろついているということだった。

もしも神崎の記憶力がもうすこしよかったなら別人だと認識して疑うようなこともなかっただろう。

その結果として、怪盗同好会をおびき寄せるための罠を仕掛けたとしても、犯人の見当がつかないままあつという間に手帳を盗まれ

ておしまいだったに違いない。

「あー、疲れたあ」

少年のすぐ横へ、神崎が座りこむ。

ふくらはぎが締めつけるように痛い。明日はさぞや筋肉痛に苛まれることだろう。

これじゃゆっくり文化祭を回することもできない。でも、そんな些細なことは勝利の陶醉感のまえでは意味を持たなかった。

「おい、捕まえたぞ」

「……………」

少年に声をかけるが、せわしく肺を上下に動かすだけで返事をしようとはしない。

できない、といったほうが近いだろうか。箱根駅伝を走りきったランナーみたいに倒れ込んだままだ。

「おーい」

もういちど呼びかけてみる。反応はない。

神崎は肩をすくめて、腕時計を確認した。

あと5分を切っている。少年を捕まえたことで1ポイントが探偵同好会に加算された。これでかなり優位に立ったことになる。相手は動いてくるしかない。

あとは手帳の前にはり付いているしかないか。くるなら本部か、副会長のところだろうし。

本部の会長に連絡する。あ、そういえば誰か逃げ出したんだっけ。それなら同点か。でも、どうしてか会長の口調は穏やかで、とても緊迫している様子ではなかった。

まあいいや。

いまはすごく疲れている。あと数分の勝負が終わるまであと少しだ。神崎は足を引きずるようにして持ち場へ戻った。イヤホンは、外したままだった。

CASE 4 結衣

CASE 4 結衣

瞳にもらったカイロをポケットにつっこみながら、寒さを紛らすために足ぶみをする。履きなれたローファアの靴音がコンクリートの地面を叩いた。

神崎がひとり、怪盗同好会を逮捕したらしい。これでポイントは優勢。敵は仕掛けてくるしかない。どんなリスクをおったとしても敗北よりはずっとましだ。

可能性が高いのは瞳と新たに捕まったひとりを一気に助けだして逆転してしまう作戦だろう。

引き分けでは意味がない。

時間がない状況で、勝利への最短距離は本部を襲撃することになった。できることならいますぐ会長たちのいる体育館に駆けつけたいくらいだ。

この手帳を守らなくてもいいのなら、また誰かと対決したい。

だがそのようなことを会長が許してくれるはずもなく、運命は咲にゆだねるしかなさそうだった。ミスをそのままにしておくような先輩じゃない、きつと助けに来た敵を捕まえて勝負を決定づけてくれるはずだ。

信じるしかないというのはもどかしいけれど、あとすこしだけ我慢しよう。チームワーク、という言葉が頭に浮かんだ。

CASE 3 副会長

CASE 3 副会長

「……まだ、ひとつ足りない」

地獄の底からとどいたような声でつぶやくと、女子中学生らしきグループが泣きながら逃げていった。お化け屋敷にすっかり溶け込んでしまった副会長の背筋はおれ曲がり、顔色は死を目前にした老人のように青白い。

何度目かわからない時計の確認。

タイムリミットは近づいている。みんなはポイントが有利であると信じているだろう。当然だ、とつくに手帳が盗まれてしまったことを報告していないのだから。

引き分けに終わるなら、まだいい。

問題なのはもし誰かに逃げられたり、手帳をもうひとつでも盗まれてしまったりした場合だ。ほかのみなは引き分けだと悔しがるだろう。そして、生徒会の審査によって探偵同好会の負けが発覚する。副会長はいとおしげに自分の髪をなでた。

「この髪とお別れだな。しばらく寒い日が続きそうだ」

もし生きていれば、の話だが。

あれだけイベントが始まる前に会長から注意を受けていたのだ、それが報告もせずに失敗しましたでは取り返しがつかない。けれども、時間がたてばたつほど会長に知らせる勇気もうせてしまって、逃げ出すわけにもいかず、どうしようもない悩みばかりが募っていた。

あんな女の子に惑わされるんじゃないかった。

いやたしかに可愛かったのだけれども。足もすらりとして綺麗だったし、小動物のような脅えたしぐさも愛らしいし、なによりありがとうというてもらえたあのときの感情が忘れられない。

——それでも、つかの間の至福を蹂躪するには十分なくらい暗黒の未来が広がっている。どうしようもない未来だ。つと、副会長は気が遠くなっていくのを感じた。

貧血だ、どうにかしなくては。そう思って立ちあがると、逆らえないめまいが襲ってきて副会長は崩れ落ちた。

CASE 会長

CASE 会長

会長は小躍りして喜んでいた。

もちろん、神崎が探偵同好会の鼻をあかしたことを聞いたからだ。生徒会の役員に連れてこられた小学生の格好をした少年を見ると、会長のテンションはさらに上がった。

「やっぱりうちの見こんだ通りの男だったわね！」

ガッツポーズを誇らしげに氷川のほうへ見せつける。そっぽを向く怪盗同好会の会長。

ざまあみろってんだ。

ストップウォッチで時間を確認するまでもなく、勝利は目前に迫っていた。

「咲ちゃん、ここからが正念場よ。絶対にひとりも逃がさないでね！」

「はい」
ステージの下ではテープでしきられた牢獄の周りを、咲が警戒している。

囚人がふたりに増えたことでさらに表情が険しくなっているようだった。頼もしくはあるが、よくを言えばもうひとりくらいは警備を増やしたい。

すでにアタックを受けた神崎が結衣をよびよせて警戒に当たらせるといふ手段もある。

おそらく結衣のほうではひどく失敗しているから、もういちど攻めてくるようなことはないだろう。つまり手帳の警備を空にしても大丈夫ということだ。

だが、相手は結衣が警備にきたのを見て屋上に向かう可能性もある。

る。むしろしないほうが不自然だ。裏をかいて副会長あたりを本来の場所から屋上へシフトするという手段もあるが、どちらにせよどこかに穴があいてしまう。

この時間帯で決定的な弱点があるというのはまずい。

怪盗同好会は最低でも引き分けに持ち込めればいい。こちらのもっとも弱い部分をつくのが常套だ。それがいまの本部なわけであつて、会長の目が届かない場所よりはずっとマシだろう。

つまり、この場にいる咲に頼るほかないのである。

こうなつてくると咲が序盤に手帳を失ったのが有利に働いてくる。だれかしら本部の警備に行かなければいけないなかで、場馴れしている咲を使えるのだから。

不幸中の幸いってやつかしらね、と会長は内心ほくそ笑む。

本当ならいますぐステージを飛び下りて咲に協力したいところだが、もちろんそんなわけにもいかない。だが、監視の目はふたり分だ。

「うちも怪しい奴らがいないか見てるからね。咲ちゃんはとくに牢屋の付近に注意しておいて。こっちは体育館の入口を見張ってるから」

「了解です」

咲のみじかい返事。

相手の顔がわからないというのは厄介だ。正体不明の敵は残り二名。ふたりでくるか、それともひとりで特攻してくるか。それすらもわからない。

神崎の捕まえた少年の服装を見てしまうと、誰もかれもが怪しく思えてしまう。怪しく盗む、それが怪盗ならば、条件はぴったりだ。体育館にいるすべての人が敵だと考えたほうがいい。

「あと2分……」

氷川の表情を盗み見る。焦ったような気配はない。

もともと感情をあまり表に出さない女だから、顔色をうかがったところで情報が得られるとは思わないけれど。

電流のような鳥肌が全身に伝わるのを感じて、会長は自分が武者ぶるいしていることに気づいた。自然と笑みがこぼれる。なぞ解きとは全然違ったスリルが心地いい。

心臓の鼓動が、大きくなる。

そのとき、会長の視界にコートのフードを目深にかぶった人物がくつきり写った。スカートをはいているから、おそらく女の子だろう。

外は寒いからフードをかぶっていたくらいでは不思議でもなんにもない。体育館にはいつでもフードをかぶり続けているのが奇妙だった。女の子なら、髪型がくずれるのを気にしてなるべくフードをかぶりたくないはずだ。

怪盗同好会の顔はわからない。

だから、顔以外のなにかをかくしている。会長の脳内に一筋の閃光が走った。

「咲ちゃん、フードをかぶった女の子に気をつけて！ たぶんうちの無線をジャックしたのはその子よ！」

無線を使うまでもなく、直接咲に呼び掛ける。

会長の声を聞いた女の子ははじめたように駆けだした。進む先には瞳がいる。ほぼ同時に走り出した咲が、一瞬だけ早く女の子の進路にはいった。

慌てて足をとめ、咲の様子をうかがう女の子。

間合いをつめすぎればタッチされ、近づかなければ仲間を逃がすことができない。

タイムリミットが刻一刻と迫るなかで板挟みになった女の子は、助けを求めるように氷川を見た。口元のマイクに小さく声を吹きこむ。

なんと言ったのかはわからなかったが、女の子は氷川の言葉を聞くと、驚いた表情をした。そのままゆっくりと後ろに下がっていく。「うしろ！」

と会長が叫ぶ。

咲が振り向くと、全力で牢屋にダッシュしてくる青年の姿があった。あれも怪盗同好会のひとりか。急いでうしろに向かう。

まえにいる女の子は放っておいても平気だ。

うしろにさがったぶんだけ距離がある。それよりも危険なのはスビードに乗った青年だと判断した。タッチできさえすればいい。そう思った。

「間に合って！」

体育館中に響きわたる怒声をとばす会長。

対する氷川はカーフェイスを崩さない。まるで興味のないスポーツ番組を視聴しているみたいに無表情だ。

「あつ」

一瞬、間に合わなかった。

青年の手が瞳の肩をタッチする。追ってきた咲の手をバレエを踊るように回転してかわすと、瞳は牢屋を離れる。

逃げる必要はない。

冷静に時間を判断しての行動だった。

残りは、ほんの数秒。

だが、青年は瞳をタッチした勢いをとめることができなかった。

そのまま神崎の捕まえた少年もタッチしようとして、瞳の座っていた椅子に足をとられる。

派手な音をたてて転倒する青年。

そのうえへ、青年の身体につまづいた咲が覆いかぶさった。少年があわてて駆けようとするが、電子タイマーの無情な音が終わりを告げる。

腕章を巻いた生徒会の役員が割って入る。

これで、試合終了だった。

結果発表

シャーロックホームズの格好をした探偵同好会の面々と、氷川以外は能面のような仮面をつけている怪盗同好会の部員たちがステージの上に並んでいた。

壮絶な勝負の結果発表ということで、体育館で休んでいる客の興味もあつめている。

途中経過はあまり目立たなかったが、最後の逃走劇は目の前で行われたということもあつて、ステージにたつ生徒たちに視線が注がれていた。

会長の鼻の穴がふくらんでいる。

捕まえたのはふたり。それに対して盗られた手帳は咲のひとつだけ。完全勝利とまではいかないが、勝ちには違いない。

「残念だったわね、うちの勝利で」

となりに立つ氷川に話しかける。

「そうとも限らないんじゃないの？」

涼やかな声。

「なにがよ。どう見てもうちの勝ちじゃない」

「知らない間に盗まれてるってこともあるかもしれないわよ」

「負け惜しみもたいがいにしてあげば？ 見苦しいし」

「そこまで言うならひとつ教えてあげるけどね」

氷川が微笑をたずさえる。口紅をしているわけでもないのに、血のように赤い唇。

「ルーキー対決は怪盗同好会が制させてもらったから」

「結衣ちゃんのこと？ そりゃ、最後はちょっと逃げられたけどひとり捕まえたことには変わりないし、実質うちの勝ちじゃない」

「そう思ってるでしょ」

わずかに声を出して笑う。

「そちらの白谷結衣ちゃんが持つてる手帳、あれって本当に本物だ

ったのかしらね。瞳は手先が器用だからちよつと目を離れたすきに偽物にすり替えるくらいわけないんだけど」

「大丈夫です、それはわたしがしっかり見抜きましたから」
会話を聞いていた結衣が胸をはる。

氷川は、会長に向けるのとは違った優しい視線を結衣へやった。

「瞳の正体を見破って捕まえたことは評価してあげる。けど友達だからって信用し過ぎちゃダメよ、これは戦いなんだから」

「……どういことですか」

「いちど瞳に手帳を渡してしまったのが失敗だったのよ。そんなことしたら絶対に瞳は本物を手放さない。今日はいくつ偽物をこしらえていったのか知らないけど、少なくともあなたの想像を超えるくらい入念な準備をしているのよ」

結衣は瞳を見た。仮面で表情はわからないが、ごめんね、というくぐもった声がかえって来た。

「手帳を結衣に返したとき、実は本物じゃなかったの。ばれたら仕方ないくらいの気持ちでやったんだけど、まさか最後まで気付かれないとは思ってなかった。だから勝負は引き分けだね」

会長の表情がくもる。

これでは勝負は引き分けだ。探偵同好会の勝利はなくなった。

「それに大高くんも秘密があるのよね」

氷川が副会長にむけてスマイルを送る。うつむく副会長。その鼻先へ会長がつめ寄った。

「なにがあつたの健輔。ひとりだけなんの攻撃もなかったから怪しいとは思ってたんだけど」

抑えた口調が、逆にこわい。

長身の副会長が会長よりも小さく見えた。

「……なにもないさ」

「ほんとに？」

「なにも」

そっぽを向く副会長。

追いかける会長。反発しあう磁石のように副会長が逃げていく。

「ぜったいなにか隠し事してるでしょ。いつてごらんなさい、怒らないから」

「なにもないってば」

「だったら目を合わせて話してみなさいよ。ほらやつぱり後ろめたいことがあるんだ」

「引き分けは残念だが、負けなくてなによりだったな」

「話題をそらさないで。なに？　いつたいなんなの？」

「……………」

ついにだんまりを決め込んだ副会長にしびれを切らして、会長は氷川のもとへ歩みよった。

「話して。健輔のことなんて思いやなくていいから。飾らない真実だけを教えてちょうだい」

「そうはいつでもねえ」

氷川がちらり、と副会長を一瞥する。

そつぽを向く副会長の両耳は真っ赤に染まっている。

「どうしようか」

「どうするもなにも、もたらなんにもないだろ」

「もう少しウソがうまくならないと怪盗同好会には入れてあげられないな。そうすれば毎日会えるけどね」

「ねえ、会うつて誰と？　まさかこの女じゃないでしょうね」

「嫉妬してるの？」

吸い込まれそうに黒い瞳で、氷川が訊く。

会長がふりむきざまに睨みつける。

「そんなわけないでしょ。うぬばねないでよね。この阿呆が引っこ抜かれでもしたら大変だって心配しているだけよ」

「お互い弱小同好会はたいへんだものね」

3年生たちの会話をそばで聞きながら、神崎と結衣がこっそり話していた。お互いに怪盗同好会をひとりずつ捕まえたということもあつて上機嫌だ。

機嫌がいい理由は他にもあるのだが。

「なにか修羅場みたいですね」

「副会長も隅に置いておけないってことかな。草食系のふりして実はすごいプレイボーイだったりして」

「そうかもしれませんね」

結衣はにじみ出てくる笑みをおさえこむのに必死だ。

声を出したら気付かれてしまう。

「怪盗同好会の会長さんも美人ですよ。普通の人にはないオーラが出ているって感じで。女のわたしでもあこがれます」

「会長には悪いけど氷川さんのほうが綺麗だし、副会長がふらふらついて行っちゃうのもわかるけど。どろどろの三角関係も悪くないな」

「じゃあ、わたしも参加してみようかな。おもしろいことになりそうです」

「やめといたほうがいいと思うけど。会長に八つ裂きにされかねない。白谷さんもまだ死にたくないでしょ」

「——そうですね、女の痴情は怖いです。もし副会長が部室で後ろから刺されるようなことがあったら推理も簡単でいいんですけどね」

「高校生で愛憎劇とは……。現実メロドラマよりも複雑だな」

「いいなあ、愛し愛される関係ですか。わたしもやってみたいなあ」

「……白谷さん、意外とディープだね」

「そうですね？」

とぼけた表情をしている結衣を見て、この後輩はいつか教師との交際なんかをやってしまうのではないかと神崎は危惧した。今のうちに思考を強制しておかないと危ないかもしれない。

「こんど純愛映画でも見に行こうか。いたってノーマルなやつを」

「デートですか？」

「いや、教育だ」

結衣が首をひねった。

そのときひととき賑やかな音楽が流れはじめた。軽音部の演奏が
はじまったわけではなく生徒会が放送しているものだ。今はやりの
JPOP。サビだけではなくイントロから流してしまうあたりが面
倒くさい。

5分近くにも及ぶ前奏が終わるとようやく結果発表の段階になっ
た。こころなしか副会長の顔色が悪い。会長に尋問され続けていた
せいか、それとも裏から氷川の脅迫じみた言葉を投げかけられてい
るせいか。

どちらにせよいますぐ逃げ出してしまいそうな表情をしていた。
「えー、只今より探偵同好会VS怪盗同好会の対決の結果発表をい
たします。お互いに全力をとして戦った結果――」

生徒会の役員が、メモを読み上げながらマイクに声を吹きこむ。
体育館にいやおうなしに響きわたる音声。

「それぞれ2ポイント獲得ということで、引き分けになりました。
まさに激闘と呼ぶにふさわしい素晴らしい対決だったと思います。
両者の健闘をたたえて、温かい拍手をお送りください」

まばらにはじまった拍手がすぐに会場を包み込む。

会長は不服そうな表情をしていたが、頭を深々と下げた。となり
では氷川と、怪盗同好会の面々がお辞儀をしている。

探偵も怪盗も観客から喝さいを浴びる存在であるならば、礼儀を
かかすことはできない。とくに怪盗に関しては厳しすぎるほどマナ
ーを守るのが美学だ。そうでなくては優雅な所業とはいえない。

「なお、引き分けだったため勝負は明日に持ち越されます。イベン
トの情報については随時報告していきますので、期待してお待ちく
ださい」

ふたたび拍手。

どうやらイベントは想像以上に注目されていたらしい。最後の逃
走劇が評判だったということもあって、客の評価は上々だった。

結果発表が終わるとすぐさまステージの上にあった会長たちの席
が片づけられ、ほかのグループの企画にまわされる。文化祭は過密

スケジュールなのだ。一秒の遅れが大きくひびいてくる。

追い出されるようにしてステージをあとにした探偵と怪盗たちは、ひとまず自分たちの部室へ退散することにした。明日も忙しいことになりそうだ。

「瞳、どうしよつか。いまからでも時間は大丈夫そうだけど」

結衣が別れぎわに仮面をつけたままの瞳に声をかけた。

怪盗同好会のほうはパーソナルデータを明かしたくないということとで素顔すらも隠している。もつとも、会長である氷川は隠そうともしていない。面が割れたくらいではなんの問題もないということだ。

「べつにいいけど——結衣怒ってないの？」

「どうして？」

「だってあたし結衣のことだましちゃったし……」

「いいよそのくらい。わたしも瞳にやられたって思ったときちよつとたのしかったもん。こつちも捕まえるときにウソついちゃったし、おいこだよ」

「そっか」

仮面の下から聞こえる声は明るい。

「じゃあ、またあとでね」

「うん」

結衣と瞳は互いに手を振りあつて離れた。

部室にもどると、会長は真つ先に神崎に声をかけた。はずんだ口調。すぐにでも踊りだしそうなくらいだ。

「誠くん、うちの期待に見事にこたえてくれたわね。ライオンは我が子を崖からおとして教育するっていうから厳しい態度をとったけど、その逆境こそが誠くんを強くすると信じてた。それでこそエースピッチャー、ひいては探偵同好会の一員よ」

「ありがとうございます」

端正な顔をはにかませる神崎。

「追いかけてこで犯人を捕まえるなんてまさに誠くんらしいやり方

ね。探偵というよりは刑事だけど、それでも全然かまわないわよ。推理小説にはそういうキャラクターも必要だからね」

会長が背伸びをして神崎の頭をなでる。

汗でまだすこし髪が濡れていたが、気にしない。今日のヒーローは間違いなく神崎だ。

「やめてくださいよ、恥ずかしい」

「そういわないで受け取っておきなさい。うちが誠くんを褒めるのはこれつきりかもしれないんだから」

「これからも期待にこたえてみせますよ」

「大口をたたいてちゃって。いつもなら容赦なくぶん殴るところだけど、今日は許してあげるわ。精進なさい」

「はい」

神崎があごをひいた。

会長は続けて咲を見た。

「咲ちゃんも最初はどうなることかと思ったけど、結局戦況がわかりやすくなってよかったわ。最後はラッキーな逮捕劇もあったことだしね」

「あそこで逃げられなければあたしたちの勝利だったんですけど。すみません」

「謝ることはないわよ。十分な活躍だったから」

会長が首を振って否定する。

咲は相変わらず申し訳なさそうな表情をしていたが、副会長を見てなにか元気を取り戻したようだった。

「結衣ちゃんはあると一歩だったわね。先制パンチをはなったのはよかったんだけど」

「まんまとやられちゃいました。次は気をつけます」

「でもまあ、期待通りといえば期待通りの活躍だったわね」

そして、副会長の番がやってきた。

氷川から解放され、リラックスしきった表情をしている。ただ、こころなしか白髪が増えていっているようにも見えた。

「健輔、あんたはいつたい何をやってたのかしら。報告にもずつとああ、とか、うん、としか答えないし。お化け屋敷がそんなに怖かったの？」

「怖くはなかったさ。——その、ちょっと途方に暮れてただけで」「どうしてそんな心境になるのよ。ふつうに守っていただけでしょうが。それになぜか怪盗同好会からの攻撃もなかったし、あんた美保になにか言ったの？」

「そんな卑怯なことはしていない、神に誓って」

「じゃあ、なにが起こったっていうのよ」

「さあな」

すつとぼける副会長。さきほどからずっとこんな調子で、会長をけむに巻いている。なにやら隠しているらしいことは明らかだったが、とくに落ち度も見当たらないので攻略法がないといった感じだ。「あとで瞳に聞いてみますね」

結衣が口をはさむと、副会長の顔から血色が引いていくのがわかった。

あからさまに動揺している。会長が口元をゆがめた。

「結衣ちゃん、洗いざらい全部聞いてきちゃってちょうだい。報告はみんなの目の前で行うこと。健輔になにをされようともやめちゃだめだからね」

「わかりました」

元気よく返事をする結衣。

「……白谷くん、君はたしか昼ドラのような展開が好きだったような気がするんだが？」

副会長がおずおず尋ねた。

「そうですけど」

平気な顔をしている結衣。副会長は懇願するように結衣の目の前でひざまづいた。

「第3次世界大戦を起こしたくなかったらぜひともなにも話さないでくれ。ぼくはまだ死にたくない」

「構わないわ、どのような手段を使っても聞きだしてきなさい」

「ああ……」

頭をかかえ、狂った館に住む老人のようなうめき声をあげる副会長。このまま灰になってしまいそうだ。たとえそうなっても、会長の息吹によつてはるか遠くまで飛ばされそうだけだ。

それから会長の講評はしばらく続き、ようやくのことで解放されたときには、瞳が時計を見ながら待っているところだった。

これからいっしょに文化祭を回るのだ。

「ごめん、会長がずっと話してて……」

結衣が走って駆けつけると、瞳は結衣の頭をなでた。

「あたしのほうも部長がけっこう怒っててさ。ついさっきまでお説教されてたところだったんだよ」

「そうなの？」

意外だった。

氷川が怒声をあげている光景は想像しにくい。いつも静かに笑っているような人だと思ったのだが。

「ああ見えてけっこうアツい人でさ、探偵同好会にだけは絶対負けるなっけきとばしてたんだよね。それが惜しいところで勝利を逃したっていうからもうカンカン。最後に転ばなければ勝てたじゃんってさ。それにもうひとつ惜しいこともあったしね」

「副会長のこと？」

「そう。そっちの副部長さんね、うちの先輩にみごと誘惑されちゃつてお化け屋敷をエスコートして歩いたんだって。そのときどさくさにまぎれて黒い布をケースの上にかけておいたんだけど、逆に落ち込んだじゃってこっちの目論見はまったく達成されなかったって話」
「うす暗いお化け屋敷で黒い布をかぶせておけば、暗闇に溶け込んでなくなつたと勘違いするもんね。それで副会長あんなに元気がなかったんだ。最後には気付いたみたいだけだ」

「そう。慌てていもしない犯人を追ってその場を離れてくれると思つただけど、なかなか上手くいかないものね。ずっと見張ってた

のに、うなだれるばかりで動こうとしないんだもん。きっと生きた心地がしなかっただろうね」

瞳が笑う。

「きつといまも生きた心地はしていないと思うよ」

「どうして」

「会長がわたしに副会長の隠し事を暴いてこいっていうもんだから、副会長すぐく焦ってた。このことを話したらどうなるかな？」

「うーん……よくわかんないけど、大変なことになるんじゃない」

「まあ、そうだよな」

こんどはふたりで声をそろえて笑う。

「やめておいたほうがいいかな、会長に話すの」

「そうだね。平和を望むならそのほうがいいかも」

「じゃあ、このことは聞かなかったことにしようっと」

結衣はスキップして、スカートをひるがえしながら一回転した。

ホームズのコスプレはまだ着たままだ。すれ違う人々はちよつと目をとめるばかりで、あまり気にする様子はない。

それよりも容姿のいい二人組が連れ立って歩いていることに好奇心を寄せている男子のほうが多いくらいだ。

もちろんそんな視線は気にせず、結衣と瞳は談笑しながらアトラクションを回り、それから食べていなかった遅めの昼食をとり、クラス企画に顔を出したりした。

残念ながら教室にこもって接客にいそしんでいたクラスメイト達は探偵と怪盗の戦いを知らなかったが、それでも別にかまわないと思った。

推理するだけが名探偵だけじゃない。

ハッピーエンドな結末が名探偵なのだ。

翌日もよく晴れわたった朝が出迎えた。

日曜日ということで2日目の文化祭はさらに盛況で、朝からせわ

しない空気が学校を包んでいる。準備のために早朝から登校している生徒たちは、こわれた備品の修理や、台本の改良などで忙しそう

だ。
肌寒さを感じながら結衣が部室のドアをあけると、会長が慚然とした表情で腕を組んで仁王立ちしていた。

「どうしたんですか」

結衣が鞆をおきながら声をかける。

昨日の反省を生かして、マフラーと手袋、それに使い捨てカイロも用意してある。どんな勝負が待ち受けていようと、寒さには負けられない装備だ。

「今日さ、すごくにぎわってるじゃない」

「そうですね」

「生徒会も予想以上の人出で、ほかに手が回らないんだって。だからうちの勝負は昨日もやったし、今日は規模を小さくするんだと」

「はあ」

「それで部長同士の一騎打ちをするってことになったの。信じられる？　どんだけ馬鹿にしたら気がすむのかしら。うちがながしるにされてるってことよね、これ」

「たしかに」

会長が早口でまくしたてるので、結衣は適当にあいづちを打った。こういうときは素直にうなずいておくのが一番だ。へたに喋って噛みつかれるよりはいい。

「会長はなにをするんですか？」

「それがね、まだ教えてもらってないのよ。始まるまで秘密だって。どう考えても後回しにしようって魂胆よね。きっとまだなんの案も浮かんでないのよ」

「そうですね」

「そうよ。せっかくこんどは部員全員で完全勝利を狙おうと思ってたのに」

会長がむくれながら乱暴に椅子にこしかける。

あとから結衣も椅子を引いた。

部室には5人分のホームズの衣装がハンガーにかけられている。

今日はこれを着る機会がなさそうで、結衣は残念に思った。もうすこしコスプレを楽しんでいたかったのだが。

「いつ開始なんですか」

「準備がととのい次第、呼びますだつてさ。脳なし連中つたらありゃしないわ」

会長はいまいましてに吐き捨てた。

「どうしてそんなに怒ってるんですか？ 会長同士の対決のほうがスツキリしていいじゃないですか」

「うちは生徒会の不手際に怒ってるのよ。引き分けなんて想定してなかったにちがいないわ。リスク管理の甘い奴ら」

「そうですね」

「あ、そうだ。健輔の件はどうなった？ ちゃんと調べられたの？」

「いえ、聞いたんですけど教えてくれなかったです。秘密だつていつてました」

しれつとウソをつく結衣。探偵の技術のひとつとして誘導尋問があるわけなのだが、結衣はとくに練習したわけではなく天性の演技力が備わっているのだ。

「あらそう、残念ね。本人の口を割らせたほうが早いかしら」

「色仕掛けですか？」

「馬鹿いわないの。仮にも女子高生なんだから。健輔とはそういう仲でもないし」

「残念です」

「なにが残念なんだか。そういうませたことばかり首を突っ込んでると、将来痛い目を見るわよ」

「じゃあ、気をつけます」

あまり真剣ではなさそうな結衣の応対に、会長は肩をすくめた。

「ほお、そんな風になったのか」

部室にきたときはトラの巣に向かうみたいに腰が引けていたのに、会長に真実が伝わっていないと見るや態度をひるがえし、くつろいでいる。

調子のいい人だ、と結衣は思った。

なんだか頭にくるから会長に告げ口してしまおうかと考えて、思考が咲に似てきていることに気づいた。さすがに周囲が敵ばかりでは副会長が不憫だ。せめてひとりくらいは中立がいてもいい。というわけで結衣は話さないことに決めたのである。

「そうよ。いつ来るのかしら」

「会長が負けたらどうするんですか？」

神崎が訊く。

探偵同好会の5人はもうとつくに集合していて、はじまっただばかりの文化祭の雰囲気味わっているところだ。昨日の興奮が冷めやらないかと思ったら、意外と冷静である。

それは、引き分けだったせいかもしれないし、勝負がまだ終わっていないからかもしれない。

「坊主にでもなんでもするわよ。ありえない未来の話をするのは時間の無駄ね」

神崎の質問に、会長がふてくされながらこたえた。

今日はシャーロックホームズの格好をしているのは結衣と神崎だけだ。そのふたりは毎日でも着そうな勢いで気にいっているので、イベントがあってもなくても関係なさそうだった。

「そうか。それはいいことを聞いた」

「文句あるの健輔」

「みなみが頭を丸めるというのも悪くないかもしれないな。イメチェンにもなるし」

「ふん、だ。絶対にあんたの隠し事を暴いてやるんだから、覚悟しておいてよね」

人差し指を突き付ける会長。

どこかで子供の笑い声がしていた。

2日目

生徒会の使者は12時を少しすぎたところに現れた。はじまるのが何時になるかわからないということで、会長以外は部室を離れて校内をまわっている。

本当は校則違反なのだが、みな隠し持っている携帯電話にメールをする。生徒会の目の前でメールを打つのは気が引けたが、べつにかまわないかと思いなおす。

どうせ同じ生徒だ。

数分後には、5人の部員がそろった。

「じゃあ、体育館に来てください」

そう言い残すと、生徒会の役員は誘導することもなく去っていった。ずいぶんと忙しそうだ。待っているあいだもせわしく足踏みをしていて、こちらまで焦らされる。

「なんかいやになるわね。12月でもないのに」

「僕たちにとっては師走よりも文化祭のほうが忙しいだろ。いや、それよりも期末テストか。そうになると12月のほうが忙しいな、うん」

ひとりでうなずく副会長。

それを咲が冷ややかな視線で眺めている。

「副会長はなにもしてないじゃないですか」

「いや、いろいろあったんだよ。これでも」

「だからなにがあったっていうのよ」

「いや、やっぱりなにもなかったと思う。最後まで平和なお化け屋敷だった」

「まったく」

ため息をつく会長。

結衣がくすりとほほ笑んだ。

「でも、お化け屋敷だと可愛い女の子に抱きつかれちゃうかもしれ

ませんね」

「……そんなことはなかったさ」

副会長は気丈に返事をしたが、一筋の冷たい汗が首を伝い落ちていくのを結衣は見逃さなかった。こうしてからかうくらいがちょうどいい薬になるだろう。

体育館ではなぜか一般人がステージの上に並んでいて、その横に役員の姿が見えた。怪盗同好会がいる気配はない。

「どこにもいないですね」

結衣が瞳を探しながらいった。さきほどまではいつしよに校内を回っていたのだが。

「あーいらっしやいましたか。どうぞこちらへ」

八百屋の店主みたいに頭を下げながら、役員がステージに会長を連れていく。ほかのメンバーは下で待機している。これからなにがはじまるのか、まだ誰にも知らされていない。

ステージに上がると、さっそくマイクを持った制服姿の男子生徒が司会だと名乗りでた。

元気な声がスピーカーから流れ出る。

「さあはじまりました頂上対決。昨日の激闘は引き分けに終わりましたが、本日は会長同士の一騎打ち、まさに探偵と怪盗のバトルだあ！ はたして勝負を制するのはどちらか、さあご注目！」

大喜利のような、プロレスのアナウンサーのような、その両方を混ぜ合わせたような口上。とにかくテンションをあげて喋っている。いいという適当な雰囲気だ。

まったくひどいMCね、と会長がちいさくつぶやく。

「バトルの方法はこちら！ 変装見破りクイズだあ！」

胸に数字をつけた十人近くの一般人と何人かの生徒が並んでいる。ステージに立って緊張した表情をしている人がほとんどだが、茶髪の少女二人は楽しそうに騒いでいる。

下から見たら短いスカートが丸見えなんじゃないかと、他人なのに心配してしまうほどの制服。霞ヶ丘高校のものではないから、ど

こか近隣の高校生なのだろう。

「この方々は我々が無作為に選んだ一般人ですが、ひとりだけ怪盗同好会の会長の変装した人がまじっていまーす！ それを見つけ出せば探偵同好会の勝利、見破れなければ怪盗同好会の勝利だあ！」

どよめく観客と、ひとりで異様に盛り上がっている司会。

会長はひとしきりステージにならべられた一般人たちを観察した。どれも大差ない反応だ。見た目だけではだれが氷川なのか見当もつかない。

「このなかにいるのよね」

会長が訊くと、司会は思い切りよくうなずいた。

「その通り！ さあ、選べるのはひとりだけ、あなたは誰をチョイスする！？」

方耳をふさぎたい気分だ。

それにしても生徒会のやつらは、ずいぶんと手を抜いたことをしでかしてくれたものだ。こんな数分で終わるイベントなど、最終対決にふさわしくない。

「けど、負けるわけにはいかないのよね」

会長は袖をまくって、ひとりひとり顔をのぞきこんでいく。

化粧でごまかせる範囲なら、女性である可能性が高い。けれども相手はあの氷川だ。顔かたちや声はおろか、身長や性別まで変える技術を有しているかもしれない。

「……………」

真剣なまなざしで表情をうかがう会長。

その横では司会がやかましく実況をしている。そうでないとなが持たないのだろうが、うるさくてかなわない。

十数人の顔をすべて見終えると、会長は首をひねった。

「分かんないわね」

「おーっと！ これは早くも敗北宣言か！ どうなる探偵同好会」ステージの下では、神崎が両手を合わせ祈っていた。

「どうか勝てますように……」

目をつぶり、神様に願う。そんなものは信じていないとかはこの際関係ない。どのような助けであれ、会長に勝利をもたらしてくれるならなんでもいいのだ。

けれども、神崎の横では会長と同じように結衣が首をひねっていた。

「分かりませんね」

「氷川さんの変装がかい？」

副会長が訊いた。

会長の恐怖からはなれていくらか気が楽そうだ。

「そうじゃなくて、この企画自体がです。いくらなんでもお粗末ですよ、これ。本当にわたしたちの、——会長たちのやりたかったことなんでしょうか。わたしはそうは思わないんですけど」

「仕方ないじゃないか。生徒会も忙しいんだろうし」

「いえ、忙しいのは仕方ないんですけど、こんなイベントを氷川さんが了承したとは思えづらくって。そこまでして勝負をつけたいのでしょうか。プライドを捨ててまで？」

「それは……」

言葉を詰まらせる副会長。

たしかに、いわれてみればその通りだ。勝利よりも大事なものがあることも、ある。

「そうかもしれないな」

「ですよ」

結衣の視線は、氷川がまぎれこんでいる一般人の列ではなく、会長の表情に向けられている。

その会長は、ふたたび首をひねった。

「ねえ」

司会に声をかける。

「どうしましたか？」

「もうやめちゃいましょうよ、こんなもの。名探偵のやることじゃないわ。まだなにも盗まれたわけじゃないのに、勝手に犯人捜して

くださいなんてふざけた話よね。そう思うでしょ？」

「はあ……」

会長の予想外の反応にとまどう司会者。どうしたらいいかわからないといった感じで、体育館を見回すが、もちろんアドバイスはもらえない。

「美保もこんなあほらしいこと意味がないってわかってるでしょ」

「そうね」

突然、大柄な男性から女声が聞こえてきた。

短髪にしたかつらを取り、かくしていた黒髪を下ろすと間違いなく氷川の姿になった。たったそれだけの変装で完全な別人になりきっていた。

「あんたそんな恰好してたの？　どうりでわからないわけだ」

会長が呆れていった。

「負けたくない気持ちはあったんだけど、プライド捨ててまで勝負にこだわる意味はない。怪盗の美学に反するからね」

氷川はそれから肩パッドとヒールをはずし、ぶかぶかになった洋服をながめた。

「これじゃただの仮装大会じゃない。そんなものジャンヌダルクにやらせておけばいいのよ。ホームズの仕事ではないわ。それに、怪盗の仕事でもない」

「そうよね。うちもおかしいと思ってたのよ」

「生徒会も墮落したものね。なにもわかつちやいないし」

「苦情を出してやろうかしら。第一、最初の勝負で決着をつけるようにしておけばよかったのよ。あれで引き分けなんてしっくりこないわ」

「ほんとに」

どうしたらいいかわからず突っ立っている司会をよそに、両会長はマシガンのように途切れない会話を展開する。ひとしきり喋り終わったあと、司会と同じように困惑した一般人たちに向きなおった。

氷川が司会の手からマイクをそつと盗み出す。

「お呼びしたくせに勝手に終わらせてしまつて申し訳ありません。ですが、怪盗同好会と探偵同好会はこのように引き分けという結果で了承しましたので、どうぞお帰りください。お手数をおかけしました」

どうぞ、と会長が一般客たちを誘導する。

話し合ったわけでもないのにみごとなコンビネーションだ。

「結衣」

と後ろから声がかかったので振り返ると、瞳の姿があつた。

ほかに怪盗同好会らしき人影は見当たらない。どうやら瞳だけでやつて来たらしかった。

「やつほー」

「やつほー、つていつてる場合じゃなくて、大変なことになつちやつたね。あたしはなんとなくこの結末も想像してたけど。部長は黙つてイベントをはじめちやうしさ」

「え？ 瞳知らなかったの？」

「部長、引け目があるのか誰にも告げずにひとりで体育館に行つちやうんだもん。美学に反するから後ろめたい気持ちだつたんだと思う。部長はいつも美学、美学つてうるさいから」

「それうちの会長と似てるかも。会長も名探偵のおきてがどうのこうのつてよくいつてる」

「あたしはまだよくわからないんだけど、美学つて大事らしいよ」

「そうそう。推理を披露するときはさて、からはじめなくちゃいけないとか、いろいろルールがあるんだつて」

「そつえば部長も『予告状を出さないなんてありえない！』つて叫んでた。今回はイベントだから仕方ないつてあきらめてたけど」
ステージ下でも繰り広げられるガールズトークはとどまるところを知らない。

慌てて生徒会の役員が収集をつけようとするが、主役である会長ふたりがすっかり乗り気でなくなつてしまつたのでどうしようもな

かった。

マイクを奪い取った氷川がうまく言い訳をつけて、そのまま優雅に歩いて体育館のそとへ出てしまった。会場は狐に包まれたような空気になっていた。

けれども、氷川の言葉には妙な説得力があつて、騙された気はしない。むしろ生徒会の不手際を恨みなくなつてしまふくらいだ。

「はい、今日はこれで解散！ 好きにしていよいよ」

会長がゆうゆうとステージから下りてくる。悪びれた様子はなく、それどころか清々した表情をしていた。

「勝負はどうなったんだ」

副会長が代表して聞いた。

「どうもなにも、引き分けでいいんじゃない？ また来年にやればいいんだし。そのときは咲ちゃんに任せるけど」

「それでいいのか。あんなに勝ちたいっていつてたのに」

「目的を見失つていたのよ。見当違いな土俵で戦つても仕方ないわあつけからんといつてのける会長。」

「だからおしまい。むしろ、勝負はつかないほうがいいのかもしれないわね。怪盗と名探偵、探偵が勝つたらそこで物語はおしまいなもの。何度も脱獄するようじゃカッコがつかないわ」

「みなみがそれでいいなら、こちらは構わないけどな」

副会長が後ろにひかえる部員たちを見回すと、いちように力強くうなずいた。

会長が相好をくずす。冬の空のような笑顔だった。

「解散、解散！ 文化祭を楽しみましょう！」

会長が明るく宣言した。

「それなら、会長たちをふたりつきりにしておく必要がありますね」
そういつて咲が神崎を引っ張つていく。神崎はニヤニヤしながら咲といっしょに体育館のそとへ出ていった。それから結衣も意味深長な微笑を浮かべて瞳と歩きだす。

「変わったな、みなみ」

と副会長がつぶやいた。

長身の副会長の顔を、会長が見上げる。

「そうかしら」

「それだけ成長したってことだ。世界には、求められていない勝負
つてもものもあるのかもしれないな」

「どこかに解決しないほうがいい事件があるのと同じように、ね」

ただ、ふたりで文化祭を回ると冷やかされるので、すこし離れて
歩いた。

2日目（後書き）

これにて10月編はおしまいです。
長くなりましたが、読んでいただきありがとうございます。

奇妙な死体

人が死んでいる。

部室のまん中で、髪の毛の長い女性が血を流して倒れていた。背中にはナイフが深々と突き刺されている。犯人の姿はない。

「……え？」

副会長の絶叫にも似た悲鳴が遠くまで響き渡った。

「……それで？ 女々しい悲鳴を聞きつけてみれば、あんたが腰を抜かして倒れていたってわけ？」

「みなみだって驚いていたじゃないか。眼に涙をうつすらと浮かべながら——その、抱きついてきたわけだし」

「あ、あれはちょっとバランスを崩しただけで、別に抱きついたわけじゃないから！ 変な誤解しないでよ！」

顔を真っ赤にして否定する会長。耳たぶのふちまで赤く染まっている。

「だいたい健輔が悪いんじゃない、死体だ、死体だって怨霊みたいにつめくからびつくりしちゃったのよ。そうでなければこんな状況にならないわ」

「僕だって好きでこうなっているんじゃない。それに、そろそろ僕から離れてくれると嬉しいんだが。腕がしびれそうだ」

「うるさいわね、そんなに重たくないでしょ。健輔よりは軽いわよ——たぶん」

副会長の、身長は高いがもやしのように細い体軀を見て、会長はため息をついた。

「健輔がもつとたくましい青年だったらこんなことにはならなかったのよ。これからはまいにち腕立て、腹筋、背筋、体幹トレーニングをハードにこなして。目標は誠くんを超えることね」

「それは無理という話だ。僕にそんな根気はない」

「この大馬鹿！」

まるで子供が遊んだ後にほったらかしに置いていった人形が重なっているような恰好で、会長と副会長は床の上に折り重なっていた。副会長が下で、会長はちょうど覆いかぶさるような体勢だ。

ふたりの目の前にある探偵同好会の部屋のドアは閉じられている。副会長が逃げようとして腰を抜かしたときには開いていたのだが、悲鳴を聞きつけあわてて駆けつけて来た会長が倒れこむ拍子に閉じてしまったのだ。

ドアにかけられていた看板の揺れは止まっており、ふたりが動けなくなつてからすでに数分が経過していることを物語っている。

「とにかくだ。はやいところどちらかが動けるようにならないとまずい。この痴態を後輩たちに見せるわけにはいかない。とくに結衣くんには絶対に見られてはいけない」

「そうね。それは同意するわ」

力強くうなづく会長。

かろうじて片腕をついて体を起こそうとするが、力がはいらず、すぐにまた倒れこんでしまう。倒れた先には副会長の頼りない腹筋が待ちうけている。

「ぐふっ」

力ないうめき声が漏れる。

「あら、ごめんなさい」

会長がわざとらしく口に手をあててほほ笑む。恨めしげな視線をむける副会長の呼吸はあらう。

「それにしても不思議なものね。まったく力が入らないわ。立てそうにもないし」

「いい加減にしてくれ、追い打ちをかけたのはみなみだろう。君がどいてくれないと僕も起き上がりようがない。全体重をもってヒップドロップをかましてくるようなことがなければ僕は今ごろ回復できていたはずだからな」

「んなわけないでしょ、健輔はヘタレ健輔のままよ。うちがなにかしようと変るはずがないわ」

「そんなことはない」

「ある」

「あつそ」

会長がぶいと顔をそむけると、副会長はなんとか視線を向けて左腕につけられた腕時計を確認する。

「――まずい、非常にまずい」

その針はもうすぐ結衣たちが来る時間であることを指し示していた。つまり、終業のチャイムが近いのだ。残りはもう数十秒というところである。

律儀に足をすすめる秒針の動きが、いやに素早く感じられる。

「しっかりしてよ健輔。倒れたのはあんたのほうが先でしょ」

「みなみと大差ないだろ。這つてもいいから離れたいんだが四肢が動かない。金縛りにあつたみたいだ」

「筋肉が足りないのよ、筋肉が」

「なら、みなみがどうかしてくれ」

「か弱い女子にないを期待してんのよ。あんたいちおう男でしょうが」

いい争っていると、授業の終わりを告げるチャイムが無情にも鳴った。いつもは早く聞きたくてしょうがない音が、今ばかりは死刑宣告のようにも思える。

たまたま3年生の授業が早く終わったため、一番のりを果たそうと副会長が意気込んで部室の扉をあけると、見慣れない血まみれの死体が目に飛び込んできたのだ。驚いた拍子に腰を抜かして尻もちをつき、そのまま動けなくなってしまった次第である。

さらにいつもなら遅れてくる会長も、まだ授業中のため購買部が開いていないということで早めに部室に向かっていたのだが、どこかで聞いたことのあるような悲鳴を耳にしてあわてて駆けつけた。

そうして副会長と同じ顛末を迎えたというわけである。

だから本来の時間通りに結衣たちがやって来るのはごく明白であり、いくら時間にルーズな部活とはいえ誰かが部室にやって来るという事実はすぐそばに迫っていた。

「まいったなあ」

副会長がぼやく。

どうにかしなければならぬのは分かっているが、どうしたらいいのか分からないといった感じた。ずれた眼鏡を戻すこともできない。

「ああもう！」

会長がわずかに動く手足をじたばたと揺らす、とくにこれといった成果もなく結果的に副会長の着ているダッフルコートのボタンをはずすだけであった。

さらに、すこしだけスカートがめくれ上がり、会長の白い太ももがあらわになる。

そのことに気づいた会長が懸命に隠そうとするが、被害はさらに大きくなるばかりだった。もうやめてくれ、と副会長の懇願する声。「だって、これじゃうちが変態みたいじゃない！」

「不可抗力だ！ 僕もみなみも変なこととはしていない」

「そんなこと知ってるわよ、けど誰かが来たら絶対に勘違いするでしょ。しかもうちが健輔を襲ってるみたいじゃない、この格好は」

「実際にそうだろう、みなみが追い打ちをかけたんだから」

「いや、そんなの絶対にいや！」

ぼとん、とかばんの落ちるにぶい音がした。眼を大きく見開いて会長と副会長が音の正体を見上げる。スラックスの黒い裾が目に入った。

「……あ、すみません。邪魔しちゃったみたいです。おれはなんにも見てませんし、聞いてませんから。どうぞごゆっくり」

神崎がきびすを返してその場を立ち去ろうとする。声が見ように上ずっていた。

「違っの、誠くん！ お願いだから話を聞いて！」

「いえ、おれは関係ないです。さすがに廊下でそういうことをするのは、ちよつとどうかと思いますけど。ふたりが合意しているならいいんじゃないですか」

「そういうことじゃないんだ。頼むからはやまらないでくれ」

副会長が必死に手を伸ばそうとするが、体が動かない。

「せめて部室のなかのほうがいいと思います。廊下は目立ちますから。では」

「待てっていつてるでしょ！ これには事情が」

「あまりに副会長が奥手なので会長がしびれを切らしてしまったんですよね。わかります。そのくらい強引じゃないと進展しませんもんね」

「誠くん、僕は君がなにをいつているのか理解したくないが、それが間違っていることは確かだぞ」

「副会長も、ここで頑張らなかつたら男じゃないです。どうぞ大人への階段を駆け上がってください」

「結衣ちゃんみたいなことをいつてんじゃないわよ。うちと健輔はそういう関係じゃないんだから」

「これからそういう関係になるんですよね。今日の部活はないって児玉と白谷さんには伝えておきますから、ごゆっくり」

「待つんだ、誠くん！」

そのとき、廊下のかどから結衣がひょっこりと顔を出した。

一瞬、時間が凍結したように停止する。結衣の視線が倒れている二人のからだをすみずみまで観察し終わるまで、さほど長い時間はいかなかった。

「結衣ちゃん、これは――」

「会長。わかってます。わたしはちゃんとかってますから。コウノトリが来ないようにだけ気を付けてください。ささ、神崎先輩、邪魔者は退散しましょう」

「そうしよう」

会長と副会長の制止にもかかわらず、結衣と神崎は意味深なほほ

笑みを残してその場を去っていった。

空虚な沈黙がおとずれる。

副会長が、ぼそりとつぶやいた。

「終わったな」

「そうね」

「これからどうしようか」

「このまま石像のように動かないで一生を終えるのも悪くないと思えて来たわ。健輔は？」

「死地にむかう兵士の気分だ。この戦いが終わったら結婚しよう」

「そうね、それもいいかもしれないわね」

かわいた笑い声は、ふたりぶんだ。

「短い人生だったけど、なかなか楽しかったわ。さよなら、健輔」

「僕はもう疲れたよ、みなみ……」

「なにやってるんですか、ふたりして」

シリアスな雰囲気が流れるなか、つららのように鋭く冷たい言葉が降ってきた。まぶたを開けなくてもわかる、咲の声だった。

「幻覚かしら」

「そうかもしれないな」

「——頭でも打ったんですか？ エイプリルフルにはまだ早いですよ」

そのときばかりは、咲の姿が観音様のように感じられた、と後に副会長は語っている。

奇妙な死体（後書き）

大変長らく更新期間をあけてしまい、申し訳ありません。
こんな時節ですが、みんなで頑張っ て行きましょう。

密室

「死体が転がっている？ このなかにですか？」

咲に起こしてもらった会長と副会長がうなずく。

ふたりとも腰や腕をおさえている。寝転がった体勢をもとにもどそうとした時にあちこちぶつけてしまっていたのだ。

「そんなことあるわけないじゃないですか」

咲が呆れた顔をした。

「ここは学校ですよ？ そんな推理小説みたいにいきなり死体が転がっていたら大事件です」

「でも、ほんとうにあつたんだから！」

会長が憤慨する。

「そうでなきゃ、あんなことになってないわよ」

「会長たちがイチャイチャしたかっただけじゃないんですか？ 見てて暑苦しいくらいでしたし」

「んなわけないでしょ。どうして健輔とイチャイチャしなくちゃいけないのよ」

「それは、まあ」

うんざりした表情の咲。

探偵同好会と書かれたプレートのかかったノブに手をかけると、ひと息にドアを開けた。会長と副会長は目をつぶって部屋のなかを見ないようにする。

「——あれ、ですか」

咲の声はいたって冷静だ。

会長がそろりと目をおおっていた右手をどかせると、そこには血まみれになっていた死体が転がっていた。背中につき刺されたナイフ、床にこびりついた黒っぽい赤色の液体はさっき見たときと変っていない。

部屋の中央、長テーブルのそばに横たわっている死体は、よく見

ると女性のものだった。長い茶髪。まるでホラー映画に出てきそう
だ。うつぶせに転がされた彼女の顔はうかがうことができないが、
制服ではない服装は、学校の生徒でないことを物語っていた。

それに、手袋、黒いストッキングと、肌の露出がまったくない。
「たしかにびっくりするかもしれないね、初見だと」

咲は臆する様子もなく死体に近づくと、その髪をつかんだ。副会
長が小さく悲鳴をもらす。

抵抗はなかった。

咲が髪をにぎった手を引き上げると、そこには安っぽい草らが
浮かんでいた。手入れをしていない寝ぐせのように荒んだ髪質。す
こし注意していれば、すぐに偽物と見破れる。

「――やられたわね」

会長が唇をかみしめる。

「マネキンですね。服からなにまで、ぜんぶ安物です。誰がこんな
いたずらをしたのやら」

死体ではないとわかると、安心した副会長がマネキンを抱え起こ
す。その体重は思ったよりも軽く、貧弱な副会長の腕力でもすぐに
持ち上げられた。

それから会長が死体に扮した人形を探って、次々に服を脱がして
いく。それらをていねいに畳んでテーブルに並べると、一通りのフ
アッションがそろった。どれも安価な量産品で、これといった特徴
もない服だ。

そのへんの量販店で買えば、高校生の小遣いよりも安い値段でそ
ろえられるだろう。

「血のりも絵の具ですし」

咲が顔をしかめて床にこびりついた液体をなでる。すでに固まり
きってしまった赤い池は、すこしこすったくらいでは落ちそうにな
かった。雑巾でこそぎ取るしかないだろう。掃除が大変だ。

「ナイフは偽物のようです」そういつてから、咲は柄だけのナイフ
を引き抜く。「接着剤で洋服に固定されていたみたいですね」

「ええい！」

会長は乱暴な手つきで椅子をひくと、脚を壊しそうないきおいで座りこんだ。眉間に深いしわが寄っている。

「いい度胸じゃない、こんな大業な嫌がらせをしてくるなんて。うちらが探偵同好会だと知つての狼藉なら許すわけにはいかないわ。地球の裏側、北極南極、月でもどこまでも追いかけていつて土下座させるまであきらめないわよ」

その声はかすかにふるえている。

「くだらない、いたずらですよ。あまり力つかないでください。あまり怒り過ぎると心筋梗塞で倒れちゃうかもしれませんよ」

「犯人を捕まえない方がストレスになるわよ！ 誠ちゃんと結衣ちゃんとはとくに帰っちゃったし、もしこれが全校に広まりでもしたら、もうお嫁にいけないわ」

「副会長に嫁入りすれば万事解決ですね」

「そういうことじゃないの！」

会長が怒鳴り散らす。

その横では副会長がしげしげとマネキンの死体を観察していた。ために片腕を持ち上げてみると、意外とスムーズに動く。これなら服を着せるのにはさほど苦労しないだろう。

「このマネキンはどこに置いておくべきだろうか。部屋に放置しておくのもなんだか不気味だしな。夜中に動き出して勝手に立ち去りそうな気がする」

そういつてから副会長はなにかに気づいたようにポン、と手を打った。

「そうだ、きっとそうだ」

「なにがよ？」

「この学校ではひとりでマネキンや保健室の骨格標本が動くにちがいない。そして幽霊やおばけ同士の抗争のすえに部室で殺されたんだ。霞ヶ丘高校にはなにかしらパワースポットのようなものがあるにちがいない、英国のストーンヘンジやマチュピチュみたいに」

オカルト好きの副会長があつい口調で自論をかたつた。

「んなわけないでしょ、馬鹿じゃないの？」

冷たくつきはなす会長の視線は、刺すようにするどい。

「第一、こんな大きなマネキンが学校のどこに置かれていたっていうのよ。見たところ美術で使うような石膏でもないし、うちにはフアッション部なんてものはないし、邪魔くさいマネキンが放置されている理由がないもの。いま部室にあるのだって目障りじゃない？」

「怒り半分、真実半分ってとこだな。たしかに、マネキンがどこから来たのか気にはなる。よもや冥界かもしれんな」

「閻魔様の使いですか。副会長を迎えにきたならいいんですけどね」
咲が折りたたまれたマネキンの洋服をかさね、ほこりのつもった戸棚の上におく。はだかになったマネキンはギリシャ彫刻のように虚空をにらみつけている。ただ、その背中に赤い血色は見受けられない。どうやら絵の具は服だけに染みついているらしかった。

「水性絵の具みたいですね、血だまりをつくりやすいようにということでしょうか」

と咲はつぶやいてから、

「まだ油性じゃなくてラッキーだったというべきでしょう。油性だったらこびりついて取りにくいところでした。不幸中の幸いですね」とすこしあわてたようにつけ加えた。

床にはりついた血だまりをふき終わった雑巾のちぢれた毛のさきに、赤い染料がしみついている。咲は窓をあけると、しめった雑巾を風通しのよい場所に干した。

11月のつめたい風が流れ込んで、会長の髪をわずかにゆらす。

「さむいわね」

「閉めましょうか？」

「いえ、臥薪嘗胆、この屈辱を忘れないためにも開け放しておいてちょうだい」

「そうですか。すぐ忘れた方がいいと思いますけどね」

「咲ちゃんは悔しくないの？」

会長がなじるように尋ねた。咲は目を細めて、

「あたしはべつに腰を抜かしたりしてませんし、雑巾がけをするくらいしか不利益を受けていませんから犯人になんのうらみもありません」

「部活の長である部長がはずかしめを受けたんだから、探偵同好会全体の赤っ恥だとおもいなさい。咲ちゃんも例外じゃないんだからね」

「そうですか」

咲がそっけなくこたえる。

自分の身の丈よりもすこしばかり大きいマネキンのなめらかな肩を見上げ、それから会長のほうへ顔を向けた。

「ところで、これの処分はどうしましょうか。部室においておけるほどゆとりはないですよ」

「捨てちゃダメよ、重要な証拠品なんだから。ほんとうは絵の具や洋服もそのままにしておきたかったんだけど、こんど来たときに結衣ちゃんや誠くんが驚いたらいけないからと思って許可したのよ」

「うそつけ」

と副会長が小さな声でつぶやく。今現在とてつもなく不機嫌な会長に聞かれたら噛みつかれるだけではすまないかもしれない。

「あのふたり、呼び戻さなくていいんですか？」

咲がきく。

会長はストラップのついた携帯電話をとりだすといくつかボタンを押し、耳にあてた。すこしの間のあと、顔をしかめて耳元から離す。

「誠くん、出もせずに切りやがったわ。こんどは電源を切ってることでしょうね。結衣ちゃんもきつといっしょにいるから、同じように応答しないと思うわ。いい度胸よね。明日までに絶対事件を解決してぎゃふんといわせてやるんだから」

「ぎゃふん、は死語ですよ会長」

「構いやしないわ、そんなこと。レトロなものにこそ価値があるの

よ」

乱暴な手つきで携帯電話をとじるとスカートのポケットにしまう。霞ヶ丘高校では携帯電話の所持は常識であり、先生に見つからなければいいという信念のもとあちこちで使われている。

昼休みなどには堂々と教室のなかで携帯をいじる生徒も少ないのだ。

「この洋服、絵の具で汚れてしまっていますし、あたしが家で洗って来ましょうか。先輩たちに押し付けるわけにもいきませんし。はやいうちに洗っておかないといくら水性とはいえ汚れが落ちにくくなってしまうかもしれませんから」

咲が提案すると、会長は首を横にふった。

「だめよ、証拠品だっていったじゃない。現場の遺留品はそのままの状態で保存しなきゃ」

「科学捜査ができるわけでもないし、とっておいても必要でしよう。へんに本格を気取らないでください」

「うるさいわね。探偵の基本よ、基本。証拠品を破棄するだなんていちばんやってはいけない展開だわ。それが犯人のトリックだったら別にしろ、現場を荒らすのは一般人って相場なのよ」

「『まーた貴様らは現場を荒らしおって』『大丈夫ですよ警部、ほらこの通り』とかいって手袋を見せるのが名探偵ってやつだな」

会長の言葉を、副会長が受けついで広げた。

「ならいいですけど」

きれいに折りたたんでまとめた洋服を戸棚からおろそうとしていた手をとめると咲は、自分の鞆から推理小説をとりだし、しおりのはさんであった場所から読みはじめた。

「咲ちゃんの鞆、いつもと違うくない？」

会長がたずねる。

たしかに咲の鞆は大多数の生徒が使っている学生鞆ではなく、それより少し大きめのスポーツバッグである。咲がそれを使っている姿を目撃したことはほとんどない。

少しだけ目線を落として咲は、

「ちよつと授業で使うものが多かったものですから。教科書とか、体操着とか、いろいろ持つて来なければならぬものが多かったです。いつものだと小さすぎるので、それでスポーツバッグにしましたですよ」

「へえ、珍しいわね」

と、自分で聞いておきながら会長はあまり興味がなさそうな様子だ。

しきりに長テーブルの表面を爪でコツコツと叩いている。

そして思いついたように立ち上がると、部室のすみにおかれているホワイトボードを引っ張り出してきてマジックペンのキャップを外した。

「なにを推理しようっていうんだ」

副会長が抑揚のない声で問う。まだ腰が痛むのか、しきりにそのあたりをさすっている。

「なにも分からないけど、とりあえず書きだしていけばなにか閃くかもしれないわ。事件の記録を残しておくことにも使えるし、一石二鳥ってわけよ」

「事件といつても、洋服を着せられていたマネキンが赤い絵の具で彩られていたつてだけのことだろう。記録をとるほどのことでもない」

「健輔、あんたってやつは」

会長が黒マジックペンの先端を副会長の眼前につきつける。

「あんなシーンを結衣ちゃんたちに見られてしまったのはこの憎たらしいプラスチックの人形が原因なのよ。でも、人形に恨みを抱くわけにはいかないわ。ほんとうに悪なのは偽殺人現場をつくりだした犯人なんだから。それだから犯人を生きているのを悔やむほど痛めつけてやらないといけないわけ、わかる？」

「最後の部分以外は、納得した」

「結衣ちゃんたちも同罪ね。犯人と同じだけのバツを受けてもらう

わ

「それはやり過ぎだろう。とばっちりじゃないか」

「人の話を、こともあるうに部長の話を聞かないからいけないのよ。人数さえ足りていれば退部にしてやるところだわ」

副会長はやれやれと肩をすくめる。が、まるでさまになっていない。

会長はちよん、と副会長の額にペンを押しつけるとホワイトボードに部室の略図を書きはじめた。

大慌てで絵の具をふいたばかりの雑巾でおでこをぬぐっている副会長は目にもとめず、ただ一言「水性よ」とコメントする。

奥に細長い長方形の部室のなかに、次々と線がつけ加えられていく。ドア、窓の位置、マネキンの場所、それから雑然と置かれた家具の配置などが書きこまれた略図は、朝の電車のように混雑している。

「さて――」

会長はペンをおくと、腰に手をあてた。

「重大な事実が発覚したわけなんだけど」

返事はない。息の詰まるような押しつけ合いのすえに副会長がしぶしぶ口を開いた。

「なんだ重大な事実って」

「健輔、部室の鍵は持っているわよね」

「ああ、これだろ」

ダッフルコートのポケットから教室番号の記されたプレートのついた鍵をとりだすと、テーブルに放る。

「それから窓も閉まっていたわよね」

「さっき児玉くんが開けるまでは閉まっていたな」

「そして部員以外の人間が部室の鍵を持ち出すことはできないとなれば、答えはひとつよ」

「つまり？」

「ずばり、密室ね」

実に明るい笑顔で、会長は嬉々としてそう宣言した。

「前回、部活が行われたのはおととい。そのときには、当然血まみれのマネキンなんて置かれていなかったわ。うちが最後に鍵をしめたんだからそれは保証できるわよ。それから探偵同好会の部室に立ち入ることはできない。掃除は自分たちでする決まりになっているから第三者が勝手に入りこむなんてことはないし、部員以外は部室の鍵を借りられない規則になつてから、健輔が鍵をあけるまで誰も部屋の中には入れないはずなの。マネキンをのぞいては」

「まあ、そうだな」

副会長はしつくりこないようで、鍵をまわして遊んでいる。

ホワイトボードのまだ白い部分に大きく『密室！』と書くところの上から何重もの丸でかこむ。会長はグーにしたこぶしでボードを叩いた。

「これは不可能犯罪、密室トリックよ。部室に抜け穴でもあれば話は別だけど、残念ながらそんなものが存在しないのはうちがいちばんよく知っているわ」

会長の鼻息は荒い。

「この探偵同好会の膝元で密室犯罪なんていう大それたことをしてこれ以上にならない挑発をかましてくれたのはいいけどこの誰なのかしら。怪盗同好会のやつらかもしれないわね、もしかすると。完膚無きにしてやったものだから、恨まれてるのかも」

文化祭で取り行われた探偵同好会と怪盗同好会の因縁の対決は引き分けに終わったわけなのだが、会長の脳内ではどうやら都合のいいように変換がされているらしい。

この話を聞いたらほんとうに怪盗同好会から挑戦状をたたきつけられてもおかしくないな、と副会長は内心思う。

「まあ、ジャンルが違うわね。密室を突破することさえあれ、こんな悪趣味ないたずらをしていくほどプライドが低いわけでもないだろうし」

「動機から推測するのは難しそうな気がするな。なんといつても突

飛な事件だ。怪しそうな人物さえ浮かびあがってこない。そうなる
と密室の謎を解決するほかなさそうだ。こういう場合、トリックさ
え暴ければ犯人が特定できるというのが常だからな」

と、副会長。

「そうね。たしかに密室の謎を解き明かすほうが近道かもしれない
わ」

「でも、密室がそう簡単に破れるとは思いませんよ」

咲が文庫本から顔をあげていった。

「なにせ鉄壁の密室ですからね。どんな方法を使ったのやら想像も
つきません。こっそり部室の鍵を盗み出したとかなら別ですけど、
そうでなければマネキンを持ちこむだけの穴があるか、合鍵を持っ
ているか——」

「合鍵の線はないわね」

と会長。耳にかかった髪をなでつけ、副会長の向かい側の椅子へ
腰を下ろす。これで長テーブルを囲むように三人の部員がそろうこ
とになった。

「いくら学校の警備が甘いとはいえ一日でも鍵が紛失していれば日
直の先生が気づくはずだもの。それに部室の鍵を持っていくときには
専用の部員証と、名前を書かなくちゃいけないから、失くしてで
もないかぎり大丈夫よね」

「あ、そういえば」

と咲が申し訳なさそうにうつむいた。

「どうしたの？」

「あたし、昨日ちょっとだけ部員証というか、それのはいった財布
を落としてしまっていたんですよね。その日のうちに見つかりまし
たけど紛失している間に誰かに抜き取られて利用されている可能性
もありますね。っていうか、たぶんそうです」

「そうなの？」 会長は露骨に顔をしかめた。「それじゃ密室になら
ないじゃない。つまんないの」

「探偵の出る幕ではないな」

空いた窓から吹きこむ冷たい風に、副会長はダッフルコートのえりに首をうずめる。それからホワイトボードの『密室！』という文字を消し去った。

「これで事件は解決だ。盗人探しは探偵同好会の役割じゃない。どこかに警察同好会なんて便利なものはなかったっけかな」

「だめよ。たとえ密室でなかったにしろ、この忌々しいマネキンを運びこんだ罪を償ってもらわなくちゃ気が済まないわ。この片倉みなみをコケにした罪は重いんだから」

「無理ですよ、そんなの」

咲がふたたび小説に視線を戻す。

「無理なんて言葉、名探偵には通用しないのよ咲ちゃん」

「誰かがいつていました。『道のまん中に人が倒れている』という事件は、解決できない』って」

「だれがいったんだい、そんなこと」

副会長が訊くと咲はそっけなく答えた。

「忘れました。けどそんな感じのニュアンスだったと思います。大事なのはシンプルな事件ほど探偵の出番は少ないってことです。摩訶不思議、複雑怪奇、魑魅魍魎な事件こそ推理小説にはふさわしい」
「だから一連のハプニングのことは記憶から抹消するんだ、みなみ」
「どうしてよ。健輔は悔しくないの」

「僕は一秒でも早くこの現状を忘却の彼方に追いやりたいんだ。トラウマになりそうだから」

ろうとで覇気をこし取ったかのように元氣のない副会長の声。

「事件が迷宮入りしたということで、マネキンや洋服はあたしが処分しておきますね」

「今日はずいぶんと気が利くじゃないか」

副会長が驚いたようにいう。いつもは口を開けば皮肉か容赦のない毒舌がマシンガンのように撃ちだされているはずなのだが、いやに親切で、おとなしい。

「もしかして、病氣かなにかなのかい？」

「あたしだって少しは先輩たちを気遣うくらいはできますから。とくに今日はお気の毒なことになっていたみたいですし、追い打ちをかけるほど鬼ではありません」

「そうか。ありがたいな」

「じゃあ、持って帰りますね。ちょうど鞆も大きいことですし」

そういつて咲は戸棚の上においた洋服をスポーツバッグに手ぎわよく詰めていく。会長の畳んだ洋服はすぐにバッグへとおさめられた。

それから咲はマネキンを抱き上げてドアの横へと移動させた。

「ねえ咲ちゃん」

その様子を頼づえをつきながらなめていた会長が声をかけた。

「なんですか？」

「ちよつと気付いたことがあるんだけど、話してもいいかしらね」

「どうぞ」

表情を変えることなく咲は返事をする。会長はもったいぶって立ちあがると、家具の置かれていないわずかなスペースを徘徊しはじめた。

そして、人差し指を立てる。

「さて——」

会長の推理

「今回の事件はうちと健輔がマネキンの死体——まあ、死体に見せかけたものだけ——を発見することからはじまりました。現場の鍵は閉じられ、窓も閉まっていた。つまり、密室で起こった事件だったのです」

名探偵がなぞ解きをする時、敬語で話さなくてはならないというルールがあるのだと会長は常々語っている。ということは、これはなぞ解きなのだろうと副会長は推測した。

「なぜ私たちがこのボロツちい部室を密室だと認識するにいたったのか、それは部室の鍵を他人が借りることができないというひとつの事実からです。でも、現実には密室なんて面倒なものを用意するだけの頭脳をもった生徒はそうそういません。ましてや、悪趣味ないたずらをするようなやつが賢いとは思えません」

一人称まで『うち』から『私』に変わっている。会長は歩きまわる足をとめずに続けた。

「ならば、密室はどうやってつくられたのか。真相は簡単です。私たちが密室だと思うもの、それが密室になってしまうのですから——すこしの間がある。」

こういうときには相の手が必要なのだ、と副会長はとっさに判断した。声をかけなければ会長が不機嫌になるのは火を見るよりも明らかだ。

「どういうことだ？」

「つまり、勘違いだったのです。この部屋は確かに密室だったけれど、犯人にとっても密室であつたとはいえなかった。そうよね、咲ちゃん」

名前を呼ばれた咲はぴくつと体をこう着させる。そして、震える声で尋ねた。

「トリックがわかったんですか？」

「トリックもなにも、犯人が部員のなかにいたなら簡単な話だったのよ。普通に鍵を借りて、さっさとマネキンを運び入れて、鍵をかけて出ていけばいい。どうしてあんな血まみれの工作をしたのかは分からないけど」

「証拠はあるんですか」

もはや追いつめられた犯人は『証拠』という単語を口にしなければいけないという暗黙の了解があるらしい。それは咲にとっても同じことであった。

「よく考えてみれば不自然だったのよ。咲ちゃん、今日は妙に口数が多いし、いつもなら首を突っ込まないところにまで割って入って来るし。うちらが密室について議論しているあいだ、いつもの咲ちゃんなら読書を中断することなんてしないでしょ」

「あれは会長たちのことを思ってます」

「服をもつて帰るだとか、注意深い咲ちゃんにしては珍しく財布を落としただとか、なぜか咲ちゃんだけマネキンを見ても驚かなかったとか、いろいろ根拠はあるわよ。でも、これだけじゃ確実な証拠とはいえないわね」

「……………」

「咲ちゃん、あなたマネキンを持って帰るっていつてたわよね。どうしてそんなこといったの」

「それは、邪魔になると思ったので……」

「普通マネキンはショーウィンドウにあるような重たそうなものをお願い浮かべるわよね。まさか持って帰ろうとは思えもしないはずだわ。誠くんならともかく、咲ちゃんが運べるとは思えないもの。咲ちゃん、うちらがマネキンを立たせる時にもさわっていなかったし、そのあとにも触れていないのよね」

会長は、人差し指を結衣の目の前に突き付けた。

「どうしてマネキンが持って帰れるほど軽いのだと知っていたのか。それは咲ちゃんが犯人だからに他ならないわ」

「おおー」

副会長から簡単な拍手が送られる。満足そうな表情で会長は咲に近づく。

「教えてもらおうかしら、どうしてあんないたずらをしたのか」

脱兎のごとく、すばやい動きで咲はドアを開いて脱走しようとする。だが、その前に会長の不気味なほどの笑顔が行方をさえぎった。「逃がしはしないわよ」

咲はほかに逃げ道はないものかと周囲を詮索するが、会長がふさいでいるドア以外に脱出経路がないのをすぐに悟ると、名探偵に真相を明かされた犯人の大部分がそうするようにがっくりとうなだれた。

ぼつり、と自供をはじめ。

「ほんとうは驚かすつもりはなかったんです。あのマネキン、じつは文化祭で使ったものだっただけですけど誰も引き取らないものですから、あたしがとりあえず引き受けることにしたんです。でも、鞆も小さかったし、いちど部屋においてから準備をして持って帰ろうと思っていました。洋服を着たマネキンを見ていたら、なんだか無性に殺人現場に仕立て上げたくなって。文化祭では実際そういうふうに使われていたものだったので、ナイフも刺さっていましたし、あとは床に絵の具をまけば完成だったんです。ほんの出来心でやってみたら、ことのほかうまくいってしまって、片づけるのが惜しくなってしまったので、次の部活までとっておこうかと」

「そしたら、みなみが腰を抜かしてしまったというわけだ」

「あんたもでしょうが健輔」

会長が深々とため息をつく。

「財布を盗まれたっていうウソは、鍵の持ち出し記録をごまかすため。あれを見れば、犯人は一目瞭然ですものね。それに洋服を持って帰るための大きなスポーツバッグ。物おじしい態度。全部合点がいったわ」

「すみません」

咲が深々と頭を下げる。その肩を副会長がやさしく叩いた。

「まあ、悪気はなかったわけだし、許してあげようじゃないか」
「だめよ」会長の目は笑っていない。「これから罪を償ってもらうんだから」

恐怖に身をすくませる咲の耳元で、会長が何やらささやく。
名探偵の推理を動かないマネキンだけがじっと見守っていた。

「会長からの呼び出しですってね。いったいなんでしょうか」

旧校舎の階段をのぼる結衣の足どりは軽い。部室に近づくと、スカートがリズムカルに揺れる。

「どうせ昨日のことで怒られるんだろうけど、こっちは弱みを握ってるんだから問題ないさ」

結衣のとなりにいるのは神崎で、こちらは口元をゆがめている。
整った顔立ちにはつねに笑みを絶やさない。

「まさか会長たちがあんな破廉恥なことをしているなんて」

「いつかそうなるんじゃないかとは思っていたけど、過程をぶっ飛ばしすぎたな」

「強引な愛——それもいいですね」

「白谷さん、目がうつとりしてない？」

「だって素敵じゃないですか」

そんな風に会話をしながら探偵同好会の看板がさげられた部室のドアを開く。

「……え？」

人が死んでいる。

部室のまん中で、児玉咲が血を流して倒れていた。背中にはナイフが深々と突き刺されている。犯人の姿はない。

時間がとまったように動けなくなる。そして、死体がもぞもぞと冬眠から覚めるように動きだす。

「……やめ、」

いきなり背後から突き倒された。

振り向きざまに見たその顔は、般若の仮面をつけている。背の高い、鬼。

ふたりが倒れると、すぐ目の前に死体と血だまりがある。冷たくなった咲の顔は戦慄するほど青白い。

ドアが閉まる。

「……え？」

ドアのかげにかくれていた覆面をつけた女が、ナイフを片手に襲いかかって来た。

どうして制服のスカートをはいているんだろう、そう考える前に。結衣と神崎の絶叫にも似た悲鳴が遠くまで響き渡った。

探偵とサンタクロース（前書き）

これから12月編となります。

探偵とサンタクロース

「高校生にサンタクロースはやって来ない」

会長は真剣なまなざしでそう語った。

「うちらがプレゼントを嬉々として受け取ることができるのはせいぜい小学生まで。それ以降は恋人だったり、バレンタインデーまがいのプレゼント作戦だったり、つまりそういった不純な贈り物しかないのよ。相手に媚を売って、ちよつとでも好いてもらおうっていう魂胆なの。その点、サンタクロースは偉いわよね。子供たちの笑顔、それだけを見返りに無償でプレゼントを配ってくれるんだから。うちらもその温かい心意気を学ばなくてはならないわ。探偵はいつだって夢を与える存在でなくてはならないのよ」

「どちらかというと、夢を現実に引き戻す役割だと思いますけど」

咲がぼそりと呟いた。この前の一件があつてからしばらくはおとなしかった咲だったが、十二月も暮れに近づいてくると段々と普段の調子を取り戻してきて、遠慮のない言葉が復活していた。

会長はち、ち、ちと指を横に振った。

「甘いわよ、咲ちゃん。その様子じゃまだまだ探偵のいろはも理解していないわね」

「そうですか」

「そうよ。探偵っていうのはね、摩訶不思議な事件に解答を与える存在であると同時に、事件にかかわる人たちに夢と笑顔を提供する役でもあるの。探偵がいなければ、難事件はただの血なまぐさい事件にすぎないわ。それを明るく、ハッピーエンドに解決するのが真の名探偵というものよ」

「探偵の心意気ですね」

神崎がブレザーの胸ポケットから手帳を取り出し、会長の言葉をそそくさとメモする。会長の気の向くままに発された名言、もしくは迷言はこうして神崎のまだページが余っているメモ帳に記録され

ていくのである。

とはいっても、さほど量は多くないのだけれど。

「でも、ハッピーエンドになんて解決するものなんでしょう？
確執どろどろ、愛憎劇の末の殺人事件なんて救いがないじゃないですか」

結衣が訊いた。

二度目の期末テストも無事に終わって、どこかほっとした表情の結衣は、文化祭で使ったホームズの衣装を着用している。これをコート代わりに着こむのが結衣のお気に入りなのである。

何度かホームズの格好のまま帰りそうになり、副会長たちにとめられたという経緯はあるのだが。

「サスペンスドラマはそれでも犯人を更生させようとするでしょ。

最後に反省するのなら、まあ、ある意味ハッピーエンドよね。ああいうのは正確には名探偵じゃなくて警察だから、別物だと考えた方がいいいわ」

「じゃあ、三角関係のもつれは？」

生き生きと結衣が質問を重ねる。会長は首を振って結衣の言葉を制した。

「あんまり若いうちから面倒くさい恋愛に興味を持ちすぎない方がいいわよ。何度もいつてるけど。結衣ちゃんは何談抜きで、教師との恋愛に発展して人生を破滅させそうだから怖いよね」

「そんなことないですよ」

結衣は否定するが、本人以外の部員たちは深くうなずいている。

「で、そのハッピーエンドは？」

「ないわね。皆無よ」

「そうですか……」

しよぼくれる結衣を無視し、会長はつづける。

「とにかくクリスマスなんてものは、うちら高校生にとっては偽善の象徴でしかないのよ。で、それを我らが優秀なる生徒会の皆様が矯正してくれるっていうんだから、これ以上に喜ばしいことはない

わね」

「手のひらを返すのが早いことだ」

副会長が神崎の耳元でひっそりささやく。

「ええ。この間は散々能なしとか、鬼畜とかいってけなしてしましたよね」

「あのくらいの変わり身がないと生きていけない世の中なのかもしれないな」

「世知辛いですね」

「——生徒会はこれから様をつけて呼ばないといけないかもしれないわね。生徒会様、もうひとつおまけして生徒会様様かしら」

「そんなに嬉しいことなんですか？」

いぶかしげに咲が訊く。

会長の喜びようは、まるで初めてサンタクロースにプレゼントをもらった子供のようだ。文字どおりそうなのかもしれないが。

「だって生徒会がプレゼントを用意してくれるっていうのよ？ 今まではただのいけすかないインテリ集団かと思ってたけど、人の心も持ち合わせていたみたいね。それでこそうちの学校を預けるにふさわしい委員会だわ」

「プレゼントとはいえ、全校生徒に配るのだからさほど高級なものではないと思いますよ」

咲が現実的な意見を述べる。

会長はひらひらと手を振る。

「きつとゴディバのチョコレートか、カシミヤのマフラーにちがいないわ」

「それこそ恋人からの贈り物じゃないか」

思わず大きな声でつぶやいてしまった副会長があわてて自分の口を隠す。会長は副会長にひと睨みくれてから、

「プレゼントがなんにせよ、うちらが貰って嬉しいものには違いないわ。生徒の喜ぶ顔がみたいなんて、よくわかってるじゃない」

「支持率アップの作戦かもしれませんよ」

「それは邪推つてやつよ、咲ちゃん。他人の笑顔のために働ける人々が、悪人であるはずはないわ」

完全に舞い上がっている会長を見て、咲はやれやれとため息をついた。まんまと策略にはまっている。

生徒会がプレゼントの配布を宣言したのは期末テストの直前のことだった。テレビ放送で生徒会長が全生徒に伝えたのだ。「我々が霞ヶ丘高校のサンタクロースになる」と。

彼の話によるとテストなどという心を憔悴させる試練ですり切れた精神を、すこしでも癒してあげたいということだった。そして不景気のいまこそ、真の笑顔が必要なのだと。

彼の演説は一部の生徒——会長など——を大いに盛り上げることになった。一方で咲のように冷やかな視線を送る者たちも少なからずいて、学校全体が一枚岩になるというわけにはいかなかった。

プレゼントは冬休みがはじまる前に、本物のクリスマスよりもすこし早く配るということで、今から期待に胸を焦がしているのだ。

「予算はどこから出すんでしょうかね。臨時の出費ですから、あまり大きな額は出せないはずなんですけど」

探偵同好会、会計担当の咲がぼやく。

「生徒会のほうから試算を見積もって学校側に申請したところ、受理されたって聞きました。余分なお金でもあつたんじゃないですか」

神崎がいう。

「それなら同好会に予算を回してくればいいのに」

「いいのよ咲ちゃん、喜びはみんなで共有するほど大きくなるわ。」

大人数の食事がおいしいのと同じことね」

「あたし、食事は少人数でゆっくり食べるほうが好きです」

「……幸せは独占しちゃだめよ。探偵はね、幸福を分け与える職業なんだからね」

「わかりました」

機械的に返事をする咲。会長はしばらく難しい顔をしたあと、いった。

「ちょっとゲームでもしようかしらね。推理ゲーム。お題はプレゼントの中身で」

「それは推理じゃなくて、推測だろう」

「いいじゃない、細かいことは気にしない」

副会長の突っ込みを軽くかわす会長。

「新しい問題集とかじゃないですか？ 学校側が許可するようなプレゼントはそのくらいしか――」

神崎がいかけて、やめた。会長が呆れた視線で見つめていることに気づいたからだ。

「うちの心を癒してくれるありがたいプレゼントがどうして問題集なのよ。それじゃ完全に乾ききった心になっちゃうじゃない」

「ブラックジョークという可能性も……」

「不吉なことをいうもんじゃないわ。言霊って知ってる？ そういうこと」

「わたし、指輪がいいと思います！」

挙手をして勢いよく立ちあがった結衣がいう。

「指輪？ なんで？」

「自分の思い人にその場で指輪を渡してしまえば婚約成立、ハッピーエンドじゃないですか。学生結婚、アリだと思います」

鼻息荒く語る結衣を、うしろから咲が羽交い絞めにして席に座らせる。

「学生結婚の果てがハッピーエンドになる可能性は薄いと思うわ。

それに誰からも指輪を渡されなかった人の心は逆に傷つくばかりじゃない」

「じゃあ、会長はなんだと思うんですか？」

「うちはね――」 会長はいたずらっぽく微笑んだ。「手袋だと思うの」

「手袋ですか」

結衣が意外そうに小首をかしげる。さっきまでチョコレートといったような気がするのだが。

「個人的な事情なんだけど、この前手袋をなくしちゃってさ、寒くて困ってるのよね。心を温めるにはまず体から。というわけで手袋がプレゼントだと思うわ」

「それって自分が欲しいだけじゃ——」

神崎がやれやれと肩をすくめる。副会長がとめる間もなく、会長がパシリと神崎の頭をたたいた。

「プレゼントってのはそういうものの！」

「いつてることが滅茶苦茶ですよ……」

「うるさい！ 探偵は論理的な生き物なんだ！」

逃げ出す神崎。追いかける会長。いつまでも終わらない追いかけて、残された三人は静かに見守っていた。

会長の満悦

「クリスマスキャロルが」

鼻歌まじりに上機嫌で部室にもみの木を運びこんできたのは、言わずもがなの会長である。どこから仕入れて来たのか身の丈ほども大きさがあるクリスマスツリーを迎え入れた部室はいつもより窮屈に感じられた。

そして、鞆からツリーの飾りを取りだすと、結衣と神崎を下っ端にして装飾をはじめ。ツリーの葉に乗つけられた雪を模した綿や、きれいな星がクリスマススのムードを盛り上げていく。

「どうにも上機嫌ですね」

その様子をはたから見ている咲が、同じように傍観している副会長に話しかけた。

「そんなにプレゼントが嬉しいんだろうか」

「会長は単純でうらやましいです」

「たまには素直に喜んでみることも必要かもしれないぞ。児玉くんは僕に笑顔を向けてくれたことがないような気がするんだけど」

「見たいんですか？」

「——いや、やめておこう。なんだか怖い」

副会長はあくびをしながら身をすくめてみせた。眼の下にはくまができていて、そのために会長の使役から逃れることができたのだった。

「ひょっとして、副会長もプレゼントが楽しみで寝られなかったとかいうんじゃないですよね」

「そんなわけないだろう。僕はそんなに幼くない」

「なら、勉強ですか？ そろそろ本格的に追いつめられる時期ですもんね」

「まあそれもあるんだけど——」

すこし言葉に詰まる副会長。その顔を咲が不思議そうにのぞきこ

んだ。

「他に理由でもあるんですか？」

「まあ、いろいろとね」

「はぐらかしますね」

「ちよつとくらい隠し事があってもいいだろ。僕にだってプライベートな事情はあるんだ」

「ふーん」

のめりだした上半身をもとの位置まで戻す。その眼は意味ありげに副会長を上から下まで観察する。咲は口元をわずかに歪めると、持っていた推理小説に視線を落とした。小説のタイトルは『極寒島殺人事件』であるのを、副会長はほんやり視認する。

「なにか秘密があるんですね。好奇心がくすぐられます。そのうち、あたしが暴きだしますから覚悟しておいてください」

「放っておいてくれてもいいじゃないか。どうしてそんな余計なことを」

「謎を解くのが探偵ですから」

「事件もなにも起こしていないのに？」

「あたしが気になるからです」

「やっぱり……」

副会長が大きなため息を吐き出すと、空気が雪色に染められる。部室にはヒーターもエアコンも置かれていないのだ。そのため各自でコートを着たり、カイロを用意したりして寒さをしのいでいる。

なかでも副会長はとくに寒がりで、マフラーに手袋、5枚重ねた洋服にニットキャップと実に怪しい恰好をしている。実際、何度か不審者として通報されたことがあるのを咲は知っていた。

「名探偵はハッピーエンドになる結末でなければ、なぞ解きをするべきではない——とだけ教えておこうか」

「それって副会長に都合のいい格言をつくりただけですよね？」

「そんなことはない」

視線をそらす副会長。咲は冬の寒さよりも冷たい視線をぶつける。

「なら、ひとつだけ真実にたどり着きそうな事実を提示します」
片腕を差し出す咲。

「なんだい？」

「握手しましょう」

近くに猫がいるとわかつている子ねずみのように警戒しながら、おそろおそろ差し出された咲の右手を握りかえす。その手を思い切り咲が引つ張ると、副会長は「いてて」と悲鳴を上げながら二の腕をおさえた。

「副会長、筋肉痛ですよね？」

「——ああ」

「ま、それだけです。どうしてなのやら」

「児玉くん、欲しいものはあるかい？」

「副会長が隠してることを聞きたいです」

「出来れば現物で頼みたいのだが」

「それならダイヤモンドの指輪を」

「僕と結婚するつもりかい？」

「御冗談を」

会長たちがクリスマスツリーのデコレーションを終えると、殺伐としていた部室の雰囲気かとたんに華やかなものにかわった。飾り付けられた電球は色とりどりの光を放ち、まっ白な蛍光灯とは違った世界をつくりだしている。

会長はツリーの出来栄えにひどく満足したようで、しきりに携帯で写真を撮ったり、モミのものがった葉をなでたりしている。

クリスマスは着実に近づいて来ているようだった。

霞ヶ丘高校の生徒たちにとって、生徒会に入るということは進学に関して大きなアドバンテージを得ることと同義である。選挙がおこなわれるどころか万年候補者探しに追われる大多数の高校とはちがいが、優秀な生徒たちによる激しい競争が行われるためである。

いつからそのような特徴があらわれてきたのか定かではないが、昔々にとある熱血生徒会長が学校全体を改革してしまったのだという迷信もあるくらいだ。

そのため、生徒会のメンバーとして選ばれることは、自動的に教師陣から絶対的な信頼を得ることに等しい。さらに今では珍しくなった名誉も得られるという特典付きである。

優秀な生徒が生徒会に入っているためなのか、それとも生徒会が優秀だからなのか、どちらにせよ生徒会役員の進学率は盤石の数値をほこる。

生徒会にさえ入ってしまえばなんにも心配することはないといわれるほどだ。

そのエリート集団のなかでも頂点に君臨するのが生徒会長であり、現在の生徒会長は事実上、学校のトップと呼ぶにふさわしい人物なのである。

「どんな人なんですか、生徒会長って？」

クリスマスが近づくに従って加速度的に上機嫌な会長に連れられて、結衣と神崎は放課後に喫茶店に寄っていた。

真冬ということもあって、学校が終わるとすぐにあたりは暗くなってしまう。

ホットココアで温まりながら、三人でドーナツを注文する。その店のお勧めだというのが理由だった。

「変なやつだけど、おそろしく頭がいいのよね。テストなんか勉強しなくても全教科満点！　って雰囲気をもとってる。それに加えて授業は真面目に受けるし、体育の成績も悪くないし、顔もそこそこなんだけど、なんか言動が変わってんのよ。いきなり大真面目に『萌え』について語りはじめたり、ケーキを買いこんで学校で大量に食べていたり、ハロウィンには片っ端からお菓子をせびって、貰えないとわかると容赦ないいたずらを仕掛けたり——あ、でも最近はよく授業中も寝てるわね。プレゼント探して忙しいのかしら」

「同じクラスなんですか」

結衣がドーナツをほおばりながら聞く。

半分をビターチョコレートで、もう半分をホワイトチョコレートでコーティングされたものだ。食べている結衣の口元にも白黒のチョコレートがついている。

「そうよ。どういうわけかね。おもしろい奴だから、いちど喋ってみるといいわよ。この前、プレゼントはなに？　って訊いたら秘密だつてはぐらかされたけど」

「そりゃ、会長にも話しませんよね。プレゼントは中身がわかっていたらつまらないですから」

神崎が、こちらは和風に抹茶ドーナツをガツガツと口のなかに送り込んでいる。食べたり、喋ったり、ココアを飲んだりと忙しそうだ。

「でも知りたいじゃない？　好奇心は探偵の命ともいえるし」

「私もプレゼントがなんなのか、すごく気になります。副会長と咲先輩も来てくれば、一緒に考えられたのに」

「用事があるらしいから仕方ないわよ。なにをしているのやら」

「会長は勉強しなくていいんですか？」

神崎が自分のことを棚に上げて質問する。会長はドーナツを平らげると、ココアのカップを傾ける。

「うちは平気だもん、健輔とちがつて。今ごろ家に帰ってせこせこ勉強でもしてるんじゃないの。恥ずかしいから知られたくないのよ、きつと」

「生徒会に入っていればそんなこと心配しなくてもいいんですよ」神崎がうらやましげに天井を見上げる。プロペラが静かに回っていた。

「ある意味受験より過酷だから、生徒会に入る方が難しいかもしれないわよ？　どちらにせようちには生徒会なんて無理だから、関係のない話なだけどね」

「大多数の人がそう思ってますね」

「誠くん、来年は頑張ればいけるかもよ？」

「まさか」

神崎が笑いながら首を振って否定する。

「そんなに難しいんですか？」

結衣がきく。

「一説によると遙か古代中国の科挙に匹敵するとか、なんとか」

「たしか倍率3000倍とかじゃありませんでしたっけ、それ」
冷や汗を浮かべながら神崎が確認する。

「そうだったかしら。あくまで噂だから、そんなものでしょ」

「はあ」

「それにしてもこのドーナツ美味しいわね。おかわりしようかしら」

「パフェもおススメみたいですよ」

結衣がメニューを覗き込みながらあれこれと悩ましげに目移りしていく。甘いものならいくらでも食べられそうだ。

「さすがに太るわよ？」

「私あんまり太らない体質みたいなんです。だから砂糖を主食にしてもいいんです。むしろそうしたいくらいです」

「殴りつきたいほどうらやましいわね。でも、そうやって強がって
いられるのも今のうちよ。気がついたらポワロみたいなお腹になっ
てるんだから。あのホームズの衣装も作りなおさなきゃね」

「それはいやですー」

あわててメニューを閉じる結衣。後輩を脅しておきながら会長は、
店員を呼びつけるとココアとドーナツのお代りを注文した。「あ、
俺もお願いします」といって神崎も注文を告げる。

「太りますよ」

と涙目になった結衣がいう。

「うちは平気なの」

と会長が片目をつぶりながら笑った。

強奪事件

事件は、全校放送で流された。

テスト返却も終わり、学校全体にのんびりとした雰囲気が漂っている師走の中甸のことだ。生徒会から重要なお知らせがあるということで、一時限目の授業がはじまる前にテレビ中継で発表があったのだ。

学校側も生徒会に関してはほとんど干渉をすることはなく、自主的な活動を重んじているという体裁はあるが、要は厄介事はまかせたというスタンスなのである。

各教室にとりつけられたアナログのテレビの画面には生徒会長――朝井孝太郎の姿が映し出されている。その放送も自分たちで仕切っており、教師たちは自分の担任するHRでその映像をながめていた。

「えー、みなさんこんにちは。生徒会会長の朝井です。最近は何つきり寒くなっていますが、風邪などひかないようにお気を付けください。今の時期にインフルエンザで休んでも特にメリットはありませんよ。どうせ授業もないことですし、出席日数を稼ぐには絶好の日和ですから休むと逆にもったいないですよ。かくいう僕はプレゼントの用意に奔走していたわけなんですけどね。おかげで良かったですよ」

朝井が合図をすると、背後にプレゼントの山が映し出された。

教室のあちこちから歓声とどよめきが漏れる。

「このプレゼントを明日にでも皆さんに配ろうと思っているところなんですけどね。クリスマスにはすこし早いですが、楽しいことは早く訪れたほうがいいでしょう」

朝井がにこりと笑う。

印象付けるほど顔だちがととのっているというわけではないのだが、朝井の表情はなにか人を引き付けるものがあるという評判だっ

た。

そのため、生徒会長を選ぶ選挙でも、学内から圧倒的な支持を得て当選しているのである。

朝井の長所はその愛嬌だけではない。ほかに、今回のようにイベントに積極的に取り組み、部下の育成にも熱心である。

それでいて最優先にするのは教師への体面ではなく生徒たちの利益であるから、一種学校からの防波堤のような役割も果たしている。物おじしない姿勢と、魅力的な人物像、これが生徒会長である朝井の特徴だった。

「みなさんもプレゼントの中身がいったい何なのか、気になりますよね。秘密ですけど。それは明日、開けてみてからのお楽しみということでご容赦ください。クリスマスっていうのはプレゼントを期待して眠るイブがいちばん楽しいものなんですよ。祭りは本番よりも準備のほうが楽しいってやつですね。ちよつと違いますか、そうですか」

そのとき、学校の上空をヘリコプターが通ったためか、エンジンの爆音で朝井の音声がかき消された。だが突然のハプニングにも動じることなく朝井はつづける。

「——というわけで、朝の挨拶はこれくらいにさせていただきますと思います」

教室から自然と拍手がわく。朝井は深々と一礼すると、驚いたように横へ視線を向けた。朝井の眼は大きく見開かれ、カメラの映す画面外のなにかを凝視している。

先ほどとはちがった意味のどよめきが教室に走る。

「なんだお前たちは！——うわっ！」

テレビのなかからいくつもの悲鳴と怒声が聞こえてくる。朝井もあわてて立ちあがると事態の收拾を図ろうとしたのか画面の外側へ駆けていったが、何者かにはねとばされて尻もちをつきながら再び戻ってくる。

カメラが倒され、世界が九十度回転する。

大勢の足が映し出されている。半分ほどはスカートで、もう半分はスラックス。

「やめろ、それだけは！」

朝井の悲痛な怒鳴り声がひびく。

教室の担任たちは困惑した様子で映像を見つめている。生徒会の行動には、教師は基本的に介入しないという暗黙のルールがある。それを破って放送室に駆けつけるべきか迷っているのだ。

誰かの足に蹴飛ばされて画面が揺らぐ。その瞬間、画面が黒一色にかわる。機械とカメラをつないでいたコードが外れたのは明らかだった。

平和な朝の挨拶は、通勤ラッシュのような混乱へと変貌した。

「まったく、ふざけないでほしいわよね。まさか学校内でこんな事件が起こるなんて」

「仕方ないだろ。生徒会だって武闘派じゃないんだ。というより、あんな急に強奪事件が起こるだなんて考えてもないだろうな、ふつうは」

「天下の生徒会でしょ。剣道部なり空手部なり、警備につけていればよかったじゃない。なんならうちら探偵同好会が出動してやってもよかったわよ。それを怠ってプレゼントを盗み出されたなんて、赤っ恥にもほどがあるっていうのよ」

騒然とした雰囲気のままのこる昼休み、会長は購買部で買ったパンを片手に副会長の前で愚痴っていた。ふたりのクラスは隣同士なので、移動するにもさほど苦労はしない。

「だれがやったのかしら。また怪盗同好会のやつら？ そうだったら容赦しないわよ」

「また無実の汚名を着せるつもりか。マネキンのときといい、今回といい、そんなに目の敵にしなくてもいいじゃないか」

副会長が呆れた口調でたしなめる。

「怪盗と探偵は相いれない存在なの。水と油、猿と犬、昼と夜なのよ。盗みがあつたら本職を疑うのが筋つてもんでしょ」

「たしかにそうだが、わざわざプレゼントを丸ごとこっそり奪ったりはしないだろう。そういうのは趣味じゃないはずだ」

「気が変わったのかもしれないでしょ。人間の意識なんてひょんなことですぐに変わってしまうものなんだから。昨日まで愛を誓い合っていたカップルが翌朝には別れていた、なんてよくある話よ」

「みなみもそうか？」

「なにがよ」

「あ——たとえばだな、探偵の心構えがいきなり変わったりはしないだろう？ 犯人がわかつてもずっと黙っていて、ほかの人がなぞ解きしてから『そのひとが犯人だって知ってたよ。いわなかったけど』みたいな名探偵がいたら、おかしいじゃないか」

「健輔、あんたがなにを伝えたいのかさっぱり分からないわ」

会長が力なく首を振る。

昼休みの教室はいろいろな話し声や物音がまじって雑音をつくりだしている。その雑然とした空氣のなかで副会長は会長の顔を見返した。

「いつもの健輔らしくないじゃない。話も支離滅裂だし。勉強のしすぎで頭がちよつと弱くなってるんじゃないの？ 寝不足はかえって体に良くないのよ」

「しってるさ。僕は勉強もほどほどにしているんだから」

「じゃあどうして寝不足なのよ。悩み事でもあるわけ？」

「ある意味では、そうかな」

「気になるわね。洗いざらい白状してごらんなさいよ、笑わないから。もしかしたらひとりぐらいには教えちゃうかもしれないけど、たぶん誰にも明かさないから」

「まったく信用ならないな」

副会長は椅子の背もたれに体重を預けると、大きく伸びをした。そして、欠伸をひとつ。

「児玉くんにも調査されそうだし、少しは僕をそつとしておいてくれる気づかいはないものかね。僕にだってプライバシーや隠し事はあるんだ」

「健輔はうちに隠し事なんて出来ないんだから。いざとなったら健輔の家に潜入調査ぐらいやってやるわ——といたいところなんだけど、そもいかないのよね」

会長は鋭い眼つきで虚空をにらみつける。その視線の先には白い天井と、そこに染みついた歴史ある汚れが浮かんでいる。

「うちのクリスマスプレゼントを返してもらわなくちゃならないの」

「返してもらって——誰からだ？」

「もちろん犯人に決まってるじゃない。そのために探偵同好会は不眠不休で捜査に励むことを義務付けようと思うの。いい考えでしょ」

子供のように屈託のない笑顔を浮かべる会長の前で、副会長は深くため息をついた。

現場検証

「ようこそ、という状況じゃないんだよね。残念ながら。でも君たちが協力してくれることには感謝する。わずかでもいいから手がかりがほしいところなんだ」

事件現場となった放送室の前には、数名の生徒会役員と会長である新井、そして探偵同好会の面々が集合していた。

プレゼント奪還にいきまく会長が新井に直談判して捜査に協力させてほしいと頼んだのだ。

最初は悪いからと断っていた新井だったが、会長の尋常でない熱意に折れて、合同で捜査を行うことになった。最初に調べなくてはならないのはやはり事件現場であると会長が主張したため、一同は事件の当日の放課後に放送室に集まっていた。

「悪いな、うちのみなみがわがままをいって」

副会長が早々に頭を下げる。同様に、神崎と、咲も頭を下げる。

「ちょっと！　なんで謝らなくちゃいけないのよ。こちらは捜査に協力してるんだから、むしろ感謝してもらわないと」

「明らかにしゃばり過ぎだ。生徒会だって迷惑だろう」

「いえいえ、そんなことないよ。こちらとしては同好会とはいえ、専門家に意見をうかがえるのだから願ってもみないことだ。一刻も早い事件解決になるよう、お互いに頑張ろう」

「ほらね、つまりそういうことよ」

新井のさし出した手を会長がにぎりかえしながら胸を張って部員達を見回す。副会長は疲れたように「はいはい」と適当な返事をすると、すぐさま右手を出す。副会長が新井との握手を終えると、会長はさっそく放送室の内部へ足を踏み入れる。

放送室は主にふたつの部分に分かれている。

テレビ放送の際の音量などを調整する整備室と、主に朝礼などの会見のために使われる部屋が、壁で仕切られている。

二つの部屋をつなぐのは音漏れを防ぐための重厚なドアであり、それ以外に行き来する手段はない。

整備室では音量調整のほかに、CDやビデオテープによる映像を流すこともできる。昼休みにスピーカーから流れてくるクラシック音楽は、この部屋から生まれたものだ。

「実はここに入るのつてはじめてなのよね。意外と広いじゃない」

「何人もの役員を配置しなくてはならないからね。そうでなければプレゼントの山を運んだりできないよ」

新井は放送室の内部を歩きまわりながら説明を続ける。

「おれが会見を行っている途中、見たことのない人たちがいきなり入って来たんだ。そいつらはあつという間におれ達を床に引き倒して、目隠しをされているあいだに出ていった。全部のプレゼントを盗んでね」

「顔は見えないの？」

会長が質問する。

「覆面で顔をおおっていたからね。それにおれは彼らの容姿や特徴を見る前に早々と倒されちゃったから、ほとんど見てないし覚えていないんだ。恥ずかしながら」

苦笑いをする朝井。だが、その眼が笑っていないことに副会長は気づいていた。

「人数は？ よほどの大人数じゃないと大量のプレゼントを運び去るのは無理だろう」

今度は副会長が問いを投げかける。

「実はね、あのテレビに映っていたのはプレゼントのすべてではないんだ」

「どういうことですか？」

神崎が手帳を構えながら聞く。朝井が喋っている最中は必死に手を動かしてメモをとっているのだ。探偵同好会の記録係として任命されたのはつい最近である。

だが、大抵のことはいちど聞けば頭に入ってしまうので、メモを

つかう必要性はほとんどない。

勉強はちつとも覚えられないけれど自分たちの好きなことならばすぐ記憶できるものなのだ、会長は自慢げに解説していた。

「さすがに大量のプレゼントにもなると運び入れが大変だね。この放送室では置く場所が足りないんだ。それにおれら生徒会がいちいち運んで来なきゃいけないから、ほんとうは今日の放課後に店側から一気に運んでくる手はずだったんだ。だから放送室にあったのは全体のごく一部、というわけ」

「じゃあ、プレゼントはおおかた無事なんですね？」

結衣が目を輝かせながら尋ねる。

「まあ、ね。でもなくなった分を再び仕入れるとなると少し時間がかかる。当初の予定通り明日にみんなに配るという計画は残念ながら達成できそうにないね。――君は一年生かい？」

「はい。一年の白谷結衣といいます」

「そうか。来年は生徒会に立候補してみない？ 白谷さんにはその才能があると思うんだけど」

「えー、そうですかあ？」

はたから見ても分かりやすい反応で結衣が相好をくずす。お菓子をもらったときと同じ、満面の笑みだ。

「たしか入学早々に教室で起こった事件を解決した人だね。噂では密室連続殺人事件と神隠しにあったような犯人の謎を同時に解決したとか何とか」

「いやあ、実はそうなんですよー」

「違うでしょうが」

会長が結衣の後頭部に突っこみを入れる。打楽器のように気持ちのいい音が放送室のなかにこもる。

「どんだけ誇張してんのよ。ちよつとは遠慮つてものを知りなさい。それにうちのスーパーキーを勧誘しても生徒会にはあげないんだからね」

「でも、生徒会に入れば進学が楽なんですよね」

会長にぶたれた頭を押さえながら結衣がいう。朝井の目つきが少しだけ鋭くなる。

「結果的に、ね。でも生徒会に入ったからといって努力しない人間は、端的な話では留年する可能性もある。おれらは生徒会のプライドを守るため、そして自分自身の成長のために勉強をして、その結果として良い進学率を残しているに過ぎないんだ。だから生徒会にもぐりこんでしまえば、なんて甘い考えのやつらは当選できないんだよ」

口調はいままでのように穏やかなものだがその裏には厳しい色が隠れている。結衣は朝井の顔をまじまじと見つめると「ごめんなさい」と謝った。

「いいんだよべつに。わかってくれればさ。ただ、進学は生徒会の特権じゃないってことだけ覚えておいてね」

「はい」

「なによ。うちよりもなつくじゃない。結衣ちゃんも白状ね」

ぼやく会長を見て、朝井は声を立てて笑った。

「おれはそんなにできた人間じゃないよ。立派に会長をこなしている片倉のほうがいっしょかりしてるさ」

「あら、そうかしら」

「会長だつてデレデレしてるじゃないですか」

結衣が唇をとがらせる。

「デレデレなんてしてないわよ」

「さ、余計な話はここまでにして早いところ調査を済ませてしまおう」

副会長が結衣と会長をひきはなす。咲がくすりと笑った。

「どうしたんだ？」

神崎が不思議そうな顔をする。

「なんでもない」

「事件のとき、朝井のほかには誰がいたんだ？」

「そうだね——おれと、数人の生徒会の役員たち。それ以外に先生

なんかはいなかったよ」

「つまり、生徒会のメンバーだけってことか」

「平たくいえば」

「犯人に心当たりは？」

「ないね。おれらは恨まれるようなことはしていない——って言い切ればいいんだけど、事件が起こってしまった以上弁解する余地はない。ひよつとしたら恨みをもっての抗議運動の一環だったのかもしれないし、単にプレゼント狙いの犯行だった可能性もある。おれには分からないよ」

「でも、プレゼントは全員に配る予定だったんですよ」

結衣が残念そうな表情を見せる。

「それなら無理に奪いにいく必要もなかったんじゃないですか？
というより、犯人たちは霞ヶ丘高校の生徒だったのでしょうか」

いやに丁寧な口調で結衣が朝井に質問する。朝井は首を縦に振って応じた。

「それは確かだ。なにせ制服を着ていたからね」

「だったら犯人はすぐに絞れるんじゃないですか？」

「そうはいつでもね——」

朝井は顔をしかめる。

「学校側としてはこの事件を明るみにはしたくないらしいんだ。ほら、窃盗事件だろ、これって。つまり生徒の中から犯罪者を出したくないというわけ。そもそも事件がなかったことにすれば、犯人もいなくなる」

「勝手な大人の都合ですね」

神崎が憤慨するが朝井は軽く笑って受け流す。

「おれらとしてもメリットがないわけではない。学校の評判を守るからね。でも犯人を突き止めないことにはプレゼントを配ることができない」

「ねえ、こちらが犯人を捕まえたらおまけのプレゼントをくれたりしない？」

「前向きに検討しておくよ」

「ケチ」

「まあ、学校側が消極的な姿勢では早期的な解決は見込めそうになり。おれらは捜査という方面に関してはまったくの素人だからね」生徒会の仕事外だ、と朝井は力なくうなだれる。

「こちらの警備が甘かったことは認めよう。まさか学校内で襲われるとは思ってもみなかった。けれど、おれらには責任をとる力が無い。このままじゃ卒業するまでに犯人を暴く事も出来ない」

「任せてください。それは私たち探偵同好会の仕事ですから」結衣が胸を張ってこたえる。

どこから持ってきたのか虫眼鏡を取り出すと、あ、と声を出した。「衣装忘れて来ちゃいました。ちよっと取ってきますね」

いそいで放送室を飛び出していく。

「なんだい、衣裳って」

「すぐにわかるわよ」

放送室は本校舎にあるため、探偵同好会のある旧校舎まで戻るには時間がかかる。渡り廊下を往復しなければいけないうえ階段も上り下りしないといけないので、ホームズの格好をした結衣がかえって来た時にはすでに疲れきっていた。

「本格的だね」

「ある意味ね」

会長がめずらしく気苦労の乗ったため息をつく。

それから探偵同好会の5人は放送室のなかをくまなく搜索し、なにか不審な場所や証拠品が残っていないか徹底的に調査した。

機械の裏、カメラのレンズ、床に敷き詰められた絨毯の毛まで、室内をくまなく捜しつくす。結衣は虫眼鏡を片手に、神崎は手帳をもちながら。男子高校生が友達の家遊びに行ったときにベットの下をまさぐるような執拗さで現場を検証し終えると、会長は額に浮かんだ汗をぬぐった。

「これだけ探しても有力な手掛かりとなりそうなものは何一つ発見

できなかった。こんな屈辱があつてたまるものですか」

「これ以上は無駄だろう。余計なことをして現場を荒らしすぎるのもよくないぞ」

副会長はぐったりと床に座り込んでいる。もう動く気力がないのか、壁にもたれかかりながら目をつぶっている。そして、大きな欠伸をひとつ。

「なによ。もう疲れたの？ だらしないわね」

「証拠のひとつも見つからないようじゃ、骨折り損のなんとやらだ。僕は今日はもう引き上げたほうがいいのではないかと思う」

「だって、これじゃ探偵同好会の沽券にかかわるじゃない。うちらまだ役に立ってないのよ」

会長は副会長にかみつくように怒鳴り散らすが、朝井がそれを押しとどめる。

「まあまあ、なにも現場検証だけが君らのやり方ではないだろう？ 証拠が残っていない、それはそれで手掛かりになるようなこともあるんじゃないかな。おれにはよくわからないけどさ、片倉たちが頑張ってくれたのはすごくありがたく思ってるよ」

「でもそれじゃ——」

「帰るぞ！」

副会長は乱暴な動きで立ちあがり、鋭い言葉を発した。いつもは見せないような苛立った様子に、その場の空気が固まったようになる。

「僕は帰る。ここで失礼するよ」

そう言い残して副会長は大腿に歩いて放送室を出ていく。後ろ手にしめられたドアは壊れそうな音を立てる。

「なによ、あれ」

会長が眉間にしわを寄せる。

それからそわそわと落ち着かない様子で放送室を歩きまわる。

「副会長のいうことにも一理ありますよ」

「なによ咲ちゃん、文句あんの」

「……会長もすこしは副会長をいたわってあげてください。副会長だって一生懸命やってたじゃないですか」

「結果が出なきゃ意味ないのよ。そんなもの」

「じゃあ、あたしも帰りますね。いつまでたっても結果が出そうにありませんし」

咲はしばらく会長とにらみ合った後、放送室を離れた。そのまぎわに「明日も部活には出ますから」とつけ加えるのを忘れなかった。
「……………」

朝井を含め、その場にいた生徒会の役員たちは気まずそうな表情をしていたが、凍りついた雰囲気をやぶったのは生徒会長であった。
「まあ、今日はこのくらいで開きにしよう。さがしたって見つからないものは仕方がない。なにも探偵同好会の技量が足りなかったとか、そういうことじゃないと思うよ」

「ごめん」

「いいってば。片倉のせいじゃない。大高のせいでもない。どうしようもなかったことなんだよ」

朝井がぼんぼんと会長の肩をたたき、口には出さないが放送室から離れるように促す。3人の探偵同好会員たちは、重たい足取りで部室に一度戻り、そして帰宅した。

探偵たち

翌日の放課後も、同じように部活は行われた。

生徒会からは再びテレビ放送で連絡があり、無くなった分のプレゼントを確保するために時間がかかるので、プレゼントの配布は延期されるということだった。

企画が廃止にならなかっただけいい、という前向きな意見もあったが生徒たちの注意はもっぱらプレゼントを盗み去った犯人の行方に向けられていた。

誰がやった、彼がやったとあらぬうわさが飛び交うのはまだいいほうで、探偵同好会でなくても自ら捜査に加わりうとする集団が大挙して放送室に押しかけることもあった。

生徒会はその協力を断ったが、その理由を「自分たちの責任は自分で取る」と説明した。

「皆さんには多大なご迷惑をおかけしてしまい、誠に申し訳ありません。この件は我々生徒会が解決にむけて調査中ですので、心配は無用です」

朝井はそういつて深々と頭を下げた。

「——たく、なにやってんのよ」

会長がいらついた様子で部室のなかを歩きまわっている。というのも、授業はとづくに終わっているのにいつまでたっても咲が姿を現さないのだ。

携帯電話もつながらず、メールもない。

普段から時間にルーズな探偵同好会とはいえ、数十分も遅れることは珍しい。真面目な咲が連絡もよこさずに無断欠席をするとは考えづらかったが、まだ部室に来ていないのは事実だ。

「学校を休むでもなく、早退したでもなく、いったいどこで油を売っているのかしら。遅すぎるのよ」

昨日のトラブルについては誰も話題にだそうとしない。

副会長は部室のすみで腕を組みむっとり黙りこんでいるし、もう一人の当事者である咲は部活に來ない。空気は灰色の鉛のように重たくのしかかっている。

鮮やかに飾り付けられたクリスマスツリーだけがピカピカと色のついた電球を点滅させる。

「誠くん、ちよつと校内をさがしてきてくれない——」

会長がいかけたところで部室のドアが勢いよく開かれる。そこには額にうつすらと汗を浮かべた咲の姿があつた。

「すみません、遅れました」

「遅刻するならするつて連絡をよこさないよ。心配したじゃないの」

「いろいろ調べるものがあつて、携帯電話の電源つけるの忘れてました。でもこの事件、とっかかりはつかめそうですよ」

咲は鞆をおくと、長テーブルを囲む席についた。

ホワイトボートの近に会長が立ちマジックペンを構えている。その右手側に結衣、神崎が座り反対側には副会長と咲が着席する格好だ。

ペンのキャップをはずし、会長はいつものようにブレインストーミングのような単語を書き出して要点をまとめていく。いくつかの言葉が丸で囲われ、直線でつながれる。

「探偵同好会の意地とプライドにかけて、そしてプレゼントを奪還するためにも探偵同好会は全力で事件解決に取り組むわよ。うまく生徒会に恩を売ることができれば予算拡大、部員増員、部室増設くらいは取り計らってもらえるかもしれないわよ。ただの事件じゃないわ、うちらには報酬まであるんだから、これを解決しない手はないわ」

会長の力説は続く。

「ただ、探偵同好会の存在意義は事件解決の報酬にあらず、解決そのものにあると心得なさい。予算もプレゼントもおまけにすぎないわ。事件は探偵のもとに転がりこむとはよく言つたものね。日ごろ

の成果を発揮する大チャンスよ。謎が目の前にあるのなら、それを解くのが名探偵の仕事なんだから」

バン、とホワイトボードをたたく。

こすれたマジックの線が少しだけ手についた。

「事件の全貌をまとめると、生徒会が朝のテレビ朝会中に何者か、あるいはグループによって襲撃され、放送室にあったクリスマスイベント用のプレゼントをゴッソリ盗まれたということになるわ。目撃者は校内にいた全員、けれどカメラに写っていない部分は見るこゝとができなかった。それに加えて現場にいた生徒会の役員たちはすぐに制圧されちゃったから犯人の顔は見えていない。分かっているのは、犯人が霞ヶ丘高校の制服を着ていたということだけ——つまり、うちの学校のなかに犯人一味がいるということね」

犯人、と大きく書かれた文字。雑だが、バランスの整った字だ。

「謎はいくつかあるわ。第一にだれがやったのか。HRから抜け出したやつらがいるはずなのよ。動機はなにか、プレゼントは保証されているのにリスクを冒してまで盗みに行く理由がわからないわ。そしてプレゼントはどこに保管しているのか。これは重大な問題ね。隠し場所さえ特定できればそこから逆算して犯人の正体も明かせるってもんよ。そして、現場にみじんも証拠を残さない手際の良さ。どうして犯人は制服を着ていたのか——挙げればきりが無いわ」

「でも、その一つ一つが解決の糸口になります」

結衣が手をあげていった。

会長は親指を立ててほえむ。

「ザツツライトよ、結衣ちゃん。がんじがらめにされた謎のほうに事件的には解決しやすいものなのよ。そのぶん推理は難しくなるけどね」

「じゃあ、どれがいちばん簡単なんですか」

質問したのは神崎だった。手には例の手帳をたずさえている。

「——難しい質問ね。どれも厄介だわ。強いていえば、制服の謎、そして証拠が残っていなかった謎というところかしら。どちらも不

自然だしね」

「わざわざ制服を着て身元が特定されやすくなる必要はありませんし、どう考えても襲撃の際に痕跡くらいは残していくはずです。それをしなかったということは――」

「外部犯が、内部犯のふりをしている可能性がある、か」

副会長が咲の言葉を引き継いだ。

「そうなると犯人を突き止めるのは困難だな。メリットが少なすぎる。まさか黄金を配るわけでもあるまいに。なにか裏があると思っただろうがいいだろう」

「そのことなんですが」

咲がスカートのしわを直しながら立ち上がる。

「部活に来るまえに生徒会の人たちに聞き取りをしようと思ったんですけど――誰一人として校内に残っていないんです」

「生徒会長も？」

「はい」

「――怪しいわね」

会長があごに手をあてて考えこむ。肩ほどにかかる髪がさらりと揺れる。

「生徒会が絡んでいるんでしょうか」

結衣が思いついたような口調でつぶやく。

「あながち間違いでもないかもしれませんが。生徒会が裏でつながっているのなら、話は簡単ですから」

咲が頷きながら賛成する。だが、会長の表情は晴れない。

「無理ね。アリバイがあるもの。生徒会の役員が教室を離れていれば記録に残ってしまう。欠席がつくからね。そしてカメラ中継で何名もの倒れている姿が見えた。これでアリバイ成立」

「――となると、やはり外部犯か？」

副会長がうなる。会長はふたたび首を横に振った。

「この時期、授業なんて息抜きみたいなものだから遅刻してくる生徒が相当数いるわ。そしてそれは、生徒会の役員ではない。あの人

たちは遅刻なんて決してしないもの。事件当日の遅刻者、欠席者だけでもかなりの容疑者が生まれることになるわ」

「となると、やはり謎を説明するしかないか」

副会長の口調は昨日と比べると心なしが明るいうだった。相変わらず目の下の隈や疲れた様子はぬぐえていないが、すくなくとも苛立った感じはない。

「プロのテロリストが犯人っていうのはどうでしょうか。生徒会の用意していたプレゼントのなかに重要な機密書類だとか発信機だとか、小型の記憶媒体が紛れ込んでいて狙われたとか」

神崎が名案とばかりに自説を披露するがすぐさま会長に一蹴される。

「ハリウッド映画の見すぎね。そんなに都合よく物事が展開するはずがないわ」

「でも、違っつていう証拠もないですよ」

食い下がる神崎に、結衣が無情な答えを出す。

「プロのテロリストがわざわざ姿をさらすような失態を犯すでしょうか。誰もいない深夜にでも忍び込んで、鍵をピッキングして盗み出しておしまい、だと思えます。催眠ガスという手もありますね」

「……そうですか」

うなだれる神崎をよそに議論は会長の手によって進められていく。「教師がけしかけた、っていう可能性はどうかしら。動機は分からないけど、HRの出欠席はごまかせるし、生徒会との権力争いとか」

――

「それよりも生徒会長へのあてつけという線はどうでしょうか。次の生徒会長の座を狙っている人物からすればチャンスになりますし」「恋愛がらみの怨恨事件だと思います」

わいわいがやがやと無秩序に広がっていくマインドマップはとどまることを知らず、冬の早く訪れる夕暮れを認めたときにはすでにホワイトボードが文字で埋め尽くされていた。

神崎や副会長が入りこむ隙間もない。

居眠りをしていた授業のように神崎が大急ぎでメモをとっているが、見開きのページだけでは容量が足りず、もはやなにがなんだかわからない混沌とした状態になっている。

事件はさらに難解さを極めていた。

「結衣くん、君は欲しい物とかあるかな？」

すっかり暗くなった放課後の帰り道、副会長がおもむろに尋ねる。

「欲しいものですか？」

「そうだ。君ならサンタクロースになにをたのむかい」

「私は——そうですね」

結衣はすこしだけ漆黒の空を見上げた。街の明るさに消された星の光は、針であけた穴から漏れているみたいに頼りない。クリスマスの派手なイルミネーションに比べると、それはあまりにも儚かった。

「美味しい物が食べたいです。せつかくのクリスマスですし、みんなでケーキを囲んでパーティーなんていいですね。お酒はダメですよ？ 酔っ払ってそのまま、っていうのはあんまり好きじゃないです。あ、でも、前々からうつ憤した思いがたまっていてっていうシチュエーションなら」

「もうわかったよ。高校生にはサンタクロースはやって来ない」

疲れたように副会長がいった。それを見た結衣が心配げに声をかける。

「大丈夫ですか？ 最近なんだかずっと疲れっぱなしですね。元気ないですよ」

「——まあ、いろいろとね」

副会長は曖昧にはぐらかすと今度は神崎のそばにすり寄っていく。はてな、と結衣は首をひねる。なんだか様子が変だ。

神崎としばらく話してから副会長はなにかを考えるように難しい顔をしながらとぼとぼ歩いて行く。

「どうしたんでしょうか」

「おかしいね」

結衣がこっそり神崎に耳打ちすると頷き返す。

「五月病にしては時期外れだし、中二病ともちよつと違うし……なんだろう」

「あ、ひよつとして」

結衣がほくそ笑む。

「恋わずらいだったりするかもしれませんがね」

「でも、副会長には会長がいるはずじゃ」

「あのふたりが必ずしもうまくいつているとは限りません。この間はすごいところを見ちゃいましたけど、副会長も男ですから気がうつってしまうこともあるでしょう」

「ってことは」

「浮気です」

ニヤリとふたりはどす黒い笑みを浮かべる。

「副会長もなかなかやるねえ」

「意外とプレイボーイですね」

「だから会長と喧嘩してたのか。ばれていないにしろ、副会長にも負い目があるからな」

「そういう些細な心のすれ違いが喧嘩につながってしまっんですよね」

「副会長が変だったのはそのせいか」

うんうんと納得したように首肯する神崎。

「でも、そうすると疲れたり、寝不足気味だったりするっていうのは」

「——まさか」

ありえない、と言いたげに神崎は結衣の考えを否定しようとする。うつすらと顔色が悪い。

結衣は表情ひとつ変えずに続ける。

「新しい彼女と、ってことですな」

「ウソだろ——副会長が、そんな」

「先月のこともあります。あれで副会長が性に目覚めてしまったとしたら、ありえない話ではありません」

真剣な眼つきの結衣の言葉に、神崎は絶句する。首筋をいやな汗が伝った。

「もしそれが事実だとすれば、大変なことになるぞ」

「はい。探偵同好会の存亡の危機です」

「ここは、探偵の出番だな」

制服のネクタイを締めなおす神崎。その目つきは鷹のようにするどい。

「浮気調査は、現実の探偵の主な仕事だ」

「私も協力します」

「ありがとう。ふたりで協力して、この世紀の危機を未然に防ごう」

「ハッピーエンドが探偵、ですね」

「ああ」

冬の冷たい夜が更けていく。凍てつくように冷たい風が結衣と神崎の火照った頬をなでる。副会長はひとつ、大きなくしゃみをして鼻をすすった。

尾行

「生徒会のプレゼントっていったいなんだったのかしら」

会長がふと思いついたようにいった。

「朝井に聞いても教えてくれないし、プレゼントの中身って意外と重要な推理の鍵になるんじゃないかしら。もしも中身を知っての犯行だとすれば、どこからか情報が漏れだしていることになるし、それを欲しがっていた人物も逆算できるわ」

「そうはいつでも、教えてくれない者は仕方ないだろう。生徒会はまだ奪われた分を補充しはじめているといっていたし、朝井の性格からして最後まで中身は明かそうとしないんじゃないか」

副会長が教室の机に突っ伏しながらこたえる。長いからだは机に収まりきっていない。

「そうかしら。捜査のためって強引に押し切れば教えてくれると思うんだけど。背に腹は代えられないでしょ」

「やめておけ。それは無粋ってもんだ」

「どうしてよ？ 生徒会だって犯人は見つけたはずでしょ」

「みなみだって推理小説のオチをばらされる代わりに報酬があるっていわれても、断るだろ。いたずらを仕掛ける子供みたいなもんだ。最後まで秘密にしているからこそ意味があるんだ。それを誰か一人にでも知られてしまったら、一気に興ざめだ」

「たしかに。そうかもしれないわね」

会長は手にしているパンを一口かじる。会長のお弁当はいつも早々に消化されてしまったため、おやつ代わりの食べものが欠かせない。自分のお弁当を細々と食べながら副会長がきく。

「今日も部活はあるのか？」

「あるわよ。がつつり。事件が解決するまでは毎日だからね」

「……はあ」

「なによため息なんてついちゃって。名探偵は事件が起こっている

あいだは生き生きしてなきゃだめなのよ」

「僕は――」副会長外れていた眼鏡をかけ直す。「早く事件が解決してくれればいいと思う。できればクリスマスの前に」

「なら、そのために頑張らしましょ」

ばん、と副会長の背中を思い切りたたく。鈍い悲鳴が聞こえた。

「さてさて」

「やってまいりましたね」

たがいに顔を見合わせ、笑みを浮かべているのは結衣と神崎だ。副会長を尾行するために、副会長の家の前で待ち合わせをしていたのだが、それでは近すぎると思いなおしてすこし離れた場所で待機している。最初結衣がホームズの衣装を着て来たためあわてて脱がせたという経緯はあるが私服姿の副会長が姿をあらわすと一気に緊迫感が高まる。

ジーパンに、上着を何枚も重ねている副会長はまるで雪だるまのようにふくれている。大きくなった背中を追いかけていくと、やがて駅前に出た。

夜の冷気にあてられて結衣と神崎の頬はほんのりと赤く染まっている。姿を見られないようにある程度距離を置きながら、ふたりは副会長を追って改札を抜ける。

すぐにやって来た電車にはカップルが何組も乗っていて、利き過ぎた暖房とともに車内の温度をあげている。副会長は空いた座席のひとつにすわると、うとうと居眠りをはじめた。

「どこまでいくんでしょうかね」

副会長のとなりの車両に陣取った結衣が神崎に聞く。

「さあ。あんまり遠くでなければいいんだけど」

隅の座席に腰を下ろす神崎。すくなくとも電車のなかにいるうちは尾行は簡単だ。

クリスマスソングを歌うように電車は一定のリズムを刻んでいく

つかの駅を超えていく。やがて副会長がゆっくりまぶたをあけると、思い出したようにプラットホームへ降り立った。

結衣と神崎もあわててその後をつける。一瞬、副会長がうしろを振り向いたが、人ごみにまぎれて結衣たちの姿には気付かなかったようですぐに前を向いて歩きだす。

「あぶなかったですね」

「これでこそ尾行って感じたね」

「よく見てください。副会長、回数券で降りて行きましたよ」

「ほんとだ。ってことは、いつもここに来てるんだろうな」

ひそひそと推理を交わしながら改札を通り抜ける。そこは霞ヶ丘高校の生徒たちが利用する最寄駅から三十分ほど行ったところにある駅だった。

いくつかの路線が交差しているため利用客も多く、駅前是人でこった返している。イルミネーションがまぶしかった。

副会長は一直線に目的地に向かっていているようだった。いくつか道を曲がり、交差点を越えて、信号を渡るとさびれた古本屋に入っていく。

「ここがデートの待ち合わせ場所なんですか」

「まさか——とは思うけど、ひよっとすると本が好きな彼女なのかもしれない。副会長も好きだし」

「もしかして、咲先輩でしょうか」

「いやいや、そんなわけは……ない、はず」神崎の語尾が弱々しくなっていく。「同じ部活のなかで三角関係なんて、信じたくない」

「どろっどろですね。なんだかわたし楽しくなってきました。いっそ神崎先輩とわたしも含めて五角関係なんてどうですか？」

「——まだ地球を救う方が簡単そうだ」

神崎の背中に悪寒が走ったのは寒さのせいだけではなかった。

ふたりはしばらく副会長が本屋から出てくるのを待っていたのだが、副会長はおろか、店に入る客さえもほとんど見当たらない始末で、だんだんと手足の指さきがかじかんでくる。

しきりに白い吐息で冷たくなった手指を温める。尾行をする途中で、張り込みにかわるとは想像していなかった。防寒対策を怠ったのはこれで何度目だったろうかと、文化祭のことを思い出しながら反省する。

一陣の風がふたりのいる電柱の影を通り抜けていった。

「寒いです。耐えられないくらいに」

「ここは我慢だ。副会長の浮気現場をおさえるまではここで待つしかない」

「でも、いつこうにやってくる気配がないですよ。いつそ店内にいたほうがいいんじゃないでしょうか」

「あんな狭い店にふたりで行ったらすぐに気付かれちゃうだろ。副会長を尾行していたことがばれたら大変だぞ」

「構いません。修羅場歓迎です」

「なに暴走族みたいなことを言つて――」

神崎の言葉を無視して、雪山で遭難している登山者がストーブの幻影に引き寄せられていくようにふらふらと本屋のほうへ吸いこまれていく結衣のマフラーを、神崎がつかんだ。

「待て」

「わたし、もう疲れましたパトラッシュ」

「辞世の句か。とにかく見つかったちゃダメだ」

「ああ……」

物欲しげに窓からもれる温かな黄色い光を見つめる結衣。その眼は焦点を結んでいない。

神崎はちらりと副会長がいるはずの本屋を見やってから、白い息を吐き出した。

「仕方ない。いちど近くの喫茶店にでも――」

避難しようか、といいかけたとき、唐突に古本屋のドアが開いた。内側からエプロンのようなクリーム色の作業着を着た副会長が、重そうな段ボール箱をかかえて出てくる。

茶色い箱の上からのぞいた副会長の視線は、電柱の影から体を乗

りだしている結衣と、それをつなぎとめている神崎の姿をしつかりとらえた。

「なにやってるんだい、こんなところで」

「それはこっちの台詞ですよ」

神崎が観念したようにいった。

副会長のアルバイトが終わったのはそれから数時間後のことだった。神崎と結衣はしばらく古本を立ち読みして時間をつぶし、ようやく副会長がその日の分のあまり多くはない給料をもらうと、三人は帰りの電車に向けて歩きだした。

「副会長」と結衣が自分よりもずっと背の高い副会長を見上げながら呼びかける。「どうしてアルバイトなんてしているんですか？うちの学校はバイト禁止ですよ」

「それに勉強の大事な時期じゃないですか。こんなことしていいんですか？」

「こんなことといわれてもなあ」

後輩ふたりから浴びせかけられる率直な質問に、副会長は視線をそむけながらこたえる。

「お金が必要だったんだ、自分で稼いだ」

「なんのためにですか？」

結衣が間髪いれずにきく。

「欲しい物があるからね」

「なんですか？」

「——白状するよ。ほんとは秘密にしておきたかったんだが」

と前置きしてから、

「みんなに、プレゼントをあげようと思ってね」

照れ臭そうに鼻の下をかく。街の明かりが無骨に副会長の表情を照らし出していた。

神崎はさささ、と副会長の前にまわりこんでから

「プレゼントですか？」

「そうだよ」

ぶつきらばうな返事。

「それで、規則違反をしてまでアルバイトを」

「そうだよ」

「おれ達のために？」

「そうだってば」

「副会長！」

神崎は九十度に腰をおって頭を下げた。

「おれ今まで副会長のこと見くびっていてすみませんでした。これからは一生ついて行きます！」

「わたしも！」

結衣が副会長の右腕に抱きつくと、副会長は困ったような表情をした。

「みなみには、黙っててくれよ」

「咲先輩にはいいんですか？」

「児玉くんはどこか気付いているような節があつたからな——まあ、いわないに越したことはないが、たぶん感じているだろう」

「副会長……」

結衣がうるんだ目で副会長を見上げる。

「筋肉痛にもなって、寝不足にもなって、わたしたちのために命を削って働いていてくれたんですね」

「いや、そこまでは——」

「それなのに、わたしたちといったら咲先輩と会長との三角関係だとか、副会長が浮気をしているとか、邪推してばかりでした」

「そんなことを考えていたのか」

「これからは認識を改めます。我らが副会長です。生徒会と同じ、いや、それ以上に素敵です！ 副会長万歳！」

「万歳！」

人目をはばからず両手をあげて万歳斉唱をする結衣と神崎。副会長がどうにか通行人の目から隠そうとするが、四方八方から飛んでくる視線は夜の風よりもずっと冷たい。

こんなことなら他人のふりをすればよかったと後悔しながら、副会長の眼は神崎の頭の向こうにいる人物をとらえていた。コートのフードをかぶってはいるが、あれはたしかに見覚えのあるシルエットだった。

副会長は有無をいわず神崎と結衣のマフラーを引っ張って、その人物が本人であるかどうか確かめようとする。驚かさないように後ろからこっそり近付くと、気配を感じたのかその人物が振り返る。だが、副会長がとつさに身をかめたためか、それとたんに入が多くて気付かなかったのか、その人物は駅のプラットホームにのみ込まれていった。

「……どうしてこんなところに？」

ひとりつぶやく。副会長の眼に映っていたのは、霞ヶ丘高校の生徒会会長、朝井の小さな後ろ姿だった。

推理の前座

その翌日も放課後になると真夜中を迎えたシンデレラのように生徒会の姿はこつ然と消えてしまった。副会長は自分の眼で、朝井が学校にいないのを確認してから渡り廊下をぬけ、旧校舎にある探偵同好会の部室へ向かう。

いつもなら息切れをする階段が気にならない。ある考え事がぐるぐると脳裏で渦巻いているからだ。

「こんにちはです！」

部室に入ると、結衣が実にわかりやすいリアクションを示す。

副会長は軽く頭を下げてから神崎に視線をやる。元野球部員はわかってますよ、という感じで笑みを返す。

「みなみはまだ来ていないのか」

会長の特等席であるホワイトボードの前に荷物は置かれていない。最近は何日のようにトップバッターで部室に駆け込んでいたのだが、どうせおやつでも買っているのだろう、と副会長は見当をつける。ピカピカ光るクリスマスツリーの横では咲が座って本を読んでいる。

「心配なら探してくればどうですか」

顔をあげずに咲がいう。その口調はいたって平坦だ。

「すぐにやって来るさ。わざわざ探しに行く必要もないだろう？」

「どこに行ってるか気にならないんですか」

「購買部かどこかだろ、きっと。いつもみたいにいちばん最後に顔を出した方がみなみらしい」

「そうですか」

抑揚のない声で答えると咲は口をつぐんだ。

咲の横にいた結衣が長テーブルから身を乗りだし、副会長に顔を近づける。

「副会長」

やけに機嫌がいい。その理由は明白だったが、当の本人はあまり喜んではいなかった。

すこし顔をそらしてから注意する。

「もう少し普通に振る舞えないのかい？ その様子だとすぐに感づかれるぞ」

「大丈夫ですつて。会長が来たらいつも通りの演技をしますから」

「演技ではなくて普通にしてくれればいいんだけど――」

会長が勢いよくドアを開けて入って来る。

結衣はあわてて近づけていた顔を引っ込める。その光景をちらりと見やっってから

「なに？ キスでもしてたの？」

とこともなげに聞いた。

「そんなわけないじゃないですか。会長とは違いますからね」

ようやく墓穴を掘っていたことに気付くと会長は両耳を真っ赤に染めた。11月の誤解をとまなうハプニング以来、こうやって何度も結衣や神崎にからかわれる。そのたびに会長が面白いように恥ずかしがるので、怒られようと追いかけまわされようとからかうのを止めようとはしない。

「あれは忘れなさいといってるはずだけど？」

「忘れようにも忘れられなくて……」

「なら、頭から強引にでも引きはがすしかないかしら」

もう慣れっこになった結衣が会長の襲撃に対して身を構える。だが、思惑と反して会長はふつと体の力を抜いた。

「こんなことをしている場合じゃないのよね。うちら探偵同好会は目先の事件を解決しないことには未来へ進めないのよ。結衣ちゃんの灰色の脳細胞を破壊し尽くしたいところだけど、はやく事件の真相を明らかにしなきゃならないから、今は見逃すことにしておくわ」

「未来永劫にですか？」

「事件が終わったら叩きのめす」

とりあえず当面の危機は去ったと見て結衣は警戒を解く。会長は

さつそく部室の奥にある窓ガラスを全開にした。

尖った氷のような寒気が部屋に入り込んでくる。

『北風と太陽』の童話で北風に吹かれた旅人のように副会長はえりを立てて風邪から身を守ろうとする。だが抵抗もむなしく心ない風は副会長の無防備な顔まわりを痛めつけていく。

「寒い！ 早く閉めてくれ！」

必死に叫ぶが、会長は一向に動く気配を見せない。

「空気が淀んでるとまともな思考はできないわ。空気の入れ替えよ、インフルエンザも流行っているらしいし。この生温かい部室では眠くなるわ」

「もう十分だから窓を閉めてくれ！」

「そう？」

「早く！」

会長は名残惜しそうに鍵をかけてから、ひんやりと冷たいマジックペンのキャップを外した。ホワイトボードには今までの記録がぎっしりと書きこまれていて、これ以上のスペースはない。

「さて——」

と思わせぶりな台詞を吐いたが、会長の次の言葉は意外と平凡なものだった。

「行き詰ってるわね」

「そうですね」

いつの間にか本を閉じた咲が相槌を打つ。

「誠くん、なにかないの」

「おれですか？」

「そうよ。こういうときは誰かが馬鹿やって、その挙動を見た名探偵が『これは……まさか！』みたいな感じで閃くっていうのが定番でしょ。その役目は見事に誠くんだわ」

「でも、おれ、何にも浮かばないです」

「どんとしんく、ふいーる！」

ひらがなの発音で会長が叫ぶ。

「なにかしなさい」

「そんなぁ……」

「さぁ、さぁ、さぁ！」

「ちよつと待ってくれ」

ずいずいと神崎にプレッシャーをかける会長を、副会長がいさめる。あまり晴れない副会長の表情に、会長は疑問をぶつける。

「なによ、難しい顔して」

「昨日のことなんだが——朝井を見かけたんだ」

「ふーん、それで？」

「あれは、おそらく、朝井はアルバイトの帰りだったんだろうと思う」

「そうなんですか!？」

結衣がすつとんきような声をあげる。それから、あつという顔を
して口元をおさえた。

まったく隠せていない、と副会長は頭痛を感じた。とても心配だ。
秘密がばれるとすれば確実に結衣の口からである。

「おどろきね。それは確かな情報なの？ 人違いとかじゃなくて？」

「ああ、確実だ。しつかり顔を見た」

「アルバイトねえ——それも生徒会長が。生徒会長だけはアルバイ
ト解禁！ なんて校則あったかしら」

「ない」

「ということは、なにか秘密があるわね。うちに話せない隠し事
が」

会長は嬉しそうに口元を歪めると、ホワイトボードの雑然とした
文字を一気に消し去る。また白い顔をのぞかせたボードの上に、さ
つそく大きく『秘密』と刻印する。

「大きな手がかりが手に入ったわ。これは確実に正解にたどり着く
ための重要なピースよ。逆にいえば、これさえ解ければ真実はもう
目と鼻の先ね」

「どうしてそんなことがわかるんですか」

神崎がきく。

「探偵の勘よ」

「そうですか」

そそくさと会長の言葉を律儀にメモする。鉛筆が紙をひっかく音が漂った。

「アルバイトってことは、なにかお金が必要なのよね、たぶん。働くこと自体が目的だとは考えづらいわ。働くだけならボランティアをすればいい話だもの。わざわざ校則を破るようなリスクを冒すはずはないわ」

「ねー、副会長」

結衣がわざとらしく視線を送って来るが、副会長は完全にそれを無視する。

「金が必要、つまりなにかを欲しているということだ。朝井が、生徒会長が規則違反をするくらいに重大な理由があるにちがいない」

「だーから放課後になるといなくなっていたわけだ」

会長がうんうんとわかったようにうなずく。副会長はすこし驚いたように

「調べてたのか？」

「そうよ。咲ちゃんに報告されてからすこし気になってたのよね、どうしてうちらが捜査しているのに生徒会がいなくなるのかって。そうでなきゃ遅れたりしないわよ」

「僕もちょうど同じところが引つかかっていたんだ」

副会長は長い腕を組み直す。

「朝井生徒会長が放課後すぐに姿を消すのはアルバイトのためとして——他の役員たちもバイトをしているんでしょうか」

咲が疑問を投げかける。

「そう考えていいと思うわ。朝井個人ではなく、生徒会全体の問題である可能性が高いわね」

「お金と、プレゼント——」結衣がうわごとのようにつぶやく。「盗まれた分を、働いて取り返そうとしているんでしょうか。それな

ら説明がつきます」

「学校側から出るんじゃないかしら。いくら自分たちの責任とはいえ、校内の問題を隠蔽しようとする学校側にも問題はあはずだし。プレゼント強奪なんていう常識なことがあるかしら、ふつう」

「なら、なにか問題が発生して予算が足りなくなってしまったとか」「それもどうにかかなりそうじゃない。すくなくとも不測の事態だったならば、公表して、学校側に金を出させると思っわ」

朝井の手腕ならばそのくらい、簡単にやってのけるだろう。学校側も干渉できない、なにか特別な事情があるにちがいがなかった。

「アルバイトしたいのなら、規則を変えればいいだけのことよね。アルバイト禁止にはかなり反対意見があるし、実際何人かは隠れてバイトしているらしいしね」

副会長がこっさりうつむいたのに会長は気がつかない。そのままあごに手をあてて続ける。

「けど、生徒会がやる理由は――」

「意外と生徒会も良い子ばかりじゃないんですね。アルバイトするなんて。これじゃ犯人と変らないですよ」

神崎がさっぱりアイデアがひらめかず、降参だというようなしぐさをする。その言葉に、結衣が反応した。

ぶつぶつと口のなかでなにやら呟く。少しして、結衣はにっこり笑うと、ホームズの衣装をひるがえした。

「わたし、犯人わかっちゃいました」

笑顔で宣言してから、表情を引き締める。

「さて――」

解いてはいけない謎

「生徒会が全校生徒にクリスマスプレゼントを配布するという企画が発表されて、Xデーを翌日に控えた朝会のさいに何者かによって襲撃されプレゼントを盗まれてしまったというのがこの事件のあらましです。犯人はおそらく学校内部の生徒だと、生徒会の人たちは証言しています。そしてプレゼントの中身、犯人の動機などは不明です。生徒会長の朝井さんも犯人の顔は見えていないといっています」

結衣が部室のなかを徘徊しながら話す。名探偵の掟のひとつ、推理をするときは歩きまわらなければならないという項目を律儀に実践しているのだ。

「ここでひとつ疑問が浮かび上がってきます。犯人が生徒であるならばどうしてプレゼントをわざわざ盗みに行ったのでしょうか。強奪には非常に大きなリスクがかかります。プレゼントは待っていてもやって来るのに自分から危険を冒す必要はありません。ですがプレゼントの中身を知っているのは生徒会だけ。高級な品物なので盗みに行ったという説は薄いです」

推理の途中で副会長のパイプ椅子に足を引っかけ掛ける。結衣は気にしなかったようにまた歩きはじめるが副会長は申し訳なさそうに椅子をすこし引っ込めた。

「ここで生徒会がアルバイトをしているという情報を加えてみましょう。バイトをするにはいくつかの理由が考えられます——お金がほしい、働きたい、誰かにプレゼントを贈りたい」

結衣はここで立ち止まった。

お気に入りのホームズの衣装をはためかせ、パイプ煙草を口から離す仕草をする。もちろんそこに煙をたゆらせるものはない。

「わたしたちが選挙で選んだ生徒会のみなさんはとても優秀な方達です。彼らは滅多にミスをすることもないし、いつも楽しいイベント

トを企画してくれます。今回もそういう生徒を喜ばせたいという善意からはじまったイベントでしょう。でも、生徒会といえど人間です。減多にミスを犯さない、けれど、間違いを犯すこともあるでしょう。それは非常に珍しいことなので、気づくまでに時間がかかったのかもしれませんが」

結衣は再び部屋のなかをまわりだす。推理のテンポによって歩くスピードを変えているらしい。

こげ茶色のローファーが冷たく硬い床をたたく音が小気味よくリズムを刻む。

「そこで仮説を立ててみました。生徒会が予算を申請したときに計算ミスをしていた、という可能性です。当然学校に請求した金額ではプレゼントを買いそろえられません。ひょっとしたら予算の請求額が低かったためにこの企画が認められたのかもしれませんがね。どちらにせよ、今のままではプレゼントは不足してしまいます」

「それならもう一回学校に金を出してくださいって頼めばいいんじゃないか？」

神崎が質問する。結衣は足を止め、神崎に微笑みかける。

「当然その請求を学校側は突っぱねると思います。生徒会が間違っていたのなら新たに支出をする義理はありませんから。経費削減というものです」

「いつも生徒会に助けられているくせに」

「わたしたちは残念ながら自分でお金を稼いでいるわけではありませんから、金銭のことが絡むと格段に立場は落ちます。それが大人の強みです」

抑揚のない口調で述べると結衣はまた推理を再開する。

「期日は決めてしまった。けどプレゼントがそろわない。ミスをしました、もう少し待っていてください、といえば良かったのでしょうか？ 会社だったらそうすべきでしょう。ミスをした人間は責任を取らなければなりません。けれどももしそれが一年生だったら？ 間違いがあったと公表する以上、その人は責任を追及されるでし

よう。生徒会はクビ、ほかの人が代わりに生徒会に入るかもしれません。ですが朝井生徒会長はやさしい人柄ですからそれを申し訳なく思ったことでしょう」

「つまり、ミスをした部下をかばったということですね」

咲がはつきりした声でいった。もうほとんど事件の全貌を理解しているような口ぶりだった。

「そうです。ひとりのミスは全員のミス——運動部的な連帯責任をかかげれば個人を守ることはできるでしょう。ですが、それでは今まで先輩たちが築いてきた生徒会の名誉と尊敬が失われてしまう。プライドや葛藤もあったことでしょう」

「あいつなら、そう考えると思うわ」

会長が太鼓判を押す。結衣は満足げにうなずいて見せる。

「そこで考えました。誰かに盗まれたことにすればいい、せめて自分たちでアルバイトをしてお金を貯められるだけの時間を稼ぐことができればいい、と」

探偵同好会の部室におだやかな静寂が流れる。誰もが結衣の言葉に耳を傾けているのだ。

「自作自演の襲撃です。朝井さんは実に巧妙な計画を立てました。自分たちはもちろん、校内にいる誰も犯人にならないような計画を最初の朝会で、生徒会長は遅刻や欠席している生徒のことをなんとなく、ですが確実に意識させました。わたしたちも朝会時に教室にいなかった生徒をまず容疑者として疑ってしまったことから、それがわかります」

「それで？ 自分たちも疑われない方法ってどうするのかしら？」

会長が目を輝かせながら尋ねる。

「録画です。前日にでもあらかじめ朝会を録画しておけば、生徒会の人たちが教室にいたまま犯人を登場させることができます。プレゼントを消失させる手間もはぶけますし、自分たちを縛る時間も稼ぐことができたでしょう。放送室には生放送だけでなく、ビデオを流せる機械もありましたし、先生たちもいなかったので実際のところ

るなかの現状は外部から見ることはできませんでしたから」

「証拠はあるのか？」

神崎が犯人でもないのにおきまりの台詞を吐く。その問いに答えたのは結衣ではなく副会長だった。

「証拠がなかったのが、証拠だよ」

「え？」

「僕らが現場を検分したとき、証拠らしい証拠はなにも見つけられなかった。それこそが当日にも起こっていなかったという証拠になる。ふつうの高校生がなんの痕跡も残さずにあれだけのことをやってのけるのはまず不可能だからね」

「副会長のいう通りです。証拠がない、それこそが証拠です」
「なるほど」

神崎が手帳に鉛筆を走らせる。結衣は書き終えるのを確認してから口を開く。

「学校が終わるとすぐにアルバイトに向かう生徒会の人たち。これで放課後にいなくなる謎も解明されました。後はプレゼントだけです」

「それはお楽しみってことね」

会長が言葉を継いで、結衣は「はい」と嬉しそうに答えた。

「でも、この事件はうちらの出る幕はなかったのかもしれないわね」
会長が疲れたように椅子へ腰をおろし、思い切りのびをする。

「なぜですか？ 事件は解決したじゃないですか」

神崎がげんそうに聞く。会長は神崎の手帳を指さし、いった。

「名探偵は事件をハッピーエンドに解決するのが仕事でしょ。うちらが今回の事件の真相を明かしたところで誰も幸せにはならない。生徒会が一生懸命に働いてまで守ろうとしているものを、全部壊しちゃうことになるもの」

「解いてはいけない事件、ですね」

咲が感想をもらす。ほとんど無表情だが、そのなかにはわずかに嬉しそうな色がかがえる。

「さてと。うちらもそろそろ帰りますか」

会長が腰をあげる。咲が不思議そうな顔をした。

「もう帰るんですか？」

「ただ帰るわけじゃないわよ、もちろん」

ニヤリと口元を浮かべる会長。咲は背中に悪寒が走るのを感じた。

「真相を知ってしまった以上、うちらも協力しなければいけないと思うのよね。微々たる戦力だけど、アルバイトに赴くのよ。たまつたお金は生徒会に寄付、ということだ」

「本気ですか？」

「当たり前じゃない。それも名探偵の仕事のうちよ。さ、行くわよ」

抵抗の色を見せる咲を強引に引っ張っていく会長。部室のドアが閉じられると、副会長がいつも以上に気苦労をのせたため息を吐き出した。

探偵からのプレゼント

冬のアルバイトは想像以上に体を酷使した。

身を切るような風が無情に路面を吹きすさぶなか、屋外で働くのは精神的にも肉体的にもこたえるものがある。会長にほとんど強制的に肉体労働を命じられた神崎の手は、あちらこちら赤切れを起こし、乾燥しきっていた。

「はあ——これでおしまいか」

働くのは大変だったけれど学校が終わるとすぐにアルバイトに向かう毎日は新しい世界が開けたみたいに新鮮で、楽しかった。それが今日でおしまいとなると少し物寂しいような気もする。

「お疲れ様でした！」

野球部仕込みの大きな声で挨拶をし、工事現場を去る。

懇意にしてくれたベテランのおじさんが「じゃあな」と笑いかけてくれる。神崎は深々とお辞儀をしてから、会長たちとの待ち合わせ場所である、副会長がアルバイトをしていた駅に足をのばす。

朝井がバイトをしているのもその近辺なので、帰りに待ち伏せよという作戦らしい。十日ほど働いて得たお金は、それほど大金ではなかったけれどお小遣いとして使うには十分な額だ。

それを生徒会に寄付してしまうというのはすこし惜しい気もする。遅いわよ誠くん。逃げられたらどうするつもりなの」

もうすでに駅前の広場には探偵同好会の面々が集合していた。会長は神崎の手から今までの給料が入った封筒をとり上げると、なかにある数枚のお札を数え、小銭を確認する。

「しけてるわね」

「なんですか、そのカツアゲみたいな台詞は」

「まあいいわ。あとは朝井を待ち伏せて、驚かせるだけね」

私服姿の会長がのんびり構えながらいった。学校がアルバイトを禁止していることはかくしているので、制服ではいられないのだ。

そういえばこうやって同好会のメンバーが校外で集まるのは久しぶりだな、と神崎は思う。

「――副会長」

結衣がつんつんと副会長の肘を小突く。

かなり高い位置から副会長が結衣に視線を向ける。

「なんだい？」

「あの、お給料はわたしが副会長の分まで一生懸命に働いたので、ぜひクリスマスプレゼントは買ってください。お願いします」

「ああ、そのことか」

副会長は興味がなさそうにこたえる。

「仕方ないよ。最初に貯めていた分はあるけど、それだけじゃとても足りないし。なかったものと考えてくれ」

「そんなぁ……」

「来ましたよ」

咲が声をかける。その視線の先には、背中を丸めて歩く朝井の姿がある。黒いコートはいつもより寂しげに見えた。

「よう」

副会長が肩をたたくと、朝井は弾かれたように顔を見上げ、そして硬直する。朝井の両目はわずかな間大きく見開かれていたが、やがて平静の表情に戻った。

「さすがにばれちゃったか。上手いことやったと思ったんだけどなあ。さすがは探偵同好会ってところだね」

照れ臭そうに笑う。会長は得意げな顔をして朝井に近づき、背中をどついた。

「あえてすべてを語ることはしないわ。うちらはこの真相を公表するつもりはないし、それについてあなたたちを責めるつもりもないから。だから安心して、これを受け取ってちょうだい」

ずいと差し出したのは今しがた徴収したばかりの封筒に入ったお金だ。朝井は静かにそれを受け取ると、中身を確認する。

「これは――って、聞くまでもないか」

「黙って貰うのが男つてものよ。あげるから、使って」

「まいったなあ」

朝井が困ったような口ぶりで天を仰いで、ぼやく。だがその表情は明るいままだ。

「君たちの気持ちはとてもうれしい。言葉では言い表せないくらいに感謝してる。この際規則がどうのこうのなんていつてはいられないからね、現におれらが破っているわけだから。そしてそれは、明日でお終いの予定だったんだ。つまり、目標金額はほとんど集まっていたんだよ」

「——つまり？」

「このお金の、3割だけでいい。生徒会に寄付していただけないだろうか」

深々と頭を下げる朝井。会長はひどくバツの悪そうな顔をして、朝井に頭をあげるよう促す。

「全部あげるっていったばかりじゃない。3割といわず、どーんと持つて行きなさいよ。こっちなんか恥ずかしいじゃない」

「そういうわけにはいかない。これは君たちが汗水たらして働いたものだ。生徒会が無暗に受け取れるものじゃない、それがいくら君らの善意だったとしても。だから、最低限の額だけいただく。それがおれなりの礼儀だと思うから」

「ありがとう、と。」

朝井はこげ茶色の封筒から数枚の札を抜き出し、うやうやしく感慨深げに見つめてから財布にしまう。朝井の財布にはほとんどお金が入っていないようだった。

「残りの分は返すよ。どうぞ好きなことに使ってくれ。この施しは忘れないから」

「ずいぶん横柄な態度ね」

会長が鼻をならす。

「推測はついているんだろうが、こんな事態になってしまった自分たちが情けなくてね。みんなを騙さなくてはならない罪悪感とか、

これで本当に良かったんだろうかという迷いとか、そんなことばかり考えてた。君たちに真相を見抜かれ、すこし悔しい思いもある。言い訳になるが、こんな風に複雑な心境を、どうやって制御しているのかわからないんだ」

「あら、そんなの簡単なことじゃない」

胸を張り、会長が答える。

「うちらを信用すればいいのよ。名探偵は事件をハッピーエンドに解決するのが仕事。なら、うちらが取った行動こそがハッピーエンドへの道のりになるのよ。今回でいえば、うちらは真相を明かさないうことにした。それが最善の手段だと思ったから」

「おれのしたことは正しかったって言ってくれるのか？」

「そうよ。我らが生徒会のトップなんだから、あなたの判断が間違っているわけじゃないじゃない。もっとうちらを信頼しなさいよ。後輩だか何だか知らないけど、身内をかばおうって姿勢は嫌いじゃないわ。学校のルールを破ってまで、約束を守ろうとする気迫も褒めてあげる」

「……励ましまでもらうては、おれはあんまり頼れる生徒会長じゃないかもしれないな」

朝井はふっ切れたように笑った。

「おれら生徒会は学校のためじゃなく、生徒のために活動しているんだ。それを忘れちゃいけないから、クリスマスイベントを企画したはずだったんだけどな。改めて思い知らされたよ、なにがいちばん大切なのかって」

ぽんぽん、と副会長の肩をたたく生徒会長。

「お前も大切なものはだいじにしろよ」

「なにを——」

「じゃあな」

「あの、ちよつとお話があるのですが」

手を振って立ち去ろうとする朝井に咲がこっそり耳打ちする。

「探偵同好会の予算を拡大していただけないでしょうか。実績は認

められるはずです」

「……前向きに検討しよう」

「ぜひよろしく願います」

苦笑しながら駅の人込みのなかへ溶け込んでいく朝井を見送ってから、会長が咲に聞いた。

「なんて言ったの？」

「便宜を図ってください、と依頼しました」

「抜け目ないわねえ、まったく」

ほとんど呆れたような会長の視線を無視して、咲は話を続ける。

「ところで、このお金はどうします？」

「ああ、これね。ぱあっとみんなで使っちゃいましょうか。ちょっと高いレストランくらいには行けるはずよ」

「そういうことなら、返してもらいます」

咲は封筒から自分の取り分を引き抜くと、そそくさと懐にしまいこむ。それにならって神崎と結衣も急いでお金を回収する。

「なによ、ケチくさいわね。これだから日本の景気はいつまでたつても良くないのよ」

「あたしはそれで結構です。会長はどうぞ盛大に消費してくださいな」

「副会長、どうぞ」

咲は結衣から封筒をとり上げると、会長の分を除いてから副会長に手渡した。副会長はおずおずと中身をのぞきこむと、ほっと胸をなでおろす。

「なに安心してるのよ」

会長が八つ当たり気味にいちゃもんをつける。副会長はどこ吹く風といったようにお金を見つめているので、つまらなくなった会長はぶいとそっぽを向いた。

「さ、用事はすんだから帰るわよ。あんまり寒いところに風邪をひいちゃうんだからね」

ひとりでさっさと駅の改札を通り抜けてしまう会長。その手がポ

ケットに入れているのを、咲は注意深くたしかめていた。

ホワイトクリスマス

「いい気分ね、人助けをすると非常に気分がいいわ。犯人はあなただ！　じゃないパターンなのぞ解きも悪くないわね。人情探偵、片倉みなみって感じ？」

会長は機嫌よくケーキをほおばっている。朝井から返してもらったお金でささやかな贅沢を楽しんでいるのだ。そのためか、ここ数日というものの会長から笑みが絶えることはない。

「その話、もう何度目ですか？　いい加減耳にたこができます」

「いいじゃない、良い話はいくら聞いても損はないものよ」

咲が苦情を申し立てるが、会長はヒラヒラ手を振って受け流す。

「それとプレゼントはどれだけでもいいものね。生徒会は素晴らしい仕事をしたわ。もちろんうちの活躍もあるわけだけど、実際のところ金銭的にはほんの僅かばかりの貢献なのよね。どちらかというと心理的な手助けが大きかったわ。これぞ名探偵の仕事ってものね」

「わたしもプレゼントはうれしいです！」

生徒会から配られた、少しはやいクリスマスプレゼントは大きな反響を呼んだ。廊下のあちらこちらで喜びのダンスを踊って叱られる生徒が続出したほどだ。

その光景をほほえましげに眺めていた朝井の表情は、おだやかなものだった。

「学校が今日で休みに入るのが惜しいくらいだわ。いつまでもこの高揚した感情をみんなに披露してあげたいものね」

「それは結構です」

きつぱりと咲がことわる。会長が気にする様子はない。

「副会長からも、なにかプレゼントがあると嬉しいなって思います」
結衣が悪意のない視線を副会長に送る。神崎があわててフオローしようとして口を開きかけたが、その前に副会長が大きな鞆のチャック

を開いた。

「——まあ、見てののとおり僕からのクリスマスプレゼントだ。せっかくアルバイトの金が入ったから、あまり高価なものじゃないが、もらってくれ」

長テーブルにならべられていくのは、包装紙にくるまれた品物。縁には赤いリボンが飾り付けられ、華やかな雰囲気醸し出している。大きさはそれぞれだったが、どれも小奇麗に彩られていた。

「副会長、ありがとうございます！ 開けてみてもいいですか？」
結衣が子供のように目を輝かせながら副会長をうかがい見る。副会長は軽く笑って「いいよ」と答えた。

はやる心をおさえながら、破かないように包装紙をほどいていく。ささやかに紙のこすれる音がクリスマスツリーのイルミネーションが光る部室を包み込む。

いち早く歓喜の声をあげたのは結衣と神崎だった。それぞれスイーツの詰め合わせセットと万年筆をキラキラした瞳で見つめている。「そのくらいしか用意できなかったんだ」

副会長が言い訳気味に弁解するが、結衣は勢いよく副会長の腕に抱きつく。その勢いで椅子ごとひっくり返りそうになる副会長を、うしろから神崎が支えた。

「大好きです副会長！」

「——まあ、ありがとうとおこう」

照れているのか、顔をそむけて副会長がいう。その顔は赤く染まっている。

「これ、有名なケーキ屋さんのですよね？ 何時間くらい並んだんですか」

「クリスマスで込んでいたのもあったし……三時間くらいかな」
結衣がさらに強く抱きつく。副会長はちよつと痛そうな顔をしていた。

「この万年筆、おれの手帳によく合いますね」
会長の言葉などをよくメモしている神崎の黒い手帳に、つややか

な紅い万年筆は綺麗に映える。さつそくページを開いて文字を書いてみると、なめらかにペン先がすべった。

「本当にありがとうございます。おれ、大事にしますから」

「壊さないようにしてくれよ」

「——これは、よく見つけましたね。レアな本ばかりです」

プレゼントの包みを開き終わった咲が、古い推理小説が積まれた山をしげしげと眺める。昭和の香りが漂う黒っぽいカバーをした文庫本からは、かすかに本屋の匂いがする。

「古本屋でアルバイトをしていたからな。店主さんにいつて集めてもらったんだ。見る人が見ないと価値のわからないものばかりだから、意外と棚の奥のほうで眠っているやつも多かったけどね」

「それにしても、こんなのタイトルを見たことしかありませんよ。復刻版も出てないし」

「読み終わったら貸してくれるとありがたい。僕も少し読んでみたいんだ」

「いくらでもどうぞ」

咲はていねいに本の束を鞆にしまうと、名残惜しそうにそれを見つめる。どうやらいますぐ読み始めたくてうずうずしているらしい。堪えられなくなったのか一冊だけ取り出すと、最初のページを開く。「手袋」

会長がぼそりとつぶやく。

その手には暖色の毛糸で編まれた一組の手袋がにぎられている。

ほころびのない手袋は副会長が編んだものではないことを示していたけれど、上品な毛糸の感触はやわらかかった。

「うちが失くしたっていつてたから」

「それくらいしか思いつかなかったんだ。悪いな」

「別にかまわないわよ」

会長はそつけなく返事をした。その声を聞いた咲は文章を追う目を止めると、耳をピクリと動かす。やれやれ、とため息をつきながら本を再びしまい、よだれを垂らしながらケーキを凝視している結

衣と玩具を買ってもらったばかりの子供みたいに万年筆で線を書きまくっている神崎をうながす。

「そろそろ帰ろう」

「えー、わたしここでケーキを食べていきたいです」

「えー、おれまだ帰りたくない」

「つべこべ言わないで、はやく」

咲の有無を言わせぬ口調と鋭すぎる視線に気おされたふたりは、しぶしぶといった様子で咲に部室のそとへ連れ出されていく。ドアを閉める直前に、咲はすこしだけ副会長と目を合わせて、ウインクする。

賑やかな人々が去ってしまうと、残された会長と副会長のまわりを静寂が包みこんだ。モミの木に飾られた小さな色つき電燈が、祝福するみたいに交互に光っている。

副会長がそとを見上げると、すっかり空は黒く塗られていた。

「帰ろうか」

副会長がいうと、会長は「うん」と短くこたえてイルミネーションの電源を切る。暗くなった部室を後にすると、ふたりは同じ方向の家路をたどる。

夜空は雲に覆われていて、星の光を見ることはできない。冷たい風が通り抜ける。会長はもらったばかりの手袋をゆつくりとはめた。

「ねえ」

「どうした」

「全員分のプレゼントを合わせるとき、アルバイトのお金だけじゃ足りないよね」

「——セーラだったんだよ」

「嘘つき」

「うるさい」

会長が足元に転がっていた小石を蹴飛ばすと、からからとアスファルトを転がって排水溝の隙間に吸い込まれていった。

「嘘だよ」

「なんで断言できるんだよ」

「うちもやろうと思ったけど、足りなかったんだもん」

会長が唇をとがらせる。

「四人分っていうとけっこうな額になっちゃうのよね。それで、やめたわ」

「そうか」

「でも、健輔からプレゼント貰っちゃったし。返さないよね」

「べつにいいさ。気にするな」

「はい。これ」

会長は唐突に立ち止まると、ポケットに忍ばせていた袋を副会長の目の前に突きつける。副会長は驚いたようにそれを見つめ、うけとった。

「足りなかったんじゃないのか？」

「だから健輔の分しか買えなかったんですよ。言わせないでよ」

「そうか、それはすまない」

無言の沈黙がふたりの間に舞い降りて、しばらく言葉を交わさずに歩く。お互い顔を見ることはなくて、前ばかり向いている。もうすぐ分かれ道だという所に差ししかかってようやく会長が口を開いた。

「ねえ健輔」

「うん？」

「ありがとう」

「お互い様だ」

会長が手袋ごしに副会長の手を握る。副会長はすぐに会長の手を握り返す。温かい感触がお互いに伝播した。

「あ、雪だ」

頬にあたった冷たいものを会長が見上げる。曇りがかった静かな空から粉雪が舞い落ちている。

「寒いな」

副会長が小さな声でつぶやくと、互いの体温をたしかめ合うみたいに、ふたりは雪のなかを寄り添った。

こっくりさん、こっくりさん（前書き）

またまたちょっとホラーチックですが、作者の力量が足りないために、中途半端な怖さになっている恐れがあります。それでもなお、心臓が弱い、靈感が強いという方はお気を付けください。

ここからは1月編となります。

こっくりさん、こっくりさん

もしもあなたに知りたいことがあって、こっくりさんに教えてもらいたいのなら、こう言えばいい。

「こっくりさん、こっくりさん、どうぞ私のもとにおいでください」これを3回繰り返すとこっくりさんが降りてきて、あなたの体を使ってあなたが聞きたいことをなんでも教えてくれる。

あなたが用意するのは昭和時代に製造された古い10円硬貨と、はい、いいえ、性別と赤い鳥居、そして五十音を記した紙だけ。それを4人で囲む。

あなたたちは必ず4人でなければいけない。1人でも足りないと、こっくりさんが現実世界に出てきてしまうから。

あなたたちは4人で鳥居の周りを囲んでいる。それは東西南北の四方を封印するため。だからひとつでも方位が欠けていると、こっくりさんが現れて、あなたたちは強すぎる妖力にとりこまれて狂ってしまう。

友達を傷つけるだけで済めばいいけどね。

そして、こっくりさんをお呼びしてからは1人ずつ人差し指を硬貨の上に乘せていく。

そのときに大事なものは、こっくりさんの存在を強く信じること。もしひとりでも疑っているような人がいたらこっくりさんは怒って帰られてしまう。だからこっくりさんをお呼びするときは、なるべく経験者どうして集まったほうがいい。一度でもこっくりさんを目の当たりにすれば、次からは疑おうなんて馬鹿なことを考えなくなるはずだから。

全員が指を乗せ終えたら、あなたは代表して質問しなければなら
ない。

「こっくりさん、こっくりさん、あなたの好物はなんですか？」つて。

こつくりさんは狐の神様だから好物はお稲荷様だと答える。あるいはあぶらあげ。それはそのときの気分次第。でも、もしあなたがこの質問を忘れてしまったら気分なんて関係ない。あなたはこつくりさんに乗り移られたまますぐに一生を終えるのだから。

こつくりさんは憑依したときにあなたの意識と深く交わり合う。だからこつくりさん自身が、自分が誰だったのか忘れてしまう。こつくりさんはあなたを自分だと認識してしまう。

だからこつくりさんの好物を尋ねて、ちゃんとこつくりさんが自分のことを思い出せるようにしないと、こつくりさんはあなたから離れられなくなる。

もちろんあなたもこつくりさんから逃れる術はない。

そして、あなたが質問を終えると、4人の指が乗せられた10円玉が動きはじめる。

4人もの人間が10円玉を制御しようとしているのだから、誰の意思とも関係なく勝手に10円玉が動くなんてありえない。でも、奇跡さえもこつくりさんなら朝飯前。なにせ神様だから。

「こつくりさん、こつくりさん」

今度はあなたの本当に聞きたいことを質問する順番。

こつくりさんはありとあらゆることを何でも教えてくれる。神様は全部を知ってるから、あなたが知りたいことをすべて伝えてくれる。はい、いいえ、で答えられないことは紙に書いてあるひらがなを指して会話する。

こつくりさんと呼び出す方法は基本的にはこれだけ。ひとつだけいい忘れたけど、途中で指を離したら絶対にダメ。もしも指を離したらすぐに依り代となっている人に謝らなければならない。こつくりさんは10円玉に指を乗せている人たちの力を使って会話しているから、一人でも離反するとすぐ怒ってしまう。それを鎮めるためにはお稲荷さんがいちばんんだけど、もしも近くにない場合はただ謝罪することしかできない。

それを怠ったら、こつくりさんは怒って指を離した子に呪いをか

けるから。その子は一生今いる場所から離れられなくなつて、衰弱死した魂をこつくりさんと一緒に連れ帰るという運命をたどることになる。

あなたの質問がすべて終わつたら、あなたはこつくりさんに深く感謝しなければならぬ。

あなただけじゃない。参加者全員がこつくりさんにお礼の言葉を述べなければならぬ。

そして儀式を終えるときには必ずこう尋ねて。

「こつくりさん、こつくりさん、お離れしてもよろしいでしょうか？」

さつきもいったけど、こつくりさんはあなたの体に憑いているから、こつくりさんに帰っていたくにはあなたから離れてもらわなければいけない。本当なら、指が勝手に動いて「はい」のところに指し示すはずなんだけど、もし4人のうちの誰かが少しでも裏切るようなことをしていたら、こつくりさんはすぐお気付きになる。

もしこつくりさんがあなたの質問に対して「いいえ」と答えたら、あなたたちはもう助からない。その場にいる全員に呪いがかかってしまうから。動けず、助けも呼べず、あなたたちはこつくりさんに縛られ続けて、やがては魂を持っていかれこつくりさんに使役され続ける。

そうして、次にこつくりさんが誰かの魂を連れてくるまで地獄のような苦痛を味わうことになる。

こつくりさんが無事にあなたから離れたら、その10円玉はすぐに神社のお賽銭箱に投げ込んだほうがいい。こつくりさんの霊的な力がまだ少し残っているから、神聖な場所に置かないと、不幸を呼び込んでしまう。

あなたはいくつかの手順を守りさえすれば、簡単にこつくりさんと呼び出すことができる。だけどそれは、一歩間違えると死と隣り合わせの儀式だということを覚えておいてほしい。

こつくりさんは狐の神様。でも、その本性は獣。すぐにしびれを

切らして、あなたを喰い殺そうと牙をむき出しにして待ち構えているのだから――。

いっくんさん いっくんさん（後書き）

1月編、はじまりです。

予感

「だから、本当に霊能力や科学で説明できないような不思議な現象は世界中に存在しているんだってば。その眼は信じてないな、よし、説明してさしあげよう。有名どころならバミューダ海域の魔のトライアングル——これは君たちも知っているだろう。フロリダ半島の先端とプエルトリコ、そしてバミューダ諸島を結んだ三角形の範囲では、船舶や飛行機が突如消失してしまったり、乗組員だけが神隠しにあつたみたいになくなってしまふという怪事件が多発しているんだ。原因は諸説あるけど、僕はやはりなにか異形の力が働いているんじゃないかと思えない。日本のあちこちにも心霊スポットなるものがあるが、その異常なまでに強力なものがバミューダトライアングルではないかと考えている。科学的な説明を試みようとした人もたくさんいるが、そのどれもが確実性に欠けている。つまり真実ではないんだ。第一、すべてを科学で説明できるというおこがましい風潮が間違っているんだよ。なぜ世界中にいわゆる超常現象やオカルトの類が分布しているのかを考察すれば、答えは簡単だ。つまり未知のパワーは存在している、という結論になる」

パチパチパチ、と結衣ひとり分の拍手が副会長に向けられる。大演説に対してもっと大きな拍手はないものかとばかりに副会長は周囲を見回すが、咲をはじめ誰も話を聞いているようすはない。

会長は一心不乱に菓子パンにかぶりついているし、神崎は会長とのオセロ対決の途中でうんうん唸っている。去年のクリスマスにもらった古本の山をとくに消化した咲は、どこで見つけてきたのかぶ厚いハードカバーの本を読んでいる。

結衣だけが真剣に副会長の話に耳を傾けていた。

副会長は目に涙を浮かべ、感謝の言葉を述べる。

「ありがとう結衣くん、君だけがこの科学というウソで塗り固められた現実に疑問を抱いてくれるよ。他の人たちはみんな不都合な真

実から目をそむけてしまっ、でもそれじゃいけないんだ」

「その通りだと思います」

結衣が力強くうなずく。お気に入りのホームズ姿のコスプレをしているのはいいが、世紀の名探偵がオカルト話を拝聴しているのはなんだか滑稽でもある。

悩んだあげくに神崎が白のオセロをおき、いくつか石をひっくり返す。それを見た会長が間髪いれずに黒石をオセロ盤のかどに打ちおろす。ああ、という悲鳴のような溜息が神崎からもれた。

「どうして科学なんていう得体のしれない物を信じられるんだ？」

原子？ 分子？ それがなんだっていうんだ。僕らは科学というものを教科書でそれっぽく説明されているだけで、なにもわかつちやいない。実際に目にしたわけでもないのに、テストで点数がとれるようにと無理矢理、頭に詰め込めさせられる。これは理不尽だ」

「おっしゃるとおりです、副会長」

「それならオカルトを信じたっていいじゃないか。妖怪や霊の教科書があつて、それを教える先生がいたなら、僕らはきっとオカルトを疑わない。むしろ科学に対して疑問をぶつけるだろう、どうしてそんなもの信じてるの？ って」

「まったくです、副会長」

「すべての学問は同等に扱われるべきだ。科学が存在するのならまやかしも同時に存在しなければならぬ。表と裏はつねに隣り合わせ、切つても切れない関係だ。それを強引に引きはがそうとするから科学では説明できないことがたくさん出てくる」

「イエス、副会長」

「オカルトを認める！ 霊を認める！ 超能力を認める！ それこそが科学と超常が共存できる唯一の道だ！ 世界を平和に、ラブ&ピース！」

「ラブ&ピース！」

「そこうるさい。黙って」

仁王立ちになって空にピースサインを突き出している結衣と副会

長に対して、会長の冷たい弾丸のような言葉が撃ちこまれる。

浮かれた二人組はしばらく抗議するようにピースサインを崩さなかったが、会長のナイフのような視線を喉元に突きつけられてあっさりと降参する。

力なくうなだれながら副会長が席に座ると、神崎が会長に投了を告げた。

頭をかきむしりながら、げんなりした副会長を見る。

「あー勝てないっ！ 副会長、気晴らしに一戦やりませんか？」

「僕が勝つたら話を最後まで聞いてくれるという条件をつけるなら、受けて立とう」

「じゃあ止めておきます」

あっけなく引き下がる神崎。年季のはいった才セロを箱にしまうと、長テーブルの上に突っ伏した。

「なんか副会長のオカルトを聞いてたら肩が凝りました。どうにかしてくださいよ」

「マッサージしながらたっぷり話を聞かせてあげよう」

「——まるでどこかの怪しい新興宗教ですね」

「そんなものよ、オカルトなんて」

会長が菓子パンの包み紙を丸めて投げると、NBAのフリースローみたいにゴミ箱へ向かって鮮やかな軌跡を描いた。

ガッツポーズをしながら会長はつづける。

「いい加減に迷信は捨てなさい。この世に起こった怪事件がすべて霊の仕業だったら、うちら探偵の出る幕がないじゃない。同好会の存在意義が消えてなくなるわよ」

「怨念を抱いた幽霊の、生前に起こった事件を解決して真犯人を突き止めてあげるといふのは」

「ただの除霊師じゃない。しかもレアなケースだし。恨みの元が男女関係のもつれによる痴情とかだったらどうするのよ」

「……夫婦喧嘩は、犬も食わないっていうだろ」

「つまり無理ってことね」

会長が呆れた口調でなじる。そして、大きく伸びをすると眠たそうにテーブルに頭を乗せる。腕を枕にして心地の良い体勢を整えようと、目を閉じた。

「暇すぎて眠くなって来たわ。くだらないオカルトばかり聞かせるからよ」

「なら、背筋も凍るような怪談を――」

「遠慮しとく。うちはちょっと眠るから、面白いことがあったら起こしてね。もしうちが目覚めたときにみんなだけで楽しそうなことやってたら怒るから」

「意外と寂しがり屋ですね、会長」

神崎がぼそりとつぶやくが、会長にひと睨みされるとあわてて口をつぐんだ。

「僕も眠いな。最近ずっとそうだ」

副会長があくびをする。さきほどまでの元気はどこへ行ったのか、今は目が半開きの状態になっている。部室においてあるタンスの上から簡易まくらを取って来ると、副会長は頭をまくらにもたせかけた。

会長はわずかに瞼をあけて、副会長のまくらを奪い取る。

支えを失った副会長の頭は重力に従って、長テーブルに思い切りぶつかった。

「なんだよ、まったく……」

涙目まじりに文句を言う。コートの袖をうまく利用して頭が痛くないようにすると、副会長も瞳を閉じた。

結衣がこっそり神崎に耳打ちする。

「ふたりとも寝不足ってことは、今度こそ――」

「結衣ちゃん、なにかあった？」

目を閉じたままけん制する会長に「いいえ、なんでもないです」と笑いながら誤魔化す。結衣の額にはいやな汗が浮かんでいた。

「いま、命の危険をちょっと感じました」

「勉強で疲れてんのよ。いつになったら終わるのかしら」

会長が力なく睡眠不足の理由を説明すると、副会長も静かにうなずいた。

「あとすこしの辛抱なんだが、それがどうしようもなく長い」

「健輔は来年もあるかもしれないわね」

「縁起でもないことを言うな。僕たぶん成功する」

「おそろく——かしらね」

会長は眠たげにいうと、それっきり黙ってしまった。副会長も同じように動かなくなってしまう。

ふたりが安らかな寝息を立てはじめるのを確認してから、結衣は本を読んでいる咲に質問する。

「あの、咲先輩？」

「なに？」

短い返事。ページに向けられた視線をあげようとはしない。

「この部室で怖い話したの覚えてますか？ 副会長がすごく怖い話をしていたのを」

「——そんなことあったっけ」

咲はページをめくる手を少しだけ中断して、思い出すように宙を見上げる。すこししてから、怪訝そうに結衣に問い返した。

「夢かなにかを見たんじゃないの？ 副会長が変なことばかり言うから、夢に出てきたことと混同してるんだと思う。すくなくともあたしはそんな記憶はないし」

「……そうですか」

「あんまり真剣に副会長のオカルト講義を聞かない方がいいよ。ああいうのは話半分に聞き流すくらいがちょうどいいんだから」

「わかりました。ありがとうございます」

抑揚のない結衣の返事。咲は一瞬、難しい表情をしたがすぐにまた小説を読みはじめる。

「でも」

そうつぶやいた結衣の言葉は、誰の耳にも届くことはなかった。

霞ヶ丘高校でも例にもれず最高学年になると理数系のクラスと文系のクラスとに仕分けされ、それぞれの科目に特化した授業を受けることになる。

理数系クラスならもちろん数学や物理、化学などを。

反対に文系のクラスでは歴史や古典などを教えている。

とくに理数系クラスは成績の優秀なものが集まる傾向があり、羨望と尊敬の念を込めて α クラスと呼ばれている。 α クラスの生徒たちは試験で良い成績を収め、名のある大学に進学するという義務を暗黙のうちに背負わされているのである。

会長も副会長も α クラスに属しているわけではないが、勉強のプレッシャーは無言のまま重たくのしかかって来る。

ふつうの生徒でさえそうなのだから、 α クラスの生徒たちにかかる重圧は尋常なものではない。

事件が起こったのはある意味、必然だったのかもしれない。

プラスチックの下敷きは力をかけるとそのぶんだけ反発するが、あまりに折り曲げすぎると真つ二つに割れてしまう。人の心もまたある時不意に堪えられなくなって、折れてしまうものなのかもしれない。

——教室のなかではチョークとシャープペンシルの走る音が競走するように鳴っていた。黒板に羅列される数列。それを必死に写し取っていく生徒たち。そこに私語を楽しむような余裕はまったく存在していなかった。

目を充血させながら問題に励む者、いくつもペンたこを作りながらもペンを握りしめる者、小刻みに貧乏ゆすりをしながらノートを取る者、みな一様に教師の言葉を一字一句聞き逃すまいと集中している。

教室に余計なものは一切置かれていない。

あるのは勉強に必要なものだけ。ノート、鉛筆、問題集。それらが生徒たちを監視するように机に置かれている。誰も時計を確認し

ようとはしない。

居眠りをするのは勝手だが、お前を拾ってやるほどの温情はない、という態度の教師はさっさと板書をすめていく。それに離されまいと必死に手を動かし、生徒たちは無表情に記憶を刻みこんでいく。無機質な騒音。

それはリズムというにはあまりにも心のこもっていない音だった。ふと、音楽プレイヤーからイヤホンを抜いてしまったときのように、シャープペンシルの音がかき消えた。

今までうるさいほど鳴いていたひぐらしの群れがいつせいに押し黙ってしまった夕暮れのような静寂。チヨークの音だけがむなしく響く。

異常を感じ取った教師がふりかえる。

全員が、まるでひきつけを起こしたように、机上にぐったりと倒れこんでいる。居眠りではないようだったが正常な状態でないのは明らかだった。

誰一人として意識を保ってはいない。

だが、全員が苦悶の表情を浮かべている。なにか悪夢にうなされているかのよう。

主を失ったシャープペンシルがノートの上を転がって、冷たい床に落下する。音のない教室で、それは異様なまでに大きく響き渡った。

数学教師はおろおろしながら教室を歩きまわったあと、狐につつまれたような表情で教室を出ていった。他の教師に応援を要請するためだった。

生徒たちは今の時期に授業を受けないことがどれだけ痛手になるか本能的に理解している。それは刷り込まれた恐怖のようなものだった。だから、悪戯のはずはない。

高層ビルの屋上から車の行き交う道路を見下ろすような感覚。

ここから飛び下りてみたい気がする、でも怖い未来が待っているからやらない。

「いったいなんだっていうんだ」

いらついた口調で廊下を大股に闊歩する。

他のクラスは、いつも通りの授業を行っていた。ときおり耳に届く誰かの笑い声がいやにまとわりついた。

事態は大事になった。

αクラスの生徒たちは全員が保健室に運びこまれ、意識が正常に戻るまでベッド、あるいはマットの上に寝かされ、その後は教師たちによる尋問にあわされた。

1クラス分の人数がいつせいに意識を失ってしまうという異様な事件を、教師たちは世間に公表しようとはしなかった。今の時期に学校に不穏なうわさが流れれば、進学の障害になる可能性があるという判断だ。

それは保護者にすら秘密にされ、校内放送で『こつくりさんを、絶対にやってはいけない』という厳命が下されるだけにとどまった。だが、校長自らが放送を流すこととなつては好奇心旺盛な一般生徒たちの口をふさぐことはできず、またたくまにαクラスの怪事は全校生徒の知るところとなった。

だが、翌日になるとすべての生徒がけろりと健康そうに何事もなく登校してきたため、事件がそれ以上発展することはなかった。

全校生徒の心に「こつくりさん」という不可思議な存在を強く印象付け、αクラスの変異は終わりを告げたのである。まるで呪われたみたいだった、とそのとき教壇に立っていた数学教師は証言している。

魔女

「やはり霊はいるんだ。『αクラスのこつくりさん』事件がそれを完全に証明している。これほどまでに強力な証拠がこれまでであったろうか、いや、ない。みなみも児玉くんも反論しようがないだろう」

挑発するように副会長がふたりに訊く。

αクラスをおそった事件は全校生徒の知るところとなり、もちろん探偵同好会が話題の怪事件を無視するはずもなく部室で会議ということになったのである。

「とはいってもねえ」

いつもはハイテンションな会長はあまり乗り気ではなさそうだ。興奮した様子なのは副会長だけである。咲と結衣は沈黙し、神崎は困ったように推移を見守っている。

「霊の仕業に見せかけたトリック、っていうなら話は別だけどうちの学校にそんな大業なことをやってのける催眠術師や知恵者はいないのよね、残念ながら。第一うちは催眠術すらも怪しいと思ってるのよ。胡散臭いテレビ番組でしか見たことないもの、あんなの」

「催眠術だつて立派に科学的に検証されているんだぞ」

副会長が胸を張って主張する。

「あー、わかつたわかつた。全部はプラズマのせいよ、それでいいでしょ？」

「なんだその適当な返事は。それにプラズマ説なんて古い物を……」
「とにかくうちは霊現象になんてこれっぽっちも興味はないの。今はいかに『αクラスの犯行』を人為的なものだったと証明するかが問題なのよ。一見まやかしのような事件だけど、きつと裏には誰かの陰謀か事情が絡んでるはずだわ。この世はだいたいそんなふうにできてるのよ」

「みなみの性格も誰かの陰謀なのか」

「なに？」

蛙を睨みつける蛇のような視線を副会長に突き刺す。

失言を悟った副会長は首をひっこめた。

「誠くん、この事件を探偵的に解決するならどうすればいいと思う？」

急に話題を振られた神崎はあわてて椅子から立ち上がる。授業中に居眠りをしていて、教師から注意された時のような反応だった。

「お、おれは幽霊とかの仕業じゃないと思います」

「ふむふむ、それで？」

「だからきつと——なるべく競争相手を減らそうと画策した誰かが、教室に薬剤をまいたのではないかと。一瞬で眠らせてしまうような薬を」

「思いつきにしては中々のものね」

会長が合格点を出すと、神崎は安心したように着席した。探偵同好会で神崎が最も恐れるのは会長なのだ。ちなみに副会長はもつとも怖くない人物である。

「でも、それだと先生が眠らなかった理由がわからないわ。最前列の席でさえ効果が及んでいたなら当然、教室にいた先生にも作用が働くはずよね」

「成人未満にしか利かない分量だったのかもしれないです」

神崎が食い下がる。

会長は感心したような顔をして、神崎を褒めた。

「あらゆる可能性を想定するのは悪いことじゃないわ」

「ありがとうございます、会長」

「でも甘い。高校3年生にもなれば体格、体重はほとんど成人と変わらないわ。むしろ勝っている人もちらほらいるしね。そのギリギリの境界線を見極めるのはまず不可能と思っていいんじゃない？」

「——じゃあ、薬のセンはなしですか」

「落ち込まない。着目は悪くなかったわ。生徒だけに共通するなにか、というのが分かれば解決への糸口がつかめるかしらね」

会長はそれから咲を横目に見たが、ロクな反応は帰って来ないだろうと判断して結衣に話を向ける。

「結衣ちゃんは？」

「わたしは——こつくりさんの、仕業だと、思います」

捻りだすように言葉を区切って、結衣はうつむいた。

まるでなにかにおびえているかのような仕草。

「結衣ちゃん、もしかしてあなたこつくりさんにトラウマがあるとか？ いやなら別に強要はしないけれど」

不審に思った会長が心配してをかける。

黒い髪の下にかくれた結衣の顔色は、優れているとはいえなかった。

「その、こつくりさんではないんですけど」

「うん」

「この学校にはなにかがいるような気がするんです。——みなさんがわざとわたしに意地悪しているのであれば、わたしが夢でも見たのでなければ、たぶん」

「……なにかあったのね」

「でも会長は覚えてないんですよ。合わせ鏡の話」

「鏡？」 会長は小首を傾げた。「それが問題なの？」

「ともかく、わたしはこつくりさんのせいだと思います。昔にもそういう事例はたくさんあったみたいです」

「事情はよくわからないが、とにかくこれで味方ができたな」

副会長が鼻の穴をふくらませながら勝ち誇ったようにいう。会長は冷たいまなざしを向け

「まだ半数に達してないのわかってる？」

「もちろんだ。あとは児玉くんが——児玉くんか、はあ」

ようやく現状を把握したらしい副会長が盛大なため息をつく。当の咲はめずらしくオカルト関連の本を読んでいるが、あまりおもしろくなさそうにページをぱらぱらとめくっているだけだ。

面倒くさそうに本を鞆にしまつて、咲は口を開いた。

「一応いっておきますけどあたしは霊なんて少しも、微塵も、わづかたりとも、ミジンコほども、副会長程度にも信じていませんから」「ちよつと待てそれはいったいどういう意味――」

「この『αクラス事件』の犯人、先生ではないかと思っています」

副会長の言葉をさえぎって咲が推理を展開しはじめる。会長は興味心身に身を乗り出した。

「それでそれで？」

「彼が犯人なのだとしたら話は簡単です。予防策を講じることができますから、さつき神崎の言っていたように薬なり、ほかの仕掛けなりで生徒を眠らせることができます。ただ」

「動機がないですね」

結衣が静かに口をはさんだ。

咲は頷いてから

「なぜ教える立場の教師がそんな七面倒なことをするのか、まったく理由が見当たりません。まあ、こじつけの推理なので穴はたくさんあると思います。なんらかの個人的な恨みがあつた、などの理由以外に可能性は薄いですね」

と結衣に賛同する。

「勉強したくなくてみんな寝たふりをしたんじゃないのか？」

副会長が手をひらひらと振りながら発言する。

「健輔じゃないのよ。自分の首を絞めるような真似はしないわ。なんなら絞めてあげましょうか」

「そういうプレイが好きなんですネ、会長」

「咲ちゃん、あまりハシタナイ言葉を使うものじゃないわ。それは結衣ちゃんの役割よ」

「あ、すみません」

結衣がぺこりと頭を下げる。

「間違つたわ。あなたも自重しなさい」

「えー」

「えー、じゃないわよ。正しくない方向に進んでるわよ、確実に」

「会長がいけないんですよ。不埒な姿を見せるから」

咲がなじる。会長は眉をひそめた。

「まだそんなことしてないでしょ」

「まだ？」

咲がここぞとばかりに言葉尻をとらえる。会長はあ、と口をおさえた。

「どういうことですか会長。もしかしてなにか進展が？」

「キスですか、それともそれ以上ですか？ A B Cでいうとどのくらいですか。わたしすごく興味あります」

「うるさいわね、なにもないわよ！」

「結婚のご予定はいつですか。式にはあたしも呼んでくださいね」

「お子さんの名まえはわたしに任せてください。きっと素敵な名前にしてみせますから」

「あーもう、なにもないってば！ あんまりしつこいとお化けが出るわよ」

会長が結衣に脅しをかけるが、へこたれた様子はまったくなく、むしろ元気になったようだった。

「会長のお化けですかね。愛の逃避行のすえにふたりで雪山で遭難してしまったとか」

まくしたてる結衣と咲をうかがいながら、副会長は顔を真っ赤にして後ろを向き、神崎は照れ臭そうにため息をついたのだった。

ちょうど日の光が当たる窓際、後ろから3番目という席に座って授業を受けている会長は、黒板に書かれた内容を板書するよりも襲いかかる眠気と戦うのに必死だった。

うつらうつらとまどろみながら禿げた国語教諭の声をぼんやりした頭で理解しようとする。だが単調な古典の解説は、まるで子守唄のように多くの生徒を夢の世界へといざなっていた。

眠い。

抗いようのない睡魔が会長のまぶたを下させようとする。

目を閉じると心地の良い感覚が体全体を包み、思考がゆっくりと停止しはじめる。

いいや、寝ちゃおう。

会長が抵抗の意思をなくしたとき、唐突に意識は途切れた。

——夢を見ている。

会長は、ふと、そう思った。理由はどうしてだったろうか。子供のころに何度か行ったことがある神社の境内に腰かけていたからかもしれない。今はまだ授業中だったはずだ。

木の板のざらざらした手から感触が伝わって来る。それから甘いキャラメルのような匂い。どうしてだか神社の柱からは、いつも懐かしい甘い匂いがしていた。

「こつくりさん、こつくりさん」

女の子の声がする。会長が声のした方を向くと、淡いピンク色のスカートを履いた少女が10円玉をおはじきにして遊んでいた。

少女の顔には見覚えがあった。

「昔の自分か——」

会長は境内から飛び下りると、自分が制服を着ていることに気づいた。夢の中くらい律儀に制服姿でなくてもいいのに。

「なにしてるの？」

少女にたずねる。幼稚園を卒業したばかりといった幼い昔の会長は、錆びた10円玉をかかげて答えた。

「こつくりさんと呼んでるの」

「こつくりさん？」

たしか小学生のときくらいに流行った遊びだったはずだ。周りの友達たちがとりつかれたように白い紙を囲み、黒い10円玉を無表情で見つめていた光景がこわくて、やったことはなかったのだけだ。

少女はそんな会長の過去も関係なく、無邪気に笑って硬貨を会長の手に握らせる。

「あなたもやってみる？」

外見とは裏腹に大人びた声。さっき聞いた声とは完全に違うものにかわっていた。まるで別人になってしまったかのように。

しかし容姿は幼いままの小さな会長は、高校生の会長の手首をうつ血するほど力強くつかんだ。少女とは思えぬ異常なまでの力に、会長はとつさに恐怖を覚えて逃げ出そうとするが、つかまれた手首は釘で打ちつけたように動かせない。

少女はさらに力を込める。腕が千切れてしまいそうだった。

「わかった、わかったから離して」

「こつくりさん、やるの？」

「そうだってば！ だから離して！」

少女はにこりと嬉しそうにほえむと会長の腕を離した。いきなり万力のような力から解放されて、会長は廊下に尻もちをついてしまふ。見ると、手首にはくつきりと手形のあざが刻まれている。

「さあ、早くやろう？」

友達を遊びに誘うみたいに少女がいう。

会長は恐るおそる立ち上がると、少女が遊んでいた１０円玉の上に指を乗せた。

「こつくりさん、こつくりさん」

歌うように節をつけて、少女も指を乗せる。

「こつくりさん、こつくりさん、あなたは本当にこつくりさん？」

力をまったく込めていないのに輝きの失せた１０円玉は導かれるように「はい」と書かれた部分へ向かってゆつくりと動いて行く。

背筋に異様な気配を覚えて、会長が背後を振り返ろうとするが、目を離すことを許さないように指を乗せた１０円玉から視線をそらすことができない。

「だめだよ。こつくりさんが怒っちゃう」

「……怒ると、どうなるの？」

「ずっと私と遊ぶの。死ぬまで、死んでからも、ずっと、ずっと」
屈託のない少女の笑顔に戦慄する。こつくりさんなんて、一度もやったことがなかったのに。

少女はそれから他愛のない質問をくりかえし、そのたびに楽しそうに笑う。会長はだんだんと背部に感じる禍々しい気配が強まっていくなかに気付いた。

そしてそれと同時に、強烈な異臭が鼻をついた。腐った肉に、鮮血を浴びせかけたような腐臭と鉄の匂い。神社の甘い香りはどこかに追いやられ、意識がもうろうつとしそうなくらいの刺激臭が漂う。「息を止めてもいいよ。どうせすぐに苦しくなるから。べつにあなたが死んでいても生きていても、私には関係のないことだし」

「うちは——死ぬの？」

「まだ生きてるよ」

少女はそう答えたきりで、死なないよ、とはいわなかった。会長は泣きそうになるのをこらえながら、少女が質問を重ねるままに10円玉が動いて行くのをながめる。

どうしてこんなことに。

こっくりさんてしたこともない、呪われる理由もないのに、どうして。

そうして恨み事を述べていると突然にこれが夢だったことを思い出した。吹っ切れたように明るく笑いだす。

「どうしたの？」

少女が首をかしげる。怖い物がなくなった会長は、過去の自分をまじまじと観察する。写真で見た自分にそっくりだ。でも、こんなに冷たい目をしていたっけ。

「あんだ、よく似てるわね」

「当たり前だよ。だって私だもん」

「夢にしては、だけど」

会長が小馬鹿にしたようにいうと、指を乗せた10円硬貨が見えない力に引き寄せられるようにして「いいえ」を指し示す。

いやな汗が、会長の額を伝った。

「夢なんでしょ？ だったら怖くもなんともないじゃない」

「こっくりさんは、違うつておっしゃっている。だから夢じゃない

よ」

「だってうちは、今古典の授業中で——」

「ホントにそうなの？ それは夢じゃない？」

「でも——」

「もしもあなたが見ている世界が夢なら、あなたは目覚めなければいけない。けどその前にこっくりさんにお伺いを立てなきゃ。『こっくりさん、こっくりさん、お離れしてもよろしいでしょうか？』って」

「……こっくりさん、こっくりさん、お離れしてもよろしいでしょうか」

会長が一言ずつ、絞り出すような声で復唱する。

だが、10円玉に反応はなかった。

「駄目だって。あなたはこっくりさんに感謝していない、信じていないから」

「そんなの関係ない」

指をひきはがそうとする。

力が入っているはずなのに、紙上に固定されてしまったかのような10円玉から離れることができない。空いてる片手を添えて引く張つてみても、肉を裂くような痛みが走るばかりだった。

「どうしてっ」

「こっくりさんが駄目だっておっしゃってるからだよ。あなたは私とずっと一緒」

「やだ、離してっ！」

「あなたは私、私はあなた。だから離れるなんて無理だよ？ こっくりさんはあなたを逃がさない」

「これは夢でしょ、だったらはやく覚めて」

「——仕方ないなあ。あなたがそう望むのなら、あなたは戻りたいと思っっている世界に帰ることができる。でも忘れないで、私はあなたと一緒にいる。そして、こっくりさんも」

少女がほえみかける。

唐突に体が痙攣して、会長は夢から覚めた。

相変わらずつまらない声で教師は授業を続けている。よかった、ほっと胸をなでおろそうとして体が動かないことに気づく。

なぜ、どうして？ パニックになりかけながら懸命に会長は手を伸ばそうとするが、それすらもかなわない。

混乱する。動揺する。そして、慄く。

「——そして、こっくりさんも」

と後ろから少女の声がしたような気がして。

会長は起き上がることができないまま、うつぶせに硬直していた。

交霊

「霊は、いるわ」

「やつと僕らはわかりあえたようだな、みなみ」

「いままで疑ってすまなかったと思ってるわ。うちもこれからは霊を肯定する立場にまわるから」

「これで形勢が逆転したな。これから探偵同好会はオカルトの方面も含めて捜査方針を決めていくことにしよう」

満足げな表情で副会長が宣言する。強い味方ができたとあって、いつもよりも自信たっぷりに喋っている。

「僕、みなみ、そして結衣さんの3人で心霊探偵団を結成しよう。いまなら誠ちゃんと兎玉くんも参入可能だ」

「けっこうです」

きつぱりと咲が否定する。

副会長は調子に乗って咲につめ寄った。

「本当にいいのかい？ あとから入りたいといっても手遅れだぞ」

「しつこいですよ。あたしはオカルトの類は一切信じていないので、会長も悪い夢でも見たんじゃないですか、いきなり変なことを言いはじめて」

「うちも最初は夢だと思っていたのよね」

いつになく真剣な会長の口ぶりに、神崎はすこし身構えた。嘘や冗談のような感じはまったくくない。むしろそういった雰囲気許さないような、大真面目な口調だ。

「でもそれは間違ってたのよ。うちは霊の存在を認めなければならぬの」

「どうしてですか？」

結衣がいつになく目つきを鋭くして尋ねる。

「自分自身にいわれたのよ、こっくりさんを信じなければいけないって。ものすごくリアルな夢だと思ってたんだけど、目がさめても

後ろに妙な気配があるのに体が動かさなくって——あれは完全にこつくりさんに呪われていたのよ。うちが信じないものだから」

「こつくりさんって、ずいぶん昔の話ですよ」

「結衣くん、その認識は間違っているぞ。呼称は変わっているが、今現在３年生の間では大流行の占いなのだ。『交霊の儀』という名前だな、なんでも我々の質問に答えてくれるというからみんな試している」

「……そうだったの？」

会長が小首をかしげる。

「そんなことも知らずにこつくりさんの話をしていたのか。てつきり実物を目にして改心したのかと思っていた」

副会長が呆れたようにいう。

「こつくりさん、ってあれですよ、１０円玉とか特殊な紙とかを用意してみんなでそれを取り囲むやつ」

神崎が思い出すように宙を見る。

「基本的にはそれで間違っていない。全国には様々なバリエーションがあつてな、１０円玉のかわりにシャープペンシルで代用するエンゼルさん、西洋風にいえばターニング・テーブル、そういうわりと有名なものからローカルな様式まで、全国的に普及しているんだ。なにせ一時期ものすごい流行って、社会現象にもなつたくらいだからな」

「それで自殺者が多発したから絶対やるな、と厳命されて段々下火になつて行つたと聞いたような気がします」

「少し誇張した表現かもしれないが、多くの人が精神的に不安定になつたというのはたしかな事実だ。いうなればこつくりさんの呪いにかかれたんだらう。呼び出すに成功したはいいものの、離れてもらえなかった、帰してもらえなかったという話はよく耳にするな」
「うちもそのパターンだった。いわれた通りに『こつくりさん、こつくりさん、お離れしてもよろしいでしょうか』って訊くんだけど、返事は必ずいいえ、なのよ。それで怖くなつて、目が覚めたらあん

なことに。頭はもやもやするし、最悪の気分だわ」

「どう考えても夢でしょう」

咲がじれったそうに反論する。会長はむっとしたように唇をとがらせる。

「教室のどこかで小耳にはさんだこっくりさんの遊びを思い出して、深層心理に潜んでいたこっくりさんに対する当時の恐怖がよみがえって来たんでしょう。よくない噂はたくさんありましたし、今でも本気でこっくりさんを恐れている人は大勢います。会長もそうだったはずですよ」

「うちはこっくりさんなんて、やったことなかったんだけど？」

「内容を聞いたことくらいはあるはずです。流行した際には誰でもどこでもやっていましたから、無意識のうちにすっかり覚えてしまっていたんでしょう」

「体が動かなかったのはどうして？」

「自己暗示です。自分はこっくりさんに呪われてしまった、という誤った認識が強烈に自分を制限したんです。のろわれている、だから体を動かせるはずがないという暗示のせいでほんとうにそうだと錯覚してしまっただけですよ。人間な体なんて所詮はそんなものです」「ふーん」と会長は頬づえをつく。そして、咲に質問した。

「ねえ咲ちゃん。あなた実際にこっくりさんをしたことがあるの？」

「いいえ。くだらないと思ってまったく相手にしてませんでしたから」

「じゃあ決まりね」

会長はたちあがると、部室のドアに手をかける。読書に戻ろうとしていた咲が怪訝そうに質問した。

「どこへ行くんですか？」

「実物を体験してもらえれば納得すると思うのよね。ちょっと用意して来るから、そこで待ってて」

会長はそういうと部室を去っていった。そのまぎわに「怖くて出来ません、なんて答えは許さないわよ。咲ちゃんも連帯責任者にな

って貰うんだから」と言い残して。

「……要は、自分だけ怖い思いをするのがいやなんですネ」
皮肉を返した咲の言葉は、廊下を走る会長には届かない。

——10分ほどして、ニヤリと笑みを浮かべた会長がもどって来た。いやな予感をいち早く感じ取って咲が逃げ出そうとするが、入り口をふさがれてしまい出られない。

「顔を見て確信しました。もっと早く行動を起こすべきだったと」

「さ、行くわよ。全員で」

「いったいどこへ連行するつもりですか」

すこしでも隙があれば逃走できるようにと姿勢を低く構え、腰をおろした神崎が恐るおそる尋ねる。会長はドアに寄りかかりながら退路をふさいで、にんまりとほほ笑んだ。

「分かってもらうためには実演してもらうのがいちばん手っ取り早いと思って。オカルト同好会のやつらに頼んでみたら、快く引き受けてくれたわ。舞台を用意するのに時間はかからないから、すぐに来てくれていいって。というわけで、さっそく行くわよ」

「おれ、無条件に信じるんで行かなくてもいいですか」

神崎の顔色は冬のプールに飛び込んだみたいに青ざめている。会長は抵抗する神崎と咲を否応なく拘束すると、底なし沼から伸びた腕のようにずるずると廊下を引きずっていく。

残った副会長は結衣をうながして部室を出る。

オカルト同好会の部室は探偵同好会と同じ、旧校舎におかれている。ひとつ下の階の廊下の奥に一行が向かうと、ドア越しにもわかる異様な雰囲気がかぼれ出ていた。

ドアノブには血のような赤い文字で「オカルト同好会の部屋」と書かれたプレートがぶら下がっている。それだけでなく、髑髏の人の形もゆらゆら揺れているというおまけつきだ。

ドアを開けると黒い光が部屋をつつんでいた。どうやら照明に黒いビニールテープを張り付けているらしい。

昼間だというのに厚いカーテンは閉め切られ、太陽光が入りこむ

隙間はない。

隅に置かれたラジカセから流れるホラー映画のサウンドトラックと相まって、どこか怪しい路地裏に迷い込んでしまったような錯覚を起こさせる。

「ようこそオカルト同好会へ」

死霊使いのような服装をした集団がうめき声のような歓迎をする。フードをかぶっている上にサングラスもしているので、表情をうかがうことはできない。

神崎と結衣は副会長の背中にかくれながら、こっそりオカルト同好会の部員達をのぞき見る。

「どうして変な格好をしてるんですか」

泣きそうな声で結衣がきく。

「これが我々の正装だからだ。それっぽい恰好をしていれば、霊はおのずと向こうからやって来る」

ガスマスク越しのようなくぐもった声。地声ではないだろうから、おそらく演技なのだろうが、それでもおぞましく感じられる。

「心霊体験をしたいのなら、君も我らの仲間になるといい。すぐに霊感が発達し、昼間でも霊が見えるようになるだろう」

「み、見えるんですか？」

「……私はまだ、修行が足りないのだ」

どうやら出来ないらしい。

会長は結衣の前に割って入ると、副会長の影に隠れている神崎と結衣を引っぱり出した。

「うちの大切な部員達を勧誘しないでちょうだいな。それよりはやく『交霊の儀』とやらをはじめてくれるかしら」

「大切ならこんなところに連れて来ないでくださいよー」

神崎がじたばたもがくが、会長の手が緩むことはない。

「つべこべ言わない！ ほら、はやく」

会長は強引に結衣と神崎を中央のテーブルのまわりに配置すると、自分は離れた場所に移った。空いた残りの2つの席に副会長とうん

ざりした様子の咲が座る。

「会長はやらないんですか？」

神崎がなじるようにいう。会長はとんでもない、というふうに首を振った。

「うちは昨日体験したばかりだもの。それにこっくりさんをお呼びするためには4人じゃなきゃだめらしいし、うちは人数的に余計なのよね」

「裏切りもの」

「黙らっしゃい。さ、はやく始めちゃって」

「わかりました」

オカルト同好会はうやうやしく一礼すると、テーブルに紙と10円玉をおいた。探偵同好会の全員の表情がこわばる。それからテーブルを囲んだ4人に、10円玉の上に指を乗せるよう指示した。

「いいですか、途中で絶対に離してはいけません。絶対にです。約束を守らなかった場合、我々はどのようなことになるうとも保証いたしません」

「か、会長」

「我慢なさい、結衣ちゃん」

泣きそうになりながら恨めしげな視線を送る結衣を、会長が一喝する。だが、会長の声もわずかに震えていた。

「みなさん、こっくりさんを少しでも疑ってはなりません——特にそのあなた」

オカルト同好会のひとりが無然とした表情の咲に向かって警告する。脅すように声を低くする。

「取り返しのつかないことになりますよ」

「そうですか」

「本当に本当に大変なことになりますよ」

「わかりました」

「咲先輩っ！」

結衣の必死な叫びに、うんざりしたような口調で咲は「わかった」

といった。

「信じればいいんでしょ」

「その通り。我々の指示したように行動すれば、とても安全なのです」

それからサングラスをかけた男はこっくりさんと呼ぶように、と指示した。壮絶な譲り合いのすえ、副会長がその任をまかされることになる。こわばった口調で、副会長は「こっくりさん、こっくりさん、どうぞ私のもとにおいでください」といった。

「それで結構です。では、今度はこっくりさんの好物をおたずねしてください。あぶらあげ、という答えが返って来るはずですよ」

「どうしてそんなことを質問するんですか」

結衣が10円玉から顔をそむけながら質問する。答えたのはオカルト同好会ではなく、会長だった。

「うちの意識とこっくりさんの意識が混同してしまうから。こっくりさんに、自分はこっくりさんなのだと気付かせなければならぬの」

「よくご存じですね」

感心したように魔術師の恰好をしたひとりが称賛する。会長はテーブルからなるべく距離を置きながら「まあね」と答えた。

副会長が代表してこっくりさんに質問する。全員の視線が10円玉に引き寄せられる。一種異様な緊張のなか、古びた硬貨はゆっくりと「あ」の文字に向かって動きはじめた。

結衣と神崎の表情が一気にこわばる。

咲は不思議そうに自分の指が動くさまを見つめている。

だが「あ」の文字に到達した10円玉がそれ以上動くことはなく、副会長は困ったようにオカルト同好会を見上げた。

「すこし霊力が弱いのかもかもしれません。誰かが信じていない、という可能性が高いですね。全員がこっくりさんの存在を信じれば、こんなことにはならないはずですよ」

非難するように咲の肩をたたく。咲はまだ指さきの感触を確かめ

るように１０円玉を注視している。

「さて、次は質問をしてみましょう。代表のかた、どうぞなんでもお尋ねください。ただ礼儀は忘れないように」

「——なんでもいいのか？」

「ええ、どうぞ」

「じゃあ」と副会長はつばを飲み込む。「僕はセンター試験がうまくいくかな？」

「ずず」と１０円玉が動きだす。そのまま「はい」に向かっていくと、副会長は安堵のため息をついた。体力を使い果たするようにぐったり椅子の背もたれによりかかる。

「これで十分だ。僕はもう構わない。みんなも質問したいことがあったらいつてくれ」

副会長は３人の顔を確認するが、誰も口を開こうとはしない。恐怖で喋ることができないのか、それとも思い浮かばないだけなのか、判別は付かなかった。

会長はうす暗い部屋のなかでテーブルを凝視している。そして時々ふと思いついたように後ろを振り返っては、そこに壁しかないことを確かめていた。

「もう終わりにするのでしたら『こつくりさん、こつくりさん、お離れしてもよろしいでしょうか』と聞いてください。大丈夫です、なにも心配することはありません。あなた方は正式な手順にのっとりて交霊の儀を行いましたから」

副会長はその言葉を聞いて、すこし安心したように質問をくりかえした。あるいは試験がうまくいくというお告げが出たからかもしれない。

無事に１０円玉は最後に質問に対して「はい」を指した。

「もう指を離しても結構ですよ」

といわれて神崎がすぐさま人差し指を引っ込める。

なにか不審な痕はないかと注意深く自分の指紋を観察していたが、異常は見つからなかったらしく、胸をなでおろした。

咲は静かにしげしげとテーブルをながめている。

まるでそこに、見えない何かを求めているように。

「これでお終いです。楽しんでいただけたでしょうか」

「こ、怖かったです」

脱力した結衣が床に座り込んでしまう。副会長が肩を支えながら立ち上がらせようとしたが、足に力が入らずうまく起き上がることができない。

「結衣ちゃんがいちばん怖がってたみたいね」

「どれもこれも会長のせいです！」

「うちはみんなにも同じ体験をしてほしかっただけのことよ。結衣ちゃんもわかってくれたでしょ？」

「それはもう、十二分に」

副会長では身長が高すぎるということで、会長と咲が両側から担ぐようにして結衣を支える。

オカルト同好会の面々は黒いサングラス越しに探偵同好会を見送ると、暗い部室のなかへ戻っていった。

怪異

自分たちの本拠地へと帰還した探偵同好会の部員たちはみな疲れ果てた表情をしていた。

なかでも会長と結衣の顔色があまり良くない。そばで見守っておきながら、会長もすっかり怖がっていたようだ。

咲だけがひとり、脅えた様子を見せていない。さきほどからずっと動く10円玉に乗せていた人差し指をながめている。まるで自分の一部でない物を観察するように、しげしげと。

「——今日は、これで解散かしらね」

会長が聞き取れないくらい小さな声でいった。

誰もうなずこうとはしなかったが、反対派もいないようだった。

奇妙に静かだった。

「会長はこつくりさんを信じてるんですね」

咲が確認する。会長は「当たり前じゃない」と返答した。

「実物を目にしたら咲ちゃんだって信じざるを得ないでしょ。それともまだ疑ってるっていうの？」

「あたしも自分で体験したことくらいは信用しています。ただ実際にこつくりさんに出会ったわけではありませんから、まだその存在を承認することはできません」

「ずいぶん意地っ張りね」

「あたしは超常現象なんて認めませんから」

きつぱりと言ってのけると咲は荷物をまとめはじめた。それに付られるようにして他の部員たちも帰り支度を開始する。

いち早く鞆を背負った咲が会長に声をかけた。

「本当に今日は終わりでいいんですね？」

「そうよ」

「わかりました」と一礼する。「また明日も部活はやりますよね？」
「たぶんね」

「そういえば、会長も副会長ももうすぐセンター試験でしたよね」
咲が思い出したようにいった。受験生ふたりがうなずくと、ニコリと微笑する。

「じゃあ、会長たちがちゃんと試験に成功するよう願掛けをします。神崎、行くよ」

「え、おれ？」

いきなり名前を呼ばれた神崎が自分を指さして訊きかえす。

「そうだよ。会長たちのためにお願いをするんだから、お賽銭を投げなくちゃダメでしょ？」

「もしかして、それをおれにやれと」

「せっかくだから憑き物も落してきちやった方がいいんじゃないか
と思つて。今日はあんなことがあつたばかりだし、神崎もお払い
したいでしょ」

「たしかに」

神崎は納得しように首を縦に振った。

「それじゃ、楽しみにしててくださいね先輩」

「しっかりお願いしてきます」

咲のあとから神崎が出ていくと、会長たちもゆつくりと動き出す。
副会長がしきりに首をひねっているのを見て、結衣が質問する。

「どうかしましたか？」

「お払いなら僕らが直接行つたほうがよかつたんじゃないかなつて
思ふんだけど」

「副会長は寄り道しないで勉強しなきゃだめですよ。ほんとうなら
この時期に部活をやっていること自体、かなり危険なことなんです
から」

「そうはいつでもなあ——」副会長は頭をかく。「霊が実在する
という意見に対する賛同者がここまで増えると、嬉しくて勉強どころ
じゃないかもしれないな。今夜もたぶん徹夜だ」

「そんなんだから成績が悪いのよ」

と会長が呆れたようにいう。

「みなみだつて寝るのは遅いじゃないか」

「うちは怖くて眠れないのよ。健輔みたいに他人の不幸を喜んでい
るわけじゃないの。なんていったって当事者なんだから」

「わたし思っただんですけど」結衣が口をはさんだ。「αクラスの事
件ってこつくりさんと呼んでしまった罰なんじゃないかって」

「交霊の儀ってやつね。でも、なんで今更になつて流行つてんのか
しら」

「会長は不安じゃないんですか？」

「なにが？」

「センター試験の結果です。この点数でこれからの人生が大きく変
わつてしまふんですよ？」

「うちはそこまで成績悪くないから」

会長が紺色の鞆を肩にかけながらいった。霞ヶ丘高校の校章が入
った鞆は、長い間使われて来たために白っぽい傷がたくさん刻まれ
ている。

「——けど、今は不安。この調子じゃ、どうなるかわからないもの。
頭痛はするし、あんまり上手に考えられない。テストなんて無理か
もしれない。健輔は常にその状態かもしれないけど」

「僕は僕なりに頑張っている。問題ない。と思いたいな」

「αクラスのみなさんもそう思っていたんでしょうか」

結衣が立ち止まつて質問する。

副会長は天井を見上げた。

「αクラスは優秀な人間ばかりだから……楽勝なんじゃないか？」

「それは副会長と同じレベルの目標を立てていた場合の考えです。

αクラスのみなさんはもつと偏差値の高い、難しい学校を志望して
いることでしょう。それこそ学校側からの期待、親からの期待、周
囲の視線、それから同級生に負けたくない、恥ずかしい思いをした
くないという様々な重圧がのしかかっているんじゃないでしょうか」

「それはたしかに、そうかもしれないな。想像がつかなかったが」

「藁にもすがる思いで過ごしていたなかで、誰かがこつくりさんの

ことを思い出したのだと思います。そして合否のことかもしれないし、他のなにかかも知れないですが、すこし質問してみようということになりました。それは瞬間にクラス中に広まって、全員が参加してしまった。わたしは、そんな風に思います」

「——ひよつとすると、それが真実なのかもしれないわね。なにかに頼ろうとしてしまった弱さを、こつくりさんは怒ったのかしら」

「もし本当にそうだとしたら」結衣は目を伏せる。長いまつ毛が何度かまたたいた。「あまりに残酷な仕打ちですね」

「そうね。触れてはいけない物に触れてしまったということかしら。こつくりさんに頼るべきではなかったのよ。自分の未来は、自分でたしかめなきゃいけないのよ」

「けど、あの程度ですんだのならまだよかったんじゃないのか」副会長がつぶやいた。

「全員が手を骨折する、なんてことにはならなかったわけだし。呪いなら誰かが死ぬような事態になってもおかしくはない。軽度の呪縛でよかったよ」

「果たしてそうなんでしょうか。呪いはこれだけなんでしょうか」

「答えは誰にもわからない、か——こつくりさんを除いては」

会長は天を仰ぐと、ドアをぬけて部室を後にした。

残ったのは冬の暗闇ばかりで、空にはもう夜が訪れかけていた。

帰り道は街灯が寂しげに弱々しい光を発しているだけで、会長と副会長、それに結衣を加えた3人以外に人影はない。

まだ星も見えないくらいの時間帯。

不思議なくらいに静かな帰路を、時折吹く風だけがからかっている。

「会長前に言っていましたよね、事件をハッピーエンドに解決するのが名探偵の仕事だって」

「今回もそうだっていいいの？」

会長が結衣の意見を察して先まわりする。結衣は小さくうなずくと「でも、どうやったらハッピーエンドになるのかわたしには分かり

ません。犯人はいない、ある意味では自業自得の出来事です。ここに探偵の出る幕はあるんでしょうか」

「さあ——うちにもさっぱり見当がつかないわ」

会長は道ばたに落ちていた空き缶を発見すると、思い切り蹴飛ばした。放物線をえがいて飛んだ空き缶は痩せこけた電柱にぶつかり、地面に落ちる。カランカランという乾いた音が聞こえた。

「けど、それをどうにかするのが探偵同好会ってやつかもしれないわね。うちらはただの同好会にあらず、その実態は学校を影から支える名探偵」

「——なあ、あれ」

会長が独り言にひたっていると、さきほど蹴飛ばしたばかりの空き缶を凝視しながら副会長が肩をたたいた。なによ、といいかけて副会長の視線を追うと、ゆらゆらと見えない糸につりさげられているかのように空き缶が浮き上がっている。

見間違いだろつかと思って結衣を見やるが、会長と同じように目を見開いている後輩の姿が現実であることを物語っていた。

再び空き缶に視線を戻す。

やはり浮遊している。会長は一步後ずさって、副会長のうしろにかくれた。

「なにあれ？」

声がふるえている。結衣も副会長の背中の中に入る。

「こ、こつくりさんの呪いなんでしょうか」

「どうしてうちが呪われなきゃいけないのよ。いけないことなにもしてないじゃない」

会長は泣きそうな声で弁解するが、空き缶は宙に浮かぶ感触を確かめているかのように電柱のまわりを動き、そしてゆっくりと副会長のほうへ向かってきている。

空き缶にのり移った得体のしれない何かと呼応するように、今まで静寂を守ってきた植木や電線が不気味な音をかなぐりだす。驚いたカラスが鳴きながらどこか遠くへ飛んでいく。あたりに人はいな

い。空はどんよりと暗い。

オレンジジュースの空き缶は手繰られるように副会長の足元まで浮遊して来ると、そこで静止した。

会長と結衣が思いきり副会長の背中を引っ張る。副会長が転びそうになりながら後退すると、磁石のように空き缶は追いかけてくる。缶に描かれているのは擬人化された蜜柑。ニタリニタリと笑みを浮かべている。

「なんで動いてんのよ!」

会長は副会長の分厚いコートのはしをぎゅっと握りしめる。

怪異を前にして副会長の大きな体はあまりに頼りなかった。だが、それ以外に身を隠す場所がないのも事実だった。

小刻みに震える身体。寒さからではない、震え。

全身を鳥肌が駆けめぐる。背筋は凍りついたように冷たい。

心臓の鼓動は破裂を望んでいるかのように激しく、荒い。体中の血管が破れんばかりに波打っている。

「か、会長う」

結衣は副会長のうしろに身を潜めている会長のうしろにまわって空き缶との距離を取った。

会長の背中からのぞき見ると、空き缶はまだ浮かんでいる。

周囲の騒音が大きくなる。風がスカートを乱暴にはためかせる。が、中身の空っぽになったオレンジ色の缶は、風のなかにいるかのように動かない。

オレンジ色の蜜柑が描かれた空き缶は、いまだに副会長の前で立ち往生している。

その様子はまるで、これからどうやって始末しようかと舌舐めずりしながら思案しているかのようだ。

「お経よ! お経を唱えればたぶんどうにかなるわ!」

悪霊退散、悪霊退散……と会長は目をつぶって詠唱する。

副会長が「それはお経じゃない」とつつこむ間もなく結衣も一緒になって悪霊を退散させようとする。ふたりともパニックになって

南無阿弥陀仏というフレーズを思い出せないらしかった。

突風にかき消されそうな声が力なく響く。叫ぶような轟音が鼓膜を突き破らんと叫びたてる。

「く、来るな！」

副会長が悲痛な叫びをあげるが、空き缶は飛ぶのをやめるどころか、徐々にその高度をあげはじめ。副会長の膝あたりから胸の前、そして視線が合わさる高さを超えて、身長を完全に抜かす。

障害のなくなった空き缶はゆっくりと会長のほうへ向かって降下を始めた。

「悪霊退散、悪霊退散、悪霊退散——」

目を閉じているために空き缶の存在に気がつかない会長は、必死に間違ったお経をくりかえしている。

周囲の騒音がさらに膨張する。

かすかに鴉のしゃがれた鳴き声が聞こえる。老人があざ笑うかのような、声。

まるで台風が訪れたかのような喧噪。空き缶が近付くのと呼応するように、あたりのざわめきは強まっていく。

「こ、こんなもの！」

会長の頭上に迫った空き缶を副会長が叩き落とそうと腕をひくが、そこから動かすことができない。見えない力に縛り付けられているかのようなだった。

その感覚を、副会長は覚えていた。ついさっき経験したばかりの感触に似ている。10円玉が自分の意思とは関係なく勝手に動きまわる、あの奇妙な感覚に。

「みなみ、上だ！」

副会長が声を発する。

会長は目を開いて頭上を見ると、すぐさま頭を抱えてしゃがみこんだ。

「なんでこんなことになるのよ！」

「会長、わたしがいま、助けます！　しよ、しよせんは空き缶です、

こんなもの！」

結衣が甲高く叫んで、学生鞆を野球のバットのように振りまわす。副会長とは違って乱暴なスイングから繰り出された紺色の鞆は、見事に空き缶をとらえた。

勢いよく浮遊する空き缶が吹っ飛ばされる。

地面にたたきつけられたオレンジジュースはアスファルトの路面を転げまわると、最初にあつた電柱の根元でおとなしくなった。

何事もなかったかのようにただの空き缶へと変貌する。

気付けば空気はまた静かなものへと戻っていた。耳が痛くなりそうなほどの静寂のなかに、緊張と恐怖からくる荒い呼吸音が聞こえる。

「や、やったか……」

「なんでこんなときに限って復活フラグを立てるのよ、この馬鹿！」副会長の背中をどつく会長の声は、すこしばかり安心したように思えた。

いつでも逃げられるように上体を反らしながら副会長は空き缶をつま先で転がす。蜜柑のイラストが描かれた空き缶は自然の摂理にしたがって、わずかばかり動いた。

「なんにもないみたい、だな」

「ホントに？」

「疑うのなら自分で確かめてみるといい。大丈夫だ、たぶん」胸をなでおろす副会長。

結衣は空き缶をはじき飛ばした鞆に霊が乗り移っていないか調べようにしばらく上下にゆすっていたが、教科書がぐちゃぐちゃになるだけだと気づいてやめた。

「本当にただの空き缶だな」

副会長が動かなくなつたオレンジジュースの容器をながめながらいう。

それは命を失ったかのように微動だにしない。会長の背中に、いやな悪寒が走った。

「もう、帰りましょ。結衣ちゃんもはやく。ここにはきつと、良くない気が滲んでいるのよ」

「わたしも、神社に行った方がいいでしょうか」
鞆を胸に抱えて結衣がきく。

彼女の両目は思い出したように潤みはじめている。

「そうね、それがいいかもしれないわ。とりあえず咲ちゃんと誠くんにお守りをもう一つもらえるように頼んでみたら？」

「そうします」

携帯を操作し、神社に向かっているであろう神崎と結衣にメールを送る。間に合えばいいけど、と結衣は思う。もしすでに神社を去っていたら、明日にでもお祓いをしてもらおう。

「……さ、はやくしましょ」

会長がせかす。

三人は足早にその場を離れた。副会長がふと後ろを振り向くと、空き缶が風に吹かれてカラカラと転がっていた。

御守

「会長、ひどい顔ですよ?」

場所は女子トイレ。会長のクラスを訪れた咲は目的の姿がないのを知ると、その階にある洗面所へと向かった。休み時間とはいえ、生徒の姿はまばらだ。

水滴のはねた鏡には会長の顔がうつっている。

寝不足のためにできたくま、そしてやつれた頬。一日でいきなり老けこんでしまったようだった。

白髪まで生えていないものだろうかと頭髪の分け目を調べながら、会長は大きくため息をつく。

「一睡もできなかったの。寝たら悪夢を見るような気がして。それにずっと頭のなかに霧がかかっているみたいに思考がはつきりしないの。誰かがうちの頭を占領して遊んでいるみたいに」

「――結衣ちゃんから話は聞いています。昨日はひどいことがあったみたいです」

「まったく。こつくりさんの呪いだわ、完全に」

「それ以上言わない方がいいですよ。自分自身に暗示をかけることになりますから」

「事実なんだから関係ないじゃない。うちはもうお終いかもしれないわ」

会長は蛇口をひねると、勢いよく流れだした水を両手ですくって顔にかけた。冬の水は切るように冷たい、というよりも痛みに近い。すぐにハンカチでしずくをぬぐう。

「あたしお守り貰って来ましたよ」

咲は会長の手にも二つのお守りを握らせた。

見ると、合格祈願と恋愛成就と書いてある。

「これ、あげますから。お賽銭もいっぱい入れて来ましたし、きつとご利益ありますよ」

「ずいぶん気前がいいじゃない」

「そのための神崎ですから。お守りは神崎からのプレゼントだと思
ってください」

「ていのいいお財布役ね」

会長は軽く笑った。

「そうですよ。お守りなんて荷物持ちにもなりませんし、今は副会
長のほうにもお守りを渡しているところだと思います」

「それはいいんだけど」

会長はピンク色で恋愛成就と刺繍のされたお守りを見やった。

「これはどうということなのかしら。余計じゃない？」

「なるほど。あたしの協力などなくても上手くいくから問題ない、
と」

「そういうことじゃないわよ。けど——」

「まあ、お守りは多ければ多いほどいいですから。悪い霊もきつと
どこかに退散していきますよ」

咲は少し笑ってから、真剣な眼つきになった。

「神社の神主さんに教えてもらったおまじないなんですけど、手の
ひらに『守』という字を書いて呑みこむ、というのを3回繰り返し返し
てから深呼吸をするというらしいです。なんでも言霊によって守護
霊を強化できるんだとか」

「ありがとう。試してみるわ」

「それから、もうひとつ大事なことがあります」

咲は会長の瞳を覗きこむ。

「今日は必ずはやく寝てください。おまじないをやってからです。
10時を過ぎると霊的な力が強くなって、悪夢を見てしまいますか
ら。絶対ですよ」

「べつにそんなの——」

「いいですか、絶対です。約束破ったら部活やめますからね」

「わかったわよ」

会長は諦めたようにいった。

「咲ちゃんにやめられたらたまらないわ。それに、今日くらいは早寝しないと生活に支障が出るしね」

「それならいいです」

にこりと笑う咲。会長は鏡を見ながら前髪をととのえ、二つのお守りをポケットにしまった。

「それじゃ、うちは教室に戻るわね。ありがと咲ちゃん」

「おまじないと、早寝。絶対にですよ」

「わかったってば」

苦笑しながらトイレを出る。

なんだかんだいいながら咲もすっかり神主のことを信じているではないか。科学があてにならないのなら、頼りになるのは神社の御利益とか、そういう昔ながらのものなのかもしれないな、と会長は思った。

翌朝、会長は珍しく目覚まし時計が朝を告げる前に起床した。

部屋のカーテンを開けるとまだそとはほの暗い。冬の日の出は遅いものだが、こうやってまだ朝日の上らぬ景色をながめるのはとても久しぶりな気がした。

いつもは遅刻ギリギリになるまで眠っているから、ゆっくりその日の天気を観賞している暇もないのだ。かすかな光に目を凝らしてみると、どうやら今日は晴天らしかった。

顔を洗い、鏡を見る。

マジックで落書きしたみたいに眼の下を彩っていたくまはきれいさっぱり消えていた。

それに頭もスッキリする。台風一過の青空のように、透きとおってどこまでも見渡せそうだ。会長はうんと背伸びをすると、鏡に向かって笑いかけた。

悪くない笑顔だ。

部屋に戻ると、枕もとに置いてあったふたつのお守りを鞆につけ

る。咲が持ってきたこれがよく利いたのかもしれない。

そんなことを考えていると地平線の彼方から太陽が出勤をはじめた。灯台のような陽射しが地上を明るく照らす。会長は目を細めて夜明けをながめていたが、ふと自分がこつくりさんの呪いなど忘れてしまっていることに気がついた。

夜はあれほど怖かったこつくりさんが、今はなんだか馬鹿らしく思える。

温かな陽の光を浴びているからかもしれないし、夜の闇が恐怖を増幅させたのかもしれない。どちらにせよ、今はとにかく気分がいい。

「太陽は偉大ね」

とつぶやき、会長は朝日に向かって一礼した。

最近は何となく仕方のなかった学校の授業も、今日は短いくらいに感じられた。退屈なことには変わりなかったけれど、不思議なことに睡魔は襲って来ない。

それどころか先生も一生懸命授業をやってるんだなあ、と変に関心をしてしまったくらいだ。

終業のチャイムが鳴り、部室のある旧校舎のほうへ歩いていると副会長に遭遇した。ふたりとも部室に行く途中なわけだから、さして珍しいわけではなかったが副会長は目を丸くした。

「今日はパン買っていかないのか？」

「うちだって常に空腹ってわけじゃないのよ。咲ちゃんにお守りのお礼もしなくちゃいけないし、ちよつと早く行こうかと思って」

「みなみも効果があったのか」

副会長は、今度は感心したような声を出した。鞆につけたふたつのお守りを手に取り、しげしげと眺める。

それから、慌ててなにかに気づいたように鞆を肩にかけ直した。

「なんかこつくりさんとは関係のなさそうなお守りだったけどね」

会長が事情を察して話題をそらす。副会長は平静を装ってうなずく。

「合格祈願なんて、まったく関連性がないな」

「ほんとよね、咲ちゃんのセンスを疑うわ」

「誠くんは財布係だったらしいな」

「咲ちゃんは意外と将来、男をパシリに使う女王様になるかもね」

「そうだな」

気まずい沈黙が流れる。

恋愛成就のお守りがふたりの歩調に合わせてゆらゆら揺れている。無言のままに渡り廊下をぬけ階段を上り、廊下を進むと部室のドアを開ける。

そこにはすでに咲と神崎、それから結衣の姿があった。

「咲ちゃん、お守りありがとね。おかげでよく眠れたわ」

「そうですか。それは良かった」

「迷信には迷信を。ってやつかしらね」

「——会長。すこしお願いがあるのですが」

咲は席から立ち上がると、そう提案した。会長は小首をかしげる。
「なにかしら？」

「あたしが今からすべてのなぞ解きをしますから、その代わりにもう呪いや迷信の類を盲信するのはやめてください」

「……おもしろいじゃない。話して御覧なさいよ」

会長の許可を得て、咲はニヤリと笑みを浮かべる。副会長と会長が席に着くのを待ってから咲は推理を披露しはじめた。

「さて——」

咲の推理とエピソード

「最初についておきますがあたしはオカルトや霊とか、そういった超常現象や異能の存在をまったく信じていません。副会長とは対極の立場にあるとについていいでしょう。べつに他人まで否定するつもりはありませんが、それが事件の元凶となっているのだとすれば許すわけにはいきません」

咲が部室のなかを徘徊しながら話す。

「結論からいえば、ある意味では、犯人は副会長ということになるでしょう」

「僕が？」

意表をつかれた副会長がすっとんきょうな声をあげる。

咲は「ですが」とつけ加えた。

「今回の事件、大きく分けてふたつに分類できるでしょう。ひとつはαクラスで起こった謎の集団催眠。もうひとつは会長たちが経験した一連の騒動です。これらは一見まったく関連性がないように思えて、実は根本的には同じ事件だといえます」

「うちらのも事件だつていうの？」

会長が尋ねると、咲は小さくうなずきかえた。

「そうです。呪いではありません、すべては統一されない意思によってもたらされた不幸な事件です」

「——あの、推理中申し訳ないんだけど」神崎がおずおずと手をあげる。「もうちょっと分かりやすい言葉で話してもらえそうれしい」

「……もつと日本語の勉強をするという約束をするなら」

神崎はしばしの間悩んだあと、勉強の苦痛よりも咲の推理が理解できないほうが悪いと判断した。

「要は、これは事件ではなく、むしろ事故に近いハプニングだった

といえるでしょう」

「なるほどな」

やさしくなった解説に喜ぶ神崎。

咲は複雑そうな表情をしてから、推理を続けた。

「たいがいの怪談や心霊体験なんてものは勘違いから生まれるものです。勘違いは暗示をかけられることによってさらに起こりやすくなります。たとえば、夜のトイレに向かうときに『なにか出そうだなあ』なんて思っていると、実際には隙間風が吹いた程度でも幽霊のすすり泣きに聞こえてしまう、といった具合です」

「たしかにあたりが真っ暗だと、いつも以上に怖いものよね」

会長が相槌を打つ。

「いわゆる自己暗示というものです。それは長年の副会長のくだらない話によって蓄積されてしまった知識や、この時期ならではの勉強による精神衰弱によってさらに発生しやすくなっていたことでしょう。不安定な精神状態であればあるほど、暗示にはかかりやすくなります」

「受験勉強、か」

副会長がしみじみと呟く。

勉強ほど学生の精神をけずるものはない。それが毎夜に及ぶ徹夜や、限界を超えた長時間にもなるならなおさらだ。

「まずはαクラスの事件から紐解いていきましょう。事件の発端はもちろんこっくりさんにあります。交霊の儀、という名前で横行した占いは、呪われるという迷信をとまなうものでした。それでも、頼らざるを得なかった。一種の精神安定剤みたいなものです。そして薬には、中毒性と副作用がある。

あたしはさほどでもありませんが、一昔前に爆発的に流行したこっくりさんは、過大に恐れられてしまう傾向があります。過去にあった様々な事例を必要以上に警戒したためです。それは、校長が校内放送をしたことからわかるでしょう。ただのおまじないなら、わざわざ校長自ら禁止令を出すことはありません。むしろ笑い飛ば

すでしょう。くだらない、と」

「大人でさえも怖いんですから、精神の不安定な状況で高校生がパニックにならないはずはない——ですね」

結衣がうつむきながらいう。

咲は歩みを止めずに推理を続行する。

「その通り。会長でさえも信じてしまうほどです。そして教室という密閉された環境下では、人間は集団催眠にかかりやすい。こつくりさんには、経験者がいると成功しやすいといううわさがあります。これはひとりが催眠にかかる、他の人たちも催眠にかかりやすくなるということから派生したものでしょう。αクラスの教室でも、同じことが起こってしまいました。生徒だけによる強制睡眠。集団ヒステリーというやつです。その証拠に、先生は無事でした。それに加えて保健室でぐっすりと休んだ彼らが、それ以上催眠にかからなかったことから、αクラスの事件がこつくりさんによる呪いではなく暗示による集団催眠であったことが証明されました」

保健室で十分に休息をとることができたαクラスの生徒は、心身ともに回復しこつくりさんの呪いにかかることはなかった。咲はいちど立ち止まると、今度は逆方向に周回する。

「さて、もうひとつの事件に移りましょう。会長たちが経験した一連の事件、あたしはそれがαクラスの事件と根本的に同じであると説明しました」

「だいたい想像はついたわ」

会長が口をはさんだ。

だが、その表情は晴れない。

「咲ちゃん、お終いまで話してちょうだい」

「わかりました。まず会長が悪夢を見たことからはじめましょう。たしか昔の自分にこつくりさんをするよう勧められ、結果として呪われてしまうという内容でしたよね」

「そのとおりよ」

「会長がその夢を見たのはαクラスの事件が起こった後でした。そ

のことが会長の記憶を呼び覚ましたのでしょう。嫌な思い出は、気付かないうちに深層心理の下で大きくなって行きました。夢はその人の深層心理を反映しますから、会長が夢の内容をやすやすと信じ込んでしまったのにもうなずけます。本当はどこかでこっくりさんを信じていたはずです」

「――思い出した」

静かな声で会長が副会長を睨みつける。

よくない予感を敏感に感じとった副会長は、いつでも逃げられる体勢にかまえながらおそろのおそろ訊きかえした。

「なにをだ？」

「小学校のころだった。健輔に無理矢理こっくりさんをやらされたのよ。うちは嫌だっていつてるのに、健輔は強引に10円玉は用意するし変な紙は持つて来るし、あげくの果てには部屋に鍵をかけて閉じ込めたりして、うちは嫌々付き合わされた覚えがあるわ」

「そういえば泣いてたな」

「最低ですな副会長」

「人外です」

「それは男としてどうかと思います」

結衣、咲、神崎から容赦のない辛辣な怒声が浴びせかけられる。

副会長は助けを求めて会長を見るが、もちろん救済の女神が現れることはなかった。

「――すまん」

「この落とし前はとう付けてもらおうかしら。咲ちゃんの推理が終わるまで考えておくわ」

副会長は観念して頭を下げたが、会長は冷たい視線をつきかえしただけだった。

咲は軽蔑のまなざしを存分に浴びせかけてから、大きくため息をついた。

「やはり犯人は副会長ですね。このダメ男」

「そ、それはいいすぎじゃ――」

「次は会長が夢から覚めたあとのことについてお話ししよう。たしか後ろに気配を感じたのに、振り向けなかったんですね？」

「まったく動けなかったわ。体が別人になったみたいに」

「原因は、ありきたりなことかもしれませんが金縛りだったと考えられます。極度の疲労や睡眠不足によって引き起こされる金縛りは、意識があるのに体は眠ったままという不思議な状態を作り出します。すると幽霊に抑えつけられているみたいに錯覚し、心霊体験として語られるわけです」

「そんな古典的なトリックだったとはね」

会長はぎろりと副会長を睨みつける。

意図せずとも完全に犯人になってしまった副会長は申し訳なさそうにうつむいた。

「さらにオカルト同好会に連れていかれたとき、あたしたちもこっくりさんを体験させられました。あの１０円玉はたしかに動いていました」

「それじゃあ、やっぱりこっくりさんは本物なのか？」

神崎が尋ねる。咲はかぶりを振った。

「もちろん違います。オカルト同好会なんてあたしは怪しいと思っていたんですけど、彼らはおそらくオカルト研究をしているうちにその手法まで体得してしまっただけでしょう。あの不気味すぎる部室からしてそうです。不安な心理をあおっています」

「探偵同好会の部室もあんな風にアレンジしようと思っていたんだが」

副会長がまったく反省の色を見せず残念そうにつぶやくが、咲がどこからか持ってきたガムテープで口を封じたのでそれ以上喋ることはできなくなった。

時折、もごもごという声のような音が聞こえる。

「彼らは巧みな話術であたしたちを特定の方向に誘導していました。さりげないテクニクだったので気付きにくいですが、あたしは最初からこっくりさんになど興味はなかったので注意深くオカルト同

好会の人たちを観察していましたから、すぐにそれとわかりました。あれはある意味詐欺ですね」

「そうだったわけ？」

神崎が首をひねる。

さっぱり記憶にないらしい。

「元からこっくりさんを信じている副会長。脅えていた結衣ちゃん。それからバカで雰囲気のにまれやすい神崎とくれば、参加者としては十分なくらいです。会長も直接参加していたわけではありませんが、しきりにあたしたちを脅迫していましたから同罪ですね。仕方ないことでしたが」

副会長が、ほれみたことか、というような目で会長を見るので、さらにハンカチで目を覆う。ついでに両手両足も縛って、身動きが取れないよう拘束した。

ミノムシのようにじっとしている副会長を満足げに見下してから、咲は推理を再開する。

「たとえばオカルト同好会ははじめ、こっくりさんに質問をしるといいました。そうすれば『あぶらあげ』という答えが返って来るはずだとも教えてくれました。もしも失敗したらあたしたちに原因があるのではないだろうか？ 呪いにあつてしまうのではないだろうか？ というような恐怖が鎌首をもたげます」

怪しげなサングラスと衣装は、声だけに意識を集中させるための道具。

術者の声に耳を傾けさせる技術は催眠術のなかでも初歩の初歩だ。「あたしたちは必然的に『あ』の文字へ行かなければならないという強迫観念を覚えます。そしてオカルト同好会のもくろみ通り『あ』を指し示したのを見て安心してしまったんでしょう。『ぶ』の文字まで10円玉が移動することはありませんでした。彼らはさりげなくあたしの責任だという方向に持って行って、いやでも意思を統合させようとしたようですが」

「咲先輩はまったく信じてないのに、どうしてこっくりさんは成功

したんですか？」

結衣がきいた。

「オカルト同好会は10円玉から手を離さないようにと忠告していました。全員を共犯者にすることで、誰も途中でリタイアできなくするためです。あたしは10円玉に指を乗せていただけでしたから、誰か一人でも動かそうとする人がいたら抵抗せずについて行ってしまします。それが誰なのか、副会長なのか結衣ちゃんなのか神崎なのかはわかりません。ひょっとしたら全員かもしれないが。とにかく誰かが動かしたとき、わざわざ抵抗することもないでしょう」

「だからこつくりさんは経験者がいると成功しやすいのか」

神崎がうなずきながらいう。

「4人というのも、誰かひとりくらいは暗示にかかりやすい人間が交じっているからでしょう。それから交霊の儀で副会長が『試験は成功するか?』と聞いたとき、10円玉は『はい』を示した件ですが、あれも犯人は副会長です」

全員の視線が副会長に集まる。

どれも非難の色をふくんだものだ。

「個人的な願望が露骨に出てしまった結果でしょう。同じことがαクラスでも起こっていたと考えられます。αクラスのみなさんが熱狂的なまでに交霊の儀を行ったのも、良好な結果ばかりが出たからだと思います」

「健輔がそうであってほしいとねがったから、望んだとおりの結果になったのね」

「だれでもそうなりますと思いますけどね。こつくりさんを終える時に『お離れしてもよろしいでしょうか』と聞かなければいけないというルールがありますが、いいえが出たらどうしようという気持ちがあると、無意識のうちにいいいえを選んでしまうことがあるんです。同じように無意識であろうとどこかでそう思っているのなら、結果に影響を及ぼします」

「無意識か」

神崎がつぶやきを漏らす。

今回の事件は心理的な側面が多いようだった。そうすると、これは事件ではなく、不幸な偶然ということになるのだろうか。意図しない事件と、狙って起こされた事故。区別はすごく難しい。

「会長が画策したとおりあたし以外の人たちは霊の存在を信じた。同時に恐怖も覚えたはずです。いかに手順にのっとっていたとはいえ、呪いがあると噂されているこつくりさんですから心のどこかで怯えている部分もあったんでしょう。帰り際に遭遇したというポルターガイスト現象も、会長たちの幻覚だった可能性が高いです。集団幻覚というやつですね」

「実際に空き缶は動いてたわよ」

「風かなにかで動いていたのが、誇大に見えたのかもしれないね」
空き缶が浮遊していたとき、強い風が吹きつけていたのを思い出す。たしか植え込みの木が激しく音を立てていたはずだ。鴉も飛んでいた。

「……………」

「会長たちに渡したお守りですが」

「といって咲は話を締めくくる。

「あれは不安を抱かずに眠ってもらうための方便です。神社の神主さんにおまじないを教えてもらったっていうのも嘘です。神崎にはしっかりお賽銭をしてもらいましたけど。人間、睡眠不足になると感情が不安定になります。夜遅くまで起きているのもいたずらに恐怖心をおおるだけです。早く寝れば気分もスッキリして勉強にも集中できますから。ということで呪いは解けましたから、あとは試験を頑張ってください。これで成績悪かったらホントに呪いますからね」

「——わたしの呪いも、解けるんでしょうか」

結衣が咲の瞳を見すえながら聞く。咲は小さくうなずきかえした。「もとから呪いなんてなかった。すべては探偵の解き明かせることだけ」

「——そうですよね、名探偵に解けない謎はないですもんね」
結衣は笑顔とともに、ホームズの衣装をぎゅっと握った。

高校生の命運を握るセンター試験の日には、新年になった初めての雪が降った。前日の晩からはらはらと舞い落ちた粉雪のような白い粒は、幸いなことに交通機関を煩わせることもなく、受験生たちの想いを乗せた吐息をほの白く染め上げた。

二日間にわたる試験の間、世の中はひどく静かで、空気には試験会場から伝播した緊張感が漂っているみたいだった。

ニュースに流れるマフラーを巻いた受験生たちの姿を見ながら結衣は咲にもらったお守りを抱きしめていた。御守とシンプルに書かれただけの薄いピンク色のそれは、結衣の不安をすべて取り払ってくれる。

休みが明けて会長たちに再開するのが待ち遠しい。

副会長のことは心配だけど、なんとかかなりそうな気がする。明言はしていなかったが会長と同じ大学に行くつもりなんだろう。恋の力があれば大抵のことは乗り越えられるものだ。

「寒いなあ……」

冬だ。

冷たい季節に、背筋の凍るような怪談は似合わない。

冬にはこたつに入りながら蜜柑を食べて、春を待つのがいちばんだ。

「いよっしゃああ！」

部室で雄たけびをあげているのは会長だ。手には新聞紙。試験の結果は知らされないの、自分で新聞に載せられた解答を見て採点しなくてはならない。

時にはマークシートのミスでとんでもない点数になってしまうこ

ともあるが、基本的には自己採点で結果を知ることができる。

会長は新聞をわざわざ部屋にまで持って来て採点をしているのだ。

「これは余裕フラグ！ 今なら東大だって余裕よ！」

「そんなによかったんですか」

神崎が明るい表情で聞く。

先輩の喜ぶ姿はいいものだ。ついこの間まで呪いやこっくりさんに悩まされていたとは思えない反応だった。

「赤いザクくらいかしらね」

「通常の——えーっと、3倍でしたっけ」

「気分的にはそのくらいね。これ以上にないくらい清々しいテスト結果だわ」

「副会長はどうなんですか」

同じように新聞を覗きこんでいる副会長は、静かにほほ笑んだ。

「来年もよろしくお願いします」

「ちよつと待て児玉くん。僕はまだなにもいってないぞ」

「いわなくても結構です」

「僕は氷の堆積くらいだった」

「ほとんど水面下ですか。残念でしたね」

「違うわ！ 1割増しだつてことだよ！」

「もとが低いとあんまり変わらないんじゃないですか？」

「僕にとっては大成果だ！」

副会長のつつこみにも威勢が感じられる。

いつのまにか新聞紙を折り紙にして兜をつくりだしていた会長が、副会長の新聞をひったくって丸めだす。細長くつくりだされた灰色の剣は、会長によってハチャメチャに振り回される。

「祝勝会を開くわよ！ 結衣ちゃん誠くん、ケーキを買って来なさい！」

「またおれのおごりですか」

神崎が財布の中身をたしかめる。

小銭ばかりがぶつかり合う金属音を立てる。なにかを訴えかける

ような瞳で、神崎は会長を見る。

「仕方ないわね。健輔のおごりでいいわ」

「わ、割り勘だろそこは」

「ちっちゃいことをいわないの。男が廃るわよ」

「……くそ」

副会長は財布から千円札を何枚か取り出すと、結衣に差し出す。うやうやしく夏目漱石を受け取ると結衣は、神崎と一緒に出かけていった。

「これで駄目だったらどうしようもないですね」

静かになった部室で、咲は読書をはじめめる。

「不吉なことをいわないでくれ。言霊というものがある」

「——今回の事件、あたしは言霊の存在を感じました。言葉一つで自由に人を操ることができる、それってすごく怖いことじゃないですか？」

真剣な表情。

「人は科学技術を生み出すことはできるけれど、それを良い方向に使うのも悪い方向に使うのも人間次第なのよね。言葉っていうのは、ある意味最強の武器なのかもしれないわ」

会長が真面目にこたえる。

「何気ない一言が誰かを深く傷つけたり、逆に誰かを救うこともある。うちらはとんでもない世界に生きているのかもしれないわね」

「——それこそ、こっくりさんの生きている世界に」

「やはり霊はいるんだな」

副会長が納得すると、咲と会長は声を合わせて「バカ」といった。

Xデー

その日は朝からしんと雪が降ってはいたが、ほの白く彩られた街並みや黒い制服姿の学生たちがあるく道には、どこか張りつめたような、それでいて頬をあかく染める火照った空気がただよっている。

うす暗い空から舞い降りてきた雪のかけらはコート生地になれど、やんわり解けていく。

それでも髪の上にちらついた粉雪はそのまま解けずに残って、ときおり気づいたように振り払われる。

道路の隅につもった新雪を踏みしめながら霞ヶ丘高校の生徒たちは学校に向かって進んでいく。あちらこちらから漏れる話し声はいつもと同じだったが、その場に流れる雰囲気は、おさえこまれ隠されながらも、やはりどこか異質だ。

「――神崎！」

うしろから声をかけられて神崎がふりむくと、そこには二人組の同級生が肩を組んで行進していた。

片方は気合いのはいった髪型で、ワックスの量がいつもの五割増しといったところだろうか。元気をもらったどこかの超人を神崎は思い出した。

「ゴキブリみたいにつやつやした髪だぞ、お前」

「うるせえ！ 今日だけは神崎に負けるまいと一時間も早起きしてセットしてきた自慢のヘアスタイルを馬鹿にすんじゃねえ！」

「はいはい、幸運な出来事があるよ、たぶん」

なぜやりにいって、神崎はもう一人の同級生に目をやる。

こちらは派手な赤いマフラーと、縁の太い黒メガネという恰好だ。どうやらコーディネートのはうに力を注いできたらしい。

見慣れないファッションに、吹きだしそうになるのをこらえる。

今日だけ頑張っても仕方ないものはしかたないだろうに。

「その眼が気に食わねえんだよ！ おれたち凡人を馬鹿にしきつたような瞳が！　なんだ、チョット顔がいいからって調子に乗りやがって」

「べつにそんなことは——」

「男は顔じゃねえ、心意気だつてことを見せてやるぜ」

「おうよ兄弟！　明日は鼻血で学校を休もうではないか！」

「ヒヤッハー！」

妙にテンションの高い同級生二人組をながめながら、神崎はため息をつく。実のところ今日という日はあまり好きじゃない。毎年のようにこうやって敵視されて絡まれる。願っているわけじゃないのにという後ろから鉄パイプで殴られかねないので口にはしないが、面倒くさいのは事実だ。

こおった雪を踏みつけながら雄たけびの声をあげている同級生たちをおいてあるき出そうとすると、また声がかかる。

今度は女子のものだ。

ああ、ついに始まったかと観念しながら声のしたほうを振り向く。背後から殺気のもった視線を感じるが、無視。こんなレベルのことをいちいち気にしていたら今日を生きのびることはできない。

「あ、あの……これ、もらってください！」

うつむきながら差し出された手のひらサイズの、赤いリボンのまかれた小箱を神崎が受け取ると、その少女は恥ずかしそうに全速力で校門のほうへ走っていった。

視線が痛い。

神崎はいましたがたもったばかりの小箱を大きめの鞆にしまうと何事もなかったようにあるきだした。だけど、耳の端は赤くなっているだろう。何度経験しても、こればかりはなかなか慣れない感覚なのだ。

こっそり横目で同級生たちをうかがう。

「——見せつけやがって」

「——今年こそひと泡吹かせてやる」

そんなひそひそ声が耳に届いてきて、神崎はどんより灰色の空を見上げた。

頬に落ちるつめたいしずくが体温に解け、顔の輪郭を伝っていく。今日は2月14日、バレンタインデーだ。

校門をくぐりぬけるころには神崎の鞆はすでに様々な種類のプレゼントによってかなり重たくなっていた。最近はチョコばかりでなくクッキーやケーキを作って渡す女子生徒も多い。

むしろチョコのほうが稀かもしれない。が、そのほとんどは男子生徒からによるもので、その辺で買った商品をそのまま送りつけてきたという感じだ。

甘い物が好物だと宣言してしまったのがいけなかったのだろうか。おかげで去年はたいへんな目にあった。

本命だけならまだしも記念のように神崎にチョコレートを贈るような人もいて、学校中が大騒ぎになったのだ。量が多すぎて持つて帰れないので昼休みにすこしでも減らそうと食べた方がいいが、結局鼻血を出して保健室に運ばれたという経緯もある。

その保健室にもチョコを渡しにくるような始末でしばらくは甘い物など見たくもなくなった。

「……はあ」

下駄箱のまえにうず高く積まれたお菓子の小山。

ヘンゼルとグレーテルが見たら、これこそお菓子の家だと喜ぶかもしれない。

ラブレターではないのだから下駄箱に入れるのはどうかと思うのだが、靴を入れる小さなスペースだけでは足りずに塔のように床からのびている。手を触れたらバランスを崩して倒れてしまいそうだ。さてどこから攻略すればいいのだろうと塔のまわりを見てみると、さきほどの同級生二人組がコンビ二で買ったのだろう板チョコを無造作に塔の頂上加えた。

「あ、バカ」

絶妙なバランスを保っていた塔は崩壊寸前のジェンガのように揺

れたが、なんとか傾いたままの状態で静止する。ほっと胸をなでおろしてみると、犯人たちの姿はもうそこにはない。

神崎はおもむろにてっぺんに置かれた板チョコをつかむと、一口かじった。喉の奥にかけて甘くほろ苦い味がのぼってくる。たしかにチョコレートだ。

今年は何のくらい食べられるだろうかと考える。無意識に鼻の頭をおさえていた。出てもない鼻血が垂れた気がした。

神崎の教室ではさらに巨大なタワーが形成されていた。

まるで巨人が積み木のゲームでもしたかのように高い。そのなかには明らかに心のこもっていない——つまり、どこかで買ってきたようなやつ——もたくさん混じっていて、何割かはいたずらだろうとうかがえる。

神崎が半ば茫然としながらそのタワーを静観していると3年生の元野球部の先輩がやってきて、さも当然のようにチョコをパーツの一部に組みこみ、神崎の左肩をばしばし叩いて笑いながら去っていった。

痛む肩をおさえながら神崎がうめく。絶対に恨みがこもってた。

「いやー、すげーなー」

観光名所と化した神崎の机周りには続々と野次馬が集まってくる。その間にも徐々にタワーは巨大化して、すでに根元にある机の木目が見えないほどだ。うかつに近づくと倒壊に巻き込まれる恐れがあるので遠巻きにお菓子の塔をながめながら、観客たちは携帯で写真をとっている。

神崎がうんざりとした様子で廊下に脱出すると、他の教室でもちようと同じように人だかりができていた。

だいたい予想はついているが念のために足をのばしてみると、そこにはデジャヴのような光景が広がっている。神崎のものとさして変わらぬ高さのスイーツタワーが君臨している。

天井に届きそうな勢いのタワーの下では、鼻を高くした男子生徒がニコニコ笑いながら写真撮影に応じていた。アイドルの握手会さ

ながらに次々とファンの要望にこたえながらも、その男は笑みを絶やさない。優雅に肩まで抱いている始末だ。

「おい、神崎が来たぞ！」

お節介なことに誰かがそう叫ぶと、群衆の視線が神崎に注がれる。そのなかには、この騒ぎの原因である男も含まれていて。男はゆつくりと立ち上がると、端正な口を開いた。

「神崎誠、いったい僕がどれだけこの日を待ちわびていたか君に分かるかい？——去年の忌々しいあの日以来、僕が安眠できた夜は一度たりともなかった。だが、それも今日で終わりだ。今年の2月14日バレンタインデー、綾小路朱雀

あやのこうじすざく

は君を見事うち破ってみせよう」

「……………」

「今日のために僕は容姿を含めたすべてに磨きをかけ、ありとあらゆる努力をしてきた。ある時は雨に打たれながら奥深い山のなかで修業をし、またあるときは見知らぬ異国の地で秘薬の材料を探し求め、途中で凶暴な獣に喰い殺されそうになったこともあった——」

「……………」

「さらに今年は霞ヶ丘高校だけでなく、周辺地域の学校にも僕の知名度を広めようと思ってる。毎朝のようにボラ〜ンティアの清掃活動を行ったり老人福祉施設を訪問し——って、ちよつと待てい！」

神崎は背を向けて教室から逃げ出した。

勝負なんて受けたつもりはないし喧嘩を売った覚えもない。

綾小路の阿呆が勝手に負けたつもりで敵対視してくるだけの話なのだ。

思い返せばまた去年のバレンタインデーにさかのぼるが、あときも今日と同じようにふたつのお菓子のタワーが建設されていた。ひとつは神崎の、もうひとつは綾小路のものだ。

当時は野球部のエースとして名をはせていた神崎と、どこかの財閥の息子であるらしい綾小路の勝負は意図せずして起こった。

朝から面白いように量を増していくチョコレートを神崎がながめていると、どこからかあの男が現れたのだ。そしてメジャーで塔の高さをはかると悔しそうに地団太を踏み、今度は重さをはかる。

「なんだというんだっ、これは……!？」

絶句する綾小路。

神崎は戸惑いながら声をかける。

「あの——あなたは？」

敬語になってしまったのは、とてもふつうに喋れるような状態ではなかったからだ。眼は血走り、髪は逆立ち、血管は浮き出ている。現実になくなっていたかどうかは別として、すくなくとも神崎には鬼か修羅が地獄からやって来たように見えていた。

「貴様の名前はなんというっ！」

「はい？」

「名乗れ！　いますぐ名乗れ！」

「神崎……誠です」

「この僕を愚弄したこと、覚えておけよ。来年こそは歯ぎしりして悔し涙を流しながら土下座することになるだろう、神崎誠。そして貴様を地獄の底にたたき送ってやるのはこの綾小路朱雀だと記憶しておけ！」

「はあ」

鼻息荒く綾小路は教室を出ていく。

後で知ったことだが綾小路もこういうわけか女子にとっても人気があるらしい。よくわからないが、人間というのはそういうものなのだろう。

顔立ちはたしかに整っている。それに話を聞いたところ運動神経もいいらしい。部活には所属せず、学外で馬術やアーチェリーを習っているというふうなうわさもある。

だが、どれもこれも人づてに聞いた話ばかりで直接確かめたわけではないから、実際のところ真実なのかどうかはわからない。印象としてはおそろしく変なやつというイメージだ。

それからというものなにかとイベントがあることに綾小路のほうから絡んでくるのだが、変人という印象を強めるばかりで、まともな人間だと意識したことはいちどもない。

こういうやつは真面目に対応してはダメなのだ。

逃げるが勝ち、ということわざ通り神崎が教室に戻ると、さきほどよりも一回り成長したタワーが微笑を浮かべていた。

「これが噂のお菓子タワーね。なるほど天井に届きそうな高さだわ」
会長が感心して見上げる先には神崎宛のチョコレートがうず高く積まれている。そのなかにはクッキーや、ラブレターらしき手紙のついたものもまざっている。

会長は携帯電話をとりだすと、なにかを探すようにあたりを見まわす。

「どうしたんですか？」

結衣が声をかけると会長は

「結衣ちゃんタバコ持ってない？」

と聞きかえす。

不穏な単語に結衣が眉をひそめる。

「会長、タバコは体にも美容にも悪いですから吸わない方がいいですよ。それにまだ二十歳になってませんから法律違反です。せっかく卒業がもうすぐなのに、退学なんてあんまりですよ」

「ああ、そういうわけじゃなくて」

手をひらひらと振って否定する。会長の口元には苦笑が浮かんでいた。

「なにか大きい物を撮影するときには比較の対象としてタバコの箱をおくものなのよ。タバコの箱なら大きさがわかりやすいから、指標になるの。このくらいは一般常識だから覚えときなさい」

「でも、さすがに部室にタバコの箱はないと思いますよ」

「そうなのよね——健輔、たしか以前持ちこんでなかったっけ？」

「火のないところに煙を立てるのはやめてくれ。僕は不良青年になるつもりはないし、憧れてもいない」

副会長は盗んだバイクではなく、青い安物のプラスチック椅子にまたがりながら返事をする。

真冬の寒さに耐えかねて使い捨てカイロを両手に握りしめながら、ときおり冷え切った耳たぶにあてがって暖をとっている。厚く着こんだコートのシルエットはまるで雪だるまだ。

「仕方ないわね。じゃ、咲ちゃんそこに立ってくれるかしら」

「なんであたしなんですか？」

咲が気だるくこたえる。

いつものように読書にふけてはいるが、スカートから伸びた脚はどことなく寒そうで、小刻みに震えている。テーブルにはホットのココアの缶が用意されており、優雅な休憩時間を過ごしていたところだ。

会長が咲の持っている本のタイトルを覗きこむと、どうやら長編シリーズの一冊目らしく、ナンバリングがされてある。

「咲ちゃんと並ぶと高さが強調されて画になりやすいのよね。東京タワーとちびっこを一緒に写すような感じっていうのかしら」

「あたしがチビだっていいたいんですね」

咲の声は冷たい。

だがまったく気にする様子のない会長は咲の頭をポンポンと叩いている。

「そのとおりよ。うちのなかでいちばん態度が大きいのに身長が最小なのは咲ちゃんなんだから。こういうのをギャップ萌えっていうのかしら」

「今日はいやに挑発的ですね会長」

「あら、そうかしら？」

火花の出そうな激しい視線の交錯ののち、おもむろに口を開いたのは咲だった。

「会長、昨日はさぞかし苦勞したことでしょうね。目元に隈ができ

てますよ」

反射的に目の下をさわって確認する会長。たしかにくぼんだような感触がある。今朝は寝坊しかけたのでチェックする時間がなかったのだ。

動揺する会長に、咲が黒い笑みを見せる。

「なにしてたんですかね。もしかして好きな人のために徹夜でチョコレートを仕込んでいたとかですかね。相手は誰なんでしょう、意外と近くにいたりして」

わざとらしく副会長のほうに視線をやる。その副会長は気付かないふりをしてそっぽを向いているが、顔が赤くなっているのだから会長と咲の会話を聞いているのは確かだった。

「もう意中のひとには渡したんですかね？ ひよっとしたら惚れ薬とかが入っていたりして。まあ、もう相思相愛のラブラブな仲ですからそんなもの必要ないでしょうけど」

「——— なんていうか、勘が鋭すぎるのか、それとも才能かしら」
会長が独り言のようにつぶやく。咲は無表情のまま応対した。

「ホントに入れたんですか？」

「惚れ薬なんて深夜のあやしい通信販売でも取り扱ってないわよ。そんな不気味なものを手に入れたところで、使う価値のある男もいないしね」

「だ、そうですよ」

咲が口到手をあててヤジを送るように副会長へ声をかける。

両手に持ったカイロで顔をおおってはいるが、その隙間からのぞいている肌は紅潮していて、赤いリンゴのようだ。

「僕より誠くんの心配をした方がいいんじゃないか。この量なら得体のしれない薬がはいっていてもおかしくはない—— 明日から突然、見知らぬ女の子を好きになっっているようなこともありえるかもしれないぞ」

「得体のしれない薬って、媚薬とかですか！」

急に生き活きとした結衣は目を輝かせながらチョコレートタ

ワーに近づくと、数あるお菓子のひとつを取り出してしげしげと見つめた。

「なんの気なしにその甘く、ほろ苦い小さなチョコレートをおぼるとなんだかふわふわした気分になって、脳裏にとある女の子のことが浮かんで仕方がない、そして徐々にうずきはじめる身体は強烈な欲望をおさえきれずに、ただの獣と化した神崎先輩は理性との葛藤に苦しみながらも本能に身を任せていく――」

「咲ちゃん、あなた変な本とか貸してないでしょうね」

「あたしそんな本持っていないです。副会長あたりじゃないですか？」

「僕だつて持っていないさ。自分で購入したんじゃないのか？」

「……それより、おれが主人公であることが問題だと思うんですけど」

神崎が割って入ると、結衣はすぐさま反応を示す。その瞳は色を取り戻したように活性化していた。

「神崎先輩なら不特定多数を相手にすることもできますし、元運動部だから素敵な体つきをしてる上に体力も精力も旺盛でしょうから主人公にぴったりなんです」

「そういう系統の作家になるつもり？」

「いえ、あくまでわたしは傍観者ですから。頑張ってください、先輩」

結衣は最上の笑顔を神崎に向けて送るが、神崎は困ったようにあまいな表情を浮かべるばかりだ。誤魔化すようにタワーからカツプケーキを見つげ出すと、一口に頬張る。

その様子を興味津々いったふうにながめていた結衣は、なにかを思い出したように手を打った。

「そういえば、チョコ渡すの忘れてました。ちよこつと待っていてくださいね」

親父ギャグのような冗談を交えると結衣は教科書を入れてくる鞆とは別に持って来ていた紙袋からクッキーの入った袋を取り出し、各自に配る。

「手作りですよー」

可愛らしいリボンに閉じられた袋をさっそく会長が開けると、香ばしくやわらかで甘いクッキーの芳香が漂ってくる。チョコチップをまぶしたクッキーは、すこし甘すぎるくらいの味がした。

「美味しい！」

「ありがとうございます。料理なんてあんまりしないから、ちょっと不安だったんですけど」

「ちょこっと、ね——」会長は苦い顔をした。「うちからもあげなくちゃいけないわね。どうぞ」

会長が結衣と咲に差し出したのは小粒のトリュフで、ココアのこげ茶色が目にまぶしい。

「誠くんにも」

「ありがとうございます」

「あれ？ 副会長にはあげないんですか——ということは、プレゼントはわ・た・しみたいな展開ですね」

咲がからかう。

「いいですね、ロマンチックです」

嬉しそうに結衣がトリュフを口に含みながら、今度は咲に期待の視線をむける。咲は少し肩をすくめるようなしぐさをしてから、スタンダードなチョコレートを机の上にさらけ出した。

「副会長と神崎のやつには毒が入れていますから、気をつけてください」

「あら、照れてるの？」

会長がからかうと、咲は四つある袋のひとつをひょいとり上げた。

「いらないみたいですから、あたしが自分で食べますね」

「いいもんね。うちは誠くんのぶんをもらうから」

そういつて素早く神崎のチョコレートを奪うと、口のなかに押し込んだ。にんまり笑う会長。すぐさま結衣と副会長は自分の取り分をしまいこんだので、神崎の目の前には何も残っていない。

「——くれるよな」

物欲しげな瞳を咲に向ける。

部室のすみに積まれたタワーをちらりと見てから咲は

「いらないでしょ？」

「いる。欲しい」

「毒が入ってるよ？」

「かまわない」

「……ま、別にいいけど」

犬にフリスビーを投げるように、咲がチョコレートを放り捨てる。

神崎は左手でキャッチすると、口元をほころばせてカカオの香りを食す。

「うまいよ」

「よかったね」

ぶっきらぼうに答える咲の目の前で、神崎の鼻を赤い液体がつくと伝い落ちた。

Xデー（後書き）

ここから2月編になります。

それと、私事になりますが皆様のおかげで10000アクセスを突破いたしました。

これからも御贐に。

開戦のゴング

「誠くんってヘタレなのよね、残念なことに。この一年ですこしは成長したかしら」

部活を終えた放課後の帰り道、かすかに舞っている雪のなかふたつの傘が並んで歩いている。積もった雪は道路の脇に寄せられてはいるが、足を踏みだすたびに湿った音を立てる。

「それは探偵的にか？ それとも人間的にか？」

「どっちもよ。名探偵は常に人格者であらなければいけないものなのよ。みんなをハッピーエンドに導いていける人こそが名探偵と呼ばれるにふさわしいんだから」

「みなみが出来ているとは思えないけどな」

「なに？」

「いや、別に」

副会長がはぐらかす。

会長はむっとしたように自分の傘を副会長にぶつけた。傘の上に淡く重なっていた粉雪が降りかかる。

顔をしかめながら副会長が抗議の声をあげようとすると、すっと眼前に小さな袋がさしだされた。

「これでおあいこね」

「——てつきり今年はもらえないものだと思っていたよ」

「間違えたらシャレにならないからよ。それに部室で渡したりなんかしたら咲ちゃんたちがうるさいでしょ」

「それもそうだな」

副会長は部室でからかわれているのを思い出して顔をほんのりと赤くする。

さつき会長にかけられた雪が解けて、首筋を伝っていく。

「春になると、これからもっと騒がしくなるかもしれないけどな」

「その頃にはうちらはもういないのかしらね」

「どうだろうな」と副会長がいった。「寂しいもんだ」

「そうね」

「でも、僕にはみなみがいるもんな」

「バーカ」

もついちど会長が傘を揺らす。

でも、先ほどストックを使いきってしまったばかりの傘はいたずらに衝撃を与えるばかりで。

そのあとから会長が静かに体を寄せた。

雪は包みこむようにしんと降り続いていた。

「——そんな理由で部活を欠席していたの？」

咲が小馬鹿にした口調で神崎をのしる。その神崎は申し訳なさそうに顔を伏せながら、しきりに腹部をさすっている。

探偵同好会の部室にそびえたつバレンタイン・タワーはいまだにその勢力を保持していて、圧倒的な存在感を放っている。たまに隙を見ては会長がこっそりとお菓子を抜き出してはつまみ食いしているのだが、それさえ感じさせないほどだ。

「仕方ないだろ。体調不良はどうしようもないんだからさ。学校に来るのだけはどうかできたけど、部活までは堪えられなかったんだよ」

「自業自得じゃない、そんなの」

「誠くん。ただだけないわね」

会長が口をはさんだ。

部室にはすでに全員がそろってはいたが、別に事件のことについて議論を交わしているわけではなく、神崎の欠席理由について問いつめているのだ。

バレンタインデーの翌日と、そのつぎの日を無断欠席した神崎は、ようやく顔を出した瞬間から咲と会長に尋問されているのである。

「自分の体調も管理できないようじゃスポーツマンとしてやってい

けないわよ。チョコの食べ過ぎでお腹を下して休むなんて、人には話せない大失態よね——それとも、自分はこんなにモテルんだぞっていうアピールのつもりなのかしら？」

「そんなことは……ないです」

「ならどうして素直に連絡をよこさなかったんですかね。部活を休むときには必ずその理由を伝えるようにいつてあるはずですが」

咲の言葉は刺さるように冷たい。

神崎はますます申し訳なさそうに直立不動の姿勢を保ちながら弁明する。

「それはその——恥ずかしかった、からです」

「なにが恥ずかしかったのか、くわしく説明して」

「……はい」

「咲ちゃん、容赦ないわね」

会長が半ばあきれたような、驚いたような口調で感心する。

咲は無表情のまま神崎の襟首をつかんでいう。

「この阿呆がいけないんですから。あたしたちが遠慮する必要性なんて少しもありませんよ。会長もどうぞご自由になじってやってください、この色ボケ男、と」

「そんなことは……」

首元をしめ上げられ苦しそうに神崎がうめく。咲はやくざのごとく大きな舌打ちをしてから手を離れた。圧迫感と恐怖から解放された神崎がはあはあと荒い息を吐く。

「くわしく事情を説明してもらいましょかね。何をどれだけ食べたらそうなったのか。覚えてないかもしれないけど」

皮肉をこめた視線で咲がそう問いかけると、神崎はすこしばかりためらってから口を開いた。

「これはおれの過失なんかじゃない——だれかが故意に起こした事件だ！」

「へえ？」

絶対零度に到達した咲の口調は、聞いているだけで背筋に鳥肌が

立つほどだった。部室のすみで縮こまっている副会長と結衣が不安そうに身を寄せ合って、事の成り行きを見守っている。

神崎は全身に悪寒が走るのを感じながら、懸命に続ける。

「だれかが毒を、もしくは下剤かなにかを盛ったにちがいないんだ。おれはむしろいつもより少なめにセーブしたはずだった。去年のこともあるし、すでに部室で鼻血を出すくらいだったから。今年はゆっくり消化していこうと思ってたんだ。それなのに腹を下すなんてありえない」

「うぬぼれてるんじゃない？」

「おれに恨みを持っただれかか、もしくは変な薬をつかまされた人間が間違って毒を混入したんだ。それを食べてしまったおれは、あえなく体調を崩して部活を休まざるを得なかった」

「それで？」

咲が冷たく問う。神崎は意を決したように咲の瞳を見すえて、いった。

「おれは兎玉が犯人なんじゃないかと思っている」

「……ふーん？」

ただならぬ緊張感が部室のなかを痛いほどに支配する。

静寂のなかで鼓動する心臓の脈拍さえも、その場の空気を揺るがすことは許されなかった。会長と副会長、それから結衣は息をのんだまま微動だにしない。

「どうして？」

「昨日も兎玉のチョコレートを食べた瞬間に鼻血が出た。それに普段からの恨みとか、嫉妬とかをこめてバレンタインデーに復讐したにちがいない。そうやっておれが体調を崩せば、思う存分におれを非難することができるもんな。調子に乗った馬鹿だった」

「そこまでいうなら証拠はあるんでしょうね？」

咲が問いかえすと、神崎は唇を固くかみしめた。ぐーに握った拳がかすかに震えている。

「証拠は、これから見つけ出す」

「どうやって？」

「まだわからないけど、絶対に探し出して、児玉の目の前に突き出してやる。そしたら土下座して謝って貰うからな」

「もしあたしが犯人である証拠を得られなかったらどうする？」

咲は挑発するように問いかける。

名探偵が犯人を指名するように、神崎は人差し指をびしりと突きつける。

「なんでもいうことを聞こうじゃないか。約束、忘れるなよ」

「その台詞、そのまま返す」

「あの……」

副会長がおずおずと手をあげて制止する。神崎と咲は勢いそのままに血に飢えた肉食獣の眼を向けた。小動物のように怯えながら副会長はぼそぼそといった。

「そんな無茶な約束はしない方がいいんじゃないかと思うんだが……

根拠もないわけだし、今ならまだ取り消せるよ」

「探偵の勘です」

神崎が胸を張って答える。すぐさま咲が皮肉を返した。

「素人探偵の当て勘ね」

「なに？」

「まあまあ、ふたりとも落ち着いて」

いまにも取っ組み合いのけんかが起こりそうな雰囲気はいやがおうにも感じ取って、副会長は助けを求めるように会長を見た。子供が自分の仕掛けたいたずらを観賞するみたいに会長はほくそ笑んでいる。

これはあてにならないな、と判断した副会長が再び口を開こうとしたときには、すでに対決ははじまっていた。

ゴングが打ち鳴らされる音がする。

「これは大変なことになったな——」

副会長が結衣に話しかけると、うつとりした言葉がかえって来た。「なんでもするって……なにをするんでしょうね」

恍惚とした表情を浮かべている結衣を見て副会長は、まわりにまともな人間がいなかったことに気づき、愕然として肩を落とした。白いため息が長々と吐き出された。

神崎の思惑

「さて——」と神崎がいった。「これから推理をはじめようと思います」

誰もがその様子を静かに見守っていたが、咲だけは燃えるような怒りの視線を神崎にぶつけていた。神崎はそんなことには気を留めずに、ゆつくりと部室を徘徊し出した。

騒々しいバレンタインデーが過ぎ去ってからというもの、神崎はタワーを喰い崩すことよりも、咲が犯人である証拠を見つけることに集中していた。

だが、そう簡単に有力な手掛かりを得ることはできず、それほど重大な要素を見落としていたことに途中で気がついたのだ。

『咲は当初神崎に渡そうとしていたチョコレートを会長に奪われている。そして、会長にあげるはずだった袋を、神崎に提供した』という事実をふと思い出し、頭を抱えたのは調査をはじめてから二日後のことだった。

どうしてこんな簡単なことを見落としていたのだろう。

頭に血が上っていたという言い訳ならいくらでもできるが、どんな理屈をならべたところで咲に売った喧嘩は買い戻すことはできない。それこそ国家予算ほどの金額をならべるか、ブラジルまで届きそうなくらい深々と土下座するくらい的心持ちでないとだめだ。

冷酷非道な眼をした咲が、鞭を持って目を光らせているイメージが脳裏にこびりついて離れない。

いつそ学校から逃げたしてどこかに潜伏した方が安全かもしれない。もしくは先手を打って、咲の弱みでも握ってしまうかだ。

だが、はたして咲に弱みなんてあるんだろうか。
結論はすぐに出た。そんなものは存在しない、考えるだけ無意味だ。

「聞かせてもらったよ、今年は僕の圧勝だったようだねえ」

神崎が頭を抱え込んでいると、背後から嫌な予感をともなった声がした。勝ち誇ったような口調からして、そうとう機嫌のいいらしい綾小路がそこに立っていた。

「……そうなのか？」

神崎は絞り出すようにうなった。

「圧勝さ。なにせ僕のほうが2インチもタワーが高かったんだからね」

歌舞伎の女形のような声色をした綾小路は、ひと目で高級だとわかる品のいいブランド服に身を包んでいる。身長こそ神崎よりは低いがお金持ちによくあるような貧相な体つきはしていない。

むしろ均整の取れた体格なんだろう、と神崎は無意識のうちに考えていた。

「60センチも違ったのか。そりゃ完敗だな、勝負していたつもりはないけど」

「……それはフィート換算だろう。1インチは約2.5センチメートルさ」

「なんだ、たったの5センチか」

「たったの、とはなんだ。去年は君に1インチ差で惜敗したことを思えば、大勝利じゃないか」

綾小路はとにかく圧勝ということにしたがっているらしいので、神崎は素直にうなずいた。

「わかったよ。お前の勝ちだ」

ヒラヒラと手を振る。綾小路はその端正な顔にしわを寄せた。

「つまらないな。こうもあっさり認められてしまうと張合いがない。君は来年こそ僕を負かしてやるとか思わないのかい？」

「残念だがそれどころじゃないんだ。おれはいま猛烈に忙しい」

綾小路は小首をかしげて尋ねる。

「なにが忙しいんだい？ 今は特別忙しいような時期じゃないだろう」

「バレンタインデーのお菓子のなかに下剤を混ぜたやつがいるんだ。」

その証拠を探してる」

「下剤を？」

怪訝そうな表情の綾小路に、神崎が状況を説明する。

神崎の言葉をひとしきり聞き終えると、綾小路はいたって平凡な考えをつぶやいた。

「食べすぎじゃないのか？」

「違うわい！ これは絶対に事件なんだ、そうでなければいけないんだ。だからおれは犯人と証拠を探し回るのに奔走しているんだ」

「どう考えても食べすぎだろう。僕も去年は腹を下すどころか、三日間ほど寝込んだくらいだ。高校になると破壊力が増すんだろうか」
「知らん。おれがこんなにチヨコをもらいだしたのは霞ヶ丘高校に入ってからだ。それまではせいぜい数十個というところだったんだけど。——この学校にはなにかあるのか？」

神崎がぼやくようにいうと綾小路は目を丸くした。

「知らないで決闘に挑んでいたのか」

「だから戦っているつもりはない。それになんだ、事情があるのか？」

「霞ヶ丘高校では代々、学校でもっとも人気のある男子生徒に大量のチヨコが送られるという風習が伝わっているんだ。誰がはじめたのかは知らないが伝説によると、中途半端に多くチヨコを貰ってしまうとひがまれやすいので、それならいっそ大量に受け取ってしまえば問題ないだろうということが始まったそうだね。モテない男子諸君もイベントになつてしまえば諦めがつくし、チヨコを渡す勇気のない女子生徒も気兼ねなく参加できるという素晴らしいシステムなのだよ」

「ずいぶんと生々しい伝説だな」

神崎はため息をつく、教室にある机のひとつに腰をかける。

大小さまざまな傷や落書きの刻まれた机は、古びたシーソーのようにかしいだ音を立てた。

「それで？ どうしておれ達の代に限ってふたりなんだ」

「あまりいいたくはないが君と僕の実力が拮抗しているからだろう。つまり君は僕の永遠の好敵手

ライバル
なのさ」

妙に片仮名の発音がいい綾小路が鼻孔をふくらませながらこたえる。

神崎は肩が重くなるのを感じながら、あるひとつの考えに行き当たった。とくに深く考えることもなくその思いつきを口に出す。

「綾小路、お前が犯人だろ」

「急になにを馬鹿なことをいい出すんだ。僕がどうしてそんな野暮つたいことをしなくちゃいけないんだよ」

「おれを負かすためだろ。もしくは復讐とか」

「みくびらないでくれ」綾小路はいくらか強い口調でいった。「僕はきみを好敵手

ライバル

だとは思えど、君を貶めてまで勝とうと思ったことは一度たりもない。その証拠に僕は一年間自分をみがきあげつづけた——代わりに君の評判を落とすこともできただろうが」

神崎は去年からの記憶をたどっていく。たしかに綾小路に絡まれ、喧嘩を吹っ掛けられたことは何度かあったが、陰で悪口をいわれていたなどということとはなかった。

ある意味、綾小路はマゾなのかもしれない。

「失礼な。僕は騎士道精神にのっとっているだけだ」

「フェンシングでもやってるのか？」

「あれは意外と泥臭いスポーツだよ。君が思うほど優雅なものじゃない」

綾小路が首を横にふつてこたえる。

やはり金持ちのやる趣味というのはどこか似通ったものになるらしい。フェンシング、乗馬、社交ダンス。そういったものも難なく習得しているのだろうということは、見当がつく。

「――僕でなければ、君に恨みを持つ人間はいるかもしれないな」
綾小路があごに手をやりながらつぶやいた。男の眼から見ても、映画のワンシーンになりそうなくらい洗練された動作だ。

「君はガールフレンドはいないんだろう？」

「ん、まあな。作るのも面倒だし」

「それは賢明な判断だ。僕もそう思う。だが――ということは、女性からの怨恨という線は薄いだろう。逆に男子からの嫉妬という可能性はかなり高い」

神崎はバレンタインデーの朝に出会った二人組の同級生や、冷やかにやって来た野球部の先輩のことを思い出した。実際に目撃したのはそのくらいだが、お菓子タワーのなかにも男子が恨みをこめて送ったプレゼントは相当数あるだろう。

去年は1年生で想定できなかったにしろ、2年目になれば再び神崎と綾小路がチョコレートを独占するのは目に見えている。

「けどさ、それならどうして綾小路はどうもなっていないんだ？ おれだけに毒を盛るっていうのも不公平な話だろ」

「それは」と綾小路はいう。「仁徳の差じゃないか」

「そういうもんか」

「そういうものさ」

「違うだろ。単にまだ毒入りのお菓子にあたっていないだけの話だな」

「甘い。僕は修業を積んできたといったはずだ。君が腹痛で休んでいるあいだに、僕はすべてのお菓子を美味しく平らげた。おかげで4キロは太ったがね」

「涙ぐましい努力の結晶だな」

神崎が呆れたようにいうと、勝ち誇った足取りで綾小路は教室を離れていった。誰が犯人なのか、容疑者が増えるばかりで証拠をつかむことはできなかった。

その日の収穫はゼロどころか、むしろ事件をややこしくした。容疑者は他に誰がいるだろう。咲はもちろんとして、野球部の先

輩、板チョコを投げてよこした二人組、ひよつとすると結衣あたりも怪しいかもしれない。変な薬を混入しようとして、間違つて下剤を入れてしまったなんてありそうな話だ。

「容疑者がおおすぎる……」

それが最も深刻な問題点だった。

咲が犯人だとタン力を切ったはいいが、証拠どころか動機さえ怪しくなってくる。そもそもなぜ咲は下剤を入れなくてはならなかったのだろうか。いや、そもそもあの下痢は本当に薬によるものなのだろうか。もしかしたら料理の下手くそな女の子が、砂糖と洗剤を勘違いしてしまったのかもしれない。白くてよく似てるし。

「んなわけあるか」

くだらない思いつきはいくらでも浮かんでくるのに、肝心の推理は一向にはかどりそうな気配がない。

どうしようか。

凄まじくまずい事態になった気がする。

喧嘩を売った相手が悪かった。会長あたりならまだ笑ってはぐらかせそうだが、咲がそんなに優しいわけがない。素直に謝ったところで許してくれるはずはなかったし、神崎のプライドがそれを認めようとはしていなかった。

わしゃわしゃと髪の毛をかきむしる。

このままじゃ白髪だらけになりそうだ、などと考えていると、閃光のようにアイデアがひらめいた。

だらしなく歪んだ口元から笑みがこぼれる。そうだ、そうすればいいのだ。余計なことに頭を悩ます必要はないのだから。

こうして神崎の推理の準備は整った。

「さて——」

「このたびの事件は、不本意ながら私わたくし

、神崎誠がバレンタインデーに毒を盛られるというものでありました。これは大変遺憾な出来事であり、二度とこのような失態を起こさないように日々精進してまいる所存でございます」

馬鹿丁寧な口調で推理をはじめ神崎。

部室には探偵同好会の全員がそろってはいたが、表情は様々だ。固唾をのんで心配そうに推理をみまもっている副会長とは対照的に、結衣と会長は楽しそうにしている。このふたりはいつも推理中には楽しそうにしているのだが、今日はさらにニヤニヤが大きくなっていた。

「まずは事件の概要から説明してまいりたいと思います。犯行日時は2月14日で間違いはありません。その晩、私は強烈な腹痛に見舞われ、翌日と翌々日の学校を欠席いたしました。これが単なる食中毒であるはずはありません。真冬に、しかも加工された食品が食中毒を起こすでしょうか。そんなはずはないです」

咲はひとり、憤怒のこもった瞳で神崎を睨みつけている。

唇を強くかみしめているせいか、赤い血が滲んでいた。それをぬぐう気配もなく、咲は神崎を凝視する。

「単なる食べ過ぎでもありません。私は去年も同じような状況を経験いたしました。今年はあまり食べていないのにもかかわらず異常な腹痛に襲われたのです。これは意図的に誰かが下剤を混ぜた証拠になります」

部室のなかを歩きまわる神崎。

咲の近くを通りかかるたびに、冷たい視線の交錯が火花を散らした。

「方法は簡単です。チョコレートに下剤を混ぜておけば、私が自然とそれを口にする。味の濃いチョコレートのことから、ちよつとやさつと薬が混ざっていたところで気づくはずもないでしょう」

「質問です」

結衣が手をあげる。

神崎はきざつぽく右手を差し出し、うなぐす。

「どうぞ」

「下剤はチョコレートに限った話ではないと思います。他のお菓子じゃダメなんですか？」

「とてもいい問いだ。私は逆にこう答えよう——チョコレートでなければならなかった、と」

結衣が小首をかしげると、得意げに解説する。

「犯人の心理として、千載一遇のチャンスを逃すようなリスクは冒したくないはずだ。バレンタインデーは年に一度しかなく、次の機会まで一年も待っていることはできない。だが、それ以外で警戒されずに下剤を盛る方法もわからない——つまり、チャンスを確実にものにしなければならなかった」

神崎は徘徊しながらつつける。ローファアの靴音がかつかつと響く。

「白谷くん、君ならどのタイミングでお菓子に下剤を混ぜる？」

「えーと——たぶん、材料がまだ固まっていない時に入れると思います。そうじゃないとうまく混ざりませんから」

「その通り。たとえばチョコレートとクッキーを比べてみよう。チョコレートは材料を溶かしたあと、最後に冷やして固める。けれどもクッキーは」

「焼きますね」

結衣が神崎の言葉を引き継いだ。

こくりとつながずいてから神崎は推理を再開する。

「そう、薬品を加熱するとその形質が変化してしまうのは常識。たとえその心配がないとしても、万が一のことを考えると犯人がリスクの大きい方法をとるとは考えづらい。それにチョコレートと比較して薄味のクッキーでは、味の微妙な違いに感づかれる可能性もある。これらの理由から、犯人がチョコレート以外のお菓子を選ぶことはありえません」

「おおー」

ぱちぱちと会長が拍手を送る。

副会長は顔をしかめて会長を非難するそぶりを見せたが、気に入る様子はない。

機嫌をよくした神崎はさらに饒舌になる。

「下剤は効果が表れるまでにしばらく時間がかかります。そのため犯人にとっては特定される恐れが少ない、ローリスクな犯行ということになるでしょう。捨てられでもしないかぎりチヨコレートは必ず私のもとへ届き、食べられる。時間がたてばたつほど犯行を立証するのは難しくなります」

ですが、とつけ加える。

「私は犯人をある特定のひとりに絞って調査を開始しました。誰とというのは伏せておきましょう」

ちらりと咲を見やる。

咲は苛立たしげに椅子の脚を蹴りつけた。

「はやくしたら？」

「そうさせてもらおう。私は犯人——ある人物のことですが——からもらったチヨコレートの袋に残ったかすを調べました。なんと、そこから薬品が検出されたのです」

「どうやって調べたの？」

間髪いれずに会長が尋ねる。

ぴたり、と神崎の靴音がやんだ。

「なに、リトマス試験紙とプロモチモールブルー溶液を使えば簡単なことですよ。見事に黄色の反応を示しましたからね。これで明らかです」

「……ねえ」

「どうしましたか、会長」

「プロモチモールブルー溶液って、つまるところBTB溶液よね。酸性とかアルカリ性とかを判断するやつ」

「……よくご存知ですね」

「受験生をなめないでちょうだい。このくらいは誰でも知ってるわよ」

にべもなくこたえる会長。神崎の背中に冷たい汗が流れる。

「下剤の成分は酸性であるのはいいとして、たしかチョコレートも酸性の食品じゃなかったかしら」

「やだなあ、あんな苦い物が酸性なわけじゃないじゃないですか。アルカリ性ですよ」

「かりにうちの記憶が間違っていたのだとして、溶液が酸性を示したのなら大量の下剤が混ぜられていたはずよね。チョコレート本体よりも多いくらい大量に」

「……………」

「それって不可能じゃない？ さすがにもうチョコではなく、チョコ味の薬になってるわ」

神崎がそろりそろりとドアに近づいていく。

容赦なく会長は続けた。

「だいたい誠くんがそんな便利なものを持っているわけがないですよ」

「………… 両親が科学者なものでして」

「さしずめ、チョコレートも下剤も酸性だってことを発見したってところね」

「………… チョコはアルカリ性です」

「咲ちゃんが犯人だという証拠はひとつも見つかってないのね。というわけで、難しい単語を使ってはぐらかそうとしたけど失敗した。あんまり現役の受験生を甘く見ないことね」

脱兎のごとく逃走を図る神崎。

だが、ドアにはかぎが掛けられていて開かない。焦って鍵を開けようとするが、うしろからずっと手が伸びて、神崎の肩をつかんだ。全身に悪寒が走る。

いや、それは恐怖であつた。

本能的な恐怖。

振り向くことはできない。
後ろを見れば、喰われる。

「あんたが犯人か」

破裂しそうな怒気をはらんだ咲の声。神崎はおそろおそろ問いかえす。

「犯人？」

「この期に及んでしらばつくれるとはいいい度胸じゃないの。吐け、吐いちまえ！」

「あの——咲先輩？」

尋常でない咲の様相に不安を覚えた結衣が、おずおずと声をかける。

咲は神崎の肩を圧迫したまま動かない。

「どうしたんですか？　すごく怖いんですけど……」

「あたしを犯人呼ばわりしただけなら、素直に謝ってくれば許してやるうかとも思っていたけど、それももうやめた。こいつは人間としてやってはいけないことをやってしまった」

結衣がつばを飲み込む。

言葉を発せば、自分も無事ではすまないと本能的に感じ取っていた。

「で、なにがあったの？」

ヘリウムガスがたつぷり詰められたはちきれんばかりの風船を、会長が針の先でつつき割る。結衣と副会長は反射的に顔をそむけた。血の惨劇が引き起こされるだろうという確信があったからだ。

だが、幸いなことに、壁の色は白いままだった。

咲は肩をつかむ腕に力を込める。神崎が顔をゆがめた。

「あんたから話したらどう？」

「な、なにを……」

「チッ」

思い切り舌打ちをする咲。副会長は恐怖に身をすくませた。

このままでは神崎の身が持たないかもしれない。とりあえず咲を神崎から離すことが先決だ。

そう思ったのだが、逃げ隠れてしまったかのように言葉が出て来

ない。戦慄ばかりが募った。

「あたしの――」

咲がゆっくりと言葉を紡ぐ。それはまるで呪詛のような低い声だった。

「読んでいる本に、メモがはさんでありました。犯人の名前と、トリックの書かれたメモが。あの時ほど自分の読むスピードを呪ったことはありませんでした。目を閉じる間もなく一瞬で内容を理解できてしまった自分が憎らしかったです」

「誠くん……あなたって人は」

「お、おれじゃないです！ ホントにやってないんですってば！」
涙ながらに訴える神崎を、会長は冷たく見下ろす。そして、あきらめたというふうに着をすくめた。

神崎を壁におしつけるにぶい音がした。

咲は耳元で、死刑宣言のようにささやく。

「認めたら？ 認めたところで許すわけじゃないけど」

「証拠はあるのかよ！ なにもなければおれの犯行だって証明することはできないはずだ！」

「犯人はみんなきまってそうわめくの。とっても見苦しいことに」
「会長！」

神崎が最後の望みをかけて、腕を組みながら状況を静観している会長を仰ぎ見る。すこし考えこんだあと、会長は静かに判決を告げる。

「たしかに誠くんが犯人である可能性は限りなく高いわ。でも、証拠がなければ無罪。疑わしきは罰せずよ」

咲はしばらく黙って神崎を押さえつけていたが、しゅしゅといった様子で解放した。左肩をおさえながら神崎は床に膝から崩れ落ちる。唇が青くなっていた。

きれいに使われている学校指定の鞆から、咲は一冊の文庫本をとりだした。

神崎が壮大なタワーを披露したバレンタインデーに読んでいた、

長編シリーズものの第三冊目である。かすれた表紙には寂しげに浮かぶ孤孤島が描かれていて、どこかの古本屋で発掘してきたのだらうと推測がついた。

咲はこうして時々、いつの時代に書かれたものとも知れない本を読んでいることがある。

「これです。ご丁寧なことに、あたしが栞をはさんでいた場所にメモはありました。読書を再開しようとするれば、必ず目に入るように」「つまり意図的な犯行だったってわけね」

会長が頷きながらあいづちを打つ。

「それにしても短編ならともかく、長編のネタばれとはかなりえぐいことをしたものね。犯人はなにを考えていたのかしら」

「復讐に決まってるでしょう、そんなもの」

吐き捨てる咲。会長は苦笑いした。

「咲ちゃんを敵に回すだけの動機があるのかしら。こうなったら外国にでも逃げないかぎり、命は保証できないわよ」

「海外どこるか——」咲は神崎を睨みつけながらいう。「地獄の果てまで追いかけていきますよ」

「誠くんは咲ちゃんが犯人だといい、咲ちゃんは誠くんが犯人だという。なんか面白くなって来たわね——」

会長がニヤリと笑う。

心労をたっぷりのせたため息が、副会長からこぼれた。

第3の事件

寒い。

学校の中とはいえど、暖房のある教室から出てしまえば息が凍りつくほど寒い。白くなった吐息をながめながら、結衣は重い足取りで探偵同好会の部室に向かっていった。

本校舎の廊下からながめる教室のいくつかは、大きな運動部や吹奏楽部の部室になっていて、たくさんのスポーツバッグや管楽器のつややかな色が見える。

校舎を揺さぶるようなバスクリネットの音。

パート練習をしているらしく、ばらばらのリズムと音程がまざっている。

のばされた長い音符。ラ、の音だ、と結衣は思う。

あまりこの音階は好きじゃない。曲を奏でることなく、絶対の指標として使われるラ、の音は孤独で、苦い思い出がつまっているから。さながら砂糖を入れ忘れたチョコレートのように。

「あーあ」

嫌なことを思い出した。

人の記憶も、CDのようにきれいさっぱり上書きできればいいのに。

いまの楽しい探偵同好会の時間を、苦々しい歴史に重ねて、いつまでも忘れないでいたい。

そうはいっても過去を消してしまうことが無理なのはわかっているし、いまさらどうあがいたところで変えられるものではない。

「わたしは名探偵なんだから」

そう、ハッピーエンドに事件を解決するのが名探偵の仕事。

つまらない記憶にしばらくいられているようじゃ、みんなを幸せにすることなんてできない。

決められた戒律と音符に従って、指揮者のタクトの踊るままに旋

律を紡いでいくのが合唱なら、犯人の残していった足跡を、ひとつひとつ、あるいは三つ飛びくらいでたどっていくのが探偵だ。

合唱部にわたしは求められていなかった。

いつも歌っていると貧血を起こしてしまうわたしは、ただの足手まといでしかなかったから。コンサートになんて出してはもらえなかったし練習でもたびたび保健室で運び込まれていくのを億劫がつていた仲間がいるのも知っている。

部長にもそういわれた。

やめたら？ 邪魔なだけだ。

だから高校になつたら合唱部にだけは入らないと心に誓っていた。今度こそは自分の居場所を見つけられるように。

そんなときに現れたのが会長だった。

足手まといでしかなかったわたしを、あろうことか探偵同好会に勧誘してくれた会長。

自分に探偵の素質があるだなんて考えてもいなかった。思い返してみれば中学でも同じようなことは、ほんの些細ながらやっていたのだけれど。誰もそれを評価してはくれなかったし、褒めてもくれなかったから、価値のあることだとは思っていなかった。

探偵同好会。

五人がそれぞれに勝手なリズムと曲を奏でるから楽しいんだ。

なにも合唱を全部否定するわけじゃない。それはわたしの肌に合っていないかったというだけのことだから。でも、いまはとても居心地がいい。

あれから一週間が経ったいまも神崎先輩と咲先輩は部活に顔を出していないけど、きっとそのうち解決するだろう。

なんてつたつて探偵同好会なんだから。

名探偵に解けない事件はない。

本校舎をぬけ、旧校舎とをつなぐ渡り廊下に差しかかる。廊下の反対側から見慣れた友達がやって来たので、手を振って声をかける。「ひとみー！」

「ん、やつほ」

怪盗同好会のルーキー、黒崎瞳。

「部活？」

「うん、これから。瞳は？」

「先輩たちが手品をするからおひねりを持って来いってうるさくてさ、仕方ないから安いお菓子でもあげようかと思って。十円ガムかなにかを投げれば静かになるだろうし」

「瞳、ケチだね」

「部長まで調子にのっておひねりを要求するんだから、あんな人たちに情をかけてやる必要はないの。ほんとにみんな子供なんだからそれじゃね、といって本校舎に入っていく瞳の背中に声をかける。」「そろそろ怪盗同好会の部室の場所を教えてよー」

「そのうちねー」

またはぐらかされた。

いつも旧校舎の階段を上るときには怪盗同好会のアジトがないものかと注意しているのだが、なかなか見つけることができない。時々瞳とはすれ違うのに。ひょっとしたら地下にでも隠れているんじゃないかと最近思う。

探偵同好会の部室がある三階まで行くと、大抵息があがっている。こればかりは一年間かけても改善されることはなさそうだった。

なにかの備品がおかれた、雑然とした通路のいちばん奥に探偵同好会の部室はある。結衣がノブをひねると、鍵がかかっているのか開かない。

「みんなまだ来てないのかな……？」

時間にルーズな同好会ではあるけれども、今日は別段早く来たといいわけではないから、いつも誰かが部室の鍵をあけているはずだった。

結衣は本校舎の教員室にもどってから、再び部室のドアの前に立つ。

そこで、違和感に気づいた。

「看板どこいったんだろ？」

そこが探偵同好会の部室であることを示すプレートが、取り外されたのか見当たらなかった。結衣が首をひねりながらなかに入ると、もうそこには勘違いではすまない異変が起こっていた。

「部室が——ない？」

そこには、なにも残っていないかった。

抜け殻のような部屋だった。

第3の事件（後書き）

これにて2月編は終了になります。
引き続き3月編をお楽しみください。

頬づえをつきながらシャープペンシルのせわしなく走るかすかな音を聞く。さほど広くない教室の黒板には、なにも書かれていない。退屈そうな先生がひとり、眠たげな目で教卓の横に座っている。

テストのときにだけ座る窓際の席。

ペンを持つ手は、暇を持て余してくると直線的なフォルムのシャープペンを回している。

空白のない答案用紙。

心のすみに生まれたまま去ろうとしない、どんよりした恐怖から目をそむけられたのも、白いページを埋めるわずかな間だけだった。何度読みなおしても変わることはない命令調の問題文。書き直しを重ねて美しくなった自分の名前。

せめて白谷結衣、という漢字がもうすこし面倒な、時間のかかる名前だったらよかったのに。

そうすればペンを動かしている間だけでも自分自身から逃げられる。このうつ屈とした、春の空に似つかない不安から逃れるにはどうしたらいいのだろう。

黄ばんだ壁にかけられた時計を見る。

息をひそめひっそりと秒針を進めていく作業がもどかしい。足りない時間はたくさんあるのに、本当に必要なときはいつだって足りない。

つまらない文字に染められた歴史のテスト。

紙飛行機にして、開け放たれた窓から春の空に放ってやることできたらどんなに楽しいだろう。それができないなら、あのと時のようにビリビリに破いて、桜吹雪に乘せて見失うことができればどんなに清々することだろう。

ふと、閉め切った窓ガラスに手を添えてみたくなった。

ほんのりと冷たい感触。まだ冬の寒さが残ってる。

1年A組の教室から見下ろせるグラウンドのまわりに裸の桜並木がある。つばみをまとっただけの桜は寒々しげに太陽を見上げているようだった。結衣が息を吐くと、冷たい窓ガラスが白く彩られる。後ろから聞こえていたペンの音がやんだ。

住田くんだ、と思う。勉強が苦手だった住田くん。先生あての脅迫状を送りつけようとして、間違つて瞳の鞆に手紙を入れてしまった事件を、どのくらいの人が覚えているだろう。

あれから住田くんは懸命に図書室に通つて勉強を教えてもらったらしい。そこでちゃっかり勉強を教えてくれていた女の子と恋仲になつて、いまはなかよく登下校するふたりの姿をよく見かける。

そのニュースは住田くん本人から聞かされた。

はにかみながら付き合うことになつたんだと報告してくれた住田くん。結衣は素直にそれを祝福した。ちよつとからかったりもしたが、誰かが幸せになつた光景に出合えるのは妬ましいことじゃない。

ペンを回す。

あまり上手にはできないから一回転させるくらいしか出来ないけど。機械的な動きを見てるとなにかを忘れられそうな気がする。自分まで心が空っぽの機械になつたように錯覚できるからかもしれない。

カタリ、とペンが机の上に落下した。

それを拾い上げる気にもなれず、澄みきつた空をながめる。

雲ひとつない晴れ空だというのにどこか冷たい雰囲気をもっている。まだ寒い。

時計に視線をやる。

さつきからまだ数分しか経過してない。いつまでも二の足を踏んでばかりの時計は、未来を示してくれはしない。

「先輩……」

どうして誰も気がつかないんだろう。探偵同好会がなくなってしまったことに。わたしの居場所が消えてしまったことに。

成績なんてどうでもいいやと臨んだ最後の期末テストのわりに点数は悪くなかった。結局、悩んでいるふりをしてるだけなのかもしれないなんて思う。

悩んでるんじゃない。

怖いんだ。

内側から自分の体が透きとおっていくような感覚。

勢いをつけすぎたブランコが地面に向かって落ちていくような感覚が全身をおおう。

放課後を告げるチャイムが鳴って。

みんな部活に行くか、どこかに遊びに行こうかなんて相談をしながら教室から消えていく。

部室があんなことになってから、部室にはおるか旧校舎にも近づかないようにしている。受験が終わった3年生たちは学校にきていないので、きっと誰も立ち寄ってはいないんだろう。

神崎も咲も事件を解決したような気配はないし、仲直りをするようなこともないだろう。

ひよっとしたらずっとこのままなのかもしれない。

探偵同好会さえあれば、どんな事件でも解決できると思っていたけどその探偵同好会がなくなってしまったのではどうしようもない賑やかなのにどこか遠い廊下を、昇降口に向かって進む。

部活に出る勇氣は出ない。

現実を事実として受け入れてしまいそうで怖かったから。

「あ……」

肩幅の広い背中を見つけて、結衣は小さな声を漏らした。神崎が鞆を揺らしながら歩いている。けれどもその方向は部室ではなく、校門のほうだった。

追いかけようかと一瞬迷う。

「神崎先輩！」

「ん、よお」

にこやかな神崎の表情からは、まるで何事もなかったかのような安心感が感じられる。でも、それは同時になにも気が付いていないことにもなるんだろう。

「悪いね、最近顔出さなくて。会長たち怒ってた？」

「いえ——あの、それが」

「いいづらいなら言わなくてもいいよ。どっちにしろ事件を解決するまでは戻れないだろうし。児玉が犯人だという証拠を見つけるのではないにしろ、真犯人の目星でもつかないかぎりはね。犯人でっち上げちゃったからさ、どうにかして汚名返上しないと」

気恥かしそうに頭のうしろをかく。

部室がどうなっているかなんて知らないようだ。

「一度も来てないんですよね、あれから」

「うん……って、白谷さんも行っていないの？」

怪訝そうに首をひねる神崎。結衣は小さくうなずいた。

「誰も、来てないと思います」

「そっか。会長たちもいないし、児玉も来ないんじゃないかな。仕方ないな。

ひとりきりじゃ何もできないし」

「そういうことじゃないんです」

強い口調で否定する。神崎は驚いたように目を見開いた。

「部室が、探偵同好会が消えてしまったんです。無くなっちゃったんです」

「消えた？」

「2月の終わりごろにわたしが部室に行ったら、看板がなくなっていて、それで、鍵も閉まって——まだ会長たち来てないのかなって思っただけをとりに行って、開けたらなんにも無くなっちゃって」

「なんにも？ 家具が消えたってこと？」

「たぶん……あんまり覚えてないんですけど、すごく寂しくなっちゃって、なんだか思い出が全部消えちゃったみたいで」

不意に、ぼろぼろと涙がこぼれ出てきて。

泣いていることに気づいたらさらに悲しくなつて、神崎があわて差し出したハンカチをもらってもあふれ出る涙をふく気になれなかった。

濡いた地面を大粒のしずくが濡らす。

「大丈夫？」

「……はい……すみません」

「まいったなあ」

神崎はくしゃくしゃと髪をかきむしる。どこか苦しげな表情だ。結衣はとまらない涙をなんとかこらえながら、嗚咽まじりにたずねる。

「なにが……どうなってるん……でしょうか」

「ひよつとしたら、会長たちが怒って荷物をひきあげちゃったのかもしれないなあ。おれと児玉がいつまでも喧嘩してるもんだから愛想を尽かされちゃったのかも。そんなに心の狭い人たちじゃないだろうけど、ありえなくはない話だよなあ」

独り言のようにまくしたてる。

そして、明るい調子で両手を打ち合わせた。

「決めた！ おれ絶対に事件を解決する。なるべく早く解決して、会長たちに許してもらおう」

「部室の荷物つて……会長たちのなんですか？」

「わからない。おれが入部したときにはもうあんな状態だったから。児玉なら知ってるかもしれないけど」

「そう……ですか」

「知らせてくれてありがとう。おれ頑張るから、白谷さんも泣かないで頑張ろう、な」

「はい」

神崎はぼんぼんと結衣の肩を叩いてから、足早に校舎のなかへ戻っていった。

推理の方向性なんて定まっていないうけど、いてもたってもいられないというような剣幕だった。

結衣はもらったハンカチで濡れた目じりをぬぐうと、空を見上げて歩きだした。

よく晴れた空だった。

結衣の決意

ページをめくる。

物語はまだはじまったばかりで、主人公の少年が日常生活に退屈さを感じているというシーンの途中だ。何ページにもわたってつづられた夏の描写。主人公の友人は詩人らしい。

結衣はベッドにあおむけに転がりながら、その小説を読んでいた。ひと月ほど前に本屋で見かけてタイトルが気に入ったのでろくに内容も確かめずに買ってみた本なのだが、いくら上手く描かれた文章を追っていても風景を結ぶことができない。

主人公たちの会話も、文字の上をなぞるばかりで頭に入って来ようとしていない。

かわりに脳裏の大部分を占めているのは神崎が事件を解決できるだろうかとか、探偵同好会は無事に復活するんだろうかという不安定な心配ばかり。

「ごめんね、と小説のキャラクターたちに謝る。

きみたちはわたしのなかじゃ生きられない、すくなくとも、今は全部がうまく収まったら改めてきみたちの世界をのぞかせてもらうから、それまでは本棚の片隅に仕舞っておこう。そう思って、とあえず閉じた小説を枕もとにおいた。

起き上がればすぐ届きそうな位置にある本棚まで動くのが億劫だった。まわりにあるのは携帯電話と、数ページで幕を下ろした文庫本の小説。蝉の鳴く並木道を歩く二人組の高校生の描かれた表紙は、この寒い季節には不似合いだ。

「なつ、か。懐かしいな」

意にかけず韻を踏んでしまった自分に苦笑しながら、結衣は去年の夏に起こった出来事をぼんやりとイメージした。天の川に彩られた七夕と、身の毛のよだつ怪談。あの時は会長と副会長がいいところまでいったんだっけ。

楽しかったな。

唐突にまた涙腺が緩みかけているのを感じた。せめて涙は流すまいと、自分の体温でぬるくなった枕に顔をうずめる。

しばらくそうやって真つ暗な世界に身をゆだねているとだんだん心も落ち着いて来て、結衣は枕から顔をあげた。まぶしい高校生たちの絵が目映る。

彼らがどんな非情を運命をたどるにしろ、ハッピーエンドを迎えるにしろ、結末はすでに決められている。生まれたときから確定した運命。だから、いちど知ってしまった彼らの未来は変えられない。読みかけの本のオチを、とくに推理小説において犯人やトリックを明かされてしまうのは、その本の魅力を半分以上失ってしまったのと同じくらいの意味を持つ。

マジックのタネを知りながら、目の前で繰り広げられる奇術を観賞するようなものなのだ。色あせたミステリーの世界は、自分で到達した真実だからこそ上塗りされる。

「咲先輩、怖かったな」

あれだけの気迫があれば証拠くらい簡単に見つけてしまえそうなものだけだ。

会長が咲と神崎の仲裁に入らなければ、あのまま神崎はアリのように押しつぶされるか、ねじあげられたシャツの襟で窒息死していたことだろう。推理するまでもない殺人事件。

探偵としての器量は、正直いって神崎よりもずっと上だろう。すくなくともいまの時点では経験的に咲のほうがずっと有利だ。

その咲が苦戦しているのなら、本当にお手上げな事件なのかもしれない。

事件というのは魑魅魍魎で不可思議な事件よりも、茫然としてしまつくらい単純なほうが難しい。ある朝、道ばたで人が倒れていたなんて事件ほど、名探偵の出番が少ないものもないだろう。

咲の本にメモをはさんだのは神崎ではないだろう、と結衣は思う。いくら神崎でも阿修羅のような咲を呼び出したくはあるまい。そ

れに犯人からすれば、単純な犯行ほど身元が特定されやすいのではないかと不安になるものだ。だからこそ幾重にもトリックを張り巡らせて我が身を隠そうとする。

だから犯人がいるとすれば、よほど肝がすわっているか、特定されない自信があるのか――それか、犯人だとばれたとしても不都合を被らない人間。神崎は、そのどれにも当てはまらない。

裏表紙はどうなっているのだろうかと思い立って本を裏返して見る。

そっけないカバーの表面には無機質なバーコードと、簡単なあらすじが記してある。どうやら彼らはこれから過酷な世界を生きなくてはならないらしかった。

「……………」

ふと、頭のなかを一筋の線が横切ったような感覚がして、結衣は思考を集中させる。

切れないように、逃げられないように、慎重に、でも、確実に。見たばかりの夢を思い出すような作業のすえ結衣は携帯電話を手にとった。アドレス帳から咲の名前を選ぶ。

短い文章を打ち終えて、送信。返事は数分後に届いた。

『読んでない』

絵文字もなにもないそっけない返信ではあったけれど、結衣にはそれで十分だった。たった一言のメールからも咲の不機嫌そうな表情が浮かんでくるような気がして、なんだか面白い。

『じゃあ、はさまれていたメモをください』

『破いて棄てた。どこにあるかはわからない』

『頑張つて探してみてください。大事な証拠ですから』
それ以上の返信はなかった。

でも、ちゃんと想いは伝わったことだろうと思う。結衣はすこしだけ目をつぶって、携帯電話を胸に押し当てた。壊れた歯車が動きはじめた、気がした。

「それでね、あたしが百円玉を消しちゃったら詐欺だ、強盗だって騒いでうるさかったんだから――」

昼下がりのお弁当の時間。

結衣と瞳は机を向かい合わせながら話していた。すでにお弁当の中身は空になってしまったので、次の授業がはじまるまではこうやって談笑するのが恒例になっている。

「その百円はもらっちゃったんでしょ？」

「そんなことしたら退部させられちゃうよ。仕方ないから返したけどさ、ちよつとは太っ腹なところを見せてくれてもいいと思わない？ こっちは毎日マジックの練習してるっていうのにさ」

授業中だというのに、瞳はよくコインを使ってパームの練習をしている。パームというのはコインマジックの基礎技術のひとつで、手のひらや裏に、不自然でないようにコインを隠し持つようにするテクニックのことだと瞳に教わった。

目の前でくるくる消えたり現れたり、増えたり減ったりする摩訶不思議なコインを見ているのはすごく愉快だ。ためしに真似を試みたのだけれど、ちつともうまくいかないから、すぐにあきらめた。「ちよつと練習すればすぐできるようになるよ、このくらい」

「わたしには無理だよ。不器用だもん」

「ま、結衣には他にすごい才能があるからいいんだけど」

瞳が外国製のコインを指ではじきながらいう。

澄んだ金属音が耳に心地よかった。

「でさ、昨日は先輩たちもかくし芸を披露してたわけなんだけど、部長ったらこともあるうちに先生の変装してくるもんだから驚いちゃって。『君たちの部長が不祥事を起こしたから、怪盗同好会は取りつぶしだ』なんていうんだよ。それも、その不祥事っていうのが校長のかつらを盗んだからっていうから笑っちゃって」

「いいなー、楽しそうだなー」

瞳には探偵同好会の部室がなくなってしまったことは話していな

い。

もしその事実を伝えていたら、こんな風に楽しく会話することもできなかっただろう。変に気を使わせてしまうより、ふつうに接してもらった方が楽でいい。

「いっつもそんな風にパーティーみたいなことしてるの？」

「今回は先輩たちのお別れパーティーだから、特別だよ。もうあんまり時間もなかったし、ギリギリになっちゃったけどね」

「時間がない？」

結衣が問いかえず。

「知らないの？ 三年生はもう授業を受けなくていいから、学校に来るのはあと数日なんだよ。卒業式と、あとは今日くらいなものかな。その卒業式も三日後だしね」

「それって……すごく切羽詰まってる？」

「そうだね」

まずい。

時間がない。

会長たちが霞ヶ丘高校からいなくなってしまうまで、残された猶予はほとんどない。それまでに事件を解決して、すべてをハッピーエンドに導くことなんてできるんだろうか。

いや、やらなくちゃいけないんだ。

「わたしが。頑張らなきゃ」

「なにを？」

瞳が怪訝そうに聞く。

結衣は両手のこぶしを固めて、いった。

「わたしが名探偵であることを」

探求

神崎からメールが来たのは、タイムリミットを知ったその晩のことだった。寒い夜。青色のカバーのベッドに寝転がっていると、結衣の携帯がメールを受信したことを告げた。

『明日、部室に一緒に来てほしい』

メールには、そう書かれていた。

動悸が激しくなっていくのを感じる。

白紙とわかつているテストを返却されるみたいな心持ち。だって、居眠りしてしまったんだもの。それなのに、残酷なくらいに現実はおしつけられる。

深呼吸。

目眩がするくらいに心臓は痛く打ちつけていた。ゆっくりとボタンを押す。

『わかりました』

送信中、のメッセージは見つめっているとすぐに消えてしまった。かわりに表示される送信完了の宣告。これで逃げることはできなくなった。

神崎がわざわざ部室に行こうと提案するくらいだから、きっとなにか手掛かりがあると踏んでのことだろう。それにいつかは通らなければいけない道でもあるわけだし。

咲先輩と神崎先輩がそれぞれに事件をかかえているんだから、残った部室消失の謎はわたしが解かなきゃいけないんだ。

血管を駆け巡るざわつきはいくら目をつぶっても消えなかったけど、朝は律儀にやって来た。

鍵を差し込む。

カチャリ、という乾いた音がした。

「準備はいい？」

ドアノブに手をかけながら神崎が尋ねる。

「はい」

結衣がうなずくと、殺風景な部室が顔をのぞかせた。

最初に見たときは違和感が強すぎてどこかどうおかしいのか判断がつかないままに目をそむけてしまったが、改めて部室を確認してみると、異常な点が鮮明に感じられた。

無駄なものがなさすぎるのだ。

普段の部室には会長の持ちこんだクリスマスツリーだったり、七夕に使う笹だったり、そのほかにも雑誌やホームズのコスプレ衣装が所狭しと並べられていた。

湯のみ。本。空き缶。UFOの小型模型。得体のしれないなにか。そういったものが姿を消しているのだ。渋谷のスクランブル交差点から、いきなり人ごみが消えてしまったように奇妙な光景。

「——ちよつと、気味が悪いね」

神崎がぼそりと感想を漏らす。

本当ならこんな風に小奇麗な部室であるべきなのだろうけど、模様替えも、大掃除もされることのない部室が姿をかえてしまうのは抵抗を覚える。

それはたぶん、会長たちとの思い出まで否定されたような気がするから。

「でも、タワーは健在みたいですね。よかったです」

結衣が指し示す先には、神崎がもらったチョコレートやクッキーで積み上げられたお菓子の塔が悠然と立っている。中途半端に崩れかかった楼閣は、そこだけ忘れ去られたように雑然とそびえていた。神崎は頂点から下まで、網膜に焼きつけるように眺めまわす。

その間に結衣は、消えてしまった小道具がどこへ行ったのか調べていた。

床一面を覆い尽くすとはではないかないものの、あちらこちらに居座っていたみんなの私物がなくなってしまったというのが、この事

件の特徴だった。それを解き明かすことで、真相に近づけるはずだ。
「ホームズの衣装、どこ行ったのかな……？」

文化祭で作ったお気に入りの衣装は、いつもハンガーにぶら下げられて窓際におかれていた。

いまは余計なものを一切合財、排除してしてあるため、こげ茶色のインバネスコートさえも見当たらない。書類のしまつてある棚をのぞくと、見かけたことのある推理小説がタイトル順に並べられていた。

アクロイド殺人事件からはじまつて、少年探偵団、そして誰もいなくなつた、緋色の研究といったポピュラーな名作が、図書室の本棚のように整然とそろっている。

どれも探偵同好会の備品として、結衣が入部したときから部室のあちこちに点在していたものだ。古くからあるせい、ほとんどの背表紙は黄ばんでいる。

神崎はこの類の本をしきりに借りていつては、数週間後に返却していた。

「こんなにたくさんあつたんだ……」

まとまつて整列しているのをいままで見たことがなかったから、これほど多くの小説が小さな部室に隠れていたとは知らなかった。これでひとつわかったことがある。

部室のものは消失したのではなく、綺麗に整頓されているのだ。結衣は手当たり次第にクローゼットや引き出しを開いていく。ホームズの衣装は折り目よく畳まれた状態で、結衣の分だけがしまわれていた。

神崎や咲は自宅に持つて帰っていたのだろう。

空き巣が家財をあさるようにあたりを調べていると、うしろから神崎の声がかかった。結衣がふりむくと、険しい眼つきでお菓子の塔を注視している。

「どうしたんですか」

「タバコの箱、持つてない？」

「持ってませんってば——もしかして、高さはかりたいんですか」
会長のいつていたことを思い出す。

タバコの箱は、写真をとるときに使うもの。

「心なしか小さくなっているような気がするんだけど」

自分の身長と比べながら神崎がいう。

「先輩がいらないあいだに会長がつまみ食いしてましたから、すこしは減ってるかもしれないですね。とくに手作りのものはもったいないっていつて副会長にも食べさせてましたし——わたしは申し訳なかったからもらいませんでしたけど」

あわててつけ加える。

神崎はタワーをしげしげと眺めた。

「自分はケチなくせに、おれのは遠慮なしに食べるんだから」
「わたしは共犯じゃないですよ」

「ふたりがかりでこんくらいしか減らないのか——綾小路のやつ、すごいな」

しみじみと呟く。

神崎はタワーから板チョコを引き抜いて、少し考えてから塔に戻した。と思ったら、また思い直したように袋をあけた。

「食べる？」

「遠慮しておきます」

「製品なら賞味期限も平気だよ」

「じゃあ、ちよつとだけ」

半欠片のミルクチョコレートは、室内の気温と同様によく冷えていた。とろけるような甘い感触が口の中いっぱいに広がっていく。

「美味しいですね」

「会長もそういつてた？」

「はい。すぐくうれしそうな表情でがつついてました」

そっか、といつて神崎は結衣を見る。

ちようと見下ろすようなかたちになるが、結衣の表情はわからない。セミロングの黒髪が横顔をおおっていた。

「おれは調べることはもうないんだけど、白谷さんは平気」

「大丈夫です。探偵同好会がなくなっただけじゃありませんでしたし、わたしのホームズも無事でしたから。ちょっと寂しくなっちゃいましたけど。掃除したんだって思えばいいんです」

「かなり散らかってたからな——おれのはいったときから変わらず小汚い部屋だったし、こうして綺麗になっちゃうと変な感じだけさ」

「咲先輩とか、片付けたくならないんでしょうか」

名前を出してから、あ、と気付く。

バツの悪そうな顔で神崎をうかがうと、意外なことに明るい表情をしていた。

「散らかってるのがデフォみたいなもんだったからさ、片付けようとかいう気にもならなかったんだよ、たぶん。空が青くて、雲が白いのをいちいち疑うようなことはしないからな」

「いい表現ですね」

「受け売りなんだけどね。名探偵は当たり前を疑ってかからなければならぬ。そこにこそ犯人の痕跡が身を潜めているって、その本には書いてあった」

「あのなかの本ですか？」

結衣が推理小説のはいつた棚を指さす。

神崎は首を横に振ってこたえた。

「兎玉に借りたやつだよ。まだ返してないんだけどさ」

「じゃあ、早く返してあげなきゃいけませんね。でも、お礼を忘れちゃ駄目ですよ。女の子はそういうところ細かいですから」

「これでいいかな」と、神崎はタワーからお菓子を引き抜く。「はやいとこ減らさなきゃいけないし」

「絶対いけません」

断言する結衣。神崎は困ったような顔をした。

「じゃあ何がいいんだよ。花とか？」

「そんな気障な物はいりません。お礼のメモでもはさんでおいてく

ださい」

「メモねえ……」

浮かない表情の神崎がなにを考えてるのか、結衣にはなんとなくわかるような気がした。

「怖いんですか？」

「死を目前にしてみる。誰だつてためらう」

神崎は身震いしてから、結衣をともなつて部室の外に出る。

そして、ドアを閉じると、鍵を差し込み、まわした。

カチャリ、という聞きなれた音がした。

咲と神崎

『放課後、部室の前で』

短い文面が届いたのは冬の夕暮れが終わりをつげ、カーテンの向こうがうす暗くなって来た頃だった。

携帯電話の画面にうつしだされた神崎からのメールは、それ以上語りかけることもなく。無造作に放置されて冷たくなった携帯を閉じると咲は読みかけの本へ目を戻した。

全十巻からなる超大作のミステリーはふつうに読んでいけば一か月ほどかかる分量だ。

いま持っているのは第八巻。結末の記されたメモがはさまれていた事件があつてからまったく手を触れていなかったため、だいぶ期間が空いてしまっていた。

目が痛い。

徹夜で読み進めてもちつともページが減っていかない。クライマックスにさしかかれば多少はペースが速くなるかとも思っていたのだが、いつまでたつても進展しないストーリーのせいで、だんだん読むのが苦痛に感じてきた。

授業も合間をぬって本を読む。

もっと効率のいい方法もあるのだろうけど、途中であきらめたり飛ばしたりするのは絶対に嫌だ。それだけはゆずることのできない部分だし、人間としてのプライドにもかかわってくると思う。

「……あー、もう!」

栞をはさんでページを閉じる。

神崎の小憎らしい顔がちらついて離れないのだ。こんな状態じやとても読書に集中することなんて出来ない。すこしだけ眠ろうかとも考える。

安穩と身体をあずけて、枕に身を任せてしまふという提案がひどく魅力的に思える。そうしてしまえるならどんなに楽だろう。

「でも、駄目」

自分に言い聞かせるようにつぶやく。

咲はベッドから身を起こし、洗面所に向かうと冷水で顔を洗った。水をすくう手が痛い。それでも我慢して冷やし続けるといくらか目が覚めた。気合いを入れるために頬を二度たたく。

寝不足のせいかニキビができていた。

触れてから気づいたデキモノを鏡で確認する。マスクをすればごまかせるだろうか。

——いや、いまはそんなことを心配している場合じゃない。

時間がないのだ。自分との戦い。それがこんなにも厳しいものだとは知らなかった。探偵は他人と戦うとは限らない、時として己を越えなければいけないこともある。

「頑張れ、あたし」

誰かのために、自分のために。

旧校舎というだけあって設備の古い建物には隙間でもあるのか、廊下が妙に冷え込んでいる。つま先の感覚がなくなりそんな空間で神崎は待っていた。

看板のなくなった探偵同好会の部室。

鍵は閉まったままで、なかをうかがうことはできない。

「寒いな……」

両手で包みこむように体を抱く。

すこししてから咲がやってくると、神崎の向かい側の壁にもたれかかった。

「……………」

静かな沈黙が流れる。

空気は重たかったが、けっして気まずいものではなかった。時計の秒針が何回かまわった後、咲がおもむろに口を開いた。

「ごめん」

意外な言葉におどろくが、神崎はそれを表情には出さない。

咲は一言そういっただけでまた黙ってしまった。神崎はうつむいていた視線をあげ、咲の瞳をしっかりと見据えていった。

「こつちこそ、ごめん。おれが余計なことをいったせいでこんな風になっちゃって。それに探偵としてやってはいけないこともしちゃうたし」

「あたしがプレッシャーかけたからでしょ、あんな嘘ついたのは。見栄張って推理するのはいけないことだけど、あたしも頭に血が上って神崎を犯人扱いしちゃったからお相子」

「おれが先に喧嘩売ったんだ。おれに謝らせてくれよ」

「謝るだけなら好きなだけやればいい。あたしは構わないから。でも、こつちも謝らなきゃいけない」

「素直じゃないな」

「そつちが素直すぎて気持ち悪いんですよ。あたしはいつも通りだから」

にべもなく咲がいつてのける。神崎は苦笑しながら部室のドアをたたいた。

「そういえば、ここのこと聞いた？」

「部室がどうかしたの」

「整理されてたんだよ。きれいさっぱり。空き巣が入ったんじゃないかって疑うくらいに変貌しちゃってさ、白谷さんも困ってたよ——泣かれちゃったし」

「最低ね」

「おれのせいじゃない。探偵同好会が消えてしまったと勘違いしたんだってさ。あながち間違ってるけど」

「あの散らかり具合だったからこそ探偵同好会らしかったんだよ。会長たちがいつも変なものばかり持ちこんでくるから、どれを片付けていいやらわからなかったし」

「やっぱ、あれは会長たちのガラクタだったんだ」

「副会長みたいだね。でも、捨てられない」

「なくなっちゃったよ、全部」

「取り戻せばいい。あたしたちは探偵同好会なんだから、泥棒に取られたものは奪還しなきゃ」

「――そうだな」

神崎が笑い声を立てる。

卒業式が近いということもあって、旧校舎に部室をおいているほとんどの同好会は活動をしていない。神崎たちの声は空洞の廊下によく響いた。

「あんたもちよつとは探偵らしくなった。前は体力馬鹿だと思ってたけど、いまは根性と体力馬鹿だって認識を改めてる」

「それってあまり変わらないんじゃないか」

「ま、名探偵っていうよりはトンマな相棒役か、足で情報を稼ぐベテラン刑事ってとこかな。どっちも好きじゃないけど」

「ひどい言い様だな、まったく」

「だからあたしのサポート役にぴったりの。来年こそは結衣ちゃんに負けないようにしなくちゃ。あの子の才能は本物だから、うかうかしていると追いつけなくなるよ」

「追いこすさ、いつか」

胸を張ってこたえる。

咲はくすりと笑ってから神崎に背を向けた。

「もう要件はすんだでしょ。あたしは帰る」

「……そっぴや、今日はあんまり元気そうな顔色じゃなかったな。

徹夜で推理でもしてたのか？」

「ある意味ね」咲は振り向きざまに付け加えた。「むしろ犯罪者としての才能を感じた」

「そうかもな」

「帰ったら寝るから。メールとかしてこないでね。結衣ちゃんからだったら許すけど、あんたからだったら容赦なく追放するから」

「部員が足りなくなるぞ」

「減ったら増やせばいいの。来年も同じことですよ」

「そう簡単にはいかないさ。下手すれば、本当に探偵同好会が消えてなくなっちまう」

神崎は動かない。

咲はほんの数秒ほど神崎を見つけていたが、やがて廊下の奥へと姿を消していった。神崎はしばらくその場にとどまっていたが、名残惜しそうに探偵同好会の部室を見やっってから歩きはじめた。

体中が、ほんのりとあたたかかった。

卒業

霞ヶ丘高校の卒業式は盛大に執り行われた。

校庭を囲むようにして植えられた桜の木は残念ながらまだ花をひらかせてはいなかったが、淡いピンク色のつぼみが枝先に丸まっていた。

堅苦しくネクタイを絞めた卒業生たちは、体育館で開かれた卒業式とお別れの会を終えると、いくらか自由な時間を得る。

それは卒業アルバムの余白のページに寄せ書きをしたり、記念写真をとったり、後輩たちと最後のお別れをするためにつくられた余暇で、短い時間を終えると学校公認の二次会へと移っていく。

二次会では卒業生たちが水入らずで高校生最後の日を惜しみながらカラオケやボーリングなどで盛り上がるのが恒例となっていて、そこに後輩たちが立ちいる隙はない。

つまり、セレモニーのあとのわずかな時間が実質最後のお別れとなるのだ。

吹奏楽部や室内楽部の演奏するクラシックミュージックが学校中に響きわたっている。校舎や校庭のあちこちでは涙を流している生徒や、お互いに肩をたたき合って名残惜しんでいる姿も多い。

旧校舎には同好会の部室で記念写真を撮って行こうという生徒たちであふれかえっている。

3階にある探偵同好会の部室でも、その他多くの同好会と同じように部員たちが集合していた。

埃ひとつない長テーブルの表面には微小な傷がいくつも刻まれている。それらは雑巾でぬぐっても消えないものだった。

テーブルの正面には会長がすわり、副会長と神崎、結衣と咲がその前に向き合うようにして坐っている。開け放された窓から話し声が聞こえてくる。春の色を帯びはじめたやわらかな風が部室に吹き込む。

「さて」と会長がいった。「うちらは卒業なわけだけど。なにかいい残すことはあるかしら？」

「立場が逆だろ」

副会長がたしなめると、会長は素直にそうねと訂正する。

「うちらに伝えたいことはあるかしら？」

部員達を見まわす顔には「あつてもらわないと困るのだけど」と書いてある。会長は耳にかかった髪をかきあげて、副会長を見た。寒がりな副会長ではあるが、今日はコートを着てきてはいない。きちりと首元まであげられた緑色のネクタイは、垂直にブレザーの胸元に消えている。

ひときわ高い視線を隣に座っている神崎に落とす副会長。

「どうだい？」

「あります——ただ、おれから話していいのなら」

ちらりと咲の表情を確認する。小さくうなずきかえす咲。

深呼吸をひとつして、神崎は口を開く。

「いままで一年間だけでしたけど、一緒にいられて楽しかったです。できることなら入学したときから野球部と兼部できていればよかったんですけど、途中参加だったのが残念ですね」

「野球部のエースを勧誘するのにや勇気がいたのよ。変にひきこんじゃ恨みを買うことにもなりかねないし、なにより誠くん自身のメンタルのこともあったしね」

「ケガで野球を辞めざるを得なかったときは、そりやすこし茫然としてましたけど——会長たちが新しい目標を与えてくれたから立ち直れたんです。ありがとうございます」

「いいってもものよ。こっちも新しい部員を手に入れられたんだから互い様」

手をヒラヒラと横に振る会長の口元はかすかに歪んでいて。

まんざらでもなさそうな様子を見ながら、神崎が続ける。

「探偵同好会に入っただけのころは——いまでもそうかもしれないですけど——おれはまだホームズも知らないような初心者で、推

理どころか探偵がなんなのかさえよくわかっていませんでした。ゼ口から育ててくれたのが会長と副会長だったんです。文化祭のとき、グラウンドの警備を任されたのがおれすごくうれしかったんです。ようやくちょっとだけ認めてもらえたんだって。怪盗同好会もやつけましたし、多少は成長したんじゃないかと思っています」

「うちからいわせれば、まだまだひよっこよ。卵にひびが入ったくらいだわ」

「どうでしょうね。それを確かめたかったんじゃないんですか？」

会長と副会長がニヤリと笑う。

神崎はネクタイの位置を微調整してから、おもむろに言葉を發した。

「さて――」

「二度目の推理になってしまっているのは探偵としてまだまだな証拠なのかもしれないです。でも、これだけは最初にいわせてください。『児玉咲は犯人ではない』。おれは調査をはじめたとき、児玉を犯人だと決めつけてから証拠を探しました。成り行き上そうせざるをえなかったこともあります。ときにはプライドを捨てて素直になることも必要だったんだと思います。実はおれ、児玉が犯人じゃないっていう証拠にすぐ気がついたんです。バレンタインデーの日、おれがもらうはずだったチョコレートを会長が取り上げてしまったから、もし本当に児玉が犯人なら会長を狙っていたということになります。犯人としては、チョコレートがすり替わった時点でどうにかして取り返したいところです。それを、自分から渡したということとは、無差別事件でない限りありえません」

神崎はたちあがって、部員たちの座るテーブルのまわりを歩きだす。名探偵は推理のさいに、こうして徘徊行動をしなくてはならないというのが会長の持論であり、会則だった。

それからもうひとつ、推理は「さて」から始めなければならない

というルールもある。

これは子供のころに読んでいた推理小説シリーズの掟なのだそう
だ。

「前回の推理は犯人を特定するという点では間違っていました、
全部が間違いだったというわけではありませんでした。犯人はどう
やっておれに下剤のはいつたお菓子を食べさせたのか——チョコレ
ートに混ぜるという方法を使ったのです」

「じゃあ、チョコレートくれた人だけを調べたのかしら？ いち
いち誰がなにを渡したかなんて覚えてるとは思えないんだけど」
会長が手をあげて質問する。

「おれがバレンタインデー当日に食べた分だけでいいんです。まあ、
誰からもらったなにをどれだけ食べていたかなんて記憶には残って
いませんけど。それが犯人の狙いでもあります」

神崎は足を止めてこたえる。

「ねらい、とは？」

副会長がきく。

「容疑者を不特定多数のだから、というふうに仕立て上げること
で。犯人の候補が多ければ多いほど捜査はやりにくい。それと同時
に自分の身元を隠す絶好のシチュエーションにもなります」

「それで、とうやって絞り込んだの？」

今度は会長が尋ねる。神崎は会長に微笑みかけた。

「会長がやさしかったからですよ。たぶん、どうにもならないおれ
を見かねてヒントを出してくれたつもりだったんでしょうけど——
正直、それがなければお手上げなところでした」

ふたたび歩きはじめる神崎。

端正な横顔は、部室のなかであってもよく映える。

「バレンタインデーのお菓子は多種多様です。チョコレートは大定
番ですけど、ほかにクッキーやマフィン、マカロンやケーキを作
ってくる人もいます。むしろ最近はそのちらのほうが多いかもしれま
せん。——そして、トリュフも」

神崎は人差し指を立てる。

「トリュフの作り方はチョコレートのとほとんど変わりません。刻んだチョコレートを温めてある生クリームに入れて、かき混ぜてから冷やし、最後にココアなどをまぶして完成です。これなら下剤の成分が変質する危険性もありませんし、食べている途中に味がおかしいと気取られる可能性も低いです」

「なるほどね」

会長が相槌を打つ。

うららかな日差しが差し込むなか、桃色の風が結衣の黒髪をなでていった。

「犯人は、会長ですね」

「……証拠はあるのかしら？」

つとめて無表情でいようとしてはいるのだろうが、会長の口元に浮かんだニヤニヤ笑いは隠し切れていない。副会長が姿勢を変えるために動いて、プラスチックの椅子がきしんだ音を立てる。

神崎は入口の脇に置かれている、お菓子タワーを指さした。バレнтаインデー当日よりはかなり低くなっているが、それでもまだ積まれたお菓子の量は充分に多い。

「あれです。会長、塔からお菓子を引き抜いて食べてたんですってね」

「そうよ。腐らせちゃ悪いし、誠くんが来ない間に美味しく頂かせてもらったわ」

「なんかそれが目的だったんじゃないかと思えてきましたけど、違うと信じましょう。ところで会長はどうして他にも下剤のいれられたお菓子が混入しているとは思わなかったんですか？ おれが犯人なら、確実性を高めるためにいくつもいれておきます。会長とあるう人がそんな簡単なことに気づかないはずもない、ましてや副会長まで食べてたっていうんですから完全にグルです。そうですね？」

「どうしかしらね」

会長がはぐらかす。

副会長は微笑するばかりでなにもいおうとはしない。

「もうひとついわせてもらえば、会長がおれにトリュフを渡すとき、児玉と白谷さんとは別にしていましたよね。男女別、と見せかけて実は目当てのものを間違えないようにするための方法です。副会長には結局あげてませんでしたし」

「ま、そういうことにおこうかしらね」

会長は肩をすくめてみせる。

一礼してから神崎は副会長のとなりの席にもどった。結衣がぱちぱちと拍手を送る。神崎は照れ臭そうに鼻の頭をかいた。

「さて、次は誰かしら？」

会長がわざとらしく咲のほうを見やる。

ツインテールにした長い髪をなでながら咲はため息をつく。

「もうすこしうまい演技はできないんですか？ これじゃあたしも気乗りしませんよ」

「あら、うちはかなり演技派女優だと思ってただけ——ねえ？」

皮肉っぽく笑いかける会長。咲はやれやれといった様子で立ちあがった。結衣から拍手が送られる。

「さて」

今日はすこし長いスカートをひるがえしながら咲が歩きはじめる。さきほど神崎がたどった道筋とおなじルートだ。部室がせまいためにそこをまわるしかないのである。

「あたしのほうはしがない推理になりますが、ご清聴願えると光栄です。あたしの読んでいた本にネタばれのメモがはさまれていたという事件、はたから見れば本当にくだらない事件かもしれませんがどあたしにとっては人生でも有数の重大さを秘めたものでした。推理小説において犯人とトリックを明かすという行為は、死罪に相当します。法で裁けないなら個人的に復讐してもいいくらいです」

咲の口調は穏やかなものだが、メモを見つけたときの怒りがよみがえって来たのか、その裏には強い意志が感じられる。

こぶしを握りしめながら咲はつつける。

「犯人はなぜこんな愚かなことをしでかしたのでしょうか。答えは簡単です。あたしをけしかけるためです。あたしの性格をよく知っている人なら、ネタばらしをされればあたしが激怒するくらいすぐに見当がつくでしょう。ただ、タイミングが絶妙でした。ちょうど神崎へ怒りの矛先が向くように操作されていたのです。おそらくは神崎があたしを犯人呼ばわりしはじめたことから考え付いたトリックなのでしょうが、じつに巧妙でした」

咲はいちど止まると、今度は逆方向に進みはじめた。

「もしあたしがメモなんて気にせずに最後まで本を読み進めていたのなら、この事件は完全な失敗に終わったことでしょう。なぜなら、あのメモはほんの悪戯にすぎなかったのですから」

「犯人だとわかって、不都合でない人物」

結衣がつぶやく。咲は大きくうなずいた。

「そう。冗談なんだよ、といえばこの事件は解決してしまうのです。だから犯人は安心してトリックを仕掛けることができた。悪戯の犯人は、犯人にはなりません。そもそも事件がなかったことになるのですから」

「それはまた、ずるがしこい犯人ね。日ごろから咲ちゃんに恨みでもあったのかしら」

会長が白々しく独り言を述べながら副会長を一瞥する。そつぽを向く副会長のあたまを、咲の平手が襲った。

「半殺しにしても足りないくらいですけど、せつかくの卒業式に流血は似合いませんからやめておきましょう」

「僕が死んだら、桜の木の根元に埋まって毎年呪ってやる」

「すぐさま燃やしますから構いません。それか復讐する気力も起こらないほど痛めつけるかの二択ですね」

冷たい放つ咲。副会長は口を閉ざした。

「悪戯——というのはつまり、ネタばれなんて真っ赤なウソだった。犯人も違えばトリックもまるで見当はずれなものでした。けれども

あたしは最後まで読み進めないとメモが本当なのか嘘なのか判別がつかない。結末だけ確認しようものなら本末転倒です。結局はメモに負けたことになる。犯人との勝負は、ある意味ここにあつたのかもしれませんね。あたしが粘り強く自分を信じてラストを迎えるか、真実だけを急いで求めて自爆するか。まあ、あたしの勝ちでしたけど」

咲は結衣のとなりに腰を下ろした。もう推理を続ける気はないらしい。

「犯人はあなたですね——副会長」

「さあね。どうかな」

副会長は相好をくずしている。犯人だといわれたのになんだか嬉しそうな表情だった。

最後に結衣が立ちあがろうとするのを、会長が片手をあげて制した。あげかけた腰を下ろす結衣。

「どうしたんですか？」

「ここらでちょっと昔話をしようと思ってね。結衣ちゃんと誠くんには、あんまり昔のこと話してなかったでしょ。咲ちゃんはそういうことを話すようなキャラじゃないし、ここらでうちが探偵同好会の歴史を伝えておかないと困るからね」

「僕らが入部したときからすでに、探偵同好会は少人数でなんとか成り立っているというような状況だった」

副会長が語りだす。

結衣と神崎は身を乗りだして耳を傾けている。正直なところ、入部以前のことはさっぱり知らなかった。

「僕はみなみにつれられて探偵同好会に入ったわけだけど、最初はオカルト同好会にでも入ろうかと思ってたんだ。背が高かったから運動部にもかなり勧誘されたけど僕には厳しい練習を乗り越えられる根気はないから、どうにかしてどこかの同好会に転がりこもうとしてた。幸いなことに霞ヶ丘高校には大小さまざまな同好会があったからね。そのうちのひとつが探偵同好会」

「うちは結衣ちゃんや誠くんみたいに勧誘されて入ったわけじゃなくて、ポスターを見て探偵同好会しかないと確信したの。昔から推理小説やなんやは好きだったけど、この同好会に行けば事件に出会えるんじゃないかって思ったのよ。名探偵になつてみたかったのよね」

「僕も推理というものには興味があつたから、まあ、入つてみてもいいかなぐらいの気持ちで参加したんだ。すると案の定――」

「探偵同好会というよりは、推理小説同好会って感じだったわ。先輩が全員咲ちゃんみたいな人だったといえいいかしら。とにかくミステリマニアばかり。べつに悪い人たちではなかったけど、探偵ではなかったわ。彼らはただの読者。名探偵の披露する鮮やかな世界に魅了されているだけに過ぎないもの」

副会長の言葉を、会長が引き継いだ。

会長の声には非難したり、軽蔑するような色はない。ただ事実を淡々と述べているという調子だった。

「当然、そんな人々に難事件がふりかかるようなことはなかったわ。事件はそこらじゅうに転がっているかも知れないけど、それを解決する探偵とセットでなければ意味がない。自分から探偵になつてと思わないと、探偵にはなれないわ」

「そうしてあつという間に一年間が過ぎた。それなりに楽しい日々ではあつたよ。あそこに並んでいる小説はほとんどが先輩たちの私物だ。僕らのために買ってくれたものもある。古本だったけどね」

「うちらが二年生になると、咲ちゃんが加わつた。まあ、とくに変化はなかったわね。何事もなく時間だけが過ぎていったわ。あ、でも、ひとつだけ事件らしい事件があつたことにはあつたわ。ふつうに謎を解いて、終わっただけのものなんだけど。そのときの快感は半端じゃなかったわね。来年こそは、たくさん事件を解決するんだって決意した」

「二年が終わる直前になって、誠くんがフリーになっていると聞きつけてみなみが勧誘にいったんだ。来年のために活きのいいのがほ

しいって」

「そんな理由だったんですか」

神崎がじつとりと会長を見る。

「それ以外にないでしょ。野球でいうなればその辺の元気な少年を拾って来たってところね」

「たとえになつてません。野球関係ないですし」

「細かいことを気にしていると禿げるわよ。で、誠くんが参加したところで先輩たちがいなくなり、ついにはうちの天下となったわけ」

「そうはいつでも当面の問題があつてな。部員を集めなければならなかった」

副会長がしみじみと呟く。どうやら相当に苦労したらしかった。

「そんな折に結衣ちゃんとうわさが全校を駆け巡ったのよ。これこそ天啓、とうちは思ってたわね。神社におれいの100円玉を放りに行つたくらいだわ」

「ちよつと安すぎやしませんか。逆に神様が怒りそうですけど」

神崎が口を突っ込む。会長は機嫌を損ねたように口をとがらせた。「無信仰のうちの神様に感謝しただけでも充分なのにお賽銭まで投げいたんだから、いま死んでも悔いはないってくらいに神様は満足だったと思うわ。そのおかげなのか、この一年は事件のほうから飛び込んでくれた。個人的には結衣ちゃんが運をはこんできたのだと思ってるんだけど」

「なにせ天性の名探偵だからな。探偵のもとにはおのずと怪事件が引き寄せられてくるもんさ」

副会長がどや顔でいった。咲の小さな舌打ちの音が聞こえる。すぐさま真顔に戻る副会長。

「うちらが解決した事件がどれだけみんなを幸せに出来たかはわからないけど、すくなくともハッピーエンドを目指したことに間違いない。そして、これからも」

「僕らが卒業しても探偵同好会らしく、事件を解決していつてほしい。世の中は謎であふれかえっている。僕らがきちんと目を向けて

やればどんな時でも不思議なものが見えるはずだ——たとえばUFOとか」

「それはオカルトでしょうが」

すっかりオカルトの類を信じなくなつた会長が、副会長の後頭部をぺしりと叩く。部屋がきれいになる前まではツツコミを入れるためのはりせんも用意されていたのだが、それもいまはない。

結衣はそっけない探偵同好会の薄汚れた壁と、床と、机を見まわした。

副会長の私物だつた分厚い怪奇現象の本や、ネッシーをはじめとするUMAのフィギュア、天上からつりさげられていたUFOの模型、怪しげな占いセットといったようなものはどこにも見当たらない。

「わたし、副会長のオカルト話好きでしたよ」

結衣がやさしく声をかける。副会長はあつくなくなつた目頭を押さえた。

「そついつてくれるのは白谷くんだけだよ……僕はこれだけでも満足だ。もうやり残したことはない。悔いが残るとすれば兎玉くんをこちら側の世界に引き入れられなかったことくらいか。いつもチャンスは狙っていたんだが」

「まるで反省してないみたいです。会長、こんなやつとはすぐに別れた方がいいですよ」

咲の鋭くとがった氷柱のような言葉が副会長の胸に突き刺さる。

さらに会長はほんのりと頬を紅潮させながら否定する。

「どうしてうちがこんな甲斐性なしと付き合わないかなんないのよ。天地がひっくりかえってもありえないことだわ」

「いえ、それが」

神崎はちらりと咲のほうを見てから、

「兎玉の友達に、会長と副会長が手をつないでデートしてるところを見かけた人がいるらしくて。証拠の写メも送られてきたそうです。おれも検証しましたが、正真正銘、会長と副会長でした。ね。いつ

からそんな関係になってたんですか——いつてくれればお祝いパーティーでも開いたのに」

「パーティー、パーティー！」

結衣が楽しそうにはしゃぎながら手を打ち鳴らす。

その場にクラッカーでもあればいつせいに爆発させそうな勢いだつたが、整頓されてしまった部屋にそんなものが残っているはずもなく。やけに響く結衣の拍手があちこちに反射した。

「静かにしなさい結衣ちゃん、うるさいわね！ き、きっと合成映像かなにかよ！」

会長が耳を真つ赤にしながら否定する。それどころか顔中が林檎のように赤く染まっている。頭から湯気が上がってもおかしくない剣幕だった。

「動機がありません。誰が会長と副会長のアベック写真なんて作るんですか」

会長と副会長とは対照的にクールな咲がにべもなくいつてのける。ただ、その眼が笑っているのを結衣は見逃さなかった。

「じゃ、じゃあ咲ちゃんがウソついてんのよ！」

「それならどうして会長たちが動揺してるんですか？ さつさと認めてしまえばいいのに、楽になりますよ」

「……咲ちゃんに彼氏ができたときには真つ先にかかってやるんだから。誠くん、写メと報告をお願いね」

観念した会長がこうべをたれながら神崎の肩をたたく。

「あ、はい。わかりました」

「結衣ちゃんのときには別の意味で注意が必要ね。彼氏というよりは禁断の恋の相手って予感がしてしょうがないわ——もしくは、変な男にたぶらかされるか。どちらにせよしっかり監視してあげてちょうだい」

「わたしは大丈夫ですよ」

結衣がはにかみながら手を横に振るが、まわりの視線はとても冷たかった。誰も信じていない目だ。

しょぼくれる結衣をよそに会長は話をまとめにかかる。

「とにかく。うちらが卒業した後でも探偵同好会は、名探偵らしく活動が続けてちょうだい。次期部長には咲ちゃんを推薦するわ。誠くんは副部長として支えてあげてちょうだい——まあ、せめて迷惑だけは掛けないくらいで」

会長が副会長をにらみながらいった。そっぽを向く背の高い副会長。

「いいんですか、あたしで」

「謙遜するなんて咲ちゃんらしくないじゃない。この同好会でいちばんまともなのは咲ちゃんだから。そこだけは自信を持っていと思う」

「だけ、ですか。とりあえず頑張ってみます。廃部にさせないくらいには」

「頼んだわよ」

指きりげんまんをしようと小指を突き出した会長だったが、咲はひらりとかわして相手にしなかった。不満そうに唇をとがらせる会長に、咲がいう。

「いつか遊びに来てください。そのときにはきつといまより部室がせまく感じると思いますから」

「あつそ。期待せずに待ってるわ」

「おれが副会長になってもいいんですか？ 推理力なら白谷さんのほうがずつとあるのに」

神崎が遠慮がちに尋ねる。会長は鼻を鳴らした。

「誠くんは根性だけはあるから。推理力なんてものはあとから身につければいい話よ。結衣ちゃんから盗めるだけ盗みなさい。あとは根性がどうにかしてくれるから」

「会長……」

神崎が目潤ませながら会長の言葉を手帳にメモする。使っているのは副会長からプレゼントされた朱色の万年筆だ。副会長はその様子を目を細めてながめている。

「さてと、あとは結衣ちゃんだけど。こちらは結衣ちゃんに感謝しなくちゃいけないって思ってる。偶然だったのかわからないけど、結衣ちゃんはこちらにとって幸運の女神だった。ラッキーガールってやつね。誘蛾灯に引き寄せられる虫のごとく、事件は名探偵のいる方にやってくる。最後の一年だけでも探偵らしくいられたのは、結衣ちゃん、あなたのおかげ」

「それについては僕も同意見だ。僕らが望んでやまなかったものを、白谷くんは届けてくれた。これは一種の運命なのではないかと思うね」

副会長が頷きながら同意する。

結衣はブレザーの袖で目じりをぬぐった。鼻をすする音が涙ぐんでいる。泣くのをこらえているせいで全身がふるふると震えていた。「わたし、そんな大それたことは」

「事実であつたのかどうかは誰にもわからない。ひょっとしたらほんの偶然が重なっただけかもしれないわね。でも人生なんてそんなもんでしょ。結衣ちゃんが来て、この5人でやっていけたからこそ事件も舞い込んできたって考え方も、悪くない。それが偶然であつたにしろ、必然であつたにしろ、うちが結衣ちゃんと過ごした毎日 は楽しかったわ。ありがとう」

「ありがとう」

副会長も頭を下げる。

結衣はしきりに目頭のあたりをおさえながら、嗚咽まじりの声で感謝の言葉を返した。神崎も潤んだまなざしでその場を見守っている。

「わ、わたしこそ会長たちにありがとうっていわなきゃいけないんです——。一年間、すごく楽しくて。会長たちがいなくなっちゃうのは寂しくて。部室が綺麗に整頓されていたとき、わたし、探偵同好会がなくなっちゃったんだってすごく悲しくなつて。でも、振り返ってみると、やっぱり嬉しいこともたくさんあつて——だから、恩返しにはならないかもしれないけど、最後に私の推理を聞いてく

れますか。会長たちがくれた優しさの、なぞ解きを」

会長と副会長はすこしのあいだお互いの顔を見合わせていたが、結衣に静かなほほ笑みを向けた。その表情には驚きの色もいくらか含まれていた。

「楽しみにしてるわよ」

「はい」

結衣はごしごしと濡れたまつ毛をこすって立ちあがった。部屋のなかにあるタンスからホームズの鹿射ち帽を取り出してくると、それを深々とかぶり、大きく深呼吸する。

「さて――」

「本当はこんなことをいうのは無粋なのかもしれないけど、わたしちゃんとお礼がいたいんです。会長や副会長たちがくれた優しさがどれだけわたしにとって大切で、どれだけ嬉しいものだったかちゃんと伝えたいんです。だから推理します。名探偵はハッピーエンドを目指さなくてはならないから。このまま秘密を秘密にしておいては、わたしのなかで真のハッピーエンドにはならないから」

結衣が静かな口調で話します。

目をつぶって聞きたくなるような、透きとおった声。夏の風鈴が青い空の下で奏でる音色のように結衣の声は涼やかに響きわたる。

「まず、会長たちが私物をすべて引き揚げてしまった理由について考えてみます。すこしくらい残してくれてもいいのに、って最初は思いました。副会長のUFOとかもずっと飾っておきたかったし、会長が散らかしたゴミだってまるで会長がいるみたいで落ち着く。でも、それじゃいけないですよね？」

結衣が副会長の瞳をのぞきこんでいう。

あいまいにほほ笑みかえす副会長。

「残されたわたしたちは新しいスタートを切らなくちゃいけない。いつまでも楽しかった思い出に浸ってはいけないうってことです

よね。もうすこししたら新入生も入れなくてはいけないし、むしろそちらを大切にしてほしいって」

結衣はブレザーの内ポケットを探ると、一冊の手帳を取り出した。緑色の表紙に、金の校章が刻まれている。

「これはご存知のとおり霞ヶ丘高校の生徒手帳です。細かい学則がたくさんのおつています。その中には、もちろん同好会に関する規定もいくつかありました」

「あら——気付かれてたんだ」

会長がいたずらのばれた子供のようにはバツの悪そうな顔で舌を出す。

赤く腫らした目をこすりながら結衣は生徒手帳のとあるページを開いた。細かい文字でぎっしりと規則字や条文がのせられている。

「同好会の設立条件——最低でも5人の会員がいること。わたしを入れて今現在では5人ですけど、5月の時点ではまだ一人足りなかったんですよ？」

「そ。結衣ちゃんがいだからギリギリセーフ」

「会長がわたしの教室に来て探偵同好会に入らないかって誘ってくれたとき、正直不安でした。中学の前の部活で、わたしあんまりうまくいってなくて。だから部活選びも躊躇してたんです。また同じ失敗を繰り返さないようにしようって」

結衣がひとつひとつ言葉を慎重に選定していくようにして話す。

「この部室に連れて来られて、目の前に入会届を突き付けられていたら断っていたかもしれません。今度こそは楽しい部活に行くんだって思ってたから。でも、副会長と咲先輩のおかげで、わたしは探偵同好会に入ることを決意したんです。家に帰ってから考える時間をくれました。ベッドに転がりながら生徒手帳をながめていたら、同好会は5人以上ないと成立しないと書いてあつて、それでわたし決めたんです。ここならわたしを大切にしてくれる。わたしがいい場所になってくれる」

結衣の声が涙ぐんでくる。

それにつられるようにして神崎もハンカチを取り出して目蓋のあたりをおさえている。

「いま思えば会長も必死だったんですね。わたしがいないと探偵同好会がなくなってしまうから。それでもわたしを待っていてくれた。ほんとうに、ありがとうございます」

深々と頭を下げる結衣の背中を、副会長の大きな手がぼんぼんと優しく叩いた。

「僕はただ、みなみが無理矢理連れ込んだんじゃないかって心配だったんだよ。新入生を先輩が強引に勧誘したんじゃない、楽しいはずがないからね」

「あたしも——」と咲がいった。「会長があんまり騒々しいのでなにか裏があるのではないかと思って」

「なによみんな失礼ね。素直にどういたしましてって言えばいいじゃない。うちは会長として新入部員を集めるのに懸命だったけど、あんたたちは余裕な顔して待ってるだけだったもんね」

「……どっちにしても」

結衣が困った表情でいった。

「わたしは楽しかったです」

「そうね」会長が明るい口調でいう。「ハッピーエンドになったならそれでいいじゃない！ 写真撮りましょ、デジカメ持って来てるから」

ポケットから取り出した銀いるのデジタルカメラのタイマーをセツトすると、会長は部員たちの肩を抱き寄せカメラに向かってピースサインを送った。

副会長は会長のうしろから見下ろすように笑っている。

神崎はハンカチを片手に。

咲は不愛想な表情で。

結衣は満面の笑顔。

カメラのフラッシュが瞬いて、一枚の写真が出来上がった。

卒業（後書き）

3月編はこれにておしまいになります。
次回エピソードの4月編で完結となります。

エピソード

4月。

結衣は軽い足取りで旧校舎へと向かう渡り廊下を歩きながら、初々しい制服姿の新生たちを見つめていた。

桜はもう満開で、儂げなピンク色を制服の上に落としている。

その花びらの一片が結衣の目の前にやってきて、ひらひらと舞う。そつと手を差し出してみるとうまい具合に手のひらに収まった。

優しく桜の花弁をつまみながら階段を上り、探偵同好会の部室をあける。

「おはようございます」

時刻はすっかり放課後なのだが、結衣はそんなことを気にしない。室内にはすでに4つの人影があつて。なんとなくデジャヴにおそわれる。見慣れた光景とは少し違ってはいたが、きっと本質的には同じもの。

「おはようございます」

固い返事がふたつ。

緊張して、こんにちは、と訂正するだけの余裕がないのだろう。

結衣はにこやかにほほ笑んだ。

「ようこそ探偵同好会へ。そしてわたしは——白谷結衣、名探偵だ」
会長と副会長のうつった写真が、かすかに光を反射してきらめいていた。

エピローグ（後書き）

いままで読んでいただいた方々、本当にありがとうございました。
気が向けば番外編なんかも書くかもしれません。

足かけ半年に及ぶ連載でしたが、書いていて面白い時間でした。
この作品が、少しでも楽しい時間を提供できたならこれ以上にうれしいことはありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6871o/>

こちら探偵同好会

2011年5月29日18時10分発行